

上細井中島遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

2013.12

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景 赤城山西南麓に位置する上細井中島遺跡 前橋市下小出町上空から北西の富士見町方面を望む



遺跡全景と西へ延びる路線 東から榛名山を望む

序

上武道路は、国道17号の混雑緩和と沿線地域における物流の促進のため、大規模バイパスとして埼玉県熊谷市から群馬県前橋市田口町に至る路線が計画され、これに伴う群馬県内での埋蔵文化財の発掘調査が昭和48年度に開始されました。埼玉県寄りの部分区間が順次開通し、平成24年12月には前橋市上細井町までの区間が供用されています。また、本年8月には国道17号に合流する最終区間の調査が終了しています。

本書で報告します上細井中島遺跡は、赤城山の南西麓に位置する遺跡で、国土交通省からの委託を受けて、当事業団が平成21年度と平成24年度に発掘調査を実施したものです。

この調査により、旧石器時代から中近世に至る多くの遺構・遺物を発見しました。主要な遺構には、縄文時代早期の集石群や縄文時代中期の集落、さらに平安時代の集落があります。特に注目されるのは、この地域特有の縄文時代早期前半の屋外石組炉の存在が明らかとなったことです。これらの調査成果は、本地域の歴史を解明する上で貴重な資料であり、今後の研究資料の一つとして役立つものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、国土交通省関東地方整備局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、並びに地元関係者の皆様には、多大なご指導・ご協力を賜りました。本報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されますことを願い、序といたします。

平成25年12月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 上原訓幸

例 言

1. 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)による、上細井中島遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 上細井中島遺跡は、群馬県前橋市上細井町1343、1345、1346-1、1346-2、1354、1355、1357、1358-1番地に所在する。
3. 事業主体は、国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所である。
4. 調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)である。
5. 調査期間と調査面積、体制は次の通りである。

調査委託契約履行期間	平成21年4月1日～平成22年3月31日(平成21年度) 平成24年4月1日～平成25年3月31日(平成24年度)
調査期間	平成22年1月1日～平成22年3月31日(平成21年度) 平成24年10月1日～平成24年10月31日(平成24年度)
調査面積	3948.99㎡(平成21年度) 809.14㎡(平成24年度)
発掘調査担当	井川達雄上席専門員、矢口裕之専門員(総括)(平成21年度) 木津博明調査統括、笹澤泰史主任調査研究員(平成24年度)
遺跡掘削工事・地上測量	技研測量設計株式会社(平成21・24年度)

6. 整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理委託契約履行期間	平成24年4月1日～平成25年3月31日、 平成25年4月1日～平成26年3月31日(平成24・25年度)
整理期間	平成25年1月1日～平成25年3月31日、 平成25年4月1日～平成25年9月30日(平成24・25年度)
整理担当	矢口裕之専門員(総括)(平成24年度) 谷藤保彦上席専門員(平成25年度)

7. 本書作成の担当者は以下のとおりである。

本文執筆	第1章と第2章第1・2節を矢口裕之専門員(総括)、それ以外を谷藤保彦上席専門員が執筆した。
デジタル編集	齊田智彦主任調査研究員(平成24年度) 佐藤元彦補佐(総括)(平成25年度)
遺物写真	佐藤元彦補佐(総括)
保存処理	関邦一補佐(総括)
遺物観察・観察表執筆	

縄文土器・鉄製品	谷藤保彦上席専門員	石器・石製品	岩崎泰一資料統括
土師器・須恵器	徳江秀夫資料統括	中世以降の土器・陶磁器	大西雅広上席専門員

8. 岩石同定の一部は、飯島静男氏(地質学者・群馬地質研究会)に依頼した。
9. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、前橋市教育委員会事務局管理部文化財保護課のご指導とご助言を得た。
10. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

1. 本書で使用した方位は、総て国家座標(座標第IX系)の北を用いた。調査区は、X=47670~47737、Y=-67759~-67855の範囲に収まる。真北方位角は+0°26'56"である。
2. 本書における遺構番号は、調査時の番号を原則としたが、以下のように変更した。

表1 遺構名対比表

報告時遺構名			調査時遺構名			報告時遺構名			調査時遺構名			報告時遺構名			調査時遺構名		
番号	種別	備考	記号	番号	備考	番号	種別	備考	記号	番号	備考	番号	種別	備考	記号	番号	備考
1	住居		S1	1		6	土坑		SK	6		27	土坑		SK	27	
2	住居		S1	2		7	土坑	欠番	SK	7		28	土坑		SK	28	
3	住居		S1	3		8	土坑	欠番	SK	8		29	土坑		SK	29	
4	住居		S1	4		9	土坑		SK	9		30	土坑		SK	30	
5	住居	欠番	S1	5	欠番	10	土坑		SK	10		31	土坑		SK	31	
6	住居		S1	6		11	土坑		SK	11		32	土坑		SK	32	
7	住居		S1	7		12	土坑		SK	12		33	土坑		SX	2	
8	住居		S1	8		13	土坑		SK	13		1	集石		配石	1	
9	住居		S1	9		14	土坑		SK	14		2	集石	欠番	配石	2	
10	住居		S1	10		15	土坑		SK	15		3	集石		配石	3	
11	住居		S1	11		16	土坑		SK	16		4	集石		配石	4	
12	住居		SX	1		17	土坑		SK	17		5	集石	欠番	配石	5	
13	住居		SX	3		18	土坑	欠番	SK	18	欠番	6	集石		配石	6	
14	住居	整理時に認定	SK	20		19	土坑		SK	19		7	集石	欠番	配石	7	
15	住居	整理時に認定				20	土坑	欠番	SK	20		8	集石	整理時に認定			
1	掘立柱建物		SB	1		21	土坑		SK	21		1	井戸		SE	1	
1	土坑		SK	1		22	土坑	欠番	SK	22		2	井戸		SE	2	
2	土坑		SK	2		23	土坑		SK	23		3	井戸		SE	3	
3	土坑		SK	3		24	土坑		SK	24		1	溝		SD	1	
4	土坑		SK	4		25	土坑		SK	25		2	溝		SD	2	
5	土坑		SK	5		26	土坑		SK	26		3	溝		SD	3	

なお、整理時において、一部の遺構については形状等を総合的に検討して欠番とし、また同様の検討から遺構として認定し番号を与えた。

3. 遺構図・遺物図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。また、遺物写真の縮尺は、実測図と同一の縮尺を原則とした。

遺構図： 遺構配置図1/250 1/500 竪穴住居1/60 掘立柱建物1/60 炉・カマド1/30
土坑・井戸1/40 溝1/60 1/100

遺物図： 石器・石製品1/2、1/3 縄文土器1/2、1/3 土師器1/3 陶磁器1/3 鉄製品1/2

4. 図中で使用したスクリーン・トンおよびマークは、以下のことを表す。

遺構図： 焼土  灰  攪乱 

遺物図： 繊維含有土器 ● 石器摩耗範囲 

5. 遺構の計測は、住居の場合はカマド主軸を基軸とし角度等の傾きを計測した。カマドを持たないものについては長軸を基軸とした。なお、計測値において全容が計測できない遺構については残存値()で表記してある。
6. 火山砕屑物の層層は、テフラの略称を使用した。略称の標記は以下のとおりである。

浅間Bテフラ[As-B] 榛名二岳渋川テフラ[Hr-FA] 浅間Cテフラ[As-C] 浅間Dテフラ[As-D]

浅間宮前テフラ[As-Mm] 浅間総社テフラ[As-Sj] 浅間板鼻黄色テフラ[As-YP] 浅間大窪沢テフラ2[As-OKP2]

浅間大窪沢テフラ1[As-OKP1] 浅間白糸テフラ[As-SP] 浅間板鼻褐色テフラ[As-BP3、As-BP2、As-BP1]

浅間室田テフラ[As-MP] 始良Tnテフラ[AT] 榛名三原田テフラ[HMP] 榛名八崎テフラ[Hr-HP]

7. 遺物観察表での表現および記載法は、以下の通りである。

- ・胎土の細砂粒と粗細粒は直径2mmほどで区別した。
- ・土器計測位置の表現は口径：口、底径：底、器高：高、高台径：台、稜径：稜、蓋の握み最大径：握で略記した。
- ・計測値の()は現存値を示す。

8. 本書で使用した地形図は下記の通りである。

国土地理院：地勢図 1:200,000「宇都宮」(平成18年発行) 地形図 1:50,000「前橋」(平成10年発行)

地形図 1:25,000「澁川」(平成14年発行)、「前橋」「大胡」(平成22年発行)、「鼻毛石」(昭和56年発行)

前橋市役所：現形図 1:2,500(平成21年測図)

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
写真目次

第1章 調査に至る経過

第1節 上武道路について	1
第2節 上武道路と埋蔵文化財	2
第3節 調査に至る経過	2
第4節 調査の方法と経過	4

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の地形・地質的環境	13
第2節 調査区の層序	17
第3節 周辺の遺跡	21

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代の遺構と遺物	
(1) 概要	26
(2) 確認状況と本調査	26
(3) 出土遺物	26
第2節 縄文時代の遺構と遺物	
(1) 概要	32
(2) 竪穴住居	36
(3) 土坑	55
(4) 集石	63
(5) 遺構外出土遺物	66

第3節 平安時代以降の遺構と遺物

(1) 概要	91
(2) 竪穴住居	92
(3) 掘立柱建物	112
(4) 土坑	112
(5) 井戸	120
(6) 溝	123
(7) 遺構外出土遺物	124

第4章 調査の成果(総括)

第1節 縄文時代早期の遺構と遺物について	129
第2節 総括	137

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図	上武道路と遺跡の位置	1	第43図	遺構外出土遺物(2)	71
第2図	上武道路 8 工区の遺跡	3	第44図	遺構外出土遺物(3)	72
第3図	上堀井中島遺跡調査範囲図	5	第45図	遺構外出土遺物(4)	73
第4図	上武道路調査測量大・中グリッド設定図	6	第46図	遺構外出土遺物(5)	74
第5図	上堀井中島遺跡小グリッド設定図	7	第47図	遺構外出土遺物(6)	75
第6図	遺構配置全体割り付け図	9	第48図	遺構外出土遺物(7)	76
第7図	遺構配置全体図(1)	10	第49図	遺構外出土遺物(8)	77
第8図	遺構配置全体図(2)	11	第50図	遺構外出土遺物(9)	78
第9図	遺構配置全体図(3)	12	第51図	遺構外出土遺物(10)	79
第10図	赤城火山の噴火史	15	第52図	遺構外出土遺物(11)	80
第11図	遺跡周辺の地形と地質	16	第53図	遺構外出土遺物(12)	81
第12図	基本掘削区 1 (台地上)	19	第54図	平安時代以降遺構配置図	91
第13図	基本掘削区 2 (東・西斜面)	20	第55図	1号住居平面図、カマド平面図、出土遺物	93
第14図	周辺遺跡図	22	第56図	2号住居平面図、カマド平面図	95
第15図	確認トレンチ配置図	27	第57図	2号住居出土遺物(1)	96
第16図	トレンチ上層断面図(1)	28	第58図	2号住居出土遺物(2)	97
第17図	トレンチ上層断面図(2)	29	第59図	3号住居平面図	98
第18図	石石器出土位置図、出土石器	31	第60図	3号住居カマド平面図、出土遺物	99
第19図	縄文時代第1面遺構配置図	32	第61図	3号住居出土遺物	100
第20図	縄文時代第2面遺構配置図、遺物分布図	33	第62図	4号住居平面図、カマド平面図	102
第21図	縄文時代第2面調査範囲図	35	第63図	4号住居出土遺物	103
第22図	7号住居平面図、炉平面図	37	第64図	6号住居平面図	105
第23図	7号住居出土遺物	38	第65図	6号住居カマド平面図、出土遺物	106
第24図	9号住居平面図、出土遺物	39	第66図	6号住居出土遺物	107
第25図	11号住居平面図、炉平面図	41	第67図	8号住居平面図、カマド平面図	108
第26図	11号住居出土遺物	42	第68図	8号住居出土遺物	109
第27図	12号住居平面図、炉平面図	43	第69図	10号住居平面図、カマド平面図	110
第28図	12号住居出土遺物	44	第70図	10号住居出土遺物	111
第29図	13(A・B)号住居平面図	47	第71図	1号雁立柱建物平面図	113
第30図	13(A・B)号住居炉平面図、出土遺物	48	第72図	1～6・9・10・12・14号土坑平面図、 12号土坑出土遺物	117
第31図	14号住居平面図、炉平面図	49	第73図	15・16・27～30号土坑平面図	118
第32図	14号住居出土遺物(1)	50	第74図	1～3号井戸平面図	119
第33図	14号住居出土遺物(2)	51	第75図	1号溝平面図	121
第34図	14号住居出土遺物(3)	52	第76図	2号溝平面図	122
第35図	15号住居平面図	54	第77図	3号溝平面図	123
第36図	11・13・17・19・21・23～26・31号土坑平面図	57	第78図	1号井戸、1・2号溝出土遺物	125
第37図	32・33号土坑平面図	58	第79図	遺構外出土遺物	126
第38図	11・13・17・19号土坑出土遺物	59	第80図	群馬県内における縄文文化の主な集石遺構(1)	131
第39図	24・31・33号土坑出土遺物	60	第81図	群馬県内における縄文文化の主な集石遺構(2)	132
第40図	1・3・4号集石平面図	64	第82図	群馬県内における縄文文化の主な集石遺構と 石置戸・石置戸をもつ彫穴住居	133
第41図	6・8号集石平面図	65			
第42図	遺構外出土遺物(1)	70			

表目次

表1	遺構名対比表		表14	19号土坑出土遺物観察表	61
表2	上武道路 8 工区調査遺跡一覧表	3	表15	24号土坑出土遺物観察表	62
表3	周辺遺跡一覧表	23	表16	31号土坑出土遺物観察表	62
表4	石器出土遺物観察表	31	表17	33号土坑出土遺物観察表	62
表5	7号住居出土遺物観察表	38	表18	遺構外出土遺物観察表	82～90
表6	9号住居出土遺物観察表	40	表19	1号住居出土遺物観察表	92
表7	11号住居出土遺物観察表	45	表20	2号住居出土遺物観察表	97
表8	12号住居出土遺物観察表	45	表21	3号住居出土遺物観察表	100
表9	13(A・B)号住居出土遺物観察表	48・49	表22	4号住居出土遺物観察表	101
表10	14号住居出土遺物観察表	53・54	表23	6号住居出土遺物観察表	107
表11	11号土坑出土遺物観察表	61	表24	8号住居出土遺物観察表	109
表12	13号土坑出土遺物観察表	61	表25	10号住居出土遺物観察表	111
表13	17号土坑出土遺物観察表	61	表26	12号土坑出土遺物観察表	119

表27	1号井戸出土遺物観察表	125
表28	1号溝出土遺物観察表	125
表29	2号溝出土遺物観察表	126
表30	遺構外出土遺物観察表	126

表31	住居一覧表	127
表32	土坑一覧表	128
表33	井戸一覧表	128
表34	溝一覧表	128

写真目次

P.L. 1	遺跡全景 空中写真 南から赤城山を望む 遺跡全景 空中写真 東から榛名山を望む
P.L. 2	調査区東側全景 空中写真 上から 調査区全景 空中写真 上から
P.L. 3	遺跡東端 1・2トレンチ全景 南から 2トレンチ北壁土層断面 南西から 4トレンチ全景 東から 6トレンチ旧石器調査全景 北から 6トレンチ旧石器出土状況 西から 6トレンチ北壁土層断面 南から 7トレンチ西側全景 東から 7トレンチ東側全景 南西から
P.L. 4	9号住居遺物出土状況 北東から 9号住居全景 北から 7号住居全景 南から 7号住居跡 南から 7号住居跡 掘り方 南から 11号住居全景 南から 11号住居跡 西から 11号住居跡内埋設土器出土状況 南から
P.L. 5	12号住居全景 南西から 12号住居跡 南東から 12号住居跡内埋設土器出土状況 南から 13(A・B)号住居全景 南から 13号住居跡 東から 14号住居遺物出土状況 南から 14号住居遺物出土状況 南から 14号住居跡 南から
P.L. 6	11号土坑全景 南から 13号土坑遺物出土状況 南から 17号土坑遺物出土状況 南から 19号土坑遺物出土状況 南から 21号土坑全景 南から 23号土坑全景 西から 24号土坑全景 西から 25号土坑全景 南から
P.L. 7	26号土坑全景 西から 31号土坑全景 南から 33号土坑露出土状況上面 南から 33号土坑露出土状況下面 南から 集石群検出状況 南西から
P.L. 8	1号集石検出状況 南西から 3号集石検出状況 西から 4号集石検出状況 北から 6号集石検出状況 北東から 8号集石検出状況 北東から 第2面遺物出土状況 東から 第2面遺物出土状況 西から 第2面石輪出土状況
P.L. 9	第2面北側遺物出土状況 南東から 第2面南側遺物出土状況 北東から
P.L. 10	1号住居全景 西から 1号住居カマド 西から

	1号住居掘り方 西から 2号住居全景 西から 2号住居カマド 西から 2号住居掘り方 西から 3号住居全景 西から 3号住居カマド1 西から
P.L. 11	3号住居貯蔵土遺物出土状況 西から 3号住居貯蔵土出土状況 南から 3号住居カマド2 西から 3号住居掘り方 西から 4号住居全景 西から 4号住居カマド 西から 4号住居掘り方 西から 6号住居全景 西から
P.L. 12	6号住居カマド 西から 6号住居掘り方 西から 8号住居全景 西から 8号住居カマド 西から 8号住居掘り方 西から 10号住居全景 西から 10号住居遺物出土状況 南から 10号住居カマド 西から
P.L. 13	1号竪立柱建物西側 南から 1号竪立柱建物全景 空中写真 1号土坑 南から 2号土坑 南から 3号土坑 南から 4号土坑 南から 5号土坑 南から 6号土坑 南から
P.L. 14	9号土坑 東から 10号土坑 南西から 14号土坑 南東から 15号土坑 北東から 16号土坑 南から 27～29号土坑 西から 27号土坑 南から 28・29号土坑 南から
P.L. 15	29号土坑 南から 30号土坑 西から 32号土坑 南から 1号井戸 南から 1号井戸断ち割り 南から 2号井戸 南から 2号井戸断ち割り 南から 3号井戸 南から
P.L. 16	1号溝 西から 2号溝 北から 旧石器出土遺物 7号住居出土遺物 9号住居出土遺物 11号住居出土遺物
P.L. 17	11号住居出土遺物

12号住居出土遺物
13(A・B)号住居出土遺物
P.L. 18 14号住居出土遺物
P.L. 19 14号住居出土遺物
11号土坑出土遺物
13号土坑出土遺物
P.L. 20 13号土坑出土遺物
17号土坑出土遺物
19号土坑出土遺物
24号土坑出土遺物
31号土坑出土遺物
33号土坑出土遺物
P.L. 21 33号土坑出土遺物
道橋外出土遺物
P.L. 22 道橋外出土遺物
P.L. 23 道橋外出土遺物
P.L. 24 道橋外出土遺物

P.L. 25 道橋外出土遺物
P.L. 26 道橋外出土遺物
P.L. 27 道橋外出土遺物
P.L. 28 道橋外出土遺物
P.L. 29 道橋外出土遺物
2号住居出土遺物
P.L. 30 2号住居出土遺物
3号住居出土遺物
4号住居出土遺物
6号住居出土遺物
P.L. 31 8号住居出土遺物
10号住居出土遺物
12号土坑出土遺物
1号井戸出土遺物
2号溝出土遺物
道橋外出土遺物

第1章 調査に至る経過

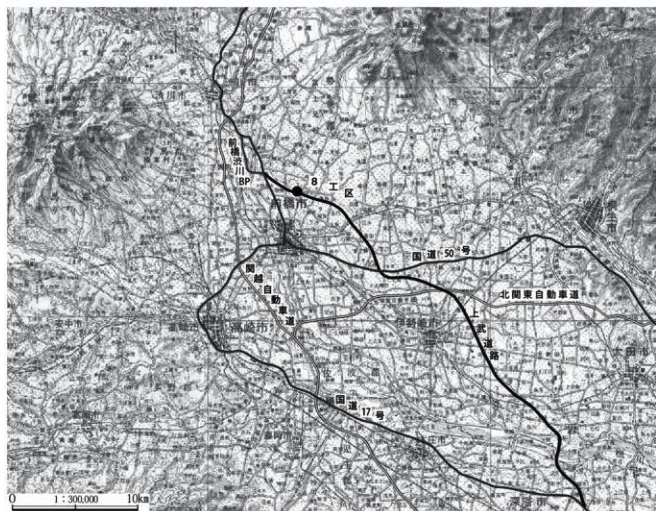
第1節 上武道路について

上武道路は一般国道17号の交通混雑に対応するために計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に接続する延長40.5kmの道路である。現道の西には、前橋洗川バイパス、その先には鯉沢バイパス、また計画では上信自動車道が続いて、県北西部の新たな交通幹線網整備事業として期待されている。平成10年には、前橋洗川バイパスを含めて地域高規格道路「熊谷洗川連絡道路」として計画路線の指定を受け、群馬県では『幹線交通乗り入れ30分構想』の中で主要幹線のひとつに位置づけられている。

上武道路の建設事業は、昭和45年度から着手され、平

成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間(7工区)が、平成20年6月に暫定2車線で供用された。

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)が対象とする8工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7km区間の暫定開通を果たし、全線開通までの最終3.5km区間の発掘調査と工事が進められている。



第1図 上武道路と道跡の位置 国土地理院発行1/200000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用

第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地の多い地域である。群馬県は、昭和48年に文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）が調査事業を受託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上泉町まで、③前橋市上泉町から前橋市田口町の現国道17号までの3つの区間に分けることができ、現在は③の中間まで供用が開始されている。

埼玉県境から国道50号までの区間では、35箇所の遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行されている。この区間の事業が完了した平成7年には、埋蔵文化財調査の成果をより広く公開するため、冊子総集編「地域をつなぐ 未来へつなぐ—上武道路埋蔵文化財22年の軌跡—」が刊行された。この総集編では、「弥生時代の開拓者」といった平野部での発掘調査や「芳郷」の墨書土器出土で話題となった古代勢多部の芳賀郷、東山道駅路のひとつにも推定されていた「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

国道50号から前橋市上泉町までは7工区にあたる。ここでは17箇所の遺跡が発掘調査の対象となり、16冊の発掘調査報告書が刊行されている。この区間の発掘調査では、荒砥川の東で検出された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女堀の調査では浅間川川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手がかりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

前橋市上泉町から現国道17号までは8工区にあたり、31箇所の遺跡、約40万㎡が埋蔵文化財の調査対象となっている。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が8

-1工区、西が8-2工区と呼ばれている。調査は、平成18年度に8-1工区の東端から始められ、工事工程との調整により、平成23年度からは8-2工区の西端である終点の田口下田尻遺跡の調査も開始された。

8-1工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、8-2工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が続々と明らかになっている。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器まで含まれていることが判明している。特に最西端の田口下田尻遺跡では整六住居280棟が検出された大集落が調査され、従来の広瀬川低地帯の遺跡分布の理解を見直す資料が得られている。

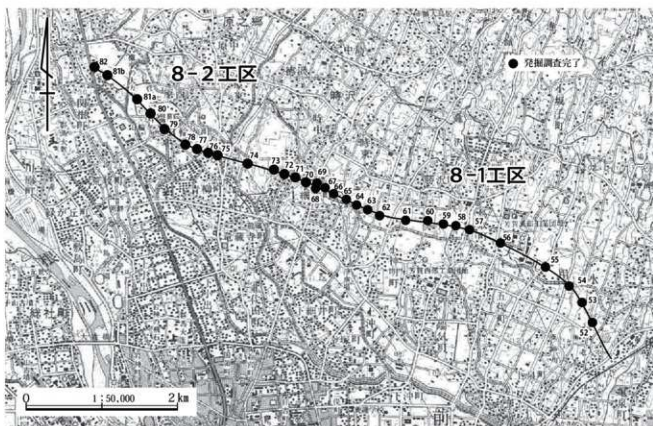
これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、J Kを冠した遺跡略号が付されている。Jが上武、Kが国道を指しており、南側の起点から順次算用数字を1から付している。8工区も、7工区の最終番号J K52に続けて、この略号を記録類作成に際して使用している。J K52だけは、上泉唐ノ堀遺跡が供用部分の関係で7工区と8工区で分割されたことから、8工区分の上泉唐ノ堀遺跡にはJ K52bをつけて7工区と区別している。また、J K59鳥取塚田遺跡は、水田遺構の存在が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番とせず、そのままとした(表2)。また、当初関根遺跡群で一括されていた遺跡が田口下田尻遺跡、関根細ケ沢遺跡、関根赤城遺跡に細分されたこと、平成23年度に開始された田口下田尻遺跡を先行して82としたことから、関根細ケ沢遺跡は81a、関根赤城遺跡は81bとした。

第3節 調査に至る経過

上武道路7工区の発掘調査は、上泉唐ノ堀遺跡を最後に平成16年度末で終了した。その後の工事は順調で、県道前橋大胡線までの供用が間近に迫っていた。さらに同16年度には、国道17号の現道から西の前橋沢川バイパスが着工されたことから、8工区は、開通部分と前橋沢川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声有一段と強まった。

表2 上武道路8工区調査遺跡一覧表

JKNb	遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	調査年度	報告書 発行年度
52b	上原唐ノ堀遺跡	前橋市 上原町	00774	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上原新田塚遺跡群	前橋市 上原町	00775	平成18・19・20年度	平成23年度
54	上原武田遺跡	前橋市 上原町	00773	平成19年度	平成24年度
55	五代砂留遺跡群	前橋市 五代町	00772	平成19年度	平成23年度
56	芳賀東部空地遺跡	前橋市 五代町・鳥取町	00357	平成18・19・20年度	平成24年度
57	鳥取松合下遺跡	前橋市 鳥取町	00776	平成20年度	平成23年度
58	那珂塚遺跡	前橋市 鳥取町	00041	平成19・20・21年度	平成23年度
59	鳥取塚田遺跡	前橋市 勝沢町		調査除外	—
60	塚遺跡	前橋市 勝沢町	00034	平成20年度	平成24年度
61	小神明勝沢墳遺跡	前橋市 小神明町	00778	平成20年度	平成23年度
62	小神明富士塚遺跡	前橋市 小神明町・上細井町	00403	平成20・21年度	平成23年度
63	東田之口遺跡	前橋市 上細井町	00125	平成20年度	平成23年度
64	丑子遺跡	前橋市 上細井町	00134	平成20年度	平成24年度
65	上細井五十嵐遺跡	前橋市 上細井町	00777	平成20・21年度	平成24年度
66	天王・東組屋谷戸遺跡	前橋市 上細井町	00131	平成20・21年度	平成25年度予定
67		前橋市 富士見町	90094	平成20・21年度	
68		前橋市 上細井町	00798	平成21年度	
69	上町・崎沢西組屋谷戸遺跡	前橋市 富士見町	90097	平成21年度	平成24年度
70	王久保遺跡	前橋市 上細井町・富士見町	00794	平成21・24年度	平成24年度
71	新田上遺跡	前橋市 上細井町	00128	平成24年度	平成26年度予定
72	上細井中島遺跡	前橋市 上細井町	00787	平成21・24年度	平成25年度
73	上細井御山遺跡	前橋市 上細井町	00786	平成21・24年度	平成24年度
74	山王・栗遺跡群	前橋市 青柳町	00795	平成21・22・23・24・25年度	平成26年度予定
75	引切塚遺跡	前橋市 青柳町	00434	平成24年度	平成26年度予定
76	青柳塚上遺跡	前橋市 青柳町	00325	平成24年度	平成26年度予定
77	日輪寺諏訪前遺跡	前橋市 日輪寺町		調査除外	—
78	諏訪遺跡	前橋市 日輪寺町	00144	調査除外	—
79	川俣根岸遺跡	前橋市 川俣町	00807	平成24年度	
80	川俣山下(道東)遺跡	前橋市 川俣町	00808	平成24・25年度	
81a	関根縮ヶ沢遺跡	前橋市 関根町	00802	平成24年度	平成26年度予定
81b	関根赤城遺跡	前橋市 関根町	00803	平成24年度	平成25年度予定
82	田口下田尻遺跡	前橋市 田口町	00804	平成23・25年度	



第2図 上武道路8工区の道跡 国土地理院1/50000地形図「前橋」平成10年発行を使用

8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事が準備が起点側から始まった。これまでの調査状況からみて、埋蔵文化財が用地内にあることは明確であったことから、埋蔵文化財の発掘調査を実施するための調整がおこなわれた。

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日付で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月1日～平成29年3月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお、「協定書」は、平成18年6月20日付で、調査期間の開始を3ヶ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。この「変更協定書」に基づいて、平成18年7月から東端の上京唐ノ堀遺跡・上京新田塚遺跡群の発掘調査が開始された。

また、各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課により、平成18年4月25・26日、同年5月17・18日、同年8月11日、同年12月5～7日、平成19年8月16～27日、同年12月10日～14日、平成21年1月6日～8日、同年4月20日～5月7日、同年9月25～29日、平成22年12月6～20日、平成23年5月12日、同年8月22日～24日、同年10月18日、の13回(23年度末現在)にわたって、8工区の試掘調査が実施された。

上細中島遺跡の試掘調査は、平成21年4月～5月に行われ、調査結果から台地上に縄文時代や古代の集落が存在することが明らかとなり、翌年1月より発掘調査が実施されることになった。

第4節 調査の方法と経過

(1) 調査区とグリッドの設定

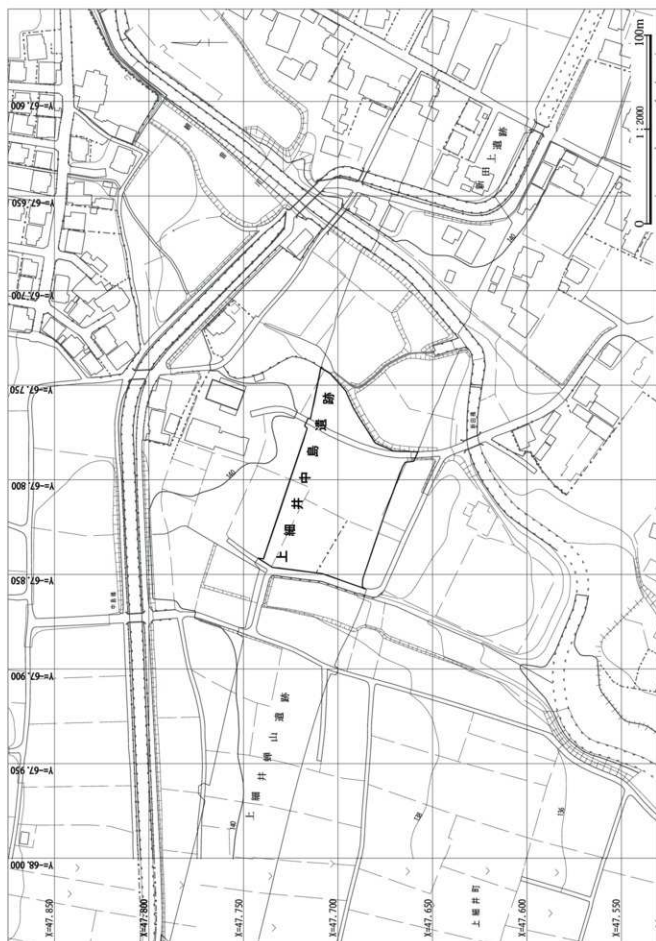
本遺跡の発掘調査は、作業の工程や用地取得の進捗により平成21年度と平成24年度の2ヶ年度に渡って進められたが、調査範囲全体を一つの調査区とした。その調査区は国家座標(世界測地系)第IX系の $X=47670 \sim 47737$ 、 $Y=-67759 \sim -67855$ の範囲に収まり、総調査面積は4758.13m²である。

グリッドの設定は、上武道路8工区全域をカバーできるように国家座標(世界測地系)第IX系の $X=45,000$ 、 $Y=-63,000$ (前橋市上京地内)を基点として、1区画1km四方のグリッドが割り付けられ、1～13の地区が設定されている。本遺跡は7地区とされる大グリッドに位置する(第4図)。

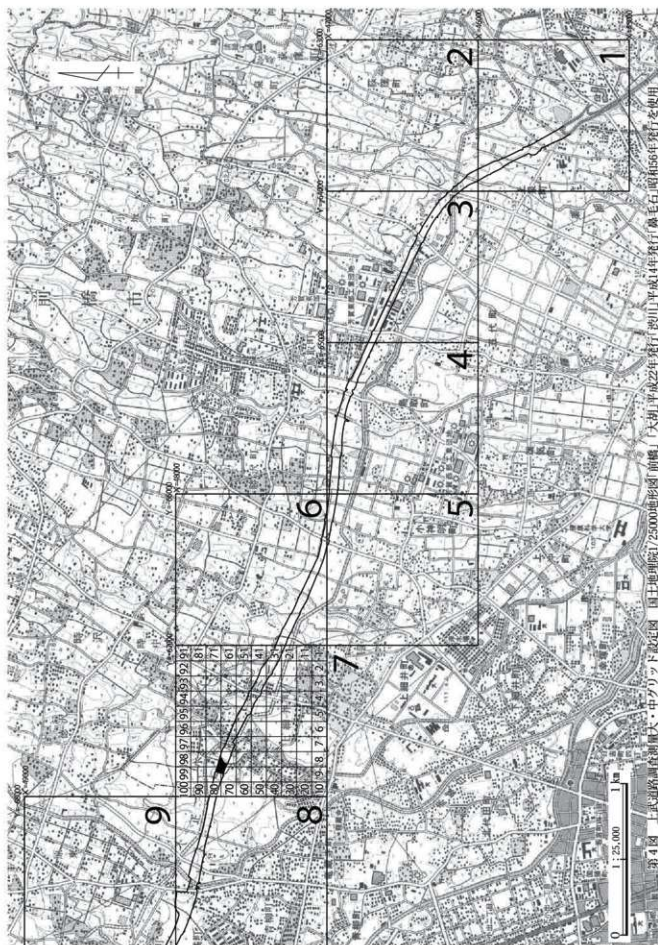
大グリッドを100m四方の中グリッドに100分割し、分割された中グリッドは、大グリッドの南東隅を基点とした。さらに、この中グリッドを5m四方に分割し、中グリッドの南東隅を基点にY軸となる東から西へA～T、X軸となる南から北へ1～20を付し、最小のグリッドとして呼称した(第5図)。なお、大グリッドの境界が本調査区を通らないため、大グリッドの番号を省略した中グリッドと小グリッドを「68区S17」のように標記した。

(2) 発掘調査の方法

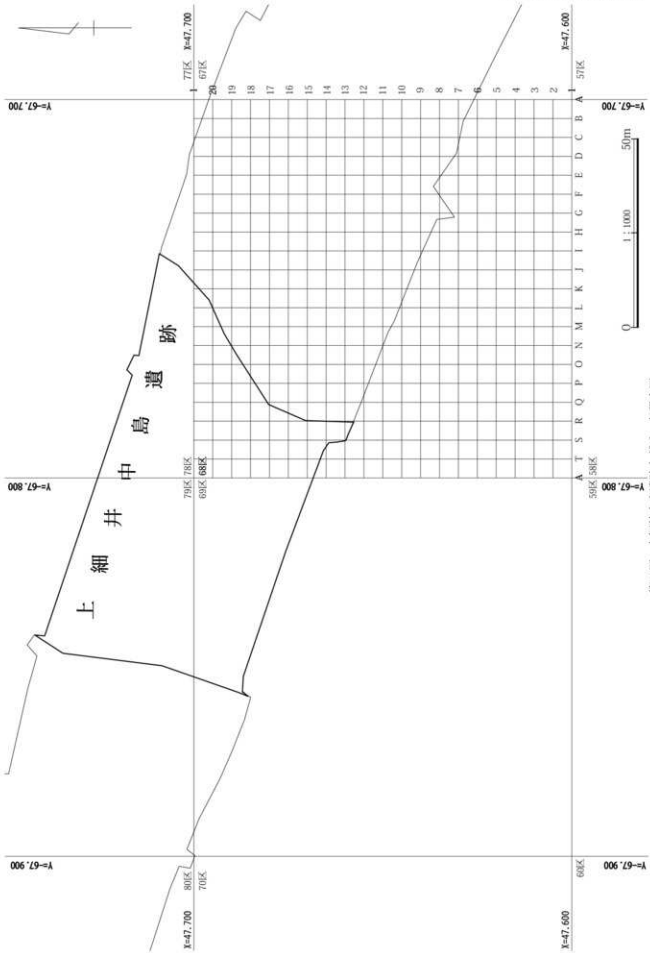
発掘調査は、表土除去に重機を使用し、表土除去後の各作業は発掘作業員により実施した。遺構確認作業はジョレンを用いて行い、面的な遺構の把握に努めた。遺構確認は、まず基本土層V層上位を確認面として、縄文時代中期から中・近世までの遺構を検出した(第1面)。その後、この確認面以下のローム上面までの層位にトレンチ調査を行い、遺構・遺物の有無を確認した結果、縄文時代早期の遺物を確認したため、ローム漸移層となる基本土層IX層上位を確認面として遺物の集中する箇所を拡張して調査を行った(第2面)。検出された遺構の種類には、縄文時代と平安時代の竪穴住居、近世の掘立柱建物をはじめ、他に土坑、井戸、溝、ピットがある。さらに、旧石器時代を対象としたローム層への確認調査の結果、石器を確認したため、その周囲を拡張して調査を行った。



第3圖 上野井中島遺跡調査範囲図 前編市役所発行 1/2500 前編市地形図(平成21年測図)を使用



第4図 上式道路調査測量大・中グリッド政定図 国土地理院1/25000地形図「前橋」「大胡」平成22年発行「西川」平成14年発行「藤毛石」昭和56年発行を引用



第1章 調査に至る経過

各遺構の調査は、堅穴住居では土層確認のための十字のベルトを設定し、土坑は半裁して土層観察を行う等、それぞれに適した方法を用いた。井戸は、途中まで半裁での観察を行い、縦坑全体については断ち割り調査とした。数の多いピットについては、先ず半裁し、遺構と判断されたものに限って記録することとした。遺構名は、遺構の種類毎に種別記号を用いて通し番号で標記した。

遺構等の測量は、主に土層断面図を作業員による手実測とし、平面図と一部の断面図を測量業者に委託して調査期間の短縮を図った。縮尺は、1/10、1/20、1/40を基本とし、それぞれの遺構の性格に合わせて適宜使用した。

写真撮影は、中判カメラでの白黒フィルム、デジタル撮影データの2種類を基本とした。調査区の全景写真等は、調査の進展にあわせて行い、併せてラジコンヘリによる空中写真撮影を業者に委託して実施した。なお、撮影した写真のデジタルデータは、HDやDVD-ROM等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

(3)発掘調査の経過

発掘調査は、平成21年度調査として平成22年1月1日から同年3月31日にかけての3ヶ月間、その後の平成24年度調査として平成24年10月1日から同年10月31日までの合計4ヶ月間を要した。

平成22年

- 1月4日 現地事務所の設定開始。
- 1月12日 調査区東側の観音川右岸縁より、重機による表土掘削を開始する。
- 1月18日 調査区東側の道路部分までを対象に、旧石器の範囲確認調査を開始する。また、調査区では、重機による表土掘削と作業員による遺構検出作業を平行して進める。
- 1月19日 住居および土坑等の遺構調査を開始。
- 1月27日 縄文早期および旧石器の範囲確認調査開始。
- 1月27日 調査区東半を対象に、ラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。群馬大学教授早川由紀夫氏(地質学)が発掘調査を見学。
- 1月28日 縄文早期および旧石器の遺物包含層調査のためトレンチを拡張する。

- 2月2日 降雪のため、終日、調査区の除雪を実施。
- 2月17日 縄文早期の調査全景を撮影する。
- 2月19日 調査区西半を対象に、重機による表土掘削を開始する。
- 2月24日 旧石器時代の縦長剥片が出土した。
- 3月1日 縄文早期の住居精査を開始する。
- 3月8日 調査区西半を対象に、ラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。
- 3月9日 降雪により作業は中止。翌日は、除雪を行う。
- 3月19日 調査区の発掘作業及び写真撮影が終了。
- 3月23日 調査区の埋め戻しを開始する。
- 3月29日 埋め戻し作業が完了し、現地調査を終了する。

平成24年

- 10月1日 調査区の用地等の確認、重機の運搬等を調整。
- 10月11日 重機による表土掘削を開始する。
- 10月15日 遺構確認作業を開始する。
- 10月22日 住居・縄文早期の遺物包含層精査を開始。
- 10月25日 13号住居の写真撮影。旧石器の範囲確認調査を開始。
- 10月29日 旧石器の確認調査を終え、現地調査を終了。

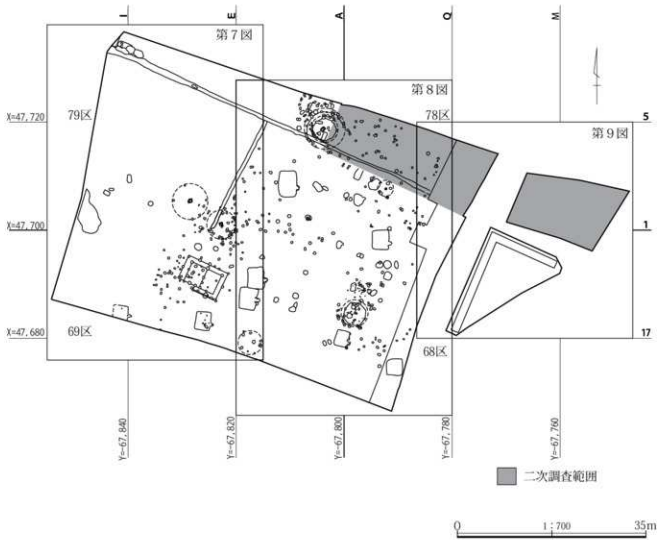
(4)整理事業の経過

整理事業は、平成25年1月1日から平成25年9月30日までの9ヶ月間を予定して行った。

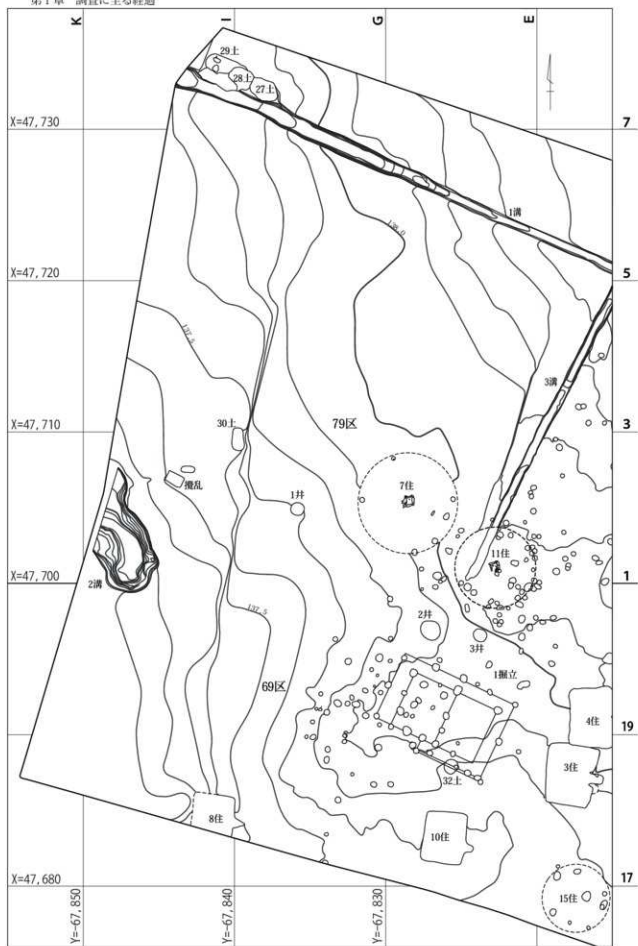
平成24年度の整理では、出土遺物の分類から開始し、土器の接合・復元・写真撮影、実測作業を行った。遺構平面図は確認と修正作業を進めた。

平成25年度は前年度から引き続き作業を継続し、縄文土器の拓本・断面実測作業、石器の分類および実測作業・写真撮影、これら遺物図のトレース作業を行い、各遺物の観察表の執筆を行った。遺構図については、修正作業の後にデジタル編集作業を行い、併せて遺構写真の選定、本文執筆を行った。その後、報告書版下のレイアウト作成、全体のデジタル編集作業およびデジタル組版を行い、印刷・製本を業者委託して発掘調査報告書を刊行した。また、整理した遺物や写真等については、管理台帳を作成し、活用し備えて遺物や資料類の収納作業を行い、すべての整理業務を完了した。

なお、遺構配置全体図を第6～9図に示した。

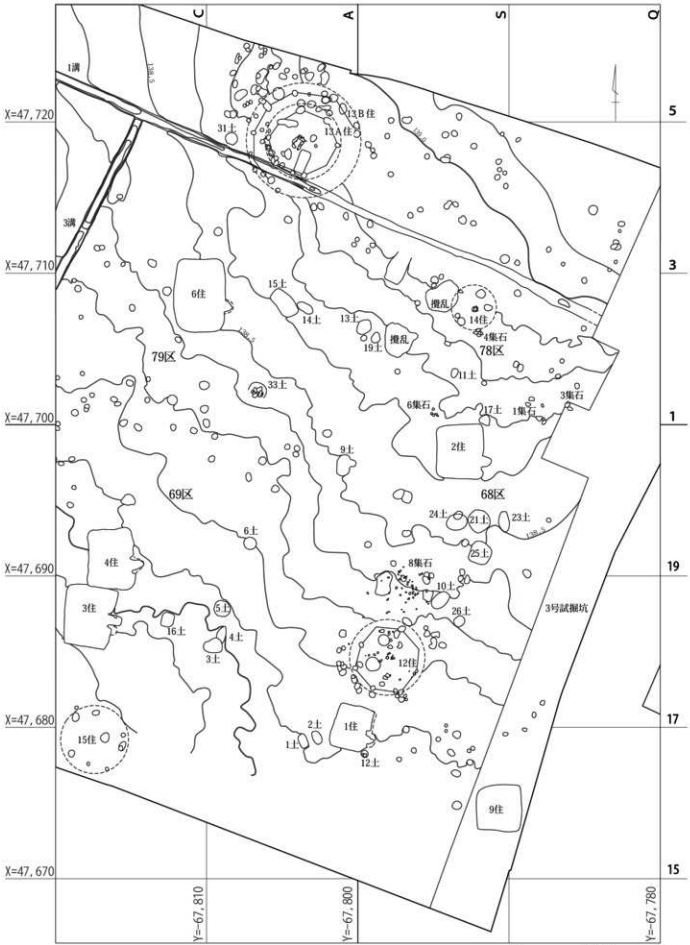


第6図 遺構配置全体割り付け図

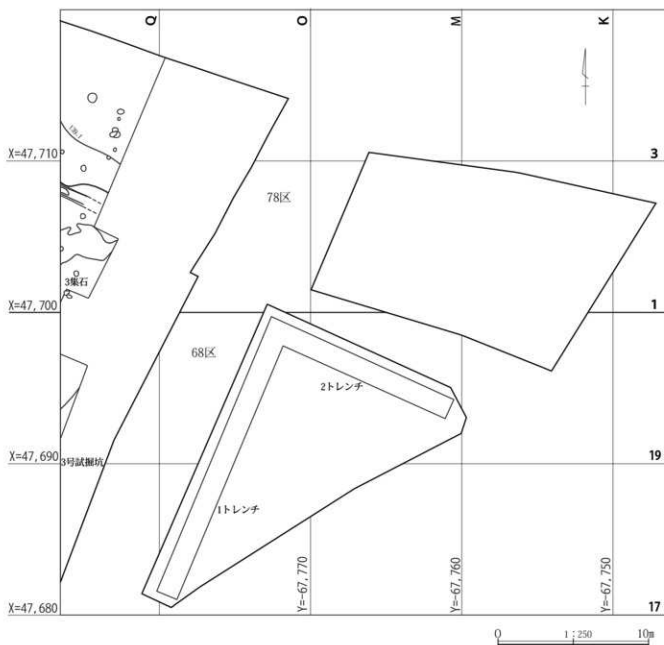


第7図 遺構配置全体図(1)

0 1:250 10m



第8図 遺構配置全体図(2)



第9図 遺構配置全体図(3)

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の地形・地質的環境

(1) 赤城火山の形成史

遺跡が立地する自然環境の理解を深めるため、先ず赤城南麓の地形発達史を中心に赤城火山の形成史について概要を述べる(第10図)。

赤城火山は火山フロント上に位置する大型の成層火山であり、山頂には外輪山の黒輪山(1827m)や溶岩ドームの地蔵岳(1673m)などが見られる。山頂にはカルデラ湖の大沼(おの)が、また、溶岩ドームの頂上に形成された爆裂火口の小沼(この)が見られる。山腹には溶岩ドームの鈴ヶ岳や鍋割山などが存在し、山麓には土石流堆積物等からなる火山麓扇状地が発達し、沼田盆地や関東平野に向かって裾野を形成している。

赤城火山の噴火史は、守屋(1968)により地形や地質が明らかにされ、Koga(1984)の岩石学的な研究、鈴木(1990)や竹本(2008)はテフラや地形発達史から赤城火山の形成史を明らかにした。守屋(1986, 1993)は赤城火山の形成を第1～4期に区分した。テフラや地形発達史などの最近の研究によって明らかになった赤城火山の形成史について守屋の形成期区分に従って述べる。

第1期は成層火山の形成期である。赤城火山が噴火を開始し、標高が2500mに達する富士山型の成層火山を形成した。この火山は古期成層火山と呼ばれ、玄武岩質の安山岩溶岩や降下スコリアの噴出によって断続的に急傾斜の成層火山が形成された。鈴木(1990)は古期成層火山の年代は約50万年前に遡り、40万年前に真岡テフラを噴出した可能性を指摘した。しかし山元(2007)はこのテフラの給源を飯土火山に比定しており、現在まで古期成層火山から噴出した規模の大きな噴火に伴うテフラは知られていない。竹本(2008)は、古期成層火山の初期に南郷岩層なだれが発生し、片品川水系で備原湖成層が形成されたことや、湖成層にMLu-10(草津白根火山起源のテフラで矢口(1999)の草津白根長野原6 [Ks-Ng6])が挟在することから、古期成層火山の開始期を50万年前とした。

古期成層火山の末期には大規模な山体崩壊がおり、山頂に馬蹄形カルデラが形成された。この崩壊で梨木岩層なだれ(竹本2008)が発生し、南西麓や南麓～南東麓に大規模な岩なだれ堆積物が堆積して泥流丘が形成された。利根川水系では沼田湖成層、渡良瀬川水系では花輪湖成層が形成されており、その年代は竹本(2008)により20万年前と推定されている。

第2期は古期成層火山の形成がさらに続く。山頂に形成された馬蹄形カルデラの内部を埋めるように噴出した厚い溶岩からなり、船ヶ原溶岩や栴形山溶岩などを形成し成層火山が再構築された。第2期から第3期までは火山活動の長い休止期が存在する。

第3期はプリニー式噴火による爆発的な山頂噴火と山頂カルデラ形成期である。山頂部に馬蹄形カルデラと新期成層火山の間を埋める鈴ヶ岳や鍋割山の溶岩ドームが形成された。鈴ヶ岳西麓の沼尾川沿いには棚下火砕流堆積物が、鍋割山南麓には大胡火砕流堆積物が分布している。第3期の末期には山頂から赤城湯ノ口テフラ[Ag-UP]が噴出し、ガラ石質火砕流堆積物が南東麓に堆積した。この活動で山頂にカルデラが形成された。第3期の棚下火砕流堆積物は120千年前、大胡火砕流堆積物は75千年前、赤城湯ノ口テフラは57千年前に噴出した。鈴木(1990)は第3期のプリニー式噴火が10万年間に10回以上も発生したとしている。

第4期は山頂の溶岩ドーム形成期である。45千年前にはカルデラ内の山頂火口から赤城鹿沼テフラが噴出し、その後、カルデラ内に地蔵岳溶岩ドームや小沼溶岩円頂丘が形成された。早川(1999)はカルデラ内の溶岩ドームの形成時期を始良Inテフラと浅間板鼻褐色テフラの間と考えた。

完新世の赤城山は、歴史時代の噴火活動が文書に残された。しかし、赤城火山が完新世に噴出した証拠となる噴出物は知られていない。『吾妻鏡』建長三年(1251)条には、赤木嶺が焼けたとする記事があり、気象庁はこれを根拠に活火山の指定を行った。守屋(1993)は地蔵岳周辺でこの噴火に対応する火山砂を確認したが、早川(1999)

は噴火そのものに懐疑的で、山麓の山火事を文献が伝えられた可能性を指摘した。

(2) 赤城南麓の地形と地質

赤城火山は広大な裾野を有する火山で、北東部の足尾山地と接する部分を除いて東西約20km、南北30kmの火山麓扇状地が広がる(第11図)。

火山麓扇状地は成層火山が放射状に浸食され、浸食谷から供給される多量の土砂が山麓から平野にかけて堆積することによって形成された扇状地を呼び、扇状地を構成するのは成層した凝灰質角礫岩層から構成される堆積物で、その起源は土石流堆積物や泥流堆積物である。

赤城南麓の地形は守屋(1968)が幾つかの地形面に区分した。赤城南麓で古期成層火山の山麓の一部を構成した斜面は、守屋(1968)によって「根利スコリア流堆積物と古期成層亜角礫層からなる定高性のある尾根」と呼ばれた山麓面で、主に鍋割山から荒山溶岩の麓から鼻毛石にかけて分布する。これらは第1～2期の噴出物や土石流などの扇状地堆積物によって構成される地形面である。

鍋割山の麓から滝窪、堀越にいたる山麓の台地は、「南麓軽石流堆積面」と呼ばれ、第3期の大胡火砕流堆積物によって形成された。

上細井中島遺跡は、赤城南麓に広がる白川扇状地(守屋1968、新井1971)の扇端に位置する。白川扇状地は標高400m付近を扇頂とし、扇央は標高が200～250m付近で東西に幅が約4km程度、扇端は標高が130～120m付近で北西から南東に6km程度の幅がある。扇状地の末端は、広瀬川低地に接し古利根川が形成した浸食崖が顕著である。

白川扇状地は、赤城白川が形成した火山麓扇状地で、赤城白川とは山頂と南部の外輪山周辺に集水域をもつ小水系である。白川扇状地上の平坦地形の開析は赤城火山の他の火山麓扇状地に比べて少ないので、赤城火山の形成史の中では新しい時期に形成された地形面であるといえる。同様の火山麓扇状地は、小規模なものが荒砥川や粕川の上流部にも存在する。白川扇状地の大部分は、早田(1990)により古期扇状地と呼ばれ、扇状地の前面にあって広瀬川低地と接する浸食崖から張り出す新期扇状地と複合した合成扇状地である。古期扇状地は土石流堆

積物からなる扇状地堆積物が認められ、榛名八崎テフラや、始良Tnテフラ以上の上部ローム層に被覆されている。

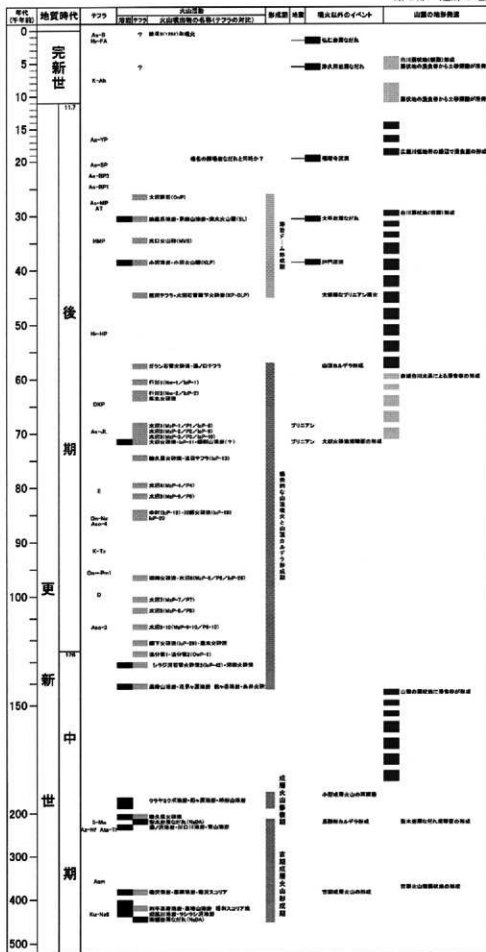
白川扇状地で上部ローム層の浅間室田テフラ以上に被覆される土石流堆積物は、小暮東山遺跡(群馬県教育委員会2011)で認められる。また、東田之口遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団2011；以下事業団と略す)では、浅間板鼻褐色テフラから浅間大窪沢テフラの間に砂主体の泥流堆積物が、堤遺跡(事業団2012)では白川扇状地を浸食した藤沢川の開析谷の下位で浅間白糸テフラの上位に泥流堆積物が、藤沢川の開析谷を埋積している。

白川扇状地には龍ノ川や観音川などの小川が認められ、扇状地に浅い谷を刻んでいる。谷の堆積物は上部ローム層や古期の扇状地堆積物を浸食して形成された谷を埋積して堆積しており、完新世の新期扇状地を構成する堆積物と同様の堆積物からなる。

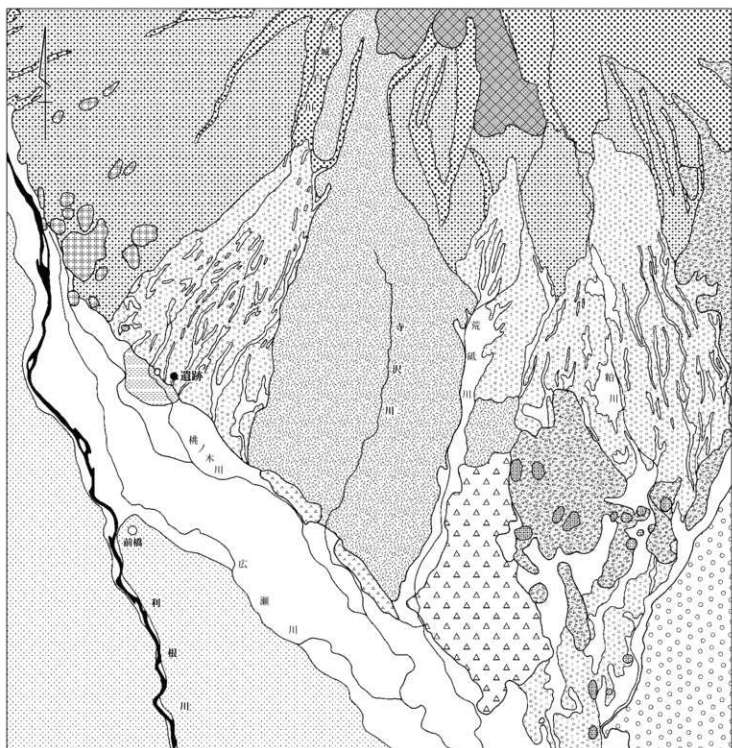
新期扇状地や古期の扇状地内の谷を埋めた堆積物は、浅間総社テフラや浅間宮前テフラの上位及び縄文時代中期前半に形成された。これらは後氷期のモンスーンの活動によりもたらされた扇状地堆積物であり、前橋台地に分布する総社砂層(早田1990)に相当する堆積物であると考えられる(矢口2011)。

上武道路8工区は、赤城南麓の縁を掠めるように横断し、山麓の地形面を貫いている。これらの地形面と調査対象遺跡は、以下のような関係となる。

上武道路の路線は、大胡火砕流堆積物が形成した標高130m前後の南麓軽石流堆積面(上泉唐ノ堀遺跡～胴城遺跡)を経て、藤沢川の谷底低地(鳥取塚田遺跡～小神明勝沢境遺跡)から白川扇状地の古期扇状地の台地(小神明富士塚遺跡～引切塚遺跡)を横断し、赤城白川を渡って新期扇状地(青柳宿上遺跡～諏訪遺跡)から広瀬川低地帯(川端山下遺跡～関根遺跡群)に至っている。なお、上細井山遺跡西側の山王・柴遊跡群の南部には、円頂丘からなる小丘がみられ、原之郷にある九十九山もこれに相当する。これらは橋山火山岩類で構成された泥流丘群と考えられ、白川扇状地の基底を構成する梨木岩層なだれにより運ばれた巨大岩塊群であると思われる。



第10図 赤城火山の噴火史



(作成 矢口)

0 2km

凡例

- | | | | | | |
|--|----------------------------|--|---------------------|--|--------------------------------------|
| | 白川扇状地堆積物 (新期・完新世) | | 火山麓扇状地堆積物 (後期更新世後半) | | 大湖火砕流堆積物 |
| | 爆発的な山頂噴火期の大砕流堆積物 (後期更新世前半) | | 爆発的な山頂噴火期以降の火山麓扇状地 | | 梨木岩層なだれ堆積物中の泥流丘 |
| | 爆発的な山頂噴火期の大砕流堆積物 (後期更新世前半) | | 梨木岩層なだれ堆積物中の泥流丘 | | 古湖成層火山・爆発的な山頂噴火期の大砕流堆積物 (中期～後期更新世前半) |
| | 梨木岩層なだれ堆積物 | | 梨木岩層なだれ堆積物中の泥流丘 | | 廣瀬川砂礫層及び谷底平野の堆積物 (後期更新世末～完新世) |
| | 梨木岩層なだれ堆積物 | | 梨木岩層なだれ堆積物中の泥流丘 | | 徳丸ラ・ハール堆積物 |
| | 梨木岩層なだれ堆積物 | | 梨木岩層なだれ堆積物中の泥流丘 | | 榛名火山・前橋台地 |
| | 梨木岩層なだれ堆積物 | | 梨木岩層なだれ堆積物中の泥流丘 | | 大間々扇状地 |

第11図 道跡周辺の地形と地質

第2節 調査区の層序

上細井中島遺跡での地層は、下位より白川扇状地を構成する暗灰色シルト質砂層を挟む暗褐色泥流堆積物、泥流堆積物を被覆した関東ローム層の上部ローム層と、黒色土並びに扇状地を開析した谷の堆積物である。調査区の模式的な層序を、台地と谷に区分して柱状図を第12・13図に示し、層相や特徴について述べる。なお、調査区の地層断面図は、第15～17図を参照して頂きたい。

以下、調査区台地上に分布する風成環境の下で堆積した地層群について述べる。

- I層**：調査区の地表面を構成する表土類で、耕作土からなる。
- II層**：暗灰色軽石まじりの火山灰土で、発泡の良い角閃石含有軽石(Hr-FA)や発泡の悪い灰色軽石(As-B)を含む。
- III層**：黒褐～黒色細粒火山灰土で、灰色軽石(As-C)を含む。本層は、黒色土の中で最も黒みが強い細粒火山灰土の層相を呈する。
- IV層**：暗灰～黒色細粒火山灰土で、径0.5～2mm大の発泡の悪い橙色の軽石(As-D)を含む。特に縄文時代中期に属する土坑などの遺構埋土には、この軽石が多く含まれる。
- V層**：暗灰色細粒砂質火山灰土で、斜長石を多く含む火山灰質中粒砂からなる。本層は、後述する谷を埋積した洪水堆積物を母材とする土壌と洪水堆積物からなり、谷部に向かって層厚を増し、灰色砂層に層相が変化する。本層は、調査区の台地上標高138.20mまで達しており、観音川の谷を埋積した洪水堆積物がオーバーラップ(下位層に対して上位層が緩やかな傾斜で接して覆うこと。急角度で接する場合はアバットと呼ぶ)して台地の頂部に達したことを示している。
- VI層**：暗黄灰～灰色砂質火山灰土～中粒砂層の互層からなり、V層と同様に洪水堆積物を母材とする土壌と洪水堆積物からなる。下位より層厚0～20cmの灰褐～灰色中粒砂層のVc層、層厚10～30cmの暗黄灰～黄灰色砂質火山灰土であるVb層、層厚0～20cmの暗黄灰色砂質火山灰土からなるVla層に岩相区分される。本層の上半部は、土壌化の度合いにより区分されたこと

から、Vla層とVb層は同時異相の層序関係にある可能性が高い。本層下位のVc層は、下位層位をオーバーラップする洪水堆積物からなり、谷に向かって層厚を増し、灰色砂～砂礫層に層相変化する。

- VII層**：暗灰～黒色細粒火山灰土からなる。本層はシルト質の細粒火山灰土で、谷の近くでは下位に層厚5cmの灰～黄灰色シルト層を挟む。本層は下位層にオーバーラップして堆積することから、小規模な洪水堆積物と考えられる。
- VIII層**：暗灰～黒色細粒火山灰土。径1mmの黄灰色軽石(As-Mm)を含む。台地の頂部では土壌化が著しく、成層した暗灰色砂質火山灰土からなる。
- IX層**：暗灰褐色風化火山灰土からなる。径3～5mmの黄灰色軽石(As-YP)は、径20mm大のブロックを呈し、成層する場所と堆積が乱れる場所が存在する。
- XI層**：黄灰色風化火山灰土からなる。上半部は、径3mmの青灰色岩片を含み、径3～7mmの黄灰色軽石(As-0kp)が多く点在する。下半部には、径1mmの黄灰色軽石が多い。
- XII層**：黄灰色風化火山灰土からなり、径5～8mmの白色軽石(As-SP?)を含む。本層は、鉱物粒が多い粉状の層相を呈する。
- XIII層**：黄灰褐色風化火山灰土からなる。
- XIV層**：黄褐色軽石層(As-BP3)のブロックを含む黄褐色風化火山灰土からなり、軽石層の分布は断片的。
- XV層**：黄灰褐色軽石層(As-BP2)からなる。軽石層は、径50～80mmのブロック状を呈し、径2～5mmの橙色軽石や黒色粗粒火山灰砂からなる。本層の上面は、台地中央の東西断面で標高137.30～137.40mに分布し、水平に堆積している。
- XVI層**：黄灰色軽石質火山灰～軽石層(As-BP1)からなる。本層は、径1～5mmの灰色軽石を含み、上半部に黒色粗粒火山灰砂が多い。
- XVII層**：黄灰褐～褐色風化火山灰土からなる。径1～3mmのカラフルな軽石(As-MP)を多く含む。青灰色の岩片も含まれる。
- XVIII層**：灰褐色泥流堆積物からなり、径10～40mmの安山岩垂角礫を含む。基質は、灰～紫灰色火山灰～火山灰質砂からなる未詳泥流堆積物であり、後述のXX層まで一連の堆積物と考えられる。

XX層：暗灰色シルト質砂層からなる。西に隣接する上細井嶺山遺跡では、本層より榛名三原田テフラ(Hr-MHP)が報告されているが、調査区内では未確認。

XX層：灰褐色泥流堆積物からなり、XVII層と同様。

次に、調査区の谷周辺に分布する風成～半水成・水成環境で堆積した地層群について述べる。

I層：表土で、耕作土からなる。

IV層：暗灰～黒色細粒火山灰土で、径0.5～2mm大の発泡の悪い橙色の軽石(As-D)を含む。本層は、下位のV～VII層からなる埋積谷堆積物IIを被覆する風成層で、谷を供給源とする洪水堆積物群の離水期以降に堆積した黒色土である。

V層：黄灰～灰色の細粒～中粒砂層からなる。本層は、地層断面Aで典型的な谷埋め堆積物の様相を示し、標高136.80～138.20mに見られることから、最大層厚は140cmである。ラミナがみられない塊状の砂層から構成され、観音川水系を起源とした洪水堆積物である。

VI層：上半部は、灰褐色中粒砂層～砂質火山灰土のVIIa層からなる。本層は、全体に植物の根や昆虫類、小動物の生物擾乱が著しい。土壌化した火山灰質の暗灰色土には、斜長石が多く含まれ、灰色軽石粒が点在する。本層中からは、縄文時代前期の土器片が出土している。

VI層下半部は、暗灰色砂質火山灰土のVIIb層からなり、下位層の土壌化帯を呈する。本層の下底は植物の根などによる生物擾乱が著しく、やや不明瞭である。

VI・VII層：灰色シルト～シルト質砂互層からなり、調査区の台地を取り巻く谷の縁辺部に分布する。本層は、火山灰質シルトから砂を主体とする堆積物で成層し、調査区の南東縁では砂礫層に層相変化する。標高137m付近まで及んだ、観音川の河川堆積物からオーバフローした洪水堆積物と考えられる。

VIII層：黒色細粒火山灰土～黒色シルト層からなる。下半部に、径2～5mmの灰色軽石(As-Mn)を多く含み、層厚5cmの軽石と鉱物粒を多く含む帯状を呈する。なお、本層は、下位のIX～XII層からなる埋積谷堆積物Iを被覆する風成層で、泥流堆積物を開析した谷を埋める最終氷期末の堆積物を覆い、その離水期に堆積した黒色土である。

IX層：上半部は、暗灰～灰色火山灰質シルト層からなるIXa層からなる。調査区西部に存在した谷にのみ分布し、垂角礫を含む。また、下位の層厚10cmは、火山岩片を多く含む径2～3mmの灰色軽石(As-Sj)が散在する。なお、本層上位には、VIII層の灰色軽石(As-Mn)が見られないので、調査区では浅間総社テフラと浅間宮前テフラの層序関係を確認できていない。

下半部は、灰～白色火山灰質シルト層からなるIXb層である。

X層：淡紫灰色軽石質火山灰層(As-YP)からなり、浅間板鼻黄色テフラが水成堆積した地層からなる。

XI層：灰色火山灰質シルト～砂互層のXIa層と灰色軽石質火山灰層(As-Okp)で、基質はシルト質中粒砂からなるXIb層からなる。本層の下位には、灰～黄灰色火山灰質シルト層が見られることから、XII～XIII層に相当する堆積物と考えられる。また、本層には、浅間板鼻褐色テフラの軽石は含まれない。

XIII層：灰褐色泥流堆積物である。径30～600mmの安山岩垂角礫を含み、基盤を構成する。

文献

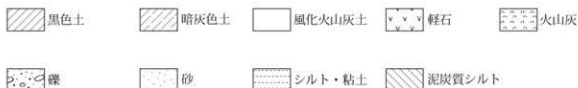
- 新井房夫 1971『前橋市の地形・地質』『前橋市史』1 pp.8-86。
Koga,S(1984) GeologyandpetrologyofAkagiVolcano, Gunma Prefecture, Japan, Sci. Rep., Inst. Geosci., Univ.Tsukuba, Sec. 8, 5, 1-67.
守屋以智雄 1968『赤城火山の地形及び地質』前橋営林局 pp.1-65.
守屋以智雄 1993『赤城火山の生い立ちと将来の噴火』『火山灰考古学』
新井房夫編 古今書院 pp.173-193。
早田勉 1990『群馬県史の自然と風土』『群馬県史通史編1、原始古代』1
群馬県史編纂委員会編 pp.39-129。
鈴木敏彦 1990『テフロクロノロジーからみた赤城火山最近20万年前の噴火史』『地学雑誌』99-2 pp.182-197。
竹本弘幸 2008『利根川中～上流域の段丘』『日本地方地質誌3関東地方』
日本地質学会編 朝倉書店 pp.352-356。
山元孝弘 2007『テフラ層序からみた新高隈中期更新世火山の形成史：
関東北部での飯土真岡テフラとM157海面変動の関係』『地質調査研究報告』58-3/4 pp.117-132。
早川由紀夫 1999『赤城山は活火山か?』『日本地球惑星科学連合1999年
大会予集録』As-012。
矢口裕之 2011『関東平野北西部、前橋堆積盆地の上部更新統から完新統
に関わる諸問題』『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業研究紀要』
29pp.21-40。

層序区分	層厚 (cm)	柱状図	層相	基本土層	テフラ	標識地
表土	20		耕作土、表土。	I		
黒色土	黒色火山灰土		暗灰色軽石まじり火山灰土。白色軽石(Hr-FA)や灰色軽石粒(As-B)を含むが断片的に分布する。	II	A s-B Hr-FA	5号トレンチ
			黒褐～黒色細粒火山灰土。 灰色軽石(As-C)を含む。	III	As-C	
			暗灰～黒色細粒火山灰土。 径0.5～2mmの橙色軽石粒(As-D)を含む。	IV	As-D	
			暗灰色細粒砂質火山灰土。斜長石を多く含む火山灰質中粒砂からなる。本層は谷部を埋積した洪水堆積物を母材とする土壌からなり、谷部で灰色砂層に層相変化する。	V		
			暗黄灰～灰色砂質火山灰土～中粒砂層の互層。 下位より層厚0～20cmの灰褐～灰色中粒砂層、層厚10～30cmの暗黄灰～黄灰色砂質火山灰土、層厚0～20cmの暗黄灰色砂質火山灰土からなる。本層は下位層をオーバーラップする洪水堆積物とその土壌からなり、谷部では灰色砂～砂礫層に層相変化する。	VI	a b c	
			暗灰～黒色細粒火山灰土。シルト質の火山灰土で下位に層厚5cmの灰～黄灰色シルト層を共存する。本層は下位層にオーバーラップする。	VII		
			暗灰～黒色細粒火山灰土。径1mmの黄灰色軽石(As-Mn)を含む。台地の頂部では土壌化が著しい。	VIII	As-Mn	
		漸移帯	10		暗灰黄褐色風化火山灰土。軟質で母材は風化火山灰土。	
上部ローム層	15		暗灰褐色風化火山灰土。径3～5mmの黄灰色軽石(As-YP)は径20mm大のブロックを呈する。	X	As-YP	6号トレンチ
	20		黄灰色風化火山灰土。 上半部に径3mmの青灰色岩片を含み、径3～7mmの黄灰色軽石(As-0kp)が多く点在する。下半部には径1mmの黄灰色軽石が多い。	XI	As-0kp	
	30		黄灰色風化火山灰土。 径5～8mmの白色軽石(As-SP?)を含み、鉱物粒が多い粉状の層相を呈する。	XII	As-SP	
	10		黄灰褐色風化火山灰土。	XIII		
	10		黄褐色軽石層(As-BP3)のブロックを含む黄褐色風化火山灰土。	XIV	As-BP3	
	20		黄灰褐色軽石層(As-BP2)。径50～80mmのブロック状を呈する。 径2～5mmの橙色軽石や黒色粗粒火山砂からなる。	XV	As-BP2	
	10		黄灰色軽石質火山灰～軽石層(As-BP1)。 径1～5mmの灰色軽石を含み、上半部に黒色粗粒火山砂が多い。	XVI	As-BP1	
	10		黄灰褐～褐色風化火山灰土。 径1～3mmの雑色軽石(As-MP)を多く含む。	XVII	As-MP	
白川扇状地堆積物	90		灰褐色泥流堆積物(未詳泥流堆積物) 径10～40mmの安山岩亜角礫を含み、基質は灰～紫灰色火山灰～火山灰質砂からなる。	XIII		1号トレンチ
	30		暗灰色シルト質砂層。	XIII		
	20		灰褐色泥流堆積物(未詳泥流堆積物)。	XX		

第12図 基本層序図1(台地上)

第2章 遺跡の概要

層序区分	層厚 (cm)	柱状図	層相	基本土層	テフラ	その他
表土	16		耕作土、表土	I		
黒色火山灰土	20		暗灰～黒色細粒火山灰土。 径0.5～2mmの橙色軽石(As-D)を含む。	IV	As-D	
埋積谷堆積物Ⅱ	70		黄灰～灰色細粒～中粒砂層。	V		
	20		灰褐色中粒砂層～砂質火山灰土。全体に生物擾乱が著しい。斜長石を多く含む灰色軽石が点在する。	VI	a	As-E?
	20		暗灰色砂質火山灰土。下位の洪水堆積物の土壌化帯で下底は植物の根などによる生物擾乱が著しい。		b	
	50		灰色シルト～シルト質砂互層。	VI・VII		
埋積谷堆積物Ⅰ	50		黒色細粒火山灰土～黒色シルト層。 下半部に径2～5mmの灰色軽石(As-Im)を多く含む、軽石と鉱物粒が多いゾーンが成層している。	VIII	As-Im	2号トレンチ 7号トレンチ
	14		暗灰～灰色火山灰質シルト層。含歪角礫、下位10cmは火山岩片を多く含む径2～3mmの灰色軽石(As-Sj)が散在。	IX	a	As-Sj
	20		灰～白色火山灰質シルト層。		b	
	10		淡紫灰色軽石質火山灰層(As-YP)。	X	As-YP	
	20		灰色火山灰質シルト～砂互層。	XI	a	
	20		灰色軽石質火山灰層(As-0kp)。 基質はシルト質中粒砂。		b	As-0kp
	30		灰～黄灰色火山灰質シルト層。	XII～XIII		
白川扇状地堆積物	10+		灰褐色泥流堆積物(未詳泥流堆積物) 径30～600mmの安山岩歪角礫を含む。	XIV		



第13図 基本層序図2(東・西斜面)

第3節 周辺の遺跡

群馬県の中央部に位置する赤城南麓は、(古)利根川流域に位置し、旧石器時代をはじめとした各時代の数多くの遺跡が知られている。また、古代においては、「勢多郡」とされた地でもあり、律令期の一角を担う地域として、その重要度は高い。

上武道路8工区周辺の遺跡位置図と一覧を第14図・表3に示し、各時代ごとに記す。

(1) 旧石器時代の遺跡

上武道路8工区の発掘調査においても、旧石器時代の遺構・遺物は調査され、すでに上泉唐ノ堀遺跡、上泉新田塚遺跡群、上泉武田遺跡、五代砂留遺跡群、芳賀東部団地遺跡、胴城遺跡は『上武道路・旧石器時代遺跡群』(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第535集 2012)として刊行されている。

報告された上泉唐ノ堀遺跡(2)では、中部ローム層の極名八崎テフラ(Hr-HP)から暗色帯下位に結晶片岩の礫が出土し、中部ローム層の暗色帯(第3文化層)、上部ローム層の始良Inテフラ(AT)から浅間室田テフラ(As-MP)(第2文化層)、浅間白糸テフラ(As-SP)から浅間大窪沢テフラ(As-OKP)(第1文化層)の各文化層に石器群が出土している。また、暗色帯からは、直径約25mの環状ブロックが検出されている。上泉新田塚遺跡群(3)においても、上泉唐ノ堀遺跡と同様の層位から石器群が出土している。上泉武田遺跡(4)では、暗色帯およびATからAs-MP(第3文化層)、浅間板岩褐色テフラ(As-BP)からAs-SP下位(第2文化層)、As-SPから浅間板岩黄色テフラ(As-YP)(第1文化層)の各文化層に石器群が出土している。五代砂留遺跡群(5)では、暗色帯(第3文化層)、暗色帯から上部ローム層のAs-BP(第2文化層)、As-SPからAs-YP(第1文化層)の各文化層に石器群が出土している。芳賀東部団地遺跡(6)では、暗色帯(第2文化層)、暗色帯から上部ローム層のAs-BP(第1文化層)の各文化層から石器が出土し、第2文化層からは環状ブロックが検出された。胴城遺跡(8)では、Hr-HPから暗色帯下位に結晶片岩の礫が出土している。また、As-SPからAs-YP(第1文化層)に石器が出土している。これらの各遺跡は、大胡火砕流が形成した台地上に位置する遺跡である。

白川扇状地での旧石器時代の遺跡は少なく、上武道路8工区中で本遺跡の西に隣接する上細井嶺山遺跡(21)は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第560集(2013)として報告され、As-OKPからAs-YP間に石器2点が出土している。同様に山王・柴遺跡(22)や青柳宿上遺跡(24)においても数点の石器類が出土し、新田上遺跡(20)では120点余の石器類が出土している。また、この白川扇状地での最初の旧石器時代調査として知られる龍ノ口遺跡は標高444mに位置し、ホロカ型の細石核が出土しており、調査ではAs-YP下の層位から計111点の石器類が出土している。木暮東新山遺跡では、As-BP下、As-OKP降下前後、As-YP下に文化層3枚が確認され、第2文化層として報告された石器群は比較的広範囲に分布し、小規模な礫群も見られる。また、住居状遺構とされた遺構も存在している。

これら白川扇状地内での遺跡は、後期旧石器時代の後半期石器群にあたり、群馬県内に多い前半期石器群(暗色帯中の石器群)ではないことが特筆できる。白川扇状地内での扇状地堆積物およびその下位の状況は、調査遺跡のデータ等からしても、その形成過程に複雑さを呈しているようで、旧石器時代の遺跡や分布を考える上でも、扇状地内の地形形成・発達を理解が必要不可欠である。

(2) 縄文時代の遺跡

赤城南麓には、縄文時代の遺跡が数多く存在するのは周知の通りで、この南麓域においても同様である。時間的な傾向とすると、前期の遺跡が最も多く、次いで中・後期の遺跡で、草創期・早期・晩期の遺跡は少ない。

草創期の遺物が出土した遺跡には、上武道路8工区の発掘調査において本遺跡(1)および堤遺跡(9)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第568集 2013)から石楯類、小神明勝沢遺跡(10)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第524集 2012)や小神明湯気遺跡(40)で有舌尖頭器、上百駄山遺跡(237)で隆起線土器1点が断片的に出土しているに止まっている。県内の草創期の遺跡には、隆起線土器や局部磨製石斧が出土した小島田八日市遺跡、厚手爪形土器や薄手爪形土器と多縄文系土器群が出土した著名な西鹿田遺跡、五日牛新田遺跡等が知られ、扇状地内での概期集落遺跡が発見される可能性は高い。

早期の遺跡には、上武道路8工区の発掘調査において



第14図 周辺遺跡図

第2章 遺跡の概要

本遺跡、本遺跡の西に隣接する上細井蛸山遺跡(21)、堤遺跡、芳賀東部団地遺跡(6)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第551集 2013)、五代砂留遺跡群(5)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第530集 2012)、上京新田塚遺跡群(3)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第522集 2011)、さらに引切塚遺跡(23)や青柳宿上遺跡(24)があり、堤遺跡では燃糸文系土器、芳賀東部団地遺跡では燃糸文系土器・沈線文系土器・条痕文系土器、五代砂留遺跡群では燃糸文系土器・押型文系土器・沈線文系土器の出土が報告されている。また、周辺の早期の遺跡には、坂上遺跡で燃糸文系土器・押型文系土器・沈線文系土器・条痕文系土器の出土と共に集石が検出されている。

前期の遺跡は、上武道路8工区の発掘調査において上泉唐ノ瀬遺跡(2)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第510集 2010)で諸磯式期の集落が、上泉新田塚遺跡群では二ツ木式期の集落および関山式期・黒浜式期・諸磯式期の住居、芳賀東部団地遺跡では有尾式および黒浜式期と諸磯式期の住居・土坑、駒城遺跡(8)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第534集 2012)では黒浜式期の住居・土坑、五代砂留遺跡群では諸磯式期の住居・土坑、堤遺跡では花積下層式期の住居、上細井蛸山遺跡では諸磯式期の集落が検出され報告されている。この内、芳賀東部団地遺跡は以前の前橋市教育委員会による調査で前期の各時期の集落が検出されており、前期の継続的な大集落であったことが窺える。また、周辺の前期の遺跡には、前期初頭花積下層I式期の集落で著名な久保田遺跡(258)をはじめ、川白田遺跡(113)で有尾式および黒浜式期の集落、陣馬遺跡(286)・愛宕山遺跡(289)・旭久保遺跡(251)・上百駄山遺跡・広面遺跡(213)で諸磯式期の集落等、他にも多くの遺跡が知られている。

中期の遺跡は、上武道路8工区の発掘調査において上泉新田塚遺跡群で加曾利E式期の住居・土坑、芳賀東部団地遺跡と五代砂留遺跡群で五領ヶ台式土器、堤遺跡で加曾利E式土器が少量出土している報告があり、そして本遺跡での加曾利E式期の集落、さらに新田上遺跡でも加曾利E式期の集落が調査されている。また、周辺の中期の遺跡には、芳賀北曲輪遺跡(137)や小神明九科遺跡(38)で住居が報告され、旭久保遺跡や陣馬遺跡でも中期

後半の集落、下庄司原東遺跡(285)では住居が調査されている。

後期の遺跡は、上武道路8工区の発掘調査において堤遺跡で称名寺式期の集落が報告され、五代砂留遺跡群・芳賀東部団地遺跡・駒城遺跡では後期前半の土器類が出土している。また、周辺の後期の遺跡には、小神明遺跡群・小神明九科遺跡・芳賀北曲輪遺跡・下庄司原東遺跡で集落が知られている。

晩期の遺跡は極めて少なく、上武道路8工区の発掘調査において引切塚遺跡や青柳宿上遺跡で遺物が断片的に出土したのみである。周辺の晩期の遺跡には、広瀬川低地帯の微高地上に位置する西新井遺跡があり、千綱式土器や土製耳飾りで著名な遺跡である。

(3) 弥生時代の遺跡

赤城南麓での弥生時代の遺跡が少ないことは、以前より周知され、上武道路8工区においても弥生時代中期後半から後期の遺跡が確認されているものの、地域の拠点となるような大規模な集落遺跡は発見されていない。

上武道路8工区の発掘調査では、新田上遺跡(20)で中期の集落が検出され、青柳宿上遺跡(24)で弥生中期の遺物が出土している。また、小神明勝羽境遺跡(10)で、後期の竪穴住居2棟が検出され、駒城遺跡(8)では樽式の土器が出土している。

周辺では、小神明倉本遺跡(41)で弥生時代中期から後期の竪穴住居が2棟、同じく小神明湯気遺跡(40)では後期の竪穴住居が1棟検出されている。また、広瀬川低地に近い端気遺跡(77)では弥生時代後期の竪穴住居2棟が検出されているに止まっている。

(4) 古墳時代の遺跡

古墳時代になると、赤城南麓においても遺跡数が増加する。古墳時代前期～飛鳥時代の集落遺跡、方形周溝墓や古墳・古墳群、さらに水田や高等といった生産域の遺構も数多く発見されている。

古墳時代前期の集落には、藤沢川岸の芳賀東部団地遺跡(6)や五代砂留遺跡群(5)、五代中原I遺跡・五代中原II遺跡(58)、赤城白川沿いの山王・柴遊跡群(22)等が上げられる。また、赤城南麓縁外に位置し、広瀬川低地帯の微高地に立地する田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡(30)は、3世紀後半から4世紀代の大集落遺跡であることが確認されている。一方、五代江戸原敷遺跡(53)では、

4世紀代の方形周溝墓が2基検出されている。

古墳時代中期の集落には、芳賀東部団地遺跡や五代中原1遺跡・五代中原II遺跡が上げられ、五代江戸屋敷遺跡では5世紀後半の竪穴住居が検出されている。

古墳時代後期の集落には、上武道路8工区の東田之口遺跡(12)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第523集 2011)で6世紀を主とした6世紀～7世紀の竪穴住居が多数検出されている。一方、古墳には、寺沢川左岸の台地上に大型の前方後円墳である正円寺古墳(88)、九十九山古墳(257)が6世紀前半、さらに広瀬川低地帯に桂笠大塚古墳(92)、藤沢川右岸の白川扇状地上にオボ塚古墳(128)やオボ塚西古墳(135)が6世紀後半の築造とされている。また、7世紀になると、大日塚古墳(49)や新田塚古墳(61)が知られ、周辺に集落遺跡と20基前後の群集墳が点在する。同様に、陣馬古墳(282)・庄司原古墳群(295)も周知の遺跡である。

(5)奈良・平安時代の遺跡

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代よりもさらに遺跡数を増している。集落規模の大小はあるが、芳賀東部団地遺跡(6)や芳賀北部団地遺跡(136)では、数百棟を越す竪穴住居が検出されており、その周辺遺跡も含めて拠点集落域であることが解っている。同様に、上武道路8工区の調査で、王久保遺跡(19)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第557集 2013)から上町・時沢西組屋谷戸遺跡(17・18)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第561集 2013)、天王・東組屋谷戸遺跡(15・16)、上細井五十嵐遺跡(14)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第558集

2013)にかけての地域も、拠点集落域の様相を示している。さらに、山王・柴遺跡(22)、ならびに田口上田尻遺跡から田口下田尻遺跡(30)、関根赤城遺跡(29)にかけても大集落である様相が明らかになりつつある。

生産域としての水田や畠といった遺構が検出されている遺跡には、上細井五十嵐遺跡で浅間Bテフラ(As-B)下に水田面が、上町・時沢西組屋谷戸遺跡ではAs-B下にイネのプラントオーバーが検出されており、稲作が行われていたことを暗示している。また、標高250m付近に位置する広面遺跡(213)では溜井とされる遺構が確認されていることも知られ、さらに上町・時沢西組屋谷戸遺跡および天王・東組屋谷戸遺跡においても溜井とされる遺

構が確認されているようで、水利を含めた生産域拡大の手段・方法といった点でも注目できよう。

一方、群馬県内における製鉄関連の遺跡は、7世紀中葉に長方形箱形が出現し、その後整形形が主体となり、9世紀以降に急増する。こうした背景の中、赤城山南麓は鉄生産域の一つとされ、前橋市三ヶ尻西遺跡や松原田遺跡の箱形が、前橋市片並木遺跡や今井三騎堂遺跡、乙西尾引遺跡、芳賀東部団地遺跡(市教委)、月山遺跡(36)等で整形形が検出されている。鍛冶遺構についても9世紀以降に増加するのは同様で、鍛冶工房として代表的な前橋市鳥羽遺跡の連房式鍛冶工房をはじめ、上武道路8工区の調査およびその周辺でも、芳賀東部団地遺跡や五代砂留遺跡群(5)、胴城遺跡(8)、鳥取松合下遺跡(7)、鳥取福蔵寺遺跡(125)、関根赤城遺跡、田口下田尻遺跡等の各遺跡で、鍛冶工房ないし鍛冶関連遺物が出土している。本遺跡においても、椀形鍛冶滓が竪穴住居内から出土している。

(6)中・近世の遺跡

中世の城館には、大胡城や峯城(150)が著名で、それらに関わる支城・砦・遠堀として上泉城(64)、小坂子城(108)、鳥取砦(119)、時沢遠堀遺跡等が知られ、さらに細ヶ沢川流域には金山城(255)や新井館、久保田遺跡(258)の存在が知られている。

上武道路8工区の調査では、丑子遺跡(13)(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第558集 2013)では堀で囲まれた館跡が、東田之口遺跡(12)でも中世の掘立柱建物や多くのピット、土坑等が、同じく天王・東組屋谷戸遺跡(15・16)および隣接する時沢東組屋谷戸遺跡(田富士見村教委)からは一連の掘立柱建物群が検出されている。また、特異な張出付きの中世土坑が堤遺跡(9)、小神明遺跡群、天王・東組屋谷戸遺跡等で検出されている。

一方、近世屋敷跡を検出した遺跡には、小神明富士塚遺跡(11)や小神明遺跡群があり、本遺跡においても1棟確認している。

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代の遺構と遺物

(1) 概要

本調査では、調査区内のローム層の堆積が良好であること、先述したように芳賀東部旧地遺跡や胴城遺跡、山王柴遺跡、さらには本遺跡の西に隣接する上細井蛸山遺跡等で、旧石器時代の遺構・遺物が検出されていることから、本遺跡での旧石器時代の存在が予測されていた。その後、東の谷を隔てた新田上遺跡においても、旧石器時代の遺構・遺物が検出されている。

こうした周囲の状況から、本調査においてもローム層への確認調査を踏まえ、旧石器時代の調査を行った。その結果、検出されたのは、ローム層中より旧石器時代の石器が1点出土したのみである。

本遺跡も含め、白川扇状地での旧石器時代の遺跡は、後期旧石器時代の後半期石器群を主とし、しかも断片的な出土の在り方に止まっている。

(2) 確認状況と本調査

1. 確認調査

旧石器時代を対象としたローム層への確認調査は、第15図に示したように、後述する縄文時代第2面調査および1～8号トレンチを利用し、それらの調査延長として確認調査を行った。その結果、調査区の東側に位置する、3号トレンチ中央部のローム層中より石器の出土を確認したため、その周囲を拡張して調査を行うこととした。他のトレンチからの、石器の出土はなかった。

また、ローム層の堆積状況を確認するため、各確認トレンチに深掘りを行いデータの集積に努めた。ローム層の堆積状況は、第16・17図に示した通りである。

2. 拡張調査

石器が出土した3号トレンチ中央部の拡張範囲は、グリッド68区Q～S19・20に位置し、南北8.0m、東西

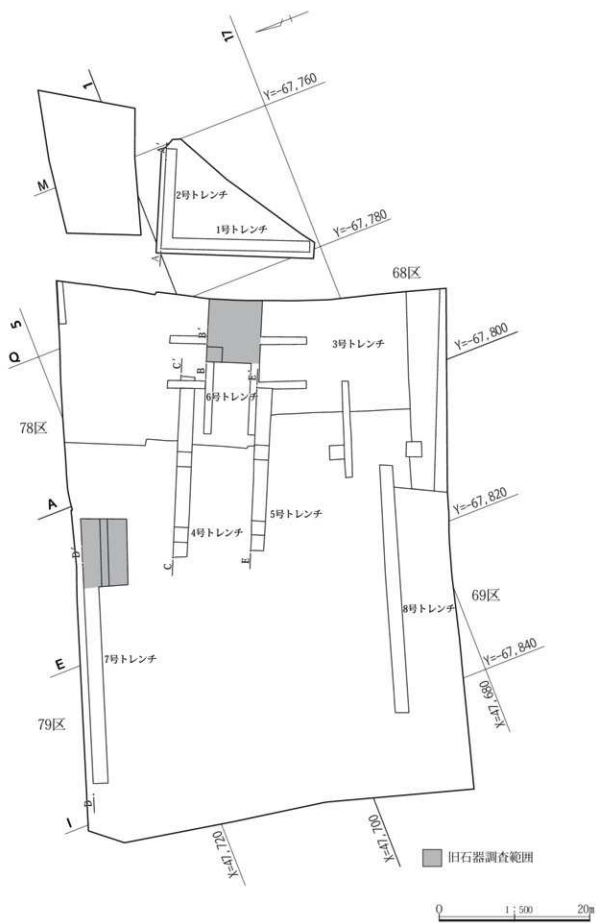
7.0mの範囲を調査対象とした。しかし、出土した石器は、確認調査時の1点のみであり、拡張範囲内からの出土は他になかった。出土した石器は、土層断面B-B' (第15・16・18図)の5層下位からの出土で、基本土層のXI層下位に相当し、浅間大窪沢テフラ(As-OKP)降下期に近い時期の石器と考えられる。

また、調査区の北側となる、7号トレンチの東側(グリッド79区A～C4～6)においても南北6.0m、東西9.0mの範囲を拡張して調査を行ったが、石器の出土はなかった。

(3) 出土遺物

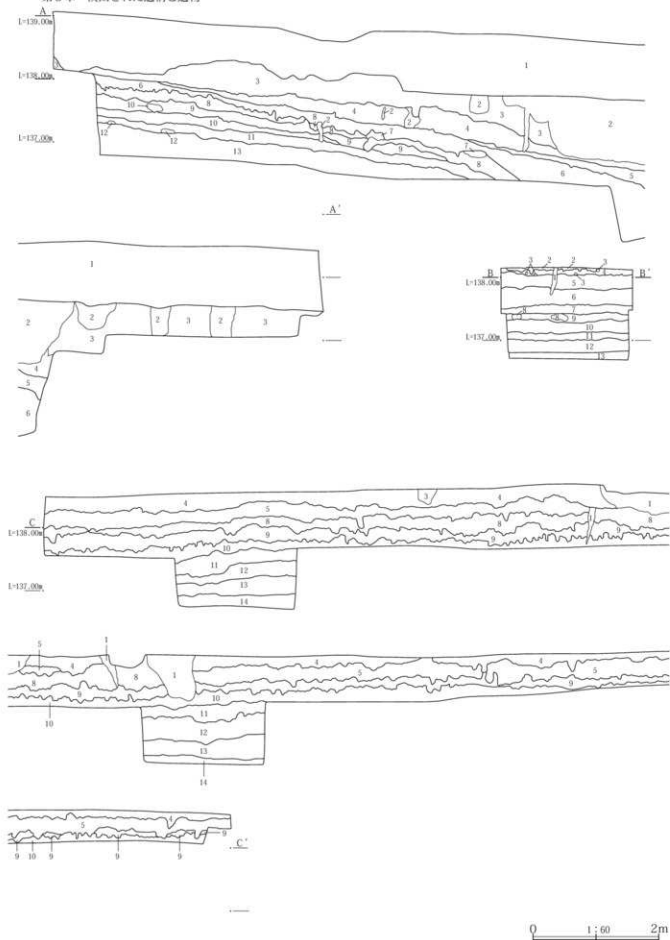
ローム層中からの出土を確認できた旧石器時代の石器は、第18図に示した1点のみである(PL.3)。1は、両設打面から剥離された黒色頁岩製の縦長剥片で、先端がやや先細り、上端側打面部に調整痕がある(表4、PL.16)。長さ6.3cm、幅2.7cm、重さ25.6gを測る。

なお、出土層位・位置は確認できないが、旧石器時代の石器と考えられる石器が他に2点出土している。この2点については、トレンチ調査時に出土した石器であることから、後述する縄文時代の遺構外遺物の中で記述する。

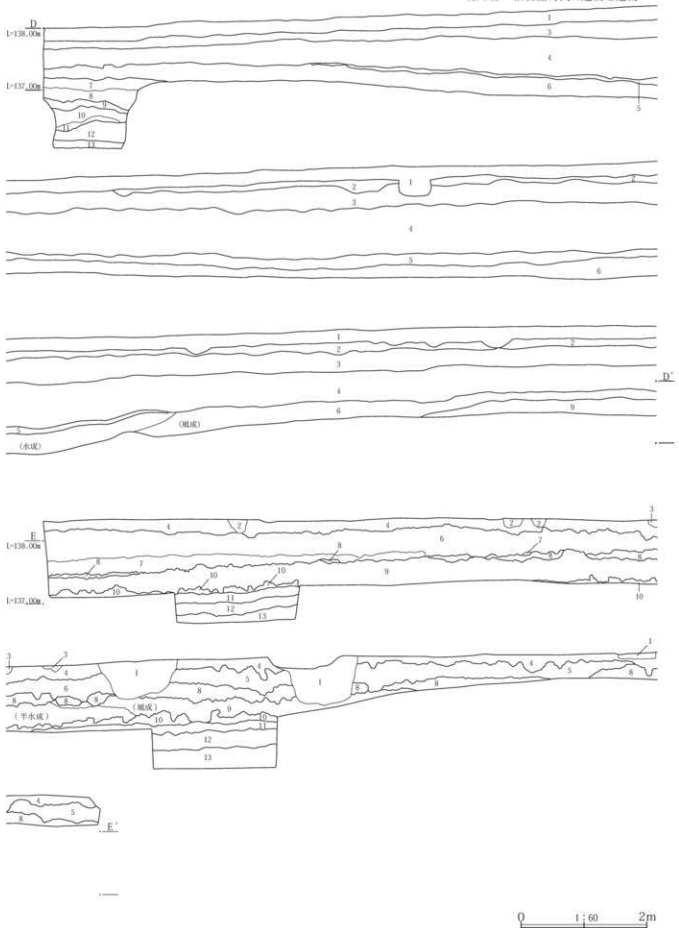


第15図 確認トレンチ配置図

第3章 検出された遺構と遺物



第16図 トレンチ土層断面図(1)



第17図 トレンチ土層断面図(2)

第3章 検出された遺構と遺物

第16図 A-A' (2号トレンチ)

- 1 暗灰色土からなる表土及び耕作土。(基本土層I層)
- 2 暗灰色土。
- 3 黄灰色細粒砂質火山灰土からなり、谷部分では淡青灰～灰色細粒～中粒砂層からなる。砂層は中粒砂優勢で、塊状無層理である。(基本土層V層)
- 4 暗灰色砂質火山灰土。埋没土壌帯からなる上半部と灰～灰白色細粒～中粒砂層の下半部からなる。砂層は中粒砂優勢でラミナが入る。(基本土層VI層)
- 5 灰色シルト層。(基本土層VII層)
- 6 暗灰～黒色細粒火山灰土。径0.5～1mmの白色岩片が点在する。谷部では黒色シルト～シルト質極細粒砂からなり、ラミナが入る。(基本土層VIII層)
- 7 黄灰色軽石層(As-YP)。(基本土層IX層)
- 8 暗灰色風化火山灰土。径3～5mmの黄色軽石(As-YP)を含む。(基本土層X層)
- 9 黄灰色風化火山灰土。径3～7mmの黄色軽石(As-Okp)が点在し、径3mmの青灰色岩片が含まれる。(基本土層XI層)
- 10 黄色軽石層(As-Okp)。(基本土層XII層)
- 11 黄灰色風化火山灰土。砂粒が多い粉状火山灰土を呈する。径5～8mmの白色軽石が点在し、軽石は浅間白系テフラの可能性が高い。(基本土層XIII層)
- 12 黄灰色風化火山灰土。動物糞が多く粉状火山灰土の層相を呈する。ダンゴ状の黄褐色軽石質火山灰(As-BP3)がみられる。(基本土層XIV層)
- 13 黄灰～黄褐色細粒砂質火山灰層(As-BP1・BP2)。径2～5mmの黄灰色軽石や径0.5～2mmの灰～黒色火山灰砂を含む。火山灰は粘土化し塊状無層理で一部は褐鉄鉱汚染が著しい。(基本土層XV・XVI層)

第16図 B-B' (6号トレンチ・旧石器調査拡張範囲)

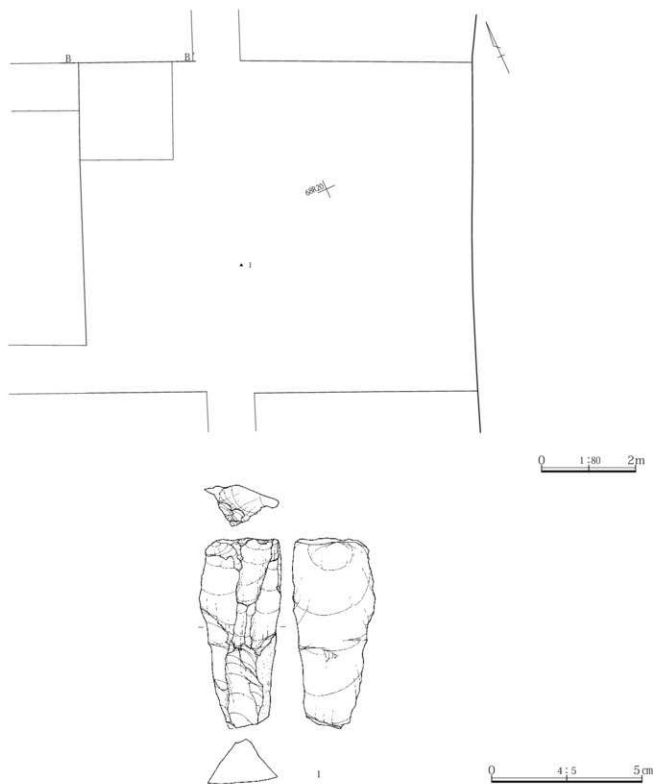
- 1 暗灰色土。
- 2 暗灰色軽石まじり火山灰土。固結がよく締まっている。下位の風化火山灰土との漸移帯を呈する。縄文時代早期の遺物包含層。(基本土層IX層)
- 3 黄灰色軽石層(As-YP)。(基本土層X層)
- 4 黄褐色細粒風化火山灰土。径1～2cmの黄灰色軽石ブロック(As-YP)が堆積する。軽石の径は1～2mm。最大径は5～8mm。(基本土層X層)
- 5 暗灰色細粒風化火山灰土。上半部の層厚10cmに径2～3mmの黄色軽石を多く含むまた下半部の層厚10cmに径1mmの黄色軽石を含む。いずれの軽石も径2mmの青灰色岩片を基質に含むことから浅間大窪群テフラに比せられる可能性がある。(基本土層XI層)
- 6 黄灰色風化火山灰土。径1～2mmの軽石が点在、上半部から縦長薄片が出ている。(基本土層XIII層)
- 7 黄灰色風化火山灰土。粉状の火山灰土で砂成分や動物糞が多い。(基本土層XIII層)
- 8 暗灰色軽石層(As-BP3)。(基本土層XIII層)
- 9 黄褐色軽石ブロックまじり風化火山灰土。径3～5cmの軽石ブロック、暗灰色軽石(As-BP3)は径2～4mmで火山灰砂を含む。(基本土層XIII層)
- 10 黄灰色軽石層(As-BP2)。径5～8cmのブロック状を呈し、径2～5mmの暗灰色軽石、基質に黄褐色火山灰土を含む。(基本土層XIII層)
- 11 黄褐色細粒砂質火山灰土。径1～5mmの灰色軽石を含み、基質の下半部には火山灰砂が多い。(基本土層XIII層)
- 12 褐色軽石まじり火山灰土。径1～3mmの褐色軽石(As-BP)を含む。(基本土層XIII層)
- 13 灰色泥炭堆積物。径1～4cmの安山岩礫やデイサイトの礫を含む。基質は紫灰色細粒火山灰。(基本土層XIII層)

第16・17図 C-C' (4号トレンチ)・E-E' (5号トレンチ)

- 1 暗灰色土。
- 2 暗灰色軽石まじり細粒火山灰土。径2mmの暗灰色軽石を含む。(基本土層I・II層)
- 3 暗灰～黒色細粒火山灰土。径0.5～2mmの暗灰色軽石(As-D)を少量含む。(基本土層IV層)
- 4 暗灰色細粒砂質火山灰土。径0.5～1mm斜長石を多く含む。径0.5mm暗灰色岩片が点在。(基本土層V層)
- 5 暗灰色砂質火山灰土。塊状無層理を呈し、中粒砂サイズの砂主体。(基本土層VI層)
- 6 暗灰色～黄灰色砂質火山灰土。中粒砂サイズの砂主体で、西に近くなると黄灰色シルト質砂。西側の上層は暗灰色砂質火山灰土。塊状無層理を呈し、中粒砂サイズの砂主体。(基本土層VI層)
- 7 灰褐～灰色中粒砂層。淘洗は良好でラミナはみられない。谷部はブロック状を呈する。(基本土層VI層)
- 8 暗灰～黒色細粒火山灰土。シルト質な上半と灰～黄灰色火山灰質シルト層の下半からなる。東側はレンズ状を呈する。(基本土層VII層)
- 9 暗灰色細粒火山灰土。径0.5～1mm黄色軽石を含み土壌化が著しく北部に分布し、南部は、暗灰～暗褐色細粒火山灰土。(基本土層VIII層)
- 10 黄灰色風化火山灰土(漸移帯)。径1mm黄色軽石を多く含む。(基本土層IX層)
- 11 黄灰色軽石(As-YP)～黄灰色軽石を多く含む風化火山灰土。径2～10mmの黄灰色軽石。レンズ状に黄灰色細粒火山灰層がみられる。(基本土層X層)
- 12 黄灰色軽石まじり風化火山灰土。径5mm黄灰色軽石(As-Okp)、径2mm青灰色岩片を含む。(基本土層XI層)
- 13 灰褐色風化火山灰土。粘土化が著しい。径5mm暗灰色軽石(As-SP)が点在。(基本土層XII～XIII層)
- 14 灰褐～灰色軽石層(As-BP2・BP1)。褐色火山灰砂を含む。(基本土層XIV・XV層)

第17図 D-D' (7号トレンチ)

- 1 表土・耕作土。黒色軽石まじり細粒火山灰土。白色軽石(As-C)は径2～5mmを多く含む。(基本土層I・II・III層)
- 2 黒色細粒火山灰土径0.5～1mm。最大径2mmの暗灰色軽石(As-D)が点在。縄文時代中期加群式の遺物を含む遺物包含層である。(基本土層IV層)
- 3 暗灰色砂質火山灰土。中粒砂優勢の火山灰土で0.5mmの白色岩片を多く含む。縄文時代中期の遺物を含む。(基本土層V層)
- 4 上部は、灰褐色中粒砂層～砂質火山灰土。径1cmの暗褐色が顕著で生物擾乱が著しい。地層の上下の境界がやや不明瞭である。中部は暗灰色砂質火山灰土。中粒～細粒砂が優勢。上半部に暗灰色岩片が点在する。下部の境界は植物の根状を呈する。下部は暗灰色シルト質中粒砂層。ラミナはみられない。下半部は中粒砂が優勢。(基本土層VI層)
- 5 暗灰～灰色砂～シルト互層。1～3cmの細互層で暗灰色の砂質火山灰土と明灰色火山灰質シルト～細粒砂層の互層からなる。(基本土層VII層)
- 6 暗灰～黒色シルト質細粒砂層。本層には堆積時の水陸境界が検出され、砂層は、乾陸環境の暗灰色細粒火山灰土に側方変化する。(基本土層VIII層)
- 7 暗灰～灰色火山灰質シルト層。上位5cmは腐植で暗灰色。下位10cmは径2～3mmの砂まじり暗灰色軽石(As-Sj)が点在する。本層中には径3～60cm最大径80cmの輝石山岩角→亜角礫が多く含まれる。(基本土層IX層)
- 8 灰～白灰色火山灰質シルト層。(基本土層IX層)
- 9 淡紫灰色軽石質火山灰層(As-YP)。中粒砂サイズの長石類が多い。上位20cmは暗灰色火山灰土への漸移帯を呈し、下位は暗灰色軽石(As-YP)を含む。(基本土層X層)
- 10 暗灰～黒色シルト質中粒砂～細粒砂互層。(基本土層XI層)
- 11 灰色軽石質火山灰層。中粒砂サイズの軽石層でシルト質である。(As-Okp) (基本土層XI層)
- 12 灰～黄灰色火山灰質シルト層。(基本土層XII層)
- 13 灰色礫まじり火山灰質砂礫層。径3～60cmの安山岩角礫→亜角礫を含む。泥炭堆積物の層相を呈する。(基本土層XIII層)



第18図 旧石器出土位置図、出土石器

表4 旧石器出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				長	幅	厚 重			
第18回 PL.16	1	剥片石器 (旧石器) 縦長剥片	完形	6.3	2.7	1.6 25.6	黒色頁岩	やや先端が先細る。上下両端の打面と背面側の剥離面構成からみて、両設打面から剥離されたことが分かる。上端側打面部に調整痕があり、部分的な打面調整が行われているが、前部調整は確認できない。原石を分割して作出された石核残部で剥離作業が行われたものであろう。	

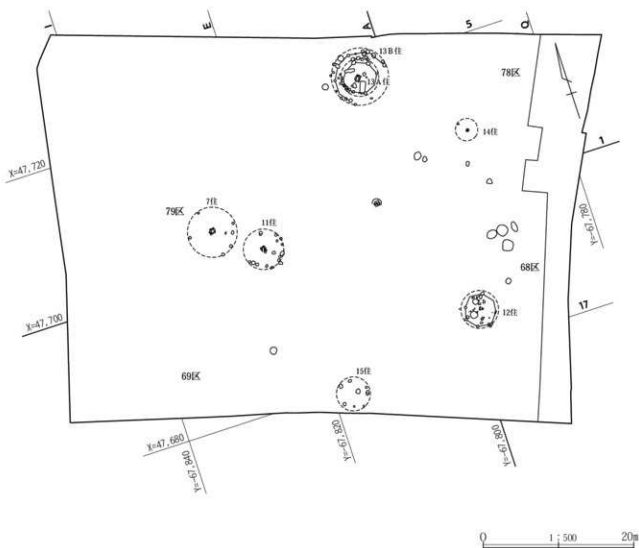
第2節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 概要

本調査で検出された縄文時代の遺構は、基本土層Ⅴ層上位を確認面とした第1面調査で、第19図に示したように、縄文時代中期後半(加曽利E式期)の集落と遺物包含層が検出された。集落は小規模な環状を呈し、集落を構成する遺構には、竪穴住居6棟ならびに土坑がある。第1面の調査後、第1面以下からローム上面までの層位を対象として、第21図に示した1～8号までのトレンチを任意に設定し、随時トレンチ調査を行った。このトレンチ調査において縄文時代早期の遺物を確認したため、基本土層Ⅲ層となるローム漸移層上位を第2面の確認面として、遺物の集中する箇所を拡張して調査を行った。

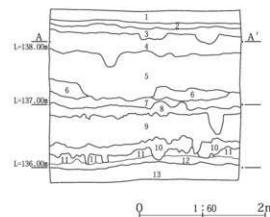
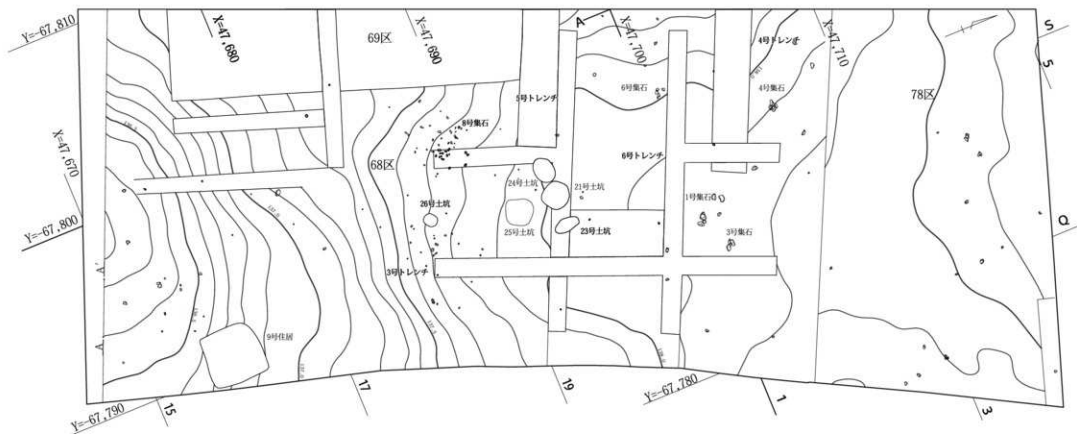
その結果、第20図に示した縄文時代早期の竪穴住居1棟や土坑、集石群といった遺構が検出され、遺物の散布範囲は調査区の東側に偏る傾向にあった。なお、第2面調査での出土遺物には、草創期段階の石槍も含まれているが、その時期の土器は出土していない。

本遺跡の西に隣接する上細井蛸山遺跡では、前期後半の諸磯式期の集落が検出されているが、本遺跡ではこの時期の遺構は検出されていない。一方、本遺跡の東側となる観音川を挟んだ新田上遺跡では、本遺跡と同様の中期後半の集落が検出されており、観音川を挟んだ両台地の縁に同時期の集落が形成されていたことが窺える。



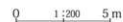
第19図 縄文時代第1面遺構配置図

遺構配置図

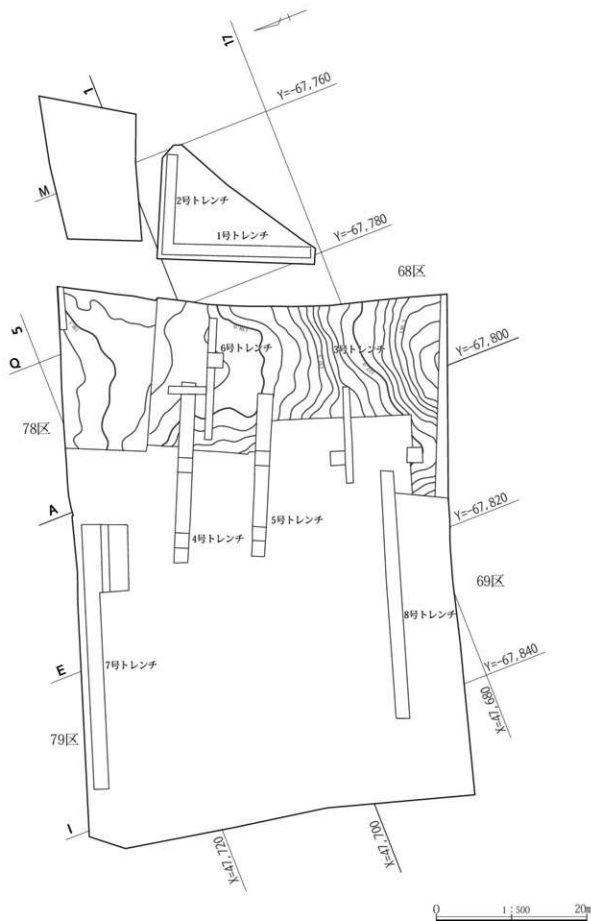


- 1 表土・耕作土。(基本土層I・II層)
- 2 黒色軽石まじり火山灰土。径2～5mmの白色軽石(As-C)を含む。(基本土層III層)
- 3 黒色細粒火山灰土。径0.5～1mmの褐色軽石(As-D)が点在する。下層の4と伴に縄文時代中期加曾利E式の遺物包含層である。(基本土層IV層)
- 4 暗灰～暗褐色火山灰土。径1～2mmの岩片まじり。(基本土層V層)
- 5 灰色礫まじり中粒砂礫。塊状無層理を呈する上部と暗灰色で径2～5mmの黄褐色軽石を含む中部及び径1～3cm級大径4cmの垂円礫を含有する中粒～粗粒砂礫からなる下部からなる。(基本土層VI層)
- 6 明灰色中粒～細粒砂礫。一部は黄灰色礫まじり、下底に径1～3cmの垂円礫を含む。(基本土層VII層)
- 7 暗灰色中粒砂礫。土壌化しており、礫を含まない。条痕文系土層の遺物包含層。(基本土層VIII層)
- 8 灰～灰褐色中粒砂礫。下底は生物擾乱が著しい。(基本土層IX層)
- 9 暗灰～黒色細粒火山灰土。上位10cmには懸糸文系土層が出土し、下半部には径2～5mmの灰色軽石(As-Ma)が点在。(基本土層X層)
- 10 灰褐色火山灰土(漸移帯)。(基本土層XI層)
- 11 黄灰色軽石まじり風化火山灰土。径3mmの黄色軽石を多く含む。(基本土層XII層)
- 12 黄灰色軽石層(As-YF)。径5～10mmの黄灰色軽石からなり、基質は黄灰色細粒風化火山灰土である。本層は平水成の層相を呈し、粘土化している。下位層の13は水成の層相を呈する。(基本土層XIII層)
- 13 黄灰～灰褐色火山灰質シルト～細粒砂礫。(基本土層XIV層)

遺物分布図



第20図 縄文時代第2面遺構配置図、遺物分布図



第21図 縄文時代第2面調査範囲図

(2) 竪穴住居

本調査で検出された縄文時代の住居は計7棟で、第1面調査時に縄文時代中期後半にあたる加曾利E式期の竪穴住居6棟、第2面調査時に早期前葉にあたる燃系文期の竪穴住居1棟がある。加曾利E式期の竪穴住居は、東側の観音川と西側の谷地に挟まれたやや狭い台地中央部に、径50m程の範囲内に環状に配されるように検出されている。

以下、各住居ごとに記載する。

7号住居 (第22・23図、表5、PL. 4・16)

第1面調査時に検出し、調査時はS1-7(7号住居)として調査した。

位置: 調査区の中央西寄りに位置し、本住居の南東側に隣接して11号住居がある。

グリッド: 79区F・G1・2

形状: 掘り込みは確認できなかったが、住居に伴うと考えられる柱穴の配置から、円形の住居と推定される。

規模: 径6.5m前後と推定。

床面: 明確な硬化面は確認されていないが、床面の位置には扁平礫が数点存在する。しかし、敷石住居とは考え難い。

炉: 住居中央に方形の石囲炉を検出した。炉の規模は一边70cmを測り、炉内は深さ20cmを測る。炉石の炉内面側は被熱し、炉石の一部は被熱により破損している。炉石には大型の扁平礫が使用されている。

柱穴: 壁際を巡る位置にP1～6までを検出した。柱穴は概ね径30～45cm、深さ13～35cmを測り、8本柱であったと推測される。

遺物: 住居中央の炉周辺と南東側に多く出土した。図示した出土遺物(第23図、表5)は、土器には中期の加曾利E3式の土器がある。石器には、剥片石器として削器1点(黒色安山岩)や打製石斧1点(黒色頁岩)、加工痕ある剥片4点(黒色頁岩2点・珩質頁岩・黒色安山岩)、礫石器として敲石1点(粗粒輝石安山岩)があり、図示したのは12の打製石斧のみである。未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに黒色頁岩・黒色安山岩・珩質頁岩・黒曜石の剥片がある。

時期: 出土遺物から、縄文時代中期の加曾利E3式期

の住居である。

9号住居 (第24図、表6、PL. 4・16)

第2面調査時に検出し、調査時はS1-9(9号住居)として調査した。

位置: 調査区の南東隅に位置する。周辺に同時期の住居はない。

グリッド: 68区R・S15・16

形状: 隅丸方形に近い。

規模: 一边3.0m。壁高27cm。

床面積: 6.79㎡

埋没土: 暗灰色砂まじり火山灰土と灰色砂まじり火山灰土を主体とする。

床面・壁: 床面は僅かに凹凸をもつが、ほぼ水平で、中央部が硬化する。壁は全体に緩やかに立ち上がる。

炉: 検出されていない。

遺物: 散漫に出土しているが、土器は3点のみで、他は石器類である。図示した出土遺物(第24図、表6)は、土器には3点と少ないが早期の燃系文系土器がある。石器には、剥片石器として削器4点(黒色頁岩)や石核3点(黒色頁岩)、加工痕ある剥片3点(黒色頁岩2点・珩質頁岩)、礫石器として凹石(粗粒輝石安山岩)、磨石(粗粒輝石安山岩)、三角錐形石器(黒色頁岩)があり、図示したのは4・5の削器、7の凹石、8の磨石、6の三角錐形石器の計5点である。未掲載遺物には、黒色頁岩・チャート・珩質頁岩の剥片がある。

時期: 出土遺物から、縄文時代早期の燃系文期の住居である。

11号住居 (第25・26図、表7、PL. 4・16・17)

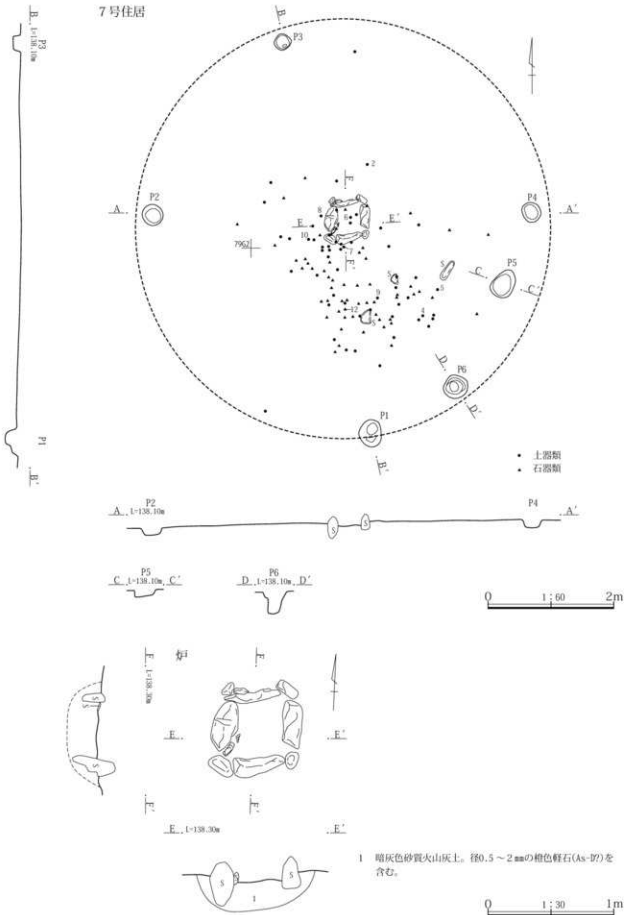
第1面調査時に検出し、調査時はS1-11(11号住居)として調査した。

位置: 調査区の中央やや西寄りに位置し、本住居の北西側に隣接して7号住居、南南東18mに15号住居、北東側19mに13号住居がある。

グリッド: 69区E20、79区E1

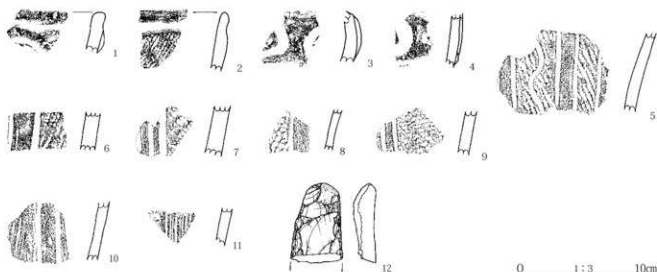
重複: 本住居の西側を3号溝と重複するが、3号溝は1号溝から分岐する溝であることから、新旧は本住居の方が明らかに古い。

形状: 掘り込みは確認できなかったが、住居に伴うと



第22図 7号住居平面図、剖面図

第3章 検出された遺構と遺物

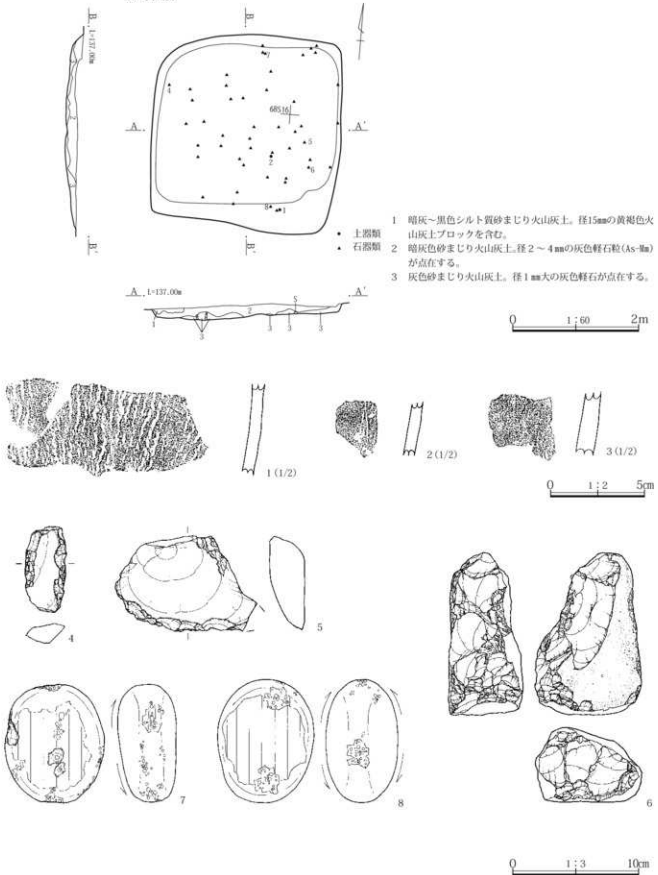


第23図 7号住居出土遺物

表5 7号住居出土遺物観察表

検出 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第23図 PL.16	1	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			砂粒	内反ぎみの平口縁で、口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文等を描く。	加賀利E3式
第23図 PL.16	2	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			砂粒	内反ぎみの平口縁で、口縁部文様に沈線で楕円等の文様を描き、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式
第23図 PL.16	3	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片			砂粒	口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文や楕円等の文様を描く。	加賀利E3式
第23図 PL.16	4	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			砂粒	口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文や楕円等の文様を描く。	加賀利E3式
第23図 PL.16	5	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施し、さらに沈線で蛇行懸垂文を垂下させる。	加賀利E3式
第23図 PL.16	6	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式
第23図 PL.16	7	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式
第23図 PL.16	8	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施し、さらに沈線で蛇行懸垂文?を垂下させる。	加賀利E3式
第23図 PL.16	9	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.R.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式
第23図 PL.16	10	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、条線を縦位に施す。	加賀利E3式
第23図 PL.16	11	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			砂粒	胴部に条線を縦位に施す。	加賀利E3式
第23図 PL.16	12	割片石器 打製石斧	埋土 頭部破片	長 幅 (6.3) (4.1)	厚 重 1.8 46.8	黒色頁岩	完成状態?無縁加工は完成状態にある。割断面は若干摩耗しているようであるが、破片であり詳細は不明。	短冊形

9号住居



第24図 9号住居平面図、出土遺物

表6 9号住居出土遺物観察表

採掘 PL.No.	No.	種別 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24回 PL.16	1	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部にRの隠糸文を縦位に施す。	隠糸文系	
第24回 PL.16	2	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				細粒	胴部に細い隠糸文を縦位に施す。	隠糸文系	
第24回 PL.16	3	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				細粒	無文の胴部。	隠糸文系	
第24回 PL.16	4	剥片石器 削器	埋土 完形	長 幅	(6.8) 3.3	厚 重	1.5 37.7	黒色頁岩	幅広剥片を横位に用い、両側縁を粗く加工して刃部を作出する。刃部は直線状を呈する。	
第24回 PL.16	5	剥片石器 削器	埋土 略完形	長 幅	7.5 (11.2)	厚 重	2.8 286.3	黒色頁岩	剥片端部を粗く打ち欠き、刃部を作出する。右辺削刃部の欠損面には鉄錆が付く。	幅広剥片
第24回 PL.16	6	礫石器 三角錐形 石器	埋土 完形	長 幅	12.8 8.3	厚 重	5.8 781.5	黒色頁岩	底面を裏面側から粗く打ち欠き機能部を作出、部分的に摩耗する。左辺部を加工して「握り部」を作出する。	楕円礫
第24回 PL.16	7	礫石器 円石	埋土 完形	長 幅	9.4 7.8	厚 重	4.6 462.8	粗粒輝石安山岩	表裏面とも礫中央付近に集合打痕がある。内側縁の敲打が著しい。	扁平楕円礫
第24回 PL.16	8	礫石器 磨石	埋土 完形	長 幅	9.8 7.6	厚 重	5.7 608.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも著しい敲打痕があるほか、小口部・側縁にも弱い敲打痕が残る。	楕円礫

考えられる柱穴の配置から、円形の住居と推定される。

規模：径5.3m前後と推定。

床面：明確な硬化面は確認できなかった。

炉：住居中央に方形の石囲炉を検出した。炉の規模は一边60cmを測り、炉内は深さ30cmを測る。炉石の炉内面側は被熱し、炉石の一部は被熱により破損している。炉石には大型の扁平礫が使用されている。また、炉内下方には、土器の胴下半(胴部～底部)を正位に埋設している。

柱穴：壁際を巡る位置にP1～5までを検出した。柱穴は概ね径27～45cm、深さ13～25cmを測り、8本柱であったと推測される。

遺物：出土遺物は散漫で、その量は多くはない。唯一の住居に伴う遺物は、10・11の石囲炉内の埋設土器と12の炉石に使用された石皿の未製品である。図示した出土遺物(第26図、表7)は、土器には埋設土器である10・11は中期加曾利E3式土器の胴下半であり、他に図示できた土器も同時期の土器片である。石器には、剥片石器として加工痕ある剥片2点(頁岩・黒色頁岩)、礫石器として石囲炉の炉石として使用されていた石皿の未製品1点(粗粒輝石安山岩)があり、図示したのは12の石皿の未製品のみである。未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに黒色頁岩・珩質頁岩・頁岩・砂質頁岩・ホルンフェルスの剥片および細粒輝石安山岩の礫がある。

時期：出土した炉内埋設土器から、縄文時代中期の加曾利E3式期の住居である。

12号住居 (第27・28図、表8、PL.5・17)

第1面調査時に検出し、調査時はSX-1として調査を行ったが、整理作業の段階で12号住居とした。

位置：調査区の南東側に位置し、本住居の西南西側15mに15号住居、北側19mに14号住居がある。

グリッド：68区T17・18、69区A17・18

重複：本住居の北側と西側に、円形の覆土をうける。

形状：掘り込みは確認できなかったが、住居に伴うと考えられる柱穴の配置から、円形の住居と推定される。

規模：径5.0m前後と推定。

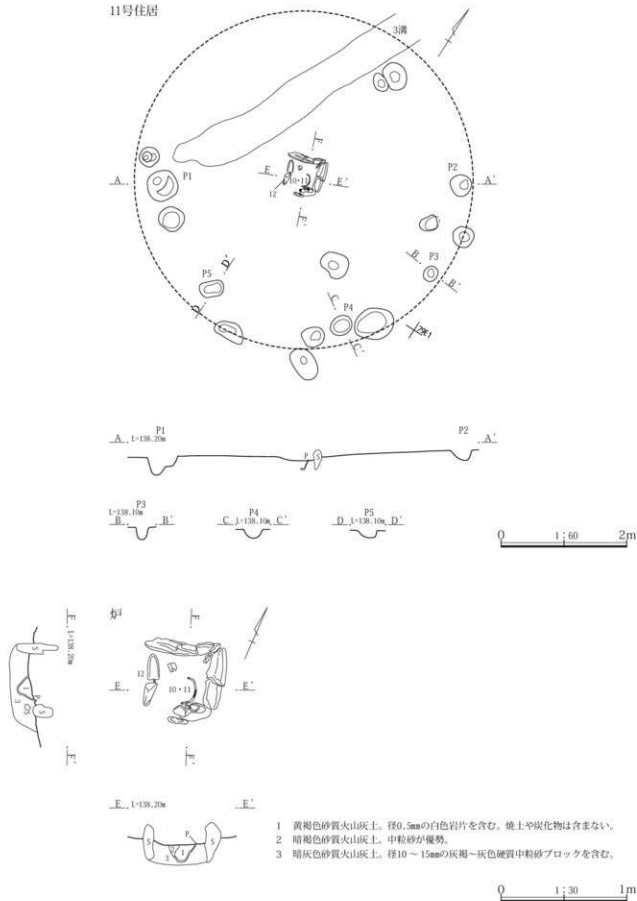
床面：明確な硬化面は確認できなかった。

炉：住居中央に埋設土器を検出したが、その周囲に破損した大型の扁平な被熱礫が散布していることから、これらの被熱礫が石囲炉の炉石であった可能性が高い。この状況から、11号住居と同様な炉の構造であったと考えられ、炉内に埋設土器を有する石囲炉であったと推測される。埋設土器は、土器の胴上半(口縁部～胴部)を正位に埋設している。

柱穴：壁際を巡る位置にP1～6までを検出した。柱穴は概ね径30～45cm、深さ15～25cmを測り、8本柱であったと推測される。

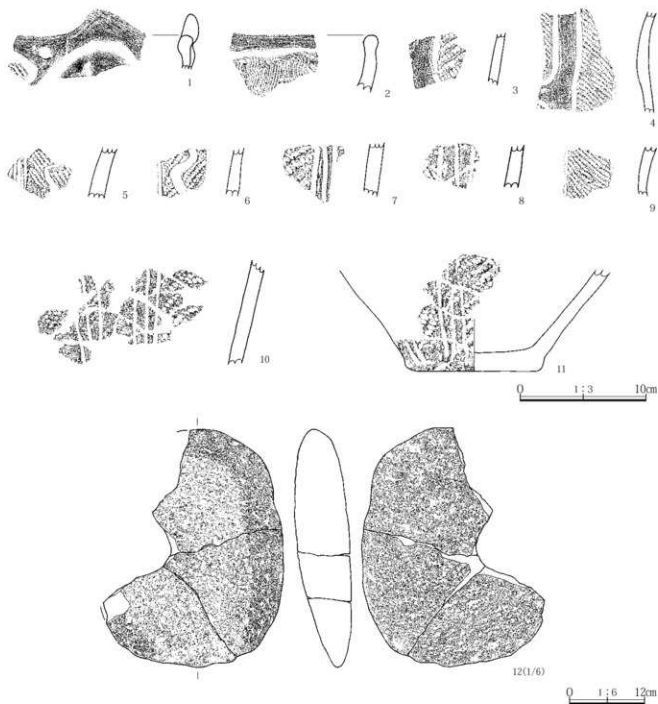
遺物：出土遺物は散漫で、その量は多くはない。唯一の住居に伴う遺物は、1の埋設土器と11の炉石に使用されたと考えられる石皿である。図示した出土遺物(第28図、表8)は、土器には埋設土器である1は中期加曾利E3式土器の胴上半であり、他に図示できた土器も同時期の土器片である。石器には、剥片石器として打製石斧

11号住居

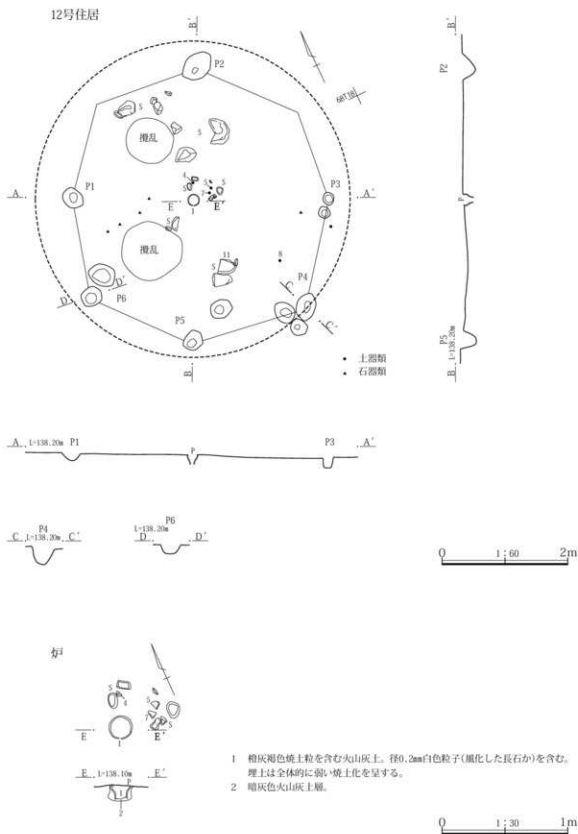


第25図 11号住居平面図、断面図

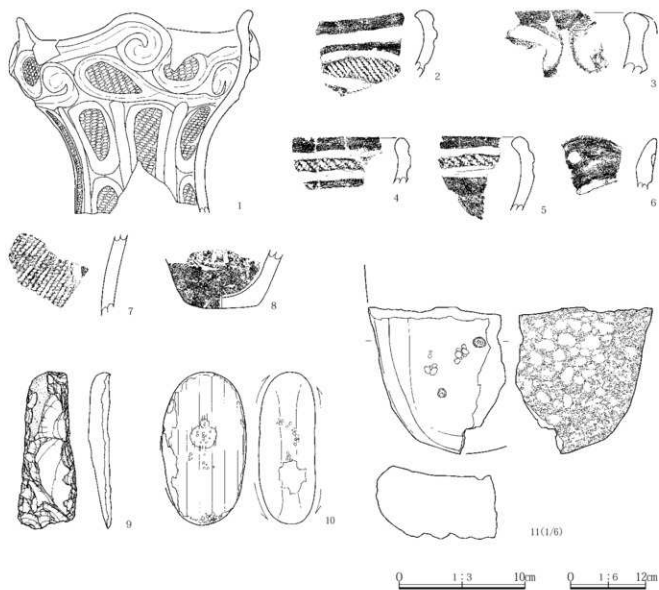
第3章 検出された遺構と遺物



第26図 11号住居出土遺物



第27図 12号住居平面図、杯平面図



第28図 12号住居出土遺物

表7 11号住居出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第269号 PL-16	1	縄文土器 深鉢	埴土 口縁部片				砂粒	小波状口縁となる口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で楕円等の文様を描き、区画内にR.Lの縄文を施す。	加賀利E3式	
第269号 PL-16	2	縄文土器 深鉢?	埴土 口縁部片				砂粒	内反する平口縁で、口縁下に横位の沈線(楕円区画?)、その下に波状の条線を縦位に施す。鉢の可能性もある。	加賀利E3式	
第269号 PL-16	3	縄文土器 深鉢	埴土 口縁部片				砂粒	胴部に沈線で縦長の楕円区画を描き、R.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式	
第269号 PL-16	4	縄文土器 深鉢	埴土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、さらに沈線で縦長の楕円区画を描き、L.Rの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式	
第269号 PL-16	5	縄文土器 深鉢	埴土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施し、さらに沈線で縦行懸垂文を垂下させる。	加賀利E3式	
第269号 PL-17	6	縄文土器 深鉢	埴土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施し、さらに沈線で縦行懸垂文を垂下させる。	加賀利E3式	
第269号 PL-17	7	縄文土器 深鉢	埴土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式	
第269号 PL-17	8	縄文土器 深鉢	埴土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式	
第269号 PL-17	9	縄文土器 深鉢	埴土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で縦長の楕円区画を描き、R.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式	
第269号 PL-17	10	縄文土器 深鉢	埴内埋設 胴部片				砂粒	11と同一個体。胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式	
第269号 PL-17	11	縄文土器 深鉢	埴内埋設 底部				砂粒	10と同一個体。胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。平底。	加賀利E3式	
第269号 PL-17	12	石器 石皿	砂石 3/4	長 幅	(37.0) (30.5)	厚 重	8.5 1000.0	粗粒輝石安山岩	未製品。背面側に大きく敲打痕が広がる。敲打痕は四辺部を除いて全面敲打され、明らかに石部の製作を意図したものである。敲打痕は摩耗しているようでもあるが、砂石として転用されており、摩耗の原因は不明。	扁平楕円形

表8 12号住居出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第289号 PL-17	1	縄文土器 深鉢	埴内埋設 口縁～胴部				砂粒	キャリバー形を呈する窪縁の上平。4単位の波状口縁で、波頂下に隆帯で渦巻き文を描き、口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文や楕円区画を描き、区画内にR.Lの縄文を施す。以下の胴部には、隆帯と沈線で懸垂文を逆U字状に垂下させ、さらに縦位の楕円区画を描き、区画内にR.Lの縄文を施す。	加賀利E3式	
第289号 PL-17	2	縄文土器 深鉢	埴土 口縁部片				砂粒	小波状口縁となる口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で楕円等の文様を描き、区画内にR.Lの縄文を施す。	加賀利E3式	
第289号 PL-17	3	縄文土器 深鉢	埴土 口縁部片				砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に沈線で楕円等の文様を描く。	加賀利E3式	
第289号 PL-17	4	縄文土器 鉢	埴土 口縁部片				砂粒	4・5は同一個体。内反する平口縁の鉢で、口縁下に2条の沈線を巡らせ、その間にR.Lの縄文を施す。	加賀利E3式	
第289号 PL-17	5	縄文土器 鉢	埴土 口縁部片				砂粒	4・5は同一個体。内反する平口縁の鉢で、口縁下に2条の沈線を巡らせ、その間にR.Lの縄文を施す。以下の胴部は無文。	加賀利E3式	
第289号 PL-17	6	縄文土器 深鉢	埴土 口縁部片				砂粒	小波状口縁となる口縁部が内反し、口縁部文様に沈線で渦巻き文等の文様を描く。	加賀利E3式	
第289号 PL-17	7	縄文土器 深鉢	埴土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加賀利E3式	
第289号 PL-17	8	縄文土器 深鉢	埴土 底部				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。平底。	加賀利E3式	
第289号 PL-17	9	割片石器 打製石斧	土形 完形	長 幅	12.3 4.6	厚 重	1.8 86.6	珪質頁岩	完成状態。酒罎面・側縁のエッジは新鮮で、刃部摩耗等は見られない。側縁は直線的に鋭く開く。	短冊形
第289号 PL-17	10	石器 凹石	埴土 完形	長 幅	12.1 6.6	厚 重	4.5 565.0	石英閃緑岩	表裏面とも摩耗するほか、體中央付近に集合打痕2ヶ所がある。両側縁とも激しく敲打され、部分的に衝撃割断面が生じている。	楕円形
第289号 PL-17	11	石器 石皿	埴土 1/4	長 幅	(23.4) (21.9)	厚 重	11.1 6.3	粗粒輝石安山岩	左側側の下端部破片。背面側に漏斗形の孔があるほか、裏面側にも孔多数を穿つ。熱処理も亦化、煤ける。	有縁

2点(黒色頁岩・珪質頁岩)、加工痕ある剥片1点(珪質頁岩)、礫石器として凹石2点(石英閃緑岩・粗粒輝石安山岩)、石皿1点(粗粒輝石安山岩)があり、図示したのは9の打製石斧、10の凹石、11の石皿である。未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに黒色頁岩・黒色安山岩・黒曜石の剥片および細粒輝石安山岩の礫がある。

時期: 出土した埋設土器から、縄文時代中期の加曾利E3式期の住居である。

13(A・B)号住居 (第29・30図、表9、PL. 5・17)

第1面調査時に検出し、調査時はS X-3として調査を行ったが、整理作業の段階で13号住居とした。

位置: 調査区の中央北側の調査区境に位置し、本住居の南東側10mに14号住居、南西側19mに7・11号住居がある。

グリッド: 79区A・B4・5

重複: 本住居の南側に1号溝(現代溝)と重複し、南側の一部に攪乱をうける。

形状: 掘り込みは確認できなかったが、住居に伴うと考えられる柱穴の配置から、円形の住居と推定される。しかも、その配置位置は内側と外側との二重に巡ることから、建て替えによる2時期の住居であると考えられる。また、その新田は不明であるが、建て替えによる拡張とすれば、外側の方が新しい住居と考えることもできる。内側を13A住居、外側を13B住居として記載する。

規模: 13A住居 径5.0m前後と推定。

13B住居 径7.5m前後と推定。

床面: 13A・B住居共に、明確な硬化面は確認できなかった。

炉: 住居中央に長方形の石囲炉を検出した。炉の規模は長辺90cm、短辺60cmを測り、長軸方向はN-37°-Eを向く。炉内は深さ30cmを測る。炉石の炉内側面は被熱し、炉石の一部は被熱により破損している。炉石には大型の扁平礫が使用されている。なお、この石囲炉は、住居廃棄時に伴うと考えられることから、新しい時期の住居の炉であろう。

柱穴: 13A住居 壁際を巡る位置にP1~7までを検出した。柱穴は概ね径30~50cm、深さ10~20cmを測り、8本柱であったと推測される。

13B住居 壁際を巡る位置にP8~13までを検出し

た。柱穴は概ね径30~45cm、深さ10~20cmを測り、10本柱であったと推測される。

遺物: 出土遺物は散漫で、その量は少ない。図示した出土遺物(第30図、表9)は、土器は中期の加曾利E3式土器の土器片である。石器には、剥片石器として打製石斧2点(黒色頁岩)、加工痕ある剥片3点(黒色頁岩2点・珪質頁岩)、石核1点(黒色頁岩)、礫石器として多孔石1点(粗粒輝石安山岩)があり、図示したのは15・16の打製石斧、17の多孔石である。未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに黒色頁岩・珪質頁岩・黒色安山岩・黒曜石・ホルンフェルスの剥片および細粒輝石安山岩の礫がある。

時期: 出土遺物から、13A・B住居共に縄文時代中期の加曾利E3式期の住居である。

14号住居 (第31~34図、表10、PL. 5・18・19)

第1面調査時に検出し、調査時はS K-20(20号土坑)として調査を行ったが、整理作業の段階で土坑底面に存在する石囲炉や遺物の出土状況等から住居と認定し、14号住居とした。

位置: 調査区の北東側に位置し、本住居の北西側10mに13号住居、南側19mに12号住居がある。

グリッド: 78区S2

形状: 掘り込みは不明確で、詳細な確認はできなかった。本住居の炉の位置と、第2面調査時の4号集石(縄文時代早期)の位置(南へ2.0m離れた位置に、ほぼ同レベルで存在)、本住居出土土器の時期から、小型の円形住居と推定される。

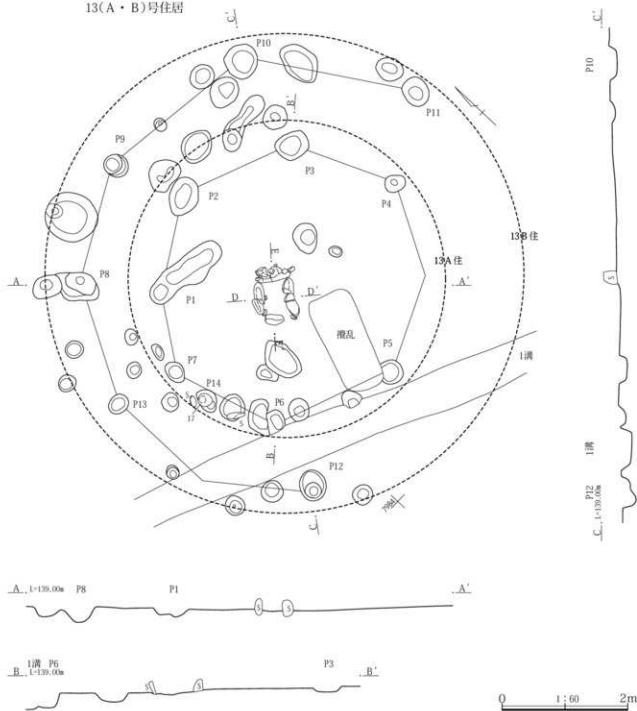
規模: 径3.0m前後と推定。

床面: 明確な硬化面は確認できなかった。

炉: 住居中央に方形の小型な石囲炉をもつ。炉の規模は一辺37cmを測り、炉内は深さ17cmを測る。炉石の炉内側面は被熱し、炉石には扁平礫と円礫が使用されている。

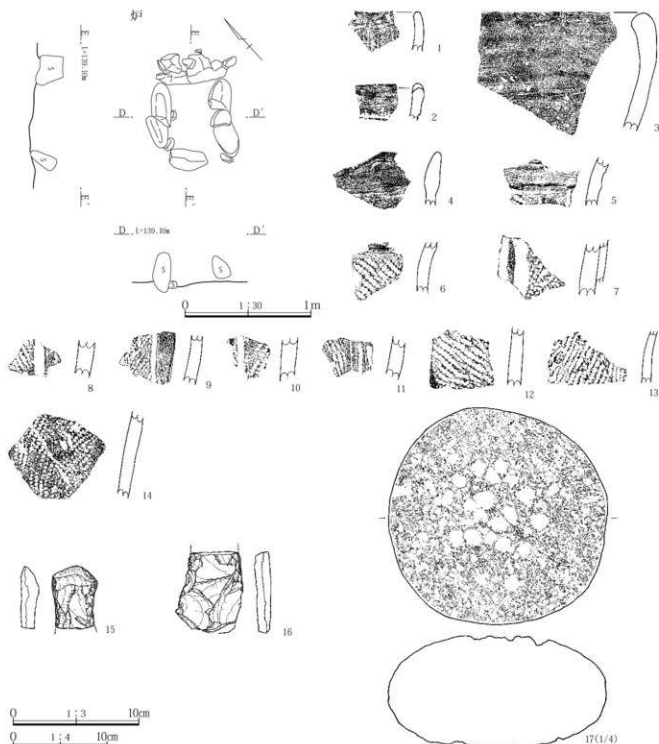
遺物: 出土遺物は比較的に多く、その土器量は本調査における住居出土土器の中で最も多い。図示した出土遺物(第32~34図、表10)の内、土器の38は炉の脇から出土した中期加曾利E3式土器の大型口縁部片、1は覆土上位から出土した加曾利E3式土器の完形品、他に図示した土器も同時期の土器片である。40は土器片利用の円盤である。石器には、剥片石器として石鎌3点(黒色安

13(A・B)号住居



第29図 13(A・B)号住居平面図

第3章 検出された遺構と遺物



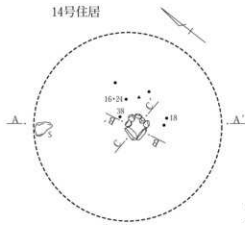
第30図 13(A・B)号住居跡平面図、出土遺物

表9 13(A・B)号住居出土遺物観察表

標図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第30図 PL.17	1	縄文土器 鉢	埋上 口縁部片		砂粒	口縁部がやや内反する平口縁の鉢で、口縁下に条線を縦位に施す。	加曾利E3式
第30図 PL.17	2	縄文土器 深鉢	埋上 口縁部片		砂粒	小突起を有する波状口縁で、口縁下に平行沈線が巡る。	諸磯b式
第30図 PL.17	3	縄文土器 鉢	埋上 口縁部片		砂粒	口縁部が内反する平口縁の鉢で、口縁下に1条の沈線を巡らせて幅広い口縁部無文帯を区画する。胴部は無文。	加曾利E3式
第30図 PL.17	4	縄文土器 深鉢	埋上 口縁部片		砂粒	小波状口縁となる口縁部。	加曾利E3式
第30図 PL.17	5	縄文土器 深鉢	埋上 胴部片		砂粒	口縁部文様に隆帯と沈線で文様を描き、以下の胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、L Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式

採 取 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/構成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第3099 PL.17	6	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で文様を描き、以下の胴部に沈線 で懸垂文を垂下させ、L Rの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	7	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に陰帯と沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄 文を縦位に施す。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	8	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L Rの縄文を縦 位に施す。平底。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	9	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦 位に施す。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	10	縄文土器 深鉢	胴部片				砂粒・細礫	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦 位に施す。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	11	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L Rの縄文を縦 位に施す。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	12	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L Rの縄文を縦 位に施す。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	13	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	14	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に R L Rの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式	
第3099 PL.17	15	剥片石器 打製石斧	埋土 頭部破片	長 幅	(5.0) (3.6)	厚 重	(1.5) 30.5	黒色頁岩	未製品？ほぼ完成しているのであろうが、左側縁の「潰れ」 は新鮮で、使用状態にないだろうと捉えた。	短冊形？
第3099 PL.17	16	剥片石器 打製石斧	埋土 胴部破片	長 幅	(6.5) 5.1	厚 重	1.3 52.4	黒色頁岩	未製品？刃部摩耗・抱神痕等がなく、剥離面も新鮮である ことから、未製品と捉えた。	短冊形
第3099 PL.17	17	礫石器 多孔石	P14内 完形	長 幅	22.8 23.2	厚 重	11.6 7050.0	粗粒輝石安山岩	表面とも漏斗状の孔多数を穿つ。	楕円礫

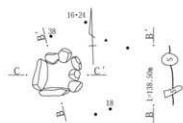
14号住居



- 土器類
- 石器類

0 1:60 2m

如



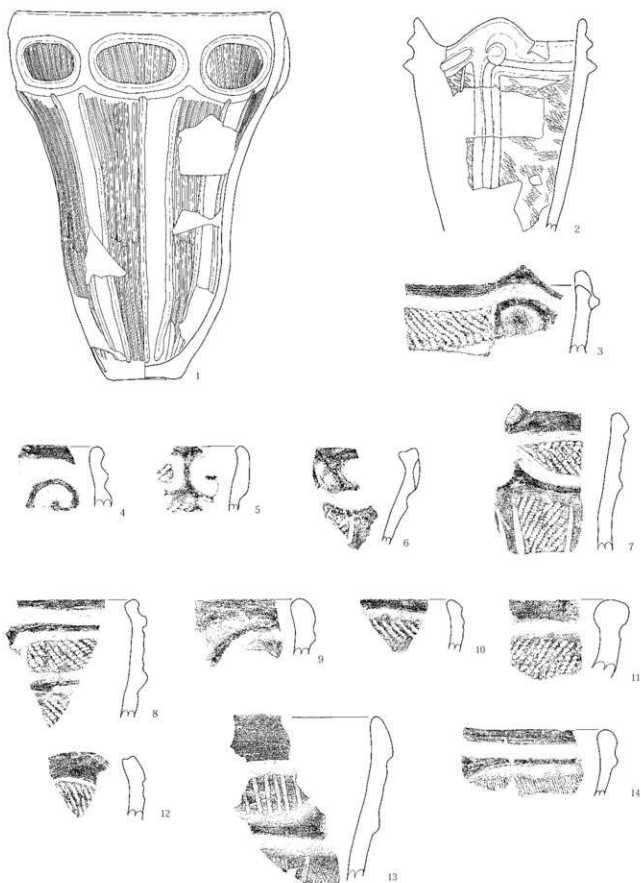
C, 1:138.50m



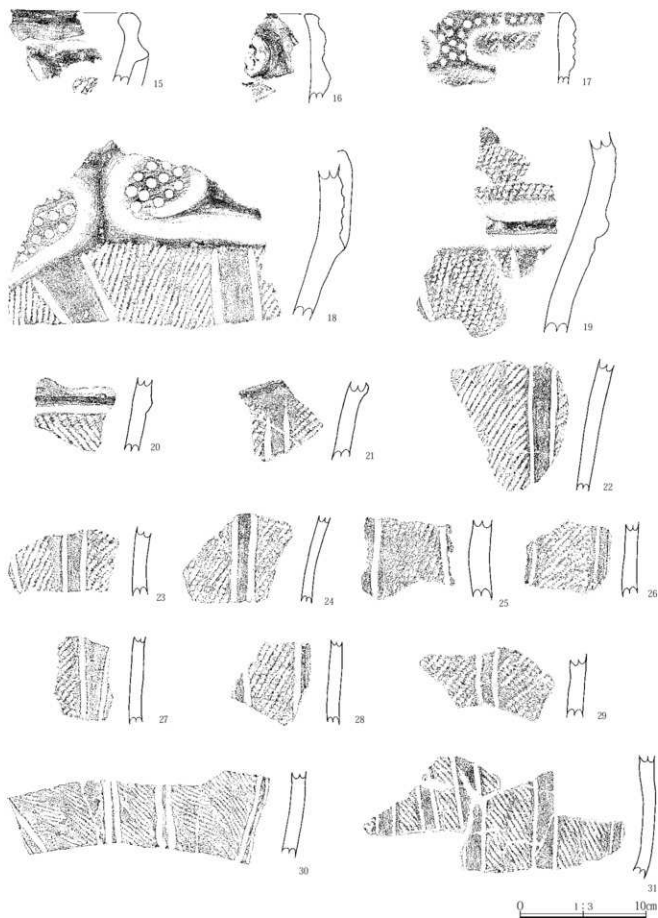
- 1 暗灰色軟質火山灰土。径0.5mmの炭化物や径0.5～1mmの長石を多く含む。
- 2 暗灰色火山灰土ブロック上。

0 1:30 1m

第31図 14号住居平面図、如平面図



第32図 14号住居出土遺物(1)



第33図 14号住居出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第34図 14号住居出土遺物(3)

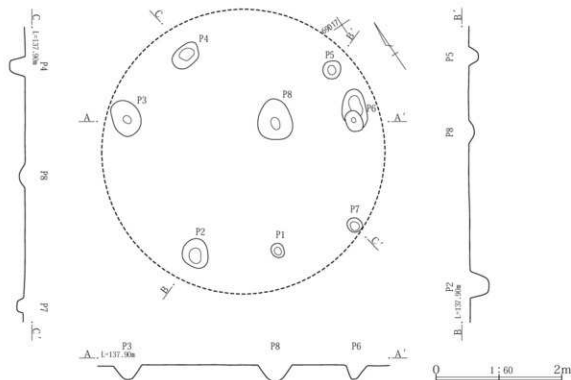
表10 14号住居出土遺物観察表

検出 No.	種別	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 ほぼ完成		砂粒	キャリバー形を呈する深鉢土器で、内反する平口縁の口縁部に沈線で楕円区画の文様を描き、区画内に縦位の条線を施す。以下の胴部には、沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、区画内に縦位の条線を施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口~胴部片		砂粒	4単位の小波状口縁で、波頂下に陰帯で渦巻き文を描き、口縁下を陰帯が深る。以下の胴部には、陰帯と沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、区画内にR Lの反折した縄文を施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	小波状口縁で口縁部がやや内反し、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反さみの平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文を描く。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を施す。以下の胴部には、沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。以下の胴部にもR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反さみの平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で楕円区画の文様を描く。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に沈線で楕円の文様を描き、区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に沈線で楕円の文様を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する波状口縁で、口縁部文様に沈線で円形等の文様を描き、区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 3式
第329号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で楕円の文様を描き、区画内に縦位の条線を施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文や楕円等の文様を描き、区画内に縄文を施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反さみの平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文や楕円等の文様を描き、区画内に円形の刺突を施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文や楕円の文様を描き、陰帯上に円形刺突を充填させ、区画内に縄文を施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文や楕円等の文様を描き、区画内に円形の刺突を施す。以下の胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で楕円等の文様を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。以下の胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で文様を描き、以下の胴部にO段多条のR Lの縄文を横位に、さらにR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-18	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で文様を描き、以下の胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第330号 PL-19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式

第3章 検出された遺構と遺物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎上/構成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第34回 PL.19	31	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第34回 PL.19	32	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	口縁部文様に沈線で楕円等の文様を描き、区画内に条線を縦位に施す。以下の胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、条線を縦位に施す。	加曾利E3式
第34回 PL.19	33	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	口縁部文様に沈線で楕円等の文様を描き、区画内に条線を縦位に施す。以下の胴部に沈線を垂下させ、条線を縦位に施す。	加曾利E3式
第34回 PL.19	34	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、条線を縦位に施す。	加曾利E3式
第34回 PL.19	35	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、条線を縦位に施す。	加曾利E3式
第34回 PL.19	36	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、条線を縦位に施す。	加曾利E3式
第34回 PL.19	37	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、条線を縦位および斜位に施す。	加曾利E3式
第34回 PL.19	38	縄文土器 鉢	床面近く 口〜胴部片				砂粒	口縁部がやや内反ぎみに直立する平口縁の鉢で、口縁下に1条の沈線を巡らせて口縁部無文部を区画する。胴部は無文。	加曾利E3式
第34回 PL.19	39	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片				砂粒	上半が大きく湾曲する器形で、平口縁の口縁部に把手を有し、把手下の胴部上半に沈線による渦巻き文を施した楕状把手が付く。	加曾利E3式
第34回 PL.19	40	土製品 円盤	埋土 完形				砂粒	胴部に条線を縦位に施した土器片利用の上製円盤で、四周を研磨して整形している。径:3.0cm	
第34回 PL.19	41	剥片石器 石礫	埋土 「返し部」欠	長 2.8 幅 1.9	厚 0.4 重 1.1		黒色安山岩	完成状態。大形の部類に属し、深く挟り込み「返し部」を作出する。「返し部」の欠損は調査時のガジリ。	凹基無芽跡
第34回 PL.19	42	剥片石器 石礫	埋土 「返し部」欠	長 3.6 幅 (2.2)	厚 0.3 重 2.2		黒色安山岩	完成状態。全面を押し剥離が覆う。右辺「返し部」を欠損する。	凹基無芽跡
第34回 PL.19	43	剥片石器 石礫	埋土 「返し部」欠	長 (2.9) 幅 (1.4)	厚 0.5 重 1.5		黒色安山岩	完成状態。小形幅広い剥片を周辺加工して形状を作出する。「返し部」の欠損が生じた段階は判断できない。	凹基無芽跡
第34回 PL.19	44	剥片石器 打製石斧	埋土 略完形	長 11.9 幅 4.8	厚 1.2 重 63.6		黒色頁岩	完成状態。側縁は強く鋭り込まれ、やや開き気味に刃部に至り、着柄位置は明らかである。刃部は強く摩耗する。	短冊形
第34回 PL.19	45	剥片石器 打製石斧	埋土 完形	長 12.5 幅 4.6	厚 2.3 重 124.0		黒色頁岩	完成状態?両側縁とも直線的で、やや開き気味である。側縁は装着可能な状態にはあるが、刃部の磨耗は不十分で、使える状態にはない。	短冊形
第34回 PL.19	46	剥片石器 打製石斧	埋土 完形?	長 7.6 幅 3.9	厚 1.5 重 46.2		黒色頁岩	完成状態。両側縁ともエッジは強く摩耗している。本来的なサイズを大幅に減じており、刃部再生というよりも器種転用を試みたものかもしれない。	短冊形

15号住居



第35図 15号住居平面図

山岩)、打製石斧6点(黒色頁岩5点・細粒輝石安山岩1点)、石核1点(黒色安山岩)、加工痕ある剥片1点(珪質頁岩)があり、図示したのは41～43の石礫、44～46の打製石斧である。未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに黒色頁岩・珪質頁岩・黒色安山岩・黒曜石・ホルンフェルス剥片および細粒輝石安山岩の礫がある。

時期: 出土遺物から、縄文時代中期の加曾利E3式期の住居である。

15号住居 (第35図)

整理作業の段階で、柱穴の配置や周囲の状況から住居と認定し、新たに15号住居とした。

位置: 調査区の中央南側の調査区境に位置し、本住居の東北東側15mに12号住居、北北西側18mに11号住居がある。

グリッド: 69区D16・17

形状: 掘り込みは確認できていない。住居に伴うと考えられる柱穴の配置から、円形の住居と推定される。

規模: 径4.5m前後と推定。

床面: 明確な硬化面も確認できていない。

炉: 検出されていない。

柱穴: 壁際を巡る位置にP1～7までを検出した。柱穴は概ね径30～55cm、深さ15～25cmを測る。

時期: 出土遺物がなく根拠に欠けるが、柱穴の配置や周囲の状況から縄文時代中期(加曾利E3式期)の住居である可能性が高い。

(3)土坑

検出された縄文時代の土坑は、調査区の東側に散発的に点在し、計11基を数えるのみである。なお、調査時におけるSK-20(20号土坑)は14号住居に変更したため欠番とし、SX-2は新たに33号土坑として扱った。

以下、各土坑ごとに記載する(表32 土坑一覧を参照)。

11号土坑 (第36・38図1、表11、PL. 6・19)

第1面調査時に検出し、調査時はSK-11(11号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区の北東に位置し、北側3mに14号住居、南東側3mに17号土坑、北西側5mに13・19号土坑があ

る。

グリッド: 78区S1

形状: 小型の楕円形を呈する。

規模: 長軸0.63m、短軸0.42m、深さ25cm。

長軸方向: N-21°-E

埋土は暗灰色火山灰土が主で、橙色軽石(As-D?)を含む。底面は概ね円形となる。埋土中からは、図示した1の縄文時代前期諸磯c式土器の胴部片が1点出土している。出土土器等から縄文時代の土坑と考えられる。

13号土坑 (第36・38図2～11、表12、PL. 6・19・20)

第1面調査時に検出し、調査時はSK-13(13号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区の北東に位置し、東側5mに14号住居、南東側に隣接して19号土坑、南東側6mに11号土坑、南西側7mに33号土坑がある。

グリッド: 78区T2

形状: 不整な楕円形を呈する。

規模: 長軸1.12m、短軸0.91m、深さ36cm。

長軸方向: N-35°-E

埋土は暗灰色砂質火山灰土が主で、上位は暗灰褐色を呈する。底面は概ね平坦となる。埋土中からは、遺物が多く出土し、土器には2～9の中期加曾利E3式土器の土器片がある。石器には、剥片石器として打製石斧2点(頁岩・細粒輝石安山岩)、加工痕ある剥片1点(黒色頁岩)があり、10・11の打製石斧を図示した。未掲載遺物には、同時期の土器の細片、黒色頁岩・珪質頁岩・黒色安山岩の剥片がある。出土土器等から縄文時代中期の土坑と考えられる。

17号土坑 (第36・38図12～24、表13、PL. 6・20)

第1面調査時に検出し、調査時はSK-17(17号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区の東に位置し、北側3mに11号土坑、5mに14号住居がある。

グリッド: 78区S1

形状: 不整な円形を呈する。

規模: 径0.7m、深さ23cm。

埋土は暗灰色火山灰土が主で、橙色軽石(As-D?)を含む。底面は平坦となる。埋土中からは、遺物が多く出土し、

第3章 検出された遺構と遺物

12～22の前期末葉(十三菩提土器)1点と中期加曽利E3式土器の土器片がある。石器には、剥片石器として打製石斧2点(黒色頁岩)、加工痕ある剥片1点(黒色頁岩)があり、23・24の打製石斧を図示した。未掲載遺物には、同時期の土器の細片、黒色頁岩・珪質頁岩・ホルンフェルス・変質玄武岩の剥片がある。出土土器等から縄文時代中期の土坑と考えられる。

19号土坑 (第36・38図25～27、表14、PL. 6・20)

第1面調査時に検出し、調査時はSK-19(19号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区の北東に位置し、東側5mに14号住居、北西側に隣接して13号土坑、南東側5mに11号土坑、南西側7mに33号土坑がある。

グリッド: 78区T2

形状: 不整な楕円形を呈する。

規模: 長軸0.73m、短軸0.59m、深さ18cm。

長軸方向: N-0°-E

埋土は暗灰色砂質土が主となり、底面は平坦となる。埋土中から出土した遺物として、25～27の中期加曽利E3式土器の土器片を図示した。未掲載遺物には、同時期の土器の細片がある。出土土器等から縄文時代中期の土坑と考えられる。

20号土坑

第1面調査時に検出し、調査時はSK-20(20号土坑)として調査を行ったが、整理作業の段階で土坑底面に存在する石囲炉や遺物の出土状況等から住居と認定し、14号住居として遺構名を変更した。

21号土坑 (第36図、PL. 6)

第2面調査時に検出し、調査時はSK-21(21号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区の東に位置し、東・西・南側に隣接して23～25号土坑があり、共に第2面調査時に検出された。

グリッド: 68区S19

形状: 円形を呈する。

規模: 径1.52m、深さ12cm。

埋土は暗灰褐色火山灰土が主で、黄色軽石(As-YP)を含む。底面は概ね平坦となる。埋土中からは剥片が僅か

に出土しているのみで、図示していない。未掲載の剥片は黒色頁岩・珪質頁岩である。出土遺物が少なく根拠に欠けるが、周囲の状況等から縄文時代の土坑と考えられる。

23号土坑 (第36図、PL. 6)

第2面調査時に検出し、調査時はSK-23(23号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区の東に位置し、西側に隣接して21・24・25号土坑があり、共に第2面調査時に検出された。

グリッド: 68区S19

形状: 楕円形を呈する。

規模: 長軸1.37m、短軸0.71m、深さ48cm。

長軸方向: N-0°-E

埋土は暗灰色火山灰土を主とし、底面は南側が深くなる。出土遺物が無く根拠に欠けるが、周囲の状況等から縄文時代の土坑と考えられる。

24号土坑 (第36・39図28・29、表15、PL. 6・20)

第2面調査時に検出し、調査時はSK-24(24号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区の東に位置し、東側に隣接して21・23・25号土坑があり、共に第2面調査時に検出された。

グリッド: 68区S19

形状: 楕円形を呈する。

規模: 長軸1.42m、短軸1.07m、深さ80cm。

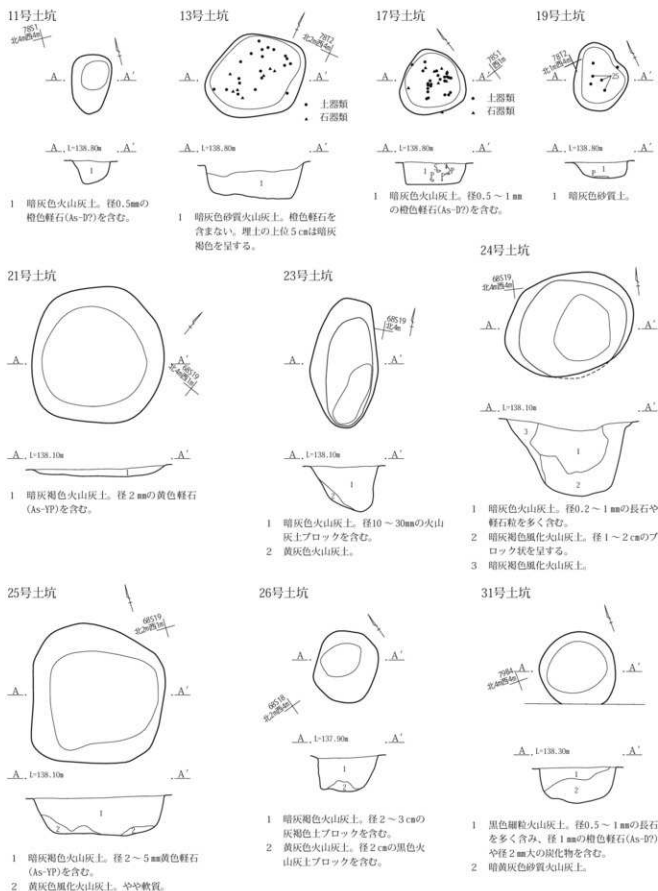
長軸方向: N-78°-E

埋土は暗灰色火山灰土と暗灰褐色風化火山灰土を主とし、底面は不整形で概ね平坦となる。出土遺物は少ないが、28・29の早期燃糸系土器2点、図示していないが石器には剥片石器として加工痕ある剥片1点(黒色頁岩)がある。未掲載の剥片には黒色頁岩・チャートがある。出土遺物が少なく根拠に欠けるが、周囲の状況や出土物から等から縄文時代(早期?)の土坑と考えられる。

25号土坑 (第36図、PL. 6)

第2面調査時に検出し、調査時はSK-25(25号土坑)として調査を行った。

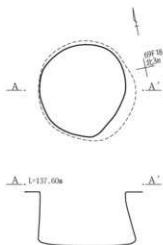
位置: 調査区の東に位置し、北側に隣接して21・23・24号土坑があり、共に第2面調査時に検出された。



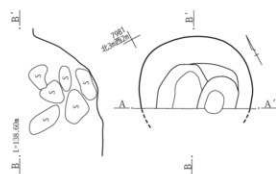
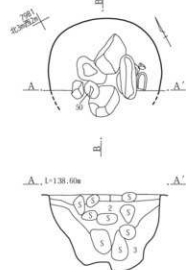
0 1:40 1m

第36図 11・13・17・19・21・23～26・31号土坑平面図

32号土坑



33号土坑



- 1 暗灰褐色火山灰土。径0.5mmの橙色軽石(As-07)を含む。
- 2 暗黄灰色細粒火山灰土。径0.5～1mmの橙色軽石(As-07)や径1mmの炭化物を含む。
- 3 黄灰色砂質火山灰土。

0 1:40 1m

第37図 32・33号土坑平面図

グリッド：68区 S 19

形状：不整な方形を呈する。

規模：一辺1.42m、深さ40cm。

埋土は暗灰褐色火山灰土が主で、黄色軽石(As-YP)を含む。底面は概ね平坦となる。埋土中からは、黒色頁岩の剥片が僅かに出土しているのみで、図示していない。出土遺物が少なく根拠に欠けるが、周囲の状況等から縄文時代の土坑と考えられる。

26号土坑 (第36図、PL. 7)

第2面調査時に検出し、調査時は S K-26(26号土坑)として調査を行った。

位置：調査区の東に位置し、北側4mに25号土坑、同6mに21・23・24号土坑があり、共に第2面調査時に検出された。

グリッド：68区 S 18

形状：楕円形を呈する。

規模：長軸0.76m、短軸0.65m、深さ36cm。

長軸方向：N-41°-E

埋土は暗灰褐色火山灰土が主で、灰褐色土ブロックを含む。底面は概ね平坦となる。出土遺物が無く根拠に欠けるが、周囲の状況等から縄文時代の土坑と考えられる。

31号土坑 (第36・39図30～37、表16、PL. 7・20)

第1面調査時に検出し、調査時は S K-31(31号土坑)として調査を行った。

位置：調査区の北側中央に位置し、東側に隣接して13号住居がある。

グリッド：79区 B 4

形状：円形を呈する。

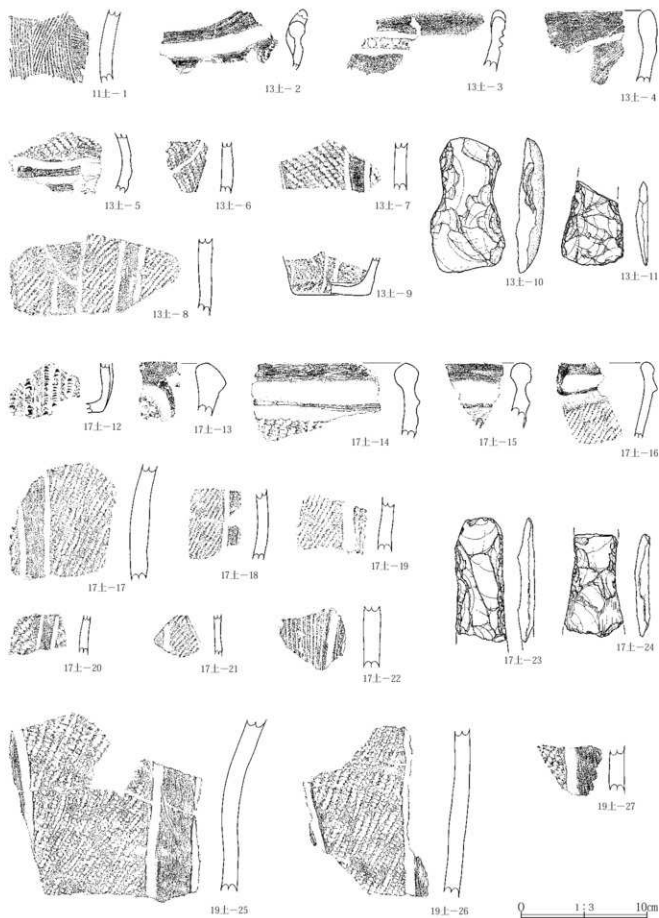
規模：径0.82m、深さ38cm。

埋土は橙色軽石(As-D7)を含む黒色細粒火山灰土と暗黄灰色砂質火山灰土が主となる。底面は概ね平坦となる。埋土中から遺物が出土し、30～37の中期加曾利 E 3 式土器の土器片、図示していないが石器には剥片石器として石核1点(黒色安山岩)がある。未掲載遺物には、同時期の土器の細片、黒色頁岩・黒色安山岩・ホルンフェルスの剥片がある。出土土器等から縄文時代中期の土坑と考えられる。

32号土坑 (第37図、PL.15)

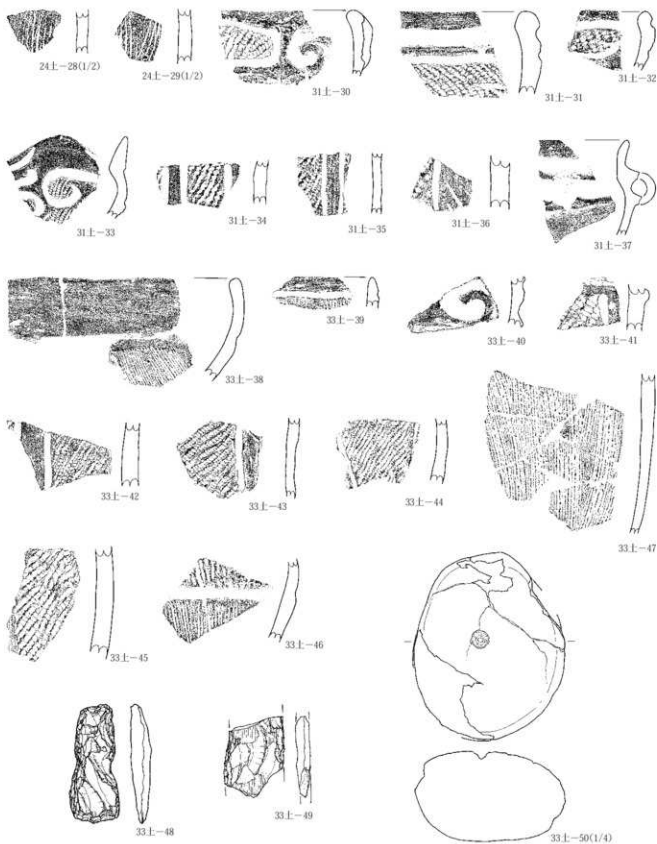
第1面調査時に検出し、調査時は S K-32(32号土坑)として調査を行った。

位置：調査区の南側中央に位置し、北側10mに11号住居、南東側10mに15号住居がある。



第38図 11・13・17・19号土坑出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



0 1:2 5cm 0 1:3 10cm 0 1:4 10cm

第39図 24・31・33号土坑出土遺物

表11 11号土坑出土遺物観察表

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第388号 PL.19	1	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に縦位の集合沈線で縦区画し、区画内に同様の沈線で縦位レンズ状となる弧状の文様を描く。	諸磯c式

表12 13号土坑出土遺物観察表

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考			
第388号 PL.19	2	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	小波状口縁となる口縁部が内反し、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文と栴門区画を描き、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.19	3	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	緩い小波状口縁となる口縁部がやや内反し、口縁下に2枚の沈線を巡らせ、その間に円形刺突を施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.19	4	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に沈線で栴門等の文様を描き、区画内に条痕を斜位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.19	5	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で栴門等の文様を描き、区画内にR.Lの縄文を施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	6	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施し、さらに蛇行懸垂文を垂下させる。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	7	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	8	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	9	縄文土器 深鉢	埋土 底部1/2		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施す。平底。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	10	割片石器 打製石斧	埋土 完形	長 幅	10.7 5.9	厚 重	2.1 130.2	細粒輝石安山岩	完成状態?器体上手に着柄部に幅広の体部が付く。刃部は未加工で、完成状態にあるであろうが、使用頻度は低く、摩耗痕等も見られない。	短冊形?
第388号 PL.20	11	割片石器 打製石斧	埋土 1/2	長 幅	(6.6) 4.9	厚 重	1.0 30.0	頁岩	未製品?両側縁とも直線的で、やや外側に開く。未加工の割片のエッジを刃部としている。無縁加工時に破損した可能性が高い。無縁加工は両極対称によるものか。	短冊形

表13 17号土坑出土遺物観察表

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考			
第388号 PL.20	12	縄文土器 深鉢	埋土 胴部-底部片		砂粒	底部付近が膨らむ平底で、胴部にR.Lの縄文を施し、結節浮線文を縦位に附与する。	十三器様式			
第388号 PL.20	13	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反さみの平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文等を施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	14	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で栴門等の文様を描き、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	15	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で文様を描く。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	16	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片		砂粒	内反する平口縁で、口縁下に沈線と陰帯を巡らせ、以下の胴部にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	17	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	18	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	19	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	20	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	21	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	22	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、条痕を縦位に施す。	加曾利E3式			
第388号 PL.20	23	割片石器 打製石斧	埋土 1/2	長 幅	(9.8) 4.1	厚 重	1.4 60.5	黒色頁岩	完成状態。無縁は直線的で、両側縁とも破損部付近が摩耗する。位置的に見て、摩耗は穂柄によるものというより、刃部摩耗の延長として理解される。	短冊形
第388号 PL.20	24	割片石器 打製石斧	埋土 胴部破片	長 幅	(8.1) (4.6)	厚 重	1.2 43.8	黒色頁岩	完成状態。刃部摩耗・穂柄部が明確に残る。両側縁破損は無縁整形時のダメージが原因したものの、刃部側破損は背面側から意図的に打ち欠いたもの。	短冊形

表14 19号土坑出土遺物観察表

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第388号 PL.20	25	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第388号 PL.20	26	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	26・27は同一個体。胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第388号 PL.20	27	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片		砂粒	26・27は同一個体。胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式

第3章 検出された遺構と遺物

表15 24号土坑出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第39回 PL.20	28	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部にRの縦い襷文を縦位に施す。	襷文文系
第39回 PL.20	29	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部にRの縦い襷文を縦位に施す。	襷文文系

表16 31号土坑出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第39回 PL.20	30	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片				砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にL.Rの縄文を施す。	加曾利E3式
第39回 PL.20	31	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片				砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に沈線で楕円の文様を描き、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第39回 PL.20	32	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片				砂粒	内反する平口縁で、口縁部文様に沈線で楕円等の文様を描き、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第39回 PL.20	33	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片				砂粒	小波状口縁で口縁部が内反し、口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第39回 PL.20	34	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第39回 PL.20	35	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第39回 PL.20	36	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に、さらに斜位の沈線を描く。	加曾利E3式
第39回 PL.20	37	縄文土器 甕形	埋土 口縁部片				砂粒	直立する平口縁で、口縁部は無文となり、以下の胴部が大きく膨らむ。口縁下には2条の陰帯が走り、その隆帯上に小さな楕円把手が付くようであるが、楕円把手は欠損。	加曾利E3式

表17 33号土坑出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第39回 PL.20	38	縄文土器 鉢	埋土 口縁部片				砂粒	内反する平口縁の鉢で、口縁下に1条の沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画する。胴部には糸線を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.20	39	縄文土器 鉢	埋土 口縁部片				砂粒	内反する平口縁の鉢で、口縁下に1条の沈線を巡らせて口縁部無文帯を区画する。胴部には糸線を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.20	40	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文を描く。	加曾利E3式	
第39回 PL.20	41	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で文様を描き、以下の胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.20	42	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.20	43	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、0段多条のR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.20	44	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.20	45	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.21	46	縄文土器 深鉢	埋土 割部片				砂粒	口縁部文様に沈線で楕円等の文様を描き、区画内にR.Lの縄文を施し、以下の胴部に糸線を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.21	47	縄文土器 鉢	埋土 割部片				砂粒	胴部に糸線を縦位に施す。	加曾利E3式	
第39回 PL.21	48	剥片石器 打製石斧	埋土 完形	長 幅	9.3 3.9	厚 重	1.7 61.4	黒色頁岩	完成状態。両側縁とも直線的だが、中央付近がノッチ状に挟られ、着柄部が用意されている。対部摩耗・抱持痕が明確に残る。着柄部と対部は近接しており、相当な対部再生が行われたものとみられる。	短形
第39回 PL.21	49	剥片石器 打製石斧	埋土 割部破片	長 幅	(6.4) (4.8)	厚 重	(1.1) 41.2	粗粒輝石安山岩	完成状態。表面とも対部摩耗・抱持痕がある。破損状況から、対部再生時に破損した可能性が高い。	短形
第39回 PL.21	50	礫石器 多孔石	埋土 略完形	長 幅	19.8 16.0	厚 重	9.4 388.7	粗粒輝石安山岩	中央付近に径2cm程度の漏斗状の孔1を穿つ。被熱してヒコ割れているほか、縁周辺が大きく剥落する。	楕円
PL.21	51	礫石器 多孔石	埋土 完形	長 幅	40.8 36.5	厚 重	33.5 880.0	粗粒輝石安山岩	断面三角形状を呈する頸縁部に漏斗状の孔を穿つ。基本的に孔は背面側にあり、背面側縁部に集中しているが、裏面側にも孔1がある。	楕円

グリッド：69区F18

形状：円形の断面袋状を呈する。

規模：径0.92m、深さ57cm。

埋土は暗黄灰色砂質火山灰土ないし暗灰色火山灰土を主とする。上部径より底面径が広くなり、底面は平坦となる。出土遺物が無く根拠に欠けるが、周囲の状況等から縄文時代の土坑と考えられる。

33号土坑（第37・39図38～50、表17、PL. 7・20・21）

第2面調査時に検出し、調査時はS X-2として調査を行ったが、整理作業の段階で形状等から新たに33号土坑とした。

位置：調査区の中央やや東寄りに位置し、北東側7mに13・19号土坑がある。

グリッド：79区B1

形状：円形を呈する。

規模：径1.2m、深さ72cm。

埋土は橙色軽石(As-D?)を含む暗黄灰色細粒火山灰土と黄灰色砂質火山灰土が主となる。底面は凹凸を呈する。土坑内には大型礫が多量に詰められており、埋土中からも多くの土器が出土している。土器には、38～47の中期加曾利E3式土器の土器片。石器には、剥片石器として打製石斧5点(黒色頁岩4点・細粒輝石安山岩)、加工痕ある剥片1点(黒色頁岩)、礫石器に多孔石2点(粗粒輝石安山岩)があり、48・49の打製石斧、50の多孔石を图示した。51の多孔石は写真のみの掲載である。未掲載遺物には、同時期の土器の細片、黒色頁岩・頁岩・珪質頁岩・黒色安山岩の剥片がある。出土土器等から縄文時代中期の土坑と考えられる。

なお、本土坑の位置は、本遺跡での中期後半の小規模環状集落の中央付近にあたり、大型礫を詰め込んでいる点でも、他の土坑とは異なる性格を有する。

(4)集石

第1面(基本土層V層上位)調査終了後のトレンチ調査を受け、基本土層L層となるローム漸移層上位を確認面として第2面の調査を行ったところ、縄文時代早期の堅穴住居と共に集石群が検出された。集石群は、調査区の東側で、中央から北寄りに点在しており、その形態には大型扁平礫を組石状にする例や、小型礫による集石といった例も見られ、さらに礫の被熱も確認されている。併せて、その周囲から出土した土器には、縄文時代早期の捻糸文系土器や条痕文系土器があり、集石群が早期の遺構であることは明らかである。

こうした早期の集石群を検出した周辺の遺跡には、前橋市坂上遺跡や渋川市箱田遺跡群(上原・三角遺跡)、同市城山遺跡があり、大型扁平礫を組石状にする例が多く、何れも捻糸文期ないし押型文期の遺構として知られている。

1号集石（第40図、PL. 8）

第2面調査時に検出し、調査時は1・2号配石として調査を行ったが、整理作業の段階で形状等から1号集石とし、2号集石は欠番とした。

位置：調査区の北東側に位置し、第2面調査拡張域の中央北寄り、6号トレンチの北側にある。本集石の東側に隣接して3号集石、北西および西側5mに4・6号集石がある。

グリッド：78区R1

形状：まず、破損した大型礫が3石あり、その北西0.8mに破損した大型礫2石が点在する。いずれの礫も被熱した扁平礫であり、本来の遺構形状を示しているかは不明。散乱した状況である可能性も考えられる。

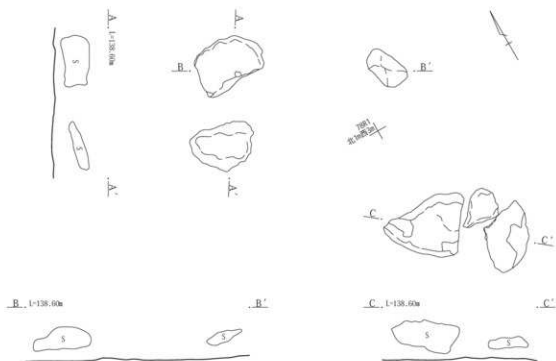
3号集石（第40図、PL. 8）

第2面調査時に検出し、調査時は3号配石として調査を行ったが、整理作業の段階で形状等から3号集石とした。

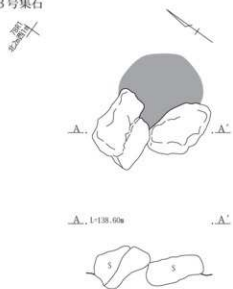
位置：調査区の北東側に位置し、第2面調査拡張域の中央北寄り、6号トレンチの北側にある。本集石の西側に隣接して1号集石がある。

グリッド：78区R1

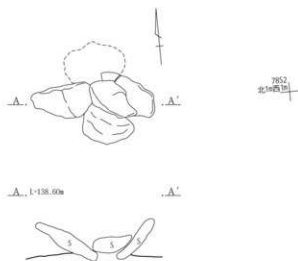
1号集石



3号集石



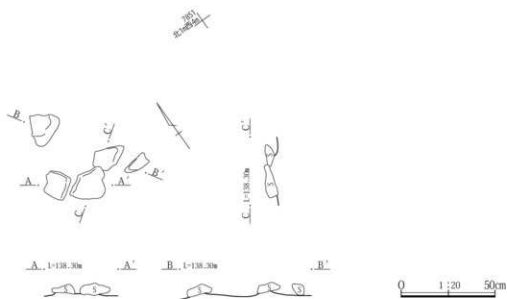
4号集石



0 1/20 50cm

第40图 1・3・4号集石平面图

6号集石



8号集石



第41図 6・8号集石平面図

第3章 検出された遺構と遺物

形状: 西側を頂点とするようにハ字状に大型礫2石を配置する。1石は破損して分割している。2石共に被熱し、礫の東側径40cmの範囲が焼土化して僅かに変色している。大型礫2石は原位置を保った残存礫で、焼土化範囲の周囲に礫が存在した可能性をもつ。

4号集石 (第40図、PL. 8)

第2面調査時に検出し、調査時は4号配石として調査を行ったが、整理作業の段階で形状等から4号集石とした。

位置: 調査区の北東側に位置し、第2面調査拡張域の中央北西寄り、4号トレンチの北側にある。本集石の南東側5mに1号集石がある。

グリッド: 78区 S 2

形状: 板状礫4石を花卉状に配置し、中心の狭くなる底面に1石を配した組石状を呈する。花卉状となる板状礫の内面は、被熱により赤色化が顕著である。1石は原位置を止めることができなかつた。上部部での規模は、東西方向で0.65m、底石までの深さ10cmを測る。

なお、北側2.0mに14号住居の石囲炉が同レベル位置に存在するが、14号住居は中期加曽利E3式期の住居であり、本集石を含めた第2面で検出された集石とは時期が異なる。

5号集石

第2面調査時に検出し、調査時は5号配石として調査を行ったが、整理作業の段階で形状等から単独の遺構とは認められず、欠番とした。

6号集石 (第41図、PL. 8)

第2面調査時に検出し、調査時は6号配石として調査を行ったが、整理作業の段階で形状等から6号集石とした。

位置: 調査区の北東側に位置し、第2面調査拡張域の中央北西寄り、6号トレンチの南側にある。本集石の東側5mに1号集石、北東側5mに4号集石がある。

グリッド: 78区 S・T 1

形状: 板状の破損礫5石からなり、ほぼ同一レベル上にある。5石の礫は被熱している。

7号集石

第2面調査時に検出し、調査時は7号配石としたが、遺構とは認められなかつたことから欠番とした。

8号集石 (第41図、PL. 8)

第2面調査時に検出されていたが、整理作業の段階で形状等から新たに8号集石とした。

位置: 調査区の東側に位置し、第2面調査拡張域のほぼ中央で、5号トレンチの南側にあり、集石群の南端となる。本集石の北側10mに6号集石がある。

グリッド: 68区 T 18・19

形状: 10cm前後から20cmほどの小型礫が主となり、ほぼ同一レベル上に、径3.0mほどの範囲に集中する。礫の多くは被熱している。

(5) 遺構外出土遺物

調査区内から出土した、遺構に伴わない縄文時代の遺物を扱う。遺構外出土遺物には、第1面調査時に出土した遺物と、第2面調査時に出土した遺物とがある。

第1面調査時の出土遺物には、先述したように検出された遺構の時期である中期後半の加曽利E式土器が主体を占め、僅かに前期の土器がある。また、石器には石鏃や打製・磨製石斧、凹石、磨石、石皿等といった定形石器をはじめ、多くの剥片類が出土している。

第2面調査時の出土遺物には、漸移層付近から出土した草創期の石槌、第2面の主体を占める早期前半の標系文系土器群、さらには条痕文系土器群があり、第2面で検出された遺構に囲むる遺物である。また、石器には、削器、楔形石器、三角錐形石器、スタンプ形石器、削器等と共に、多量の剥片類が出土している。

以下、種別ごとに記載する。

1. 土器

出土した土器は、第2面調査時に出土した早期前半の標系文系土器群が最も古く、続いて条痕文系土器群がある。第1面調査時に出土した土器には、先ず量は少ないが前期の間山式や有尾式といった繊維土器、同じく諸磯式土器・興津式土器、十三菩提式土器がある。出土土器

の中で最も量が多いのは、中期後半の加曾利E 3式土器であり、本遺跡の集落を構成する時期とも一致する。

燃糸文系土器群 (第42・43図、表18、PL.21～22)

第2面調査時に出土し、調査区の南壁土層断面(第20図A-A')において、9層上位10cmに燃糸文系土器と無文土器の両者が出土することを確認している。出土した土器量は192点を数えるが、燃糸文系土器の土器片は少なく、その大方を図示した(1～20)。むしろ、無文土器が大半を占める状態で、21～36を図示した。燃糸文系土器の特徴として、4・5に見られるような、かなり細い燃糸文が施文されていることが上げられる。一見すると、条痕風に見える。また、無文土器では、22・23に示したように、やや小型となる尖底土器が多いようである。

条痕文系土器群 (第43～46図、表18、PL.22～24)

第2面調査時に出土し、調査区の南壁土層断面(第20図A-A')において、7層中に条痕文系土器が出土することを確認している。出土した土器量は113点を数え、その内の37～94を図示した。37～42・63～68・76・77は同一個体で、波状口縁となる口唇部に刻みをもち、表面の口縁部以下に条痕を施し、裏面では口縁付近に条痕が顕著に施される。43～45・47～49・51は同一個体で、波状口縁となる口唇部に刻みをもち、表面の口縁部以下に擦痕状の浅い条痕を施すが、裏面は不明瞭。52～55・94は同一個体で、胴部に条痕を施した尖底土器。これら条痕文系土器の大半は、胎土に微量な繊維と多量の砂粒を含み、79～90のような繊維の含まないような土器も存在する。

関山式土器 (第46図、表18、PL.24)

図示した95～103は同一個体で、胴部にコンパス文や円形刺突を横位に施している。これらは、第1面調査時に出土している。他に、この時期の土器はない。

有尾・黒浜式土器 (第46図、表18、PL.24)

少量であるが、第1面調査時に出土している。図示した104は爪形連続刺突で菱形文等を描く有尾式土器で、105～108は縄文施文の有尾式ないし黒浜式土器である。

諸磯式土器 (第46・47図、表18、PL.24～25)

あまり多くはないが、第1面調査時に出土している。図示した109～111は諸磯a式土器、112～131は諸磯b式土器、132～141は諸磯c式土器で、142・143は縄文施文の諸磯式土器である。

興津式土器 (第47図、表18、PL.25)

図示した144の1点のみであるが、興津式土器が第1面調査時に出土している。

十三菩提式土器 (第47図、表18、PL.25)

少量であるが、図示した145～151が第1面調査時に出土している。縄文地文に、結節浮線文を横位ないし縦位に貼付して文様を描く。

加曾利E式土器 (第47～50図、表18、PL.25～27)

第1面調査時に出土した土器の大半を占める。図示した土器の大多数が、加曾利E 3式の古段階から中段階の土器で、さほど時期幅はない。器種においても、キャリパー形を呈する深鉢を中心に、鉢形、壺形(両耳壺)が存在する。未掲載土器についても、ほぼ同様である。

2. 石器

出土した石器は、剥片類も含めた総数1001点で、第1面調査時の出土は441点、第2面調査時の出土は560点である。これらの器種には、剥片石器として石槍、石鏃、石匙、削器、打製石斧、三角錐形石器、加工痕ある剥片、石核等と多量の剥片類および磨製石斧があり、礫石器として磨石、凹石、敲石、多孔石、石皿がある。定形的な石器の中では、加工痕ある剥片が最も出土量が多く、続いて打製石斧、石核、削器、敲石、磨石の順となる。使用される石材は、剥片石器に黒色頁岩が最も使用頻度が高く、次いで黒色安山岩、珪質頁岩、細粒輝石安山岩、チャート、頁岩、ホルンフェルスと続き、雲母石英片岩、黒曜石、砂質頁岩が各1点と少なく、磨製石斧には変玄武岩、黒色頁岩、変質玄武岩が使用されている。礫石器の石材には、粗粒輝石安山岩が最も多く、細粒輝石安山岩、石英閃緑岩、石英斑岩、変質安山岩の順となる。剥片類については、第1面調査時の出土は337点、第2面調査時の出土は438点あり、黒色頁岩が最も使用頻度が

第3章 検出された遺構と遺物

高く、次いで黒色安山岩、ホルンフェルス、チャート、頁岩、細粒輝石安山岩、珪質頁岩と続き、黒曜石等は少ない。

石槍 (第51図、表18、PL. 8・28)

第2面調査時に、調査区南東の漸移層付近から245の1点を出土した。石材は黒色頁岩で、長さ13.5cm、幅4.4cm、重さ74.2gを測り、大型の幅広剥片を横位に用い、背面側を厚く、裏面側を薄く剥離して器体の形状を整える。細部調整は、背面側両端の剥離は細かく繊細で、両側縁の加工は粗い。出土層位から、草創期の石槍と考えられる。

石鏃 (第51図、表18、PL. 28)

第1・2面の両調査時に、計6点出土している。使用される石材は、チャートが3点、黒色安山岩が2点、黒曜石が1点である。その形態は240～243が凹基無茎鏃であり、244は未製品である。

石匙 (第51図、表18、PL. 28)

第1・2面の両調査時を通じて、246の1点のみであり、黒色頁岩が使用石材となっている。

削器 (第51図、表18、PL. 28)

第1・2面の両調査時に、計17点出土している。使用される石材は、黒色頁岩が16点、細粒輝石安山岩が1点である。この内、247・252・253の3点を図示した。247は刃部が典型的な削器様で、252は刃部角が厚く挿器的、253は礫面を大きく残す。

打製石斧 (第51図、表18、PL. 28)

第1・2面の両調査時に、計37点出土している。使用される石材は、黒色頁岩が31点、砂質頁岩が1点、珪質頁岩が2点、細粒輝石安山岩が3点である。形態は、短冊形が主体を占め、楕形は3点、分銅形は1点と少ない。この内、248～251・254～260の11点を図示した。248・250・251は片刃石斧様で、248は裏面側に礫面を大きく残す幅広剥片を素材に器体を作出し、刃部角は厚い。250・251は未製品か？。

三角錐形石器 (第52図、表18、PL. 28)

第2面調査時に、計3点出土している。使用される石材は、3点共に黒色頁岩である。この内、265・266の2点を図示した。265は大型柱状礫を素材に、裏面側に礫面、背面側に分割面を配し、両側縁を加工して器体を作出する。機能部は底面部にあり、裏面側から剥離し、部分的に敲打・摩耗痕が残る。266は断面三角形形状を呈し、各辺から対向するような剥離で器体を整形する。原石を分割して得た平坦面を裏面側に用い、頭部先端に礫面が残る。

加工痕ある剥片 (第53図、表18、PL. 29)

第1・2面の両調査時に、計60点出土している。使用される石材は、黒色頁岩が56点と圧倒的に多く、黒色安山岩・珪質頁岩・ホルンフェルス・雲母石英片岩が各1点である。285・286の2点を図示した。この2点は第2面調査時に出土した石器で、旧石器時代の石器の可能性をもつが、本項で記載する。285は黒色頁岩製で、弧状に膨らむ剥片端部に、刃こぼれ状の小剥離痕がある。剥片は上面の剥離面打面(非調整)より剥離されている。286は黒色頁岩製で、横位折断した小型幅広剥片を用い、背面側左辺と裏面側端部を粗く加工している。

石核

第1・2面の両調査時に、計42点出土している。使用される石材は、黒色頁岩が35点、黒色安山岩が4点、チャートが1点、珪質頁岩が1点、ホルンフェルスが1点である。図示はしていない。

剥片類

第1面調査時には337点、第2面調査時には438点の出土がある。使用される石材は、黒色頁岩が最も使用頻度が高く、次いで黒色安山岩、ホルンフェルス、チャート、頁岩、細粒輝石安山岩、珪質頁岩と続き、黒曜石等は少ない。図示はしていない。

磨製石斧(第52図、表18、PL. 28)

第1・2面の両調査時に、計5点出土している。使用される石材は、黒色頁岩が2点、変玄武岩が2点、変質玄武岩が1点である。形態には、定角式、扁平柱状礫、

礫石斧(未製品?)、乳棒状の各種がある。この内、261～264の4点を図示した。261は上端部付近を剥離した後に研磨し、やや幅広。262は偏平な板状礫を用いた未製品で、下端側を薄く剥離した後に研磨し、裏面側は未加工で礫稜部が残る。263は敲打痕と剥離面を残し、全面を研磨する。264は表裏面とも丁寧に研磨するが、先端部に敲打痕が残る。

磨石 (第52図、表18、PL.28・29)

第1・2面の両調査時に、計10点出土している。使用される石材は、粗粒輝石安山岩が8点と最も多く、石英閃緑岩が2点ある。この内、270～275の6点を図示した。楕円礫ないし楕円扁平礫を素材とし、272～275は敲打痕を残し、275は被熱している。

凹石 (第52図、表18、PL.28・29)

第1・2面の両調査時に、計5点出土している。使用される石材は、すべて粗粒輝石安山岩である。この内、267～269・282の4点を図示した。扁平楕・円礫ないし楕円礫を素材とし、敲打痕をもつ。267・269は被熱している。

敲打石 (第53図、表18、PL.29)

第1・2面の両調査時に、計13点出土している。使用される石材は、粗粒輝石安山岩が6点と最も多く、次いで石英閃緑岩が3点、細粒輝石安山岩・石英斑岩・変質安山岩・凝灰質砂岩は各1点である。この内、276～281・283の7点を図示した。楕円礫や扁平礫、柱状礫ないし棒状礫を素材とし、小口端部付近に敲打痕を有し、280は被熱している。

多孔石 (第53図、表18、PL.29)

第1面調査時に、1点出土している。図示した284は、石材に粗粒輝石安山岩を使用し、背面側の礫稜部に漏斗状の孔を2ヶ所、裏面側の平坦部に漏斗状の孔を多数穿つ。

石皿

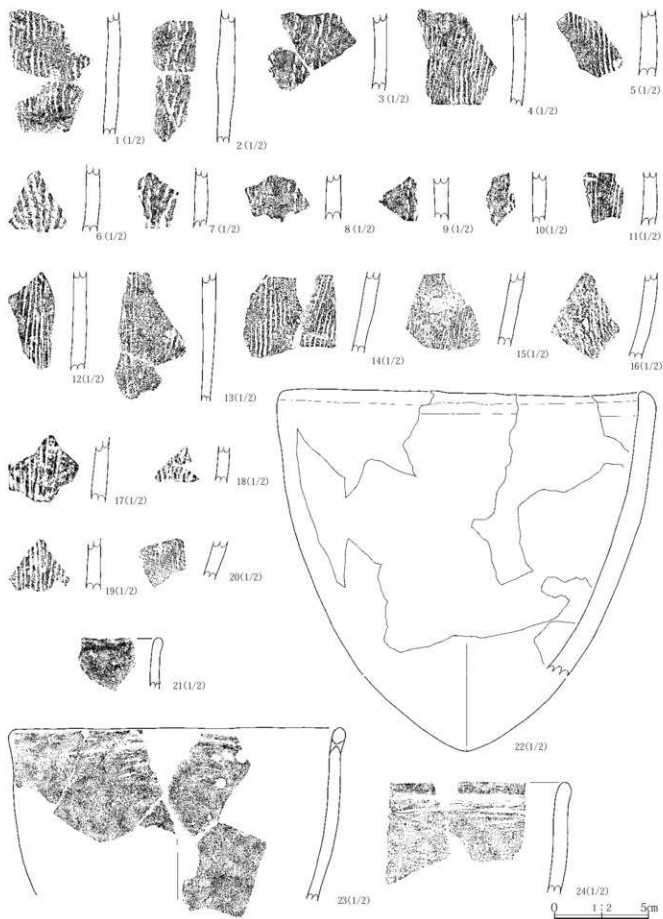
第1面調査時に、粗粒輝石安山岩を使用した破片1点が出土している。図示していない。

3. 石製品

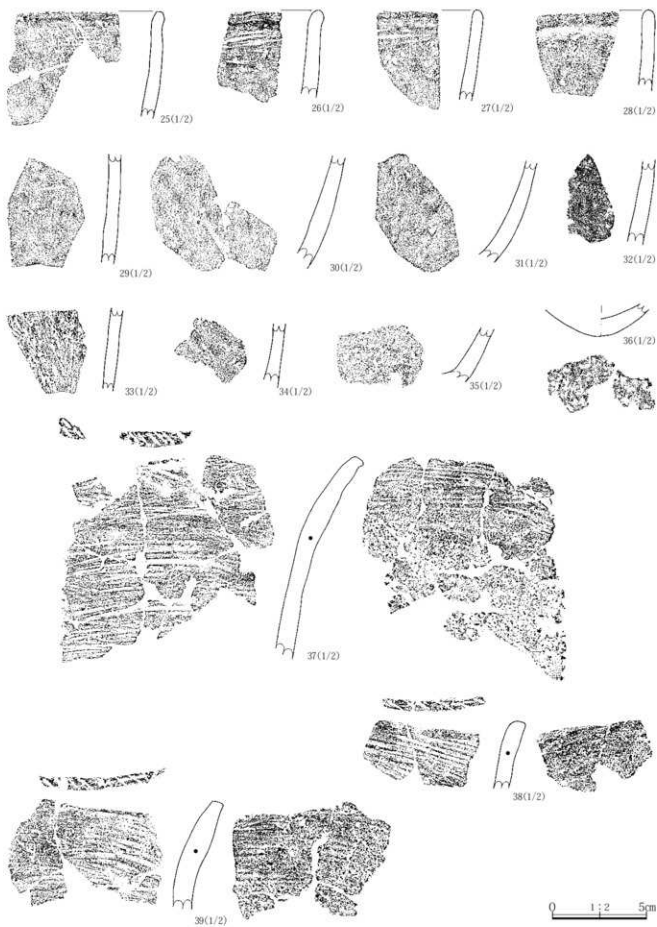
塊状耳飾り (第53図、表18、PL.29)

図に示した、287の滑石製の塊状耳飾りが1点出土している。外径2.0cm、内径9mm、厚さ1.7cm、重さ10.1gを測る。中心孔は両面からの穿孔で、スリットを有し、概形は柱状を呈する。前期諸磯式期と考えられよう。

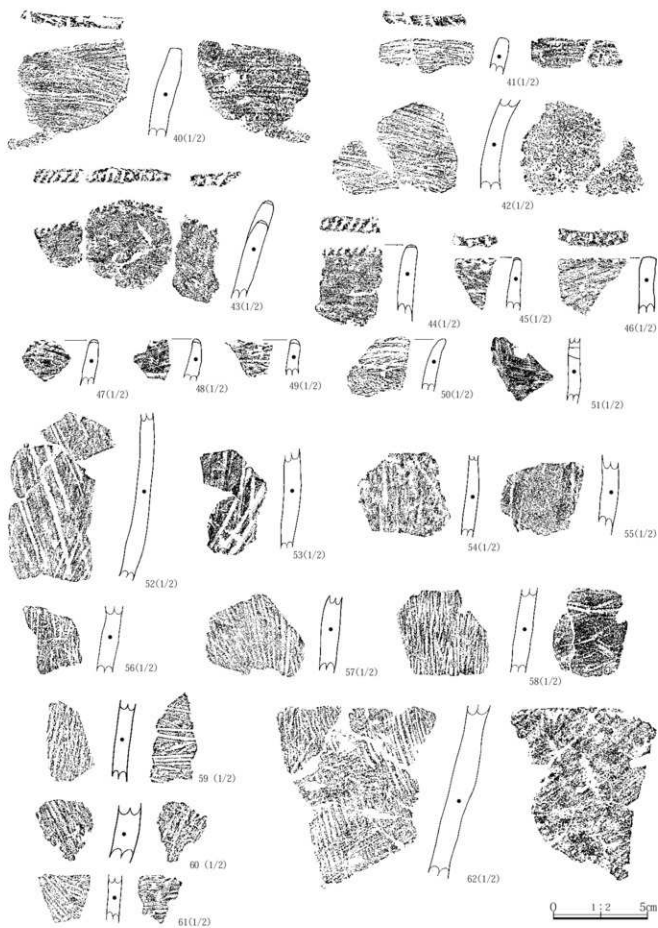
第3章 検出された遺構と遺物



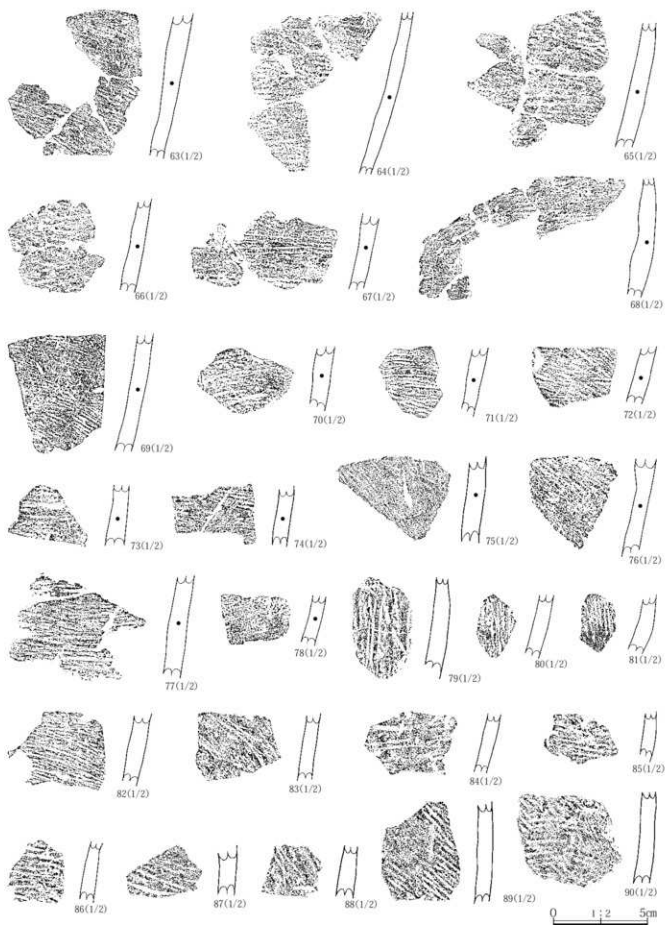
第42図 遺構外出土遺物(1)



第43図 遺構外出土遺物(2)

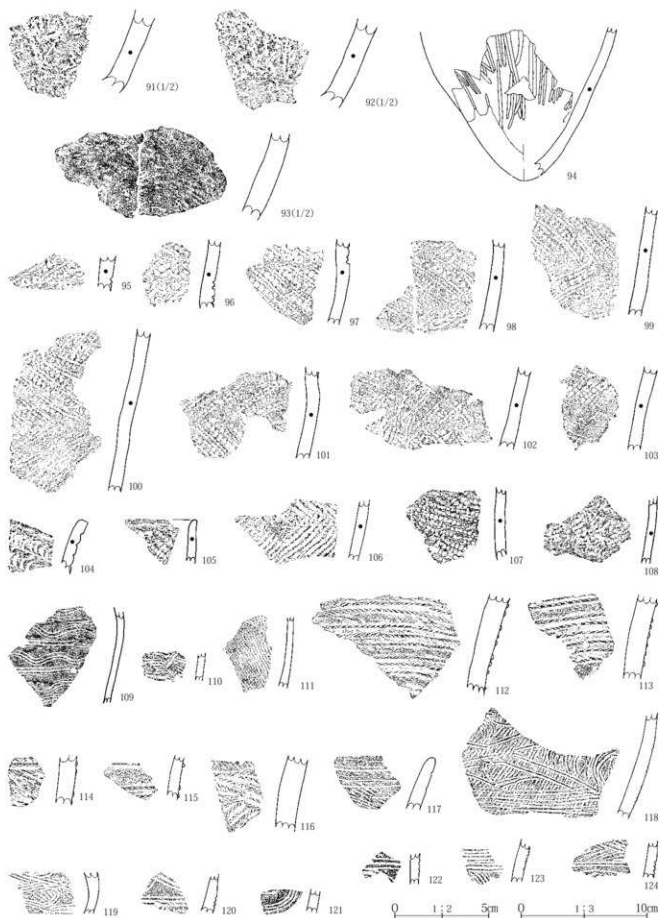


第44図 遺構外出土遺物(3)

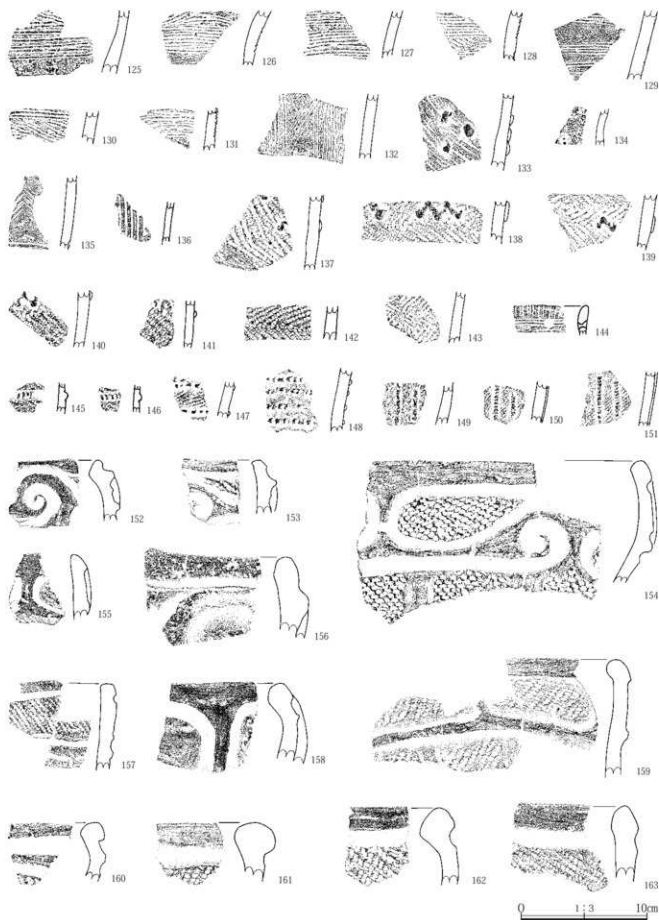


第45図 遺構外出土遺物(4)

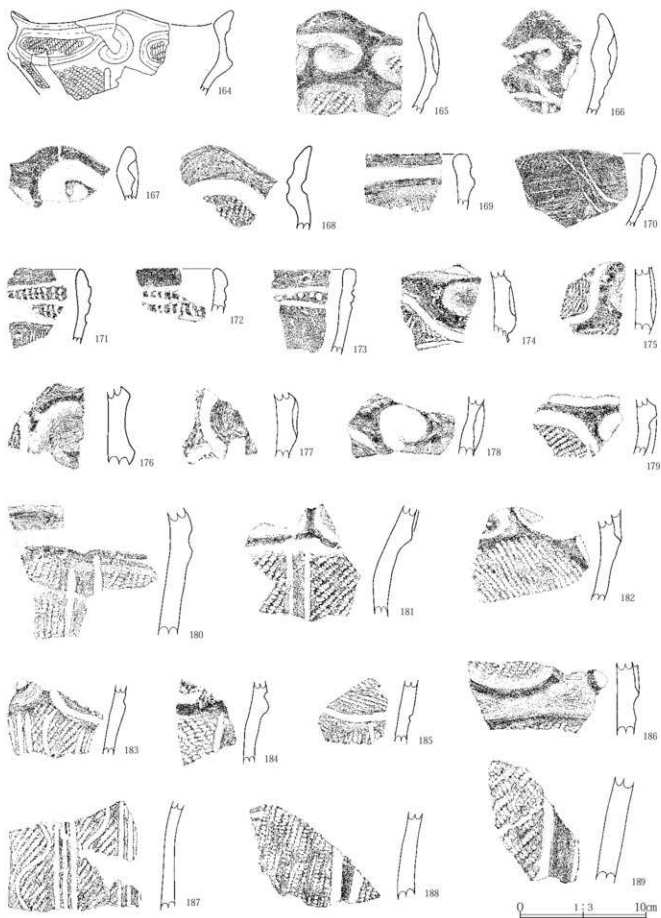
第3章 検出された遺構と遺物



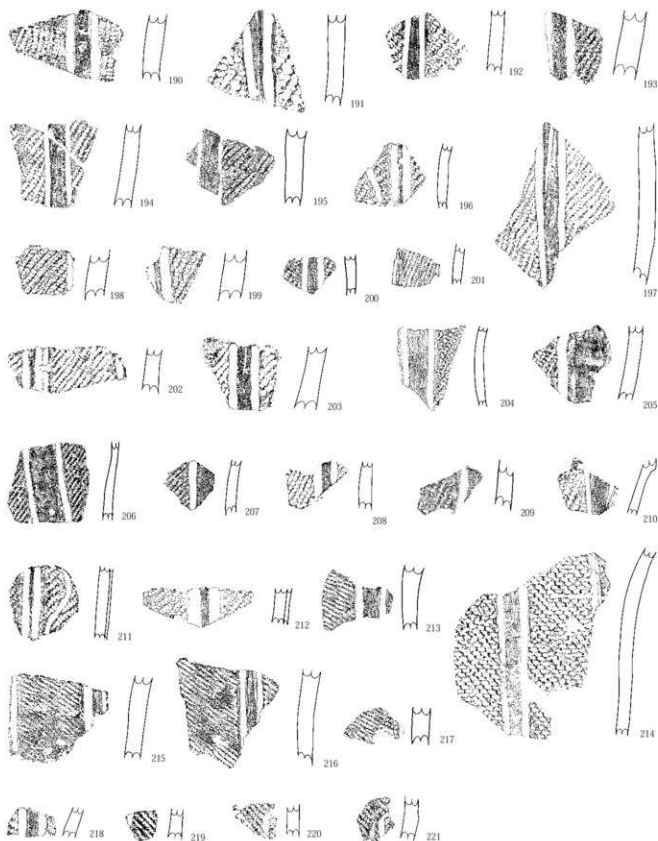
第46図 遺構外出土遺物(5)



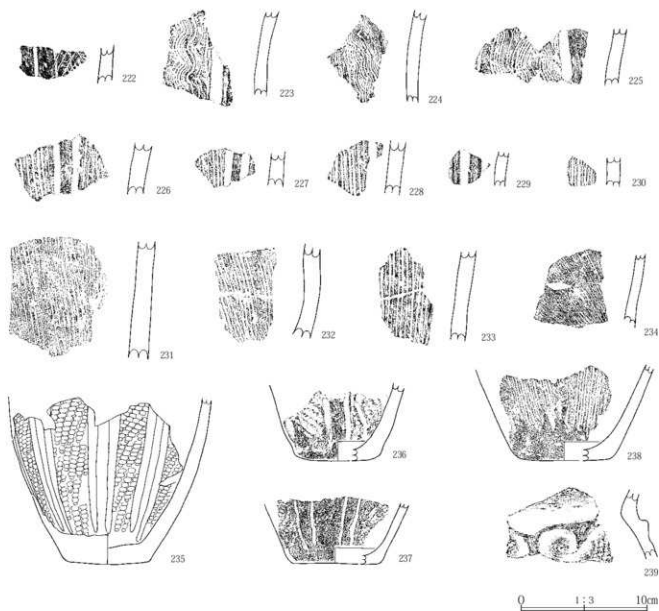
第47図 遺構外出土遺物(6)



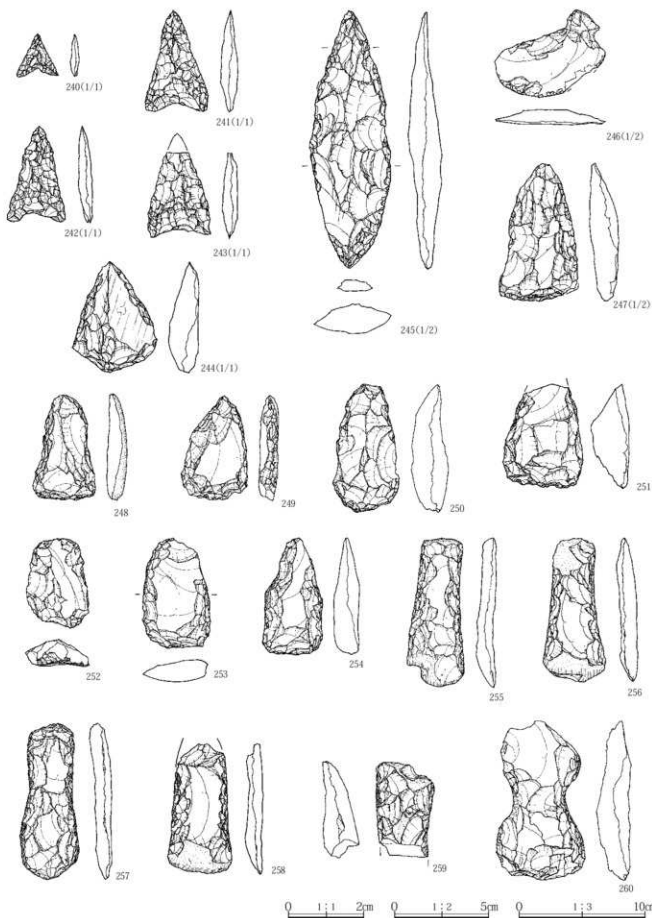
第48図 遺構外出土遺物(7)



第49図 遺構外出土遺物(8)

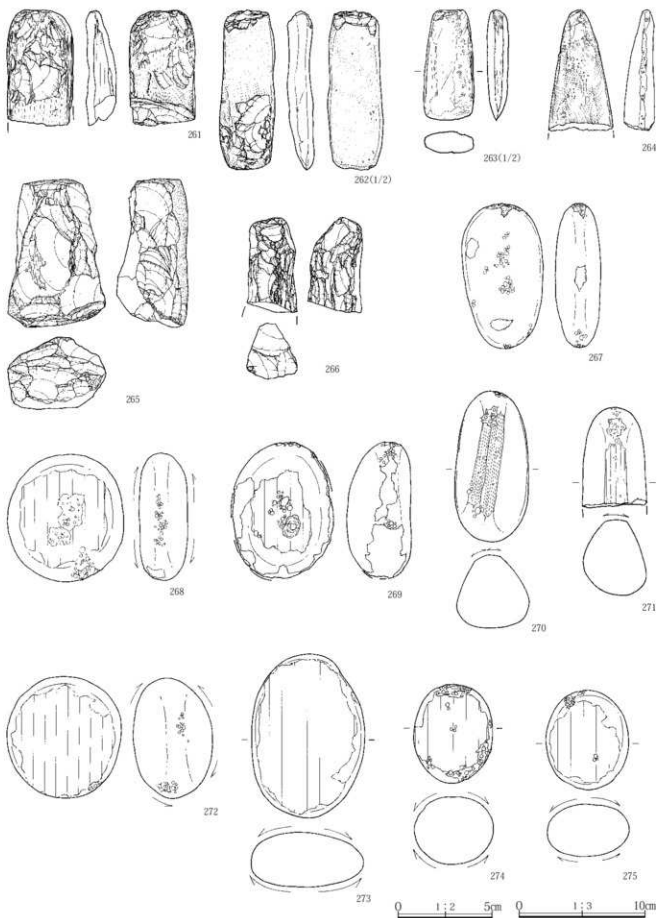


第50図 遺構外出土遺物(9)

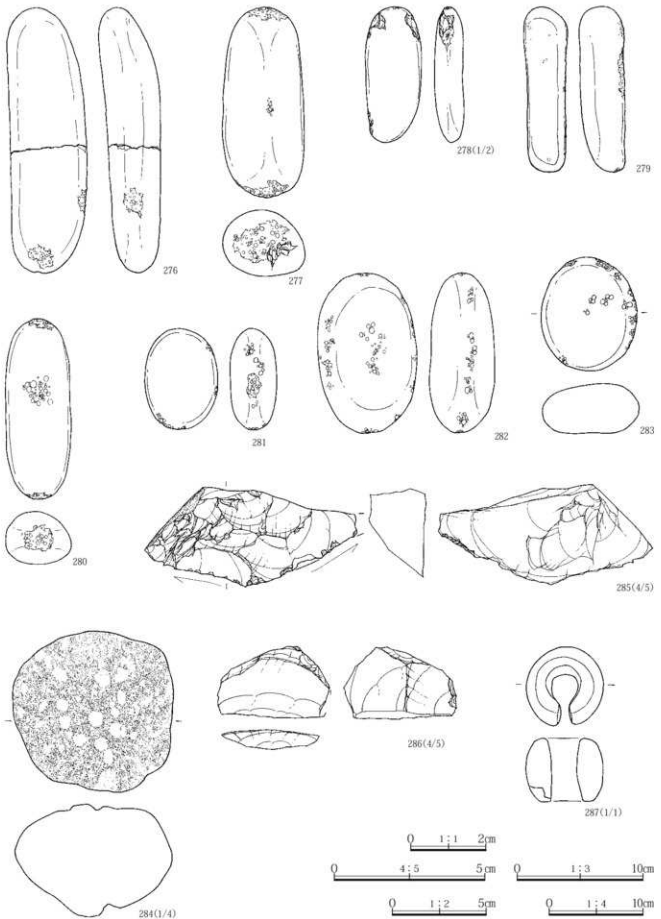


第51図 遺構外出土遺物(10)

第3章 検出された遺構と遺物



第52図 遺構外出土遺物(11)



第53図 遺構外出土遺物(12)

第3章 検出された遺構と遺物

表18 遺構外出土遺物観察表

検出 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第42Ⅸ PL. 21	1	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にLの細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	2	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	3	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	4	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	5	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	6	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	7	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	8	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	9	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にLの細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	10	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にLの燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	11	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	12	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	13	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部に細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	14	縄文土器 深鉢	胴部片		細粒	14・15は同一個体。胴部に、細い1の燃糸文を縦位に疎らに施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	15	縄文土器 深鉢	胴部片		細粒	14・15は同一個体。胴部に、細い1の燃糸文を縦位に疎らに施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	16	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に、細い1の燃糸文を縦位に疎らに施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	17	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部に細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	18	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部に細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	19	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	胴部にRの細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	20	縄文土器 深鉢	胴部片		細粒	胴部に、細い燃糸文を縦位に施す。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	21	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		砂粒	平口縁の無文土器で、口唇部は丸みをもち、口縁下が僅かに括れる。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	22	縄文土器 深鉢	第2面 口縁～胴部1/3		砂粒	平口縁の無文土器で、口唇部は外列ぎ状となる。器厚は厚く、尖底となる。口径17.5cmを測り、やや小型。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 21	23	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		砂粒	23～30は同一個体。平口縁の無文土器で、口唇部は丸みをもち、口縁下が僅かに括れ、補修孔を有する。口径17.5cmを測り、やや小型。	燃糸文系
第42Ⅸ PL. 22	24	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		砂粒	23～30は同一個体。平口縁の無文土器で、口唇部は丸みをもち、口縁下が僅かに括れる。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	25	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		砂粒	23～30は同一個体。平口縁の無文土器で、口唇部は丸みをもち、口縁下が僅かに括れる。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	26	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		砂粒	23～30は同一個体。平口縁の無文土器で、口唇部は丸みをもち、口縁下が僅かに括れる。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	27	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		砂粒	23～30は同一個体。平口縁の無文土器で、口唇部は丸みをもち、口縁下が僅かに括れる。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	28	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		砂粒	23～30は同一個体。平口縁の無文土器で、口唇部は丸みをもち、口縁下が僅かに括れる。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	29	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	23～30は同一個体。無文の胴部片。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	30	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	23～30は同一個体。無文の胴部下平で、やや器厚が厚くなる。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	31	縄文土器 深鉢	第2面 底部片		砂粒	胴部下平の尖底部付近で、無文。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	32	縄文土器 深鉢	5号トレンチ 胴部片		細粒	無文の胴部。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	33	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		砂粒	無文の胴部片。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	34	縄文土器 深鉢	5号トレンチ 胴部片		細粒	無文の胴部。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	35	縄文土器 深鉢	第2面 底部片		砂粒	無文の尖底部。	燃糸文系
第43Ⅸ PL. 22	36	縄文土器 深鉢	第2面 底部片		砂粒	無文の尖底部。	燃糸文系

第2節 縄文時代の遺構と遺物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第43図 PL.22	37	縄文土器 深鉢	口縁部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。縦い波状口縁の口唇部に刻みをもち、表面の口縁以下に横位ないしやや右下がりの条痕を施す。裏面の口縁下付近には横位の条痕が施されるが、それ以下は顕著ではない。	条痕文系
第43図 PL.22	38	縄文土器 深鉢	口縁部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。縦い波状口縁の口唇部に刻みをもち、表面の口縁以下に横位ないしやや右下がりの条痕を施す。裏面の口縁下付近には横位の条痕が施される。	条痕文系
第43図 PL.22	39	縄文土器 深鉢	口縁部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。縦い波状口縁の口唇部に刻みをもち、表面の口縁以下に横位ないしやや右下がりの条痕を施す。裏面の口縁下付近には横位の条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	40	縄文土器 深鉢	口縁部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。縦い波状口縁の口唇部に刻みをもち、表面の口縁以下に横位ないしやや右下がりの条痕を施す。裏面の口縁下付近には横位の条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	41	縄文土器 深鉢	口縁部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。縦い波状口縁の口唇部に刻みをもち、表面の口縁以下に横位ないしやや右下がりの条痕を施す。裏面の口縁下付近には横位の条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	42	縄文土器 深鉢	胴部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部の表面に、右下がりの斜位に条痕を施す。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	43	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		微繊維・砂粒	43～45・47～49・51は同一個体。波状口縁の口唇部に刻みをもち、表面に押痕状の条痕を横位に浅く施す。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	44	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		微繊維・砂粒	43～45・47～49・51は同一個体。口唇部に刻みをもち、表面に押痕状の条痕を横位に浅く施す。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	45	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		微繊維・砂粒	43～45・47～49・51は同一個体。口唇部に刻みをもち、表面に押痕状の条痕を横位に浅く施す。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	46	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 口縁部片		微繊維・砂粒	平口縁で、表面の口縁以下に横位の条痕を施す。裏面の口縁下付近には横位の条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	47	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		微繊維・砂粒	43～45・47～49・51は同一個体。口唇部に刻みをもち、表面に押痕状の条痕を横位に浅く施す。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	48	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		微繊維・砂粒	43～45・47～49・51は同一個体。口唇部に刻みをもち、表面に押痕状の条痕を横位に浅く施す。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	49	縄文土器 深鉢	第2面 口縁部片		微繊維・砂粒	43～45・47～49・51は同一個体。口唇部に刻みをもち、表面に押痕状の条痕を横位に浅く施す。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	50	縄文土器 深鉢	口縁部片		微繊維・砂粒	平口縁で、表面の口縁以下に横位の条痕を施す。裏面の口縁下付近には横位の条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	51	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		微繊維・砂粒	43～45・47～49・51は同一個体。口縁下に補修痕を有し、表面に押痕状の条痕を横位に浅く施す。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	52	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		微繊維・砂粒	52～55・94は同一個体。胴部の表面に、縦位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	53	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		微繊維・砂粒	52～55・94は同一個体。胴部の表面に、縦位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	54	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		微繊維・砂粒	52～55・94は同一個体。胴部の表面に、縦位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	55	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		微繊維・砂粒	52～55・94は同一個体。胴部の表面に、縦位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	56	縄文土器 深鉢	胴部片		微繊維・砂粒	胴部の表・裏面に、斜位の条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	57	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 胴部片		微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第44図 PL.22	58	縄文土器 深鉢	胴部片		微繊維・砂粒	胴部の表面に縦位および斜位の条痕を施し、裏面には横位の条痕が疎らに施される。	条痕文系
第44図 PL.22	59	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		微繊維・砂粒	胴部の表面は縦位に条痕が施され、裏面は横位に条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	60	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片		微繊維・砂粒	胴部の表・裏面に斜位の条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	61	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 胴部片		微繊維・砂粒	胴部の表面は斜位に条痕が施され、裏面は横位に条痕が施される。	条痕文系
第44図 PL.22	62	縄文土器 深鉢	胴部片		繊維・砂粒	胴部の表・裏面に、斜位の条痕が施される。	条痕文系
第45図 PL.23	63	縄文土器 深鉢	胴部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部の表面に、浅く斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第45図 PL.23	64	縄文土器 深鉢	胴部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部の表面に、浅く斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第45図 PL.23	65	縄文土器 深鉢	胴部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部下平の表面に、浅く斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第45図 PL.23	66	縄文土器 深鉢	胴部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部下平の表面に、浅く斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
第45図 PL.23	67	縄文土器 深鉢	胴部片		微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部下平の表面に、浅く斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系

第3章 検出された遺構と遺物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
4590 PL.23	68	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部の表面に、浅く斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	69	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位の細い条痕が小単位に施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	70	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	71	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	72	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面にも僅かに条痕を確認できる。	条痕文系
4590 PL.23	73	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、横位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	74	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位ないし横位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	75	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が浅く施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	76	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部の表面に、僅かに斜位の条痕が確認できる。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	77	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	37～42・63～68・76・77は同一個体。胴部の表面に、横位ないしやや斜位に条痕を施す。裏面は条痕が顕著ではない。	条痕文系
4590 PL.23	78	縄文土器 深鉢	胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	79	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 胴部片			砂粒	胴部の表面に、縦位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	80	縄文土器 深鉢	胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	81	縄文土器 深鉢	胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	82	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	83	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片			微繊維・砂粒	胴部の表面に、斜位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	84	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位ないし横位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	85	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位ないし横位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	86	縄文土器 深鉢	第2面 胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位ないし横位に条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	87	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	88	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.23	89	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位の条痕が施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4590 PL.24	90	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 胴部片			砂粒	胴部の表面に、斜位および横位の条痕が小単位に施される。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4690 PL.24	91	縄文土器 深鉢	第2面 底部片			繊維	胴部下平の尖底部付近で、無文。	条痕文系
4690 PL.24	92	縄文土器 深鉢	第2面 底部片			繊維	胴部下平の尖底部付近で、無文。	条痕文系
4690 PL.24	93	縄文土器 深鉢	第2面 底部片			砂粒	胴部下平の尖底部付近で、表面に条痕が浅く施される。	条痕文系
4690 PL.24	94	縄文土器 深鉢	第2面 製へ底部1/2			微繊維・砂粒	52～55・94は同一個体。胴部表面に縦位の条痕が施され、尖底部では無文。裏面の条痕は不明。	条痕文系
4690 PL.24	95	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部に竹管具による円形刺突列を横位に施し、Lの正反の合の縄文を施す。	岡山B式
4690 PL.24	96	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部に竹管具による円形刺突列を横位に2列施し、Lの正反の合の縄文を施す。	岡山B式
4690 PL.24	97	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部に竹管具による円形刺突列を横位に2列施し、Rの正反の合の縄文を施す。	岡山B式
4690 PL.24	98	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部下平にLとRの正反の合による羽状縄文を施す。	岡山B式
4690 PL.24	99	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部下平にLとRの正反の合による羽状縄文を施す。	岡山B式
4690 PL.24	100	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部下平にLとRの正反の合による羽状縄文を施す。	岡山B式
4690 PL.24	101	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部にコンバズ文を横位に施し、LとRの正反の合による羽状縄文を施す。	岡山B式
4690 PL.24	102	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部下平にLとRの正反の合による羽状縄文を施す。	岡山B式
4690 PL.24	103	縄文土器 深鉢	第1面 胴部片			繊維	95～103は同一個体。胴部下平にLとRの正反の合による羽状縄文を施す。	岡山B式

第2節 縄文時代の遺構と遺物

採掘 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/構成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
469	104	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		繊維	波状口縁の口縁下に、連続爪形刺突を2条巡らせる。	有尾式
469	105	縄文土器 深鉢	8号トレンチ 口縁部片		繊維	平口縁の口縁以下にR Lの縄文を施す。	有尾・黒沢式
469	106	縄文土器 深鉢	製部片		繊維	胴部に0段多条のR Lと0段多条のL Rによる浮彫縄文を施す。	有尾・黒沢式
469	107	縄文土器 深鉢	8号トレンチ 製部片		繊維	胴部にR LとL Rによる浮彫縄文を施す。	有尾・黒沢式
469	108	縄文土器 深鉢	2号住居 製部片		繊維・砂粒	胴部に粗いL Rの縄文を施す。	黒沢式
469	109	縄文土器 深鉢	2号住居 製部片		砂粒	胴部に3本単位の細い平行沈線を描数巡らせて区画し、各段間に同様の平行沈線で波状文を付す。また、円形刺突を有する。	諸磯a式
469	110	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	口縁部文様に、細い平載竹管具による平行沈線でレンズ状等の文様を横位に描く。	諸磯a式
469	111	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		細砂	胴部に細いR Lの縄文を施す。	諸磯a式
469	112	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に刻みをもつ浮彫文を3条単位で数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
469	113	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	胴部に刻みをもつ浮彫文を数条巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
469	114	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	胴部に、刻みをもつ浮彫文を数条巡らせて文様帯を区画し、区画内に同様の浮彫文で曲線的な文様を描く。	諸磯b式
469	115	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に刻みをもつ浮彫文を数条単位で数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
469	116	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に刻みをもつ浮彫文を数条巡らせて区画し、区画内に同様の浮彫文で曲線的な文様を描く。	諸磯b式
469	117	縄文土器 深鉢	口縁部片		砂粒	平口縁の口縁下に集合沈線状に平行沈線を数条巡らせ、その下に曲線的な文様を平行沈線で描く。地文にはR Lの縄文を施す。	諸磯b式
469	118	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に平行沈線で曲線のおよび扇歯状の文様を描く。地文にはL Rの縄文が施される。	諸磯b式
469	119	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に平行沈線で曲線的な文様を描く。地文にはR Lの縄文が施される。	諸磯b式
469	120	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に平行沈線で曲線的な文様を描く。	諸磯b式
469	121	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線で曲線的な文様を描く。	諸磯b式
469	122	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	胴部に平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に平行沈線で曲線的な文様を描く。	諸磯b式
469	123	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に平行沈線で曲線的な文様を描く。	諸磯b式
469	124	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に平行沈線で横位矢羽根状の文様を描く。地文にはR Lの縄文が施される。	諸磯b式
479	125	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に平行沈線で曲線的な文様を描く。地文にはR Lの縄文が施される。	諸磯b式
479	126	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に平行沈線で曲線的な文様を描く。地文にはR Lの縄文が施される。	諸磯b式
479	127	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条単位で数段巡らせ、地文にR Lの縄文が施される。	諸磯b式
479	128	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
479	129	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条単位で数段巡らせ、地文に施らに縄文を施す。	諸磯b式
479	130	縄文土器 深鉢	埋土 製部片		砂粒	胴部に平行沈線を数条巡らせて区画し、区画内に斜位の平行沈線を施す。	諸磯b式
479	131	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に集合沈線状の平行沈線を数条巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
479	132	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	胴部に、集合沈線で縦位に文様を区画し、その間に斜位の集合沈線で扇歯状の文様を縦位に描く。	諸磯c式
479	133	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に斜位の平行沈線を施し、扇歯の貼付文を貼付する。	諸磯c式
479	134	縄文土器 深鉢	製部片		砂粒	地文にR Lの縄文を施し、結節浮彫文を縦位に貼付する。	諸磯c式
479	135	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に平行沈線を巡らせて文様帯区画し、区画内に縦位の矢羽根状沈線を施す。	諸磯c式
479	136	縄文土器 深鉢	2号住居 製部片		砂粒	胴部に縦位の沈線を施し、その脇に印刻をもつ。	諸磯c式

第3章 検出された遺構と遺物

採掘 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
47Ⅸ PL.25	137	縄文土器 深鉢	第1面 製銅片		砂粒	胴部にR Lの縄文を施し、鋸歯状の貼付文を横位に数段貼付する。	諾儀c式
47Ⅸ PL.25	138	縄文土器 深鉢	第1面 製銅片		砂粒	胴部にR LとL Rによる結束羽状縄文を施し、鋸歯状の貼付文を横位に貼付する。	諾儀c式
47Ⅸ PL.25	139	縄文土器 深鉢	第1面 製銅片		砂粒	胴部にR LとL Rによる結束羽状縄文を施し、鋸歯状の貼付文を横位に貼付する。	諾儀c式
47Ⅸ PL.25	140	縄文土器 深鉢	製銅片		砂粒	胴部にR Lの縄文を施し、鋸歯状の貼付文を横位にもつ。	諾儀c式
47Ⅸ PL.25	141	縄文土器 深鉢	2号住居 製銅片		砂粒	胴部に0段多条のR Lの縄文を施し、鋸歯状の貼付文を横位にもつ。	諾儀c式
47Ⅸ PL.25	142	縄文土器 深鉢	2号住居 製銅片		砂粒	胴部にL RとR Lによる結束羽状縄文を施す。	諾儀式
47Ⅸ PL.25	143	縄文土器 深鉢	製銅片		砂粒	胴部にR LとL Rによる結束羽状縄文を施す。	諾儀式
47Ⅸ PL.25	144	縄文土器 深鉢	2号住居 口縁部片		砂粒	平口縁?の口縁直下に縦位沈線帯を巡らせ、その下に横位沈線帯を巡らせる。また、口縁下に補修孔をもつ。	興津式
47Ⅸ PL.25	145	縄文土器 深鉢	2号住居 製銅片		砂粒	145・146は同一個体。胴部にR Lの縄文を施し、横位に結節浮線文を貼付して文様を描く。	十三晋式
47Ⅸ PL.25	146	縄文土器 深鉢	2号住居 製銅片		砂粒	145・146は同一個体。胴部にR Lの縄文を施し、横位に結節浮線文を貼付して文様を描く。	十三晋式
47Ⅸ PL.25	147	縄文土器 深鉢	製銅片		砂粒	胴部にL Rの縄文を施し、横位に結節浮線文を貼付して文様を描く。	十三晋式
47Ⅸ PL.25	148	縄文土器 深鉢	第1面 製銅片		砂粒	胴部にR Lの縄文を施し、結節浮線文を横位に数条貼付して文様を描く。	十三晋式
47Ⅸ PL.25	149	縄文土器 深鉢	5号トレンチ 製銅片		砂粒	胴部下手に結節浮線文を縦位に貼付する。	十三晋式
47Ⅸ PL.25	150	縄文土器 深鉢	第1面 製銅片		砂粒	150・151は同一個体。胴部下手にL Rの縄文を施し、結節浮線文を縦位に貼付する。	十三晋式
47Ⅸ PL.25	151	縄文土器 深鉢	第1面 製銅片		砂粒	150・151は同一個体。胴部下手にL Rの縄文を施し、結節浮線文を縦位に貼付する。	十三晋式
47Ⅸ PL.25	152	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文を描く。	加曾利E 2式
47Ⅸ PL.25	153	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 口縁部片		砂粒	内反する平口縁の口縁部文様に、隆帯と沈線で渦巻き文と楕円等の区画を描き、区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 2式
47Ⅸ PL.25	154	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 口縁部片		砂粒	154・214は同一個体。内反する平口縁の口縁部文様に、隆帯と沈線で渦巻き文と楕円等の区画を描き、区画内にL R Lの縄文を施す。以下の胴部には沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にL R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	155	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	小波状口縁で口縁部がやや内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	156	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部がやや内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	157	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部がやや内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	158	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で楕円区画を描く。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	159	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部がやや内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。以下の胴部には、沈線で懸垂文を垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	160	縄文土器 深鉢	口縁部片		砂粒	内反する平口縁の口縁部、沈線と隆帯で渦巻き状の文様を描く。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	161	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 口縁部片		砂粒	内反する平口縁の口縁部文様に、隆帯と沈線で楕円等の区画を描き、区画内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	162	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 3式
47Ⅸ PL.25	163	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部がやや内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 3式
48Ⅸ PL.25	164	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	小波状口縁で口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にL Rの縄文を施す。以下の胴部には、沈線で懸垂文を垂下させ、L Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
48Ⅸ PL.25	165	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	小波状口縁で口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にL Rの縄文を施す。以下の胴部には、逆J字状に沈線を垂下させ、L Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
48Ⅸ PL.25	166	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	小波状口縁で口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を施す。以下の胴部には、沈線で懸垂文を垂下させる。	加曾利E 3式
48Ⅸ PL.26	167	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	小波状口縁で口縁部が内反し、口縁部文様に隆帯と沈線で渦巻き文を描く。	加曾利E 3式
48Ⅸ PL.26	168	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 口縁部片		砂粒	小波状口縁の波頂下に沈線で円形文を区画し、区画内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 3式

第2節 縄文時代の遺構と遺物

採掘 PL.No.	No.	種類 残存率	出土位置 残存率	計測値	胎土/構成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第489 PL.26	169	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部がやや内反し、口縁部文様に陰帯と沈線で楕円区画を描き、区画内に糸線文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	170	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部が内反し、口縁部文様に沈線で円形文や楕円文を描く。	加曾利 E 3式
第489 PL.20	171	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 口縁部片		砂粒	内反きみの平口縁で、口縁下に沈線を巡らせて口縁部文様を区画し、区画内に2列の半截竹管衝突を2段階施す。以下に陰帯の糸線文を施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	172	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁部が内反きみで、口縁下に沈線を巡らせて口縁部文様を区画し、区画内に2列の半截竹管衝突を2段階施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	173	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	平口縁の口縁下に沈線を巡らせて口縁部文様を区画し、区画内に円形衝突を施す。以下は無文。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	174	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	175	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文と楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	176	縄文土器 深鉢	10号住居 製部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と陰帯で渦巻き文および楕円区画の文様を描き、口縁部文様下にL Rの縄文を施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	177	縄文土器 深鉢	3号トレンチ 口縁部片		砂粒	口縁部文様に、陰帯と沈線で渦巻き文等の区画を描く。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	178	縄文土器 深鉢	第1面 口縁部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文を描く。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	179	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 口縁部片		砂粒	口縁部文様に、陰帯と沈線で楕円等の区画を描き、区画内に0段多条のL Rの縄文を施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	180	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で文様を描き、以下の製部に沈線で懸垂文を垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.20	181	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で楕円等の区画を描き、以下の製部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	182	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文や楕円区画を描き、製部にL Rの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	183	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	口縁部文様に沈線で渦巻き文や楕円等の文様を描き、以下の製部に沈線で懸垂文を垂下させ、R Lの縄文を縦位に施し、さらに沈線で蛇行懸垂文を垂下させる。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	184	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で文様を描き、以下の製部に沈線で懸垂文を垂下させ、L Rの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	185	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と楕円等の区画を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。以下の製部に沈線で懸垂文を垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	186	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	口縁部文様に陰帯と沈線で渦巻き文や楕円区画を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。以下の製部に、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	187	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に3本の沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施し、さらに沈線で蛇行懸垂文を垂下させる。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	188	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	189	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	190	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	191	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R L R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	192	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	193	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	194	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	195	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内に0段多条のR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	196	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	製部に沈線と陰帯で懸垂文を垂下させ、区画内にR Lの縄文を縦位に施し、さらに沈線で蛇行懸垂文を垂下させる。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	197	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.26	198	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.27	199	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.27	200	縄文土器 深鉢	7号トレンチ 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.27	201	縄文土器 深鉢	5号トレンチ 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第489 PL.27	202	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	製部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式

第3章 検出された遺構と遺物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第49R PL.27	203	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	204	縄文土器 深鉢	5号トレンチ 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR.L.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	205	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	206	縄文土器 深鉢	2号住居 製部片		砂粒	胴部に懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	207	縄文土器 深鉢	2号住居 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	208	縄文土器 深鉢	1・2号トレンチ 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	209	縄文土器 深鉢	5号住居 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	210	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	211	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線と陰帯で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施し、さらに沈線で蛇行懸垂文を垂下させる。	加曾利E3式
第49R PL.27	212	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線と陰帯で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	213	縄文土器 深鉢	8号トレンチ 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にL.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	214	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	154・214は同一個体。胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にL.R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	215	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	216	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	217	縄文土器 深鉢	8号トレンチ 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にL.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	218	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	219	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に沈線で逆U字状の懸垂文を垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	220	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に沈線で逆U字状の懸垂文を垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第49R PL.27	221	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に沈線で逆U字状の懸垂文を垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	222	縄文土器 深鉢	3号住居 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内に条線を斜位に施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	223	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線と陰帯で懸垂文を垂下させ、区画内に縦位の波状条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	224	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線と陰帯で懸垂文を垂下させ、区画内に縦位の波状条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	225	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線と陰帯で懸垂文を垂下させ、区画内に縦位の波状条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	226	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に沈線と陰帯で懸垂文を垂下させ、区画内に縦位の条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	227	縄文土器 深鉢	4号トレンチ 製部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内に条線を縦位に施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	228	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内に条線を縦位に施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	229	縄文土器 深鉢	胴部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させる。	加曾利E3式
第50R PL.27	230	縄文土器 深鉢	第2面 製部片		砂粒	胴部に縦位の条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	231	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に縦位の条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	232	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に縦位の条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	233	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に縦位の条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	234	縄文土器 深鉢	第1面 製部片		砂粒	胴部に縦位の条線を施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	235	縄文土器 深鉢	3号トレンチ 製部～底部		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	236	縄文土器 深鉢	第1面 底部1/2		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、L.Rの縄文を縦位に施し、さらに沈線で蛇行懸垂文を垂下させる。	加曾利E3式
第50R PL.27	237	縄文土器 深鉢	第1面 底部片		砂粒	胴部に沈線で懸垂文を直線的に垂下させ、R.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
第50R PL.27	238	縄文土器 深鉢	第1面 底部1/3		砂粒	胴部に縦位の条線を施す。	加曾利E3式

種 別 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第50図 PL.27	239	縄文土器 鉢	4号トレンチ 製片部				砂粒	頸部が屈曲して括れ、口縁部は外反する無文。頸部下の胴上半が膨らみ、隆帯で溝きき等の文様を横位に展開する。内口縁の可能性あり。	加曾利E3式
第51図 PL.28	240	割片石器 石鏃	遺構外 完形	長 1.1 幅 1.1	厚 0.3 重 0.2		チャート	完成状態。小形割片を周辺加工して作出されたもの。深く基部を挟り込む。	凹基無芽鏃
第51図 PL.28	241	割片石器 石鏃	遺構外 完形	長 2.7 幅 1.7	厚 0.5 重 1.5		チャート	完成状態。全面を押圧割鏃が覆う。「返し」部を浅く挟り出している。	凹基無芽鏃
第51図 PL.28	242	割片石器 石鏃	遺構外 完形	長 2.6 幅 1.6	厚 0.4 重 0.9		黒曜石	完成状態。押圧割鏃によるものであるが、内側縁の加工は粗く、再加工されている可能性がある。左辺部「返し」部の変形も、これに伴う可能性が高い。	凹基無芽鏃
第51図 PL.28	243	割片石器 石鏃	遺構外 先端部欠損	長 (2.3) 幅 1.7	厚 0.5 重 1.5		黒色安山岩	完成状態？先端部裏面から強い力が働いた結果、破損したものか。割鏃面は風化が著しく新鮮で、製作時に破損した可能性も否定できない。	凹基無芽鏃
第51図 PL.28	244	割片石器 石鏃	遺構外 完形	長 2.9 幅 2.3	厚 0.8 重 4.2		チャート	未製品。幅広割片を周辺加工して、楔形を作出する。基部側が厚すぎ、石鏃の製作を放棄したものか。	不明
第51図 PL.28	245	割片石器 石鏃	遺構外 完形	長 13.5 幅 4.4	厚 1.8 重 74.2		黒色頁岩	大形の幅広割片を横位に用い、背面側を厚く、裏面側を薄く割鏃して形状を整える。背面側内端の割鏃は細かく繊細だが、内側縁の加工は粗く対照的である。	木葉形
第51図 PL.28	246	割片石器 石鏃	遺構外 完形	長 4.6 幅 5.8	厚 0.8 重 16.3		黒色頁岩	分割面を取り込んだ幅広割片を横位に用いる。割片端部を浅く打ち欠き、弧状に刃部を整える。	斜め
第51図 PL.28	247	割片石器 削器	遺構外 完形	長 7.2 幅 4.2	厚 1.6 重 43.3		黒色頁岩	裏面側の割鏃が先行、裏面側から背面側を加工する。左辺側の加工は遅だが、右側縁・下端側の加工は丁寧で、典型的な削器縁の刃部が形成されている。	幅広割片
第51図 PL.28	248	割片石器 打製石斧	遺構外 完形	長 8.4 幅 5.0	厚 1.6 重 68.4		黒色頁岩	完成状態。裏面側に礫面を大きく残す幅広割片を周辺加工して器体を作出する。刃部角は厚く、刃部左辺側に部分的に摩耗が残る。	楕円形？
第51図 PL.28	249	割片石器 打製石斧	遺構外 完形	長 (8.3) 幅 5.2	厚 1.4 重 77.4		黒色頁岩	完成状態。裏面側に礫面を大きく残す幅広割片を加工して器体を作出する。下端側刃部より右側縁の加工が丁寧で、様式的である。上端側は製作時に破損したものであるが、これを機に様式的に転用されたのかも知れない。	楕円形？
第51図 PL.28	250	割片石器 打製石斧	遺構外 完形	長 10.1 幅 5.3	厚 2.9 重 140.0		黒色頁岩	未製品？刃部は略四角で、裏面側礫面から片側割鏃する。刃部は濡れた状態にあり、刃部としては機能していない。内側縁は粗く鋸歯状に加工する。原石を大削して得た大型割片を用いる。	楕円形？
第51図 PL.28	251	割片石器打 製石斧	遺構外 1/2	長 8.2 幅 6.4	厚 3.0 重 168.0		黒色頁岩	未製品？裏面側に礫面を大きく残す幅広割片を加工して器体を作出する。片打様の石斧で、器体方向に大削しから刃部を作出している。	楕円形？
第51図 PL.28	252	割片石器 削器	遺構外 完形	長 7.0 幅 5.0	厚 2.1 重 79.4		黒色頁岩	表面側とも周辺加工を粗く施す。スクレイパーエッジは右側下端部にある。刃部角は厚く、様式的である。	幅広割片
第51図 PL.28	253	割片石器 削器	遺構外 完形	長 8.6 幅 5.3	厚 1.5 重 95.4		黒色頁岩	裏面側に礫面を大きく残し、裏面側から周辺加工して器体を作出する。加工状態は楕円状を呈する打製石斧248と変わらないが、やや幅広で、ここでは削器として扱った。	幅広割片
第51図 PL.28	254	割片石器 打製石斧	遺構外 完形？	長 9.1 幅 4.7	厚 1.9 重 85.1		黒色頁岩	未製品？幅広割片の打面側に刃部を作出する。刃部に細く微細形態からみて打製石斧を志向したものだろうが、先端が尖り気味であることから、大きく変形していることは確実である。割鏃面・側縁のエッジが新鮮であり、未製品と扱った。	楕円形？
第51図 PL.28	255	割片石器 打製石斧	遺構外 完形	長 11.7 幅 4.0	厚 1.6 重 84.9		細粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗が著しい。側縁は直線的で、やや鋭く気味である。	短楕形
第51図 PL.28	256	割片石器 打製石斧	遺構外 完形	長 11.3 幅 5.0	厚 1.6 重 96.3		黒色頁岩	完成状態。側縁は左辺側が直線的だが、右側縁は鋭く外反気味である。刃部摩耗が著しい。刃部再生は明確で、右辺無裏面の割鏃面は比較的新鮮である。	短楕形
第51図 PL.28	257	割片石器 打製石斧	遺構外 完形	長 12.2 幅 4.7	厚 1.7 重 93.3		黒色頁岩	完成状態。表面側とも刃部摩耗が著しい。右辺側刃部から右側縁にかけて再加工され、その痕跡が裏面側に残る。	短楕形
第51図 PL.28	258	割片石器 打製石斧	遺構外 頭部欠損	長 10.3 幅 5.1	厚 1.6 重 78.0		黒色頁岩	完成状態。側縁は直線的で、やや鋭く気味。刃部摩耗は明確だが、接合部は不明瞭。石斧頭部を欠く。	短楕形
第51図 PL.28	259	割片石器 打製石斧	遺構外 1/2	長 (7.8) 幅 4.8	厚 3.0 重 111.3		砂質頁岩	未製品。厚い幅広割片を横位に用い、周辺加工して器体を作出する。やや厚手の石斧で、着柄を意識して側縁を強く絞り込んでいる。着柄部より下を欠損する。	短楕形
第51図 PL.28	260	割片石器 打製石斧	遺構外 完形	長 12.6 幅 7.0	厚 2.7 重 199.5		黒色頁岩	完成状態。刃部再生されているが、刃部摩耗が部分的に残されている。	分銅形
第52図 PL.28	261	割片石器 磨製石斧	遺構外 1/2	長 (9.0) 幅 5.4	厚 2.4 重 167.0		黒色頁岩	完成状態。上端部付近を割鏃したのち、研磨して器体を整形する。側縁は「楔切り」線だが、破損部付近の形状からみて柱状礫を用いたもので、やや幅広である。器体下半を欠損する。	扁平柱状礫？
第52図 PL.28	262	礫石器 磨製石斧	遺構外 完形	長 8.4 幅 3.0	厚 1.4 重 54.9		黒色頁岩	未製品？扁平な板状礫を用い、下縁側を薄く割鏃したのち研磨、上端側の表面側を粗く加工する。背面側刃部は完成状態にあるものの、裏面側は未加工で礫核部が残る。	礫石斧
第52図 PL.28	263	割片石器 磨製石斧	遺構外 完形	長 5.9 幅 2.7	厚 1.4 重 3.8		変玄武岩	右辺側に敲打面、裏面側上半部に割鏃面を残す等、全面を研磨する。側縁は背面側に若干欠く。	定角式？
第52図 PL.28	264	割片石器 磨製石斧	遺構外 下半部欠損	長 (9.7) 幅 (5.1)	厚 (2.4) 重 152.8		変玄武岩	表面側とも丁寧研磨されているが、先端部に敲打痕が残る。体部中央付近で破損。刃部側を大きく欠く。	乳棒状
第52図 PL.28	265	割片石器 三角錐形 石器	遺構外 完形	長 11.7 幅 7.7	厚 5.6 重 645.3		黒色頁岩	裏面側に礫面、背面側に分割面を配し、内側縁を加工して器体を作出する。機能部は底面部にあり、裏面側から割鏃して作出。部分的に敲打・摩耗痕が残されている。	大形柱状礫

第3章 検出された遺構と遺物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第538 PL.28	266	割片石器 三角錐形 石器	遺構外 頭部破片	長 幅	(7.5) 4.3	厚 重	4.4 174.3	黒色頁岩	断面三角形状を呈し、各辺から対向するよう割離を施し、器体を整形する。原石を分別して得た平坦面を裏面側に用いる。頭部先端に稜面が残る。	
第538 PL.28	267	礫石器 凹石	遺構外 凹石	長 幅	11.5 6.5	厚 重	3.6 362.6	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗、集合打痕があるほか、小口部両端に敲打痕が残る。背面下部に被熱割離痕がある。	扁平楕円礫
第538 PL.28	268	礫石器 凹石	遺構外 凹石	長 幅	10.1 5.9	厚 重	3.8 529.5	粗粒輝石安山岩	表裏面とも密く摩耗、礫中央に敲打痕があるほか、下端部小口部に敲打痕がある。	扁平円礫
第538 PL.28	269	礫石器 凹石	遺構外 完形	長 幅	10.7 8.0	厚 重	5.1 577.9	粗粒輝石安山岩	背面側に漏斗状の凹部1、表裏面とも中央付近に敲打痕がある。両側縁は火バネしているが、敲打痕が残る。	扁平楕円礫
第538 PL.28	270	礫石器 磨石	遺構外 完形	長 幅	12.0 5.9	厚 重	5.7 549.4	粗粒輝石安山岩	背面側中央が摩耗して、稜が形成されている。断面三角形状を呈する礫を用いる。殺擦石。	楕円礫
第538 PL.28	271	礫石器 磨石	遺構外 1/2	長 幅	(7.9) (5.1)	厚 重	6.0 60.5	粗粒輝石安山岩	背面側中央が摩耗して、稜が形成されている。断面三角形状を呈する礫を用いる。殺擦石。中央付近で破損する。	
第538 PL.29	272	礫石器 磨石	遺構外 完形	長 幅	9.5 9.1	厚 重	6.3 771.8	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、側縁に打痕がある。	楕円礫
第538 PL.29	273	礫石器 磨石	遺構外 完形	長 幅	12.9 8.9	厚 重	4.3 762.4	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、側縁に敲打痕がある。	扁平楕円礫
第538 PL.29	274	礫石器 磨石	遺構外 完形	長 幅	7.8 6.2	厚 重	5.3 359.6	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、上端部小口部・右辺側側縁が敲打されている。	楕円礫
第538 PL.29	275	礫石器 磨石	遺構外 完形	長 幅	7.8 6.5	厚 重	4.1 297.9	粗粒輝石安山岩	表裏面とも密く摩耗する。小口部に敲打痕が残る。裏面側が被熱して燻ける。	楕円扁平礫
第538 PL.29	276	礫石器 敲石	遺構外 完形	長 幅	20.8 6.2	厚 重	4.8 501.1	粗粒輝石安山岩	背面側下端・右側縁・小口部に集中的な敲打痕がある。器体の中央付近で破損する。	棒状礫
第538 PL.29	277	礫石器 敲石	遺構外 完形	長 幅	15.0 6.5	厚 重	5.3 804.4	石英閃緑岩	小口部両端に著しい敲打痕がある。	棒状礫
第538 PL.29	278	礫石器 敲石	遺構外 完形	長 幅	7.2 3.0	厚 重	1.6 50.8	凝灰質砂岩	小口部に近い両側縁に敲打痕がある。礫形態・サイズとも石製研磨具としての属性を有しているが、石材が粗く研磨痕については不明。	小形扁平礫
第538 PL.29	279	礫石器 敲石	遺構外 完形	長 幅	13.0 3.4	厚 重	3.6 242.0	変質安山岩	上端部小口部に近い右辺側エッジに敲打痕がある。	柱状礫
第538 PL.29	280	礫石器 敲石	遺構外 完形	長 幅	14.3 5.1	厚 重	4.2 466.3	粗粒輝石安山岩	背面側中央よりやや上端部・小口部両端に敲打痕があるほか、上端部小口部付近に摩耗痕がある。被熱して部分的に燻ける。	棒状礫
第538 PL.29	281	礫石器 敲石	遺構外 完形	長 幅	7.9 5.8	厚 重	3.7 258.0	粗粒輝石安山岩	小口部・側縁に敲打痕がある。	扁平楕円礫
第538 PL.29	282	礫石器 凹石	遺構外 完形	長 幅	12.6 7.8	厚 重	5.2 636.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗、中央付近に敲打痕がある。このほか小口部・側縁に敲打痕が残る。	楕円礫
第538 PL.29	283	礫石器 敲石	遺構外 完形	長 幅	9.0 7.6	厚 重	4.0 404.3	粗粒輝石安山岩	小口部両端・側縁に敲打痕がある。裏面側は燻ける。	楕円扁平礫
第538 PL.29	284	礫石器 多孔石	遺構外 完形	長 幅	17.0 17.0	厚 重	12.2 3557.1	粗粒輝石安山岩	背面側の礫核部に漏斗状の孔2を、裏面側の平坦部に漏斗状の孔多数を穿つ。	楕円礫
第538 PL.29	285	割片石器 (旧石器) 加工痕ある 割片	遺構外 完形	長 幅	3.3 (7.1)	厚 重	2.0 33.3	黒色頁岩	弧状に彫らむ割片端部にさじばれ状の小割離痕がある。割片は上面の割離面打面(非調整)より割離されている。	
第538 PL.29	286	割片石器 (旧石器) 加工痕ある 割片	遺構外 完形	長 幅	2.4 3.7	厚 重	0.8 7.9	黒色頁岩	横位折断した小形細凸割片を用い、背面側左端と裏面側端部を粗く加工したもので、加工意図については不明。	
第538 PL.29	287	石製品 球状耳飾り	遺構外 完形	長 幅	2.1 2.0	厚 重	1.7 10.1	滑石	径9mmの孔を両側穿孔スリット入れたもので、腹形は略柱状を呈する。肉厚とされるものの中でも厚すぎ、1球状耳飾りとしては質質である。	

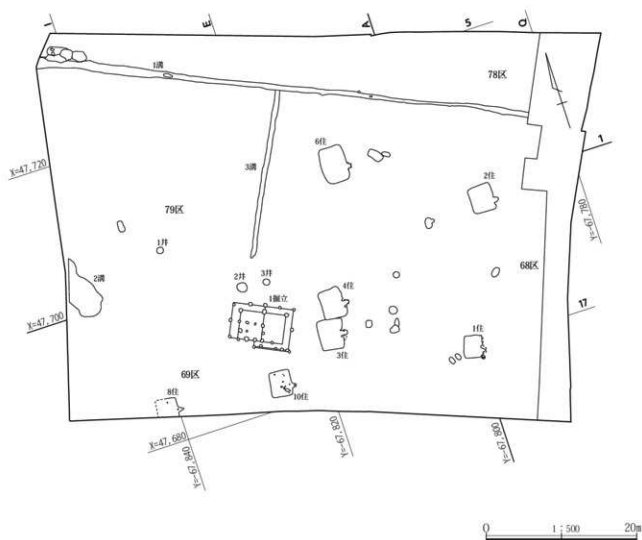
第3節 平安時代以降の遺構と遺物

(1)概要

本調査で検出された平安時代以降の遺構は、基本土層V層上位を確認面とした縄文時代の第1面調査と同時に調査を行った。遺構の種類には、平安時代の竪穴住居をはじめ、中世以降の掘立柱建物や井戸、溝、さらには土坑やピット等があり、第54図に示したように調査区全体に広がっている。傾向とすれば、平安時代の竪穴住居は台地の中央付近に点在し、中世以降の掘立柱建物や井戸は台地の西斜面側に寄った位置にある。

本遺跡の西に隣接する上細井嶺山遺跡では、平安時代の9世紀中頃から10世紀前半期の竪穴住居が24棟検出され、山王・柴遺跡群では同時期の集落が検出されている。

一方、本遺跡の東側となる観音川を挟んだ新田上遺跡では、平安時代の9世紀から10世紀にかけての竪穴住居が31棟検出され、王久保遺跡から上町・時沢西組屋谷戸遺跡および天王・東組屋谷戸遺跡においては8世紀から10世紀にかけての大規模な集落が検出されている。



第54図 平安時代以降遺構配置図

(2) 竪穴住居

9世紀後半に位置づけられる、平安時代の竪穴住居を7棟検出した。竪穴住居は台地の中央付近に点在し、重複するのは2棟のみである。椀形鍛冶滓を出土した竪穴住居もあるが、鍛冶遺構を伴う遺構ではなかった。

以下、各遺構ごとに記載する(表31 住居一覧を参照)。

1号住居 (第55図、表19、PL.10)

調査時は、S1-1(1号住居)として調査した。

位置: 調査区の南東側に位置し、本住居の北北東側16mに2号住居、西北西側16mに3号住居がある。

グリッド: 68区T16・17、69区A16・17

重複: 住居の南東隅を12号土坑と僅かに重複するが、その新旧は不明。

形状: 南北方向に長い長方形を呈するが、カマドのある南東隅は丸みをもつ。

規模: 長辺3.05m 短辺2.6m 壁高16cm

長軸方向: N-16°-E **床面積:** 6.13㎡

埋没土: 暗灰色で、As-C・Hr-FAまじり火山灰土を主とし、径5～10mm大の黄灰色火山灰土ブロックを混在する。

床面・壁: 床面はカマド前から住居中央にかけて凹凸をもち、平坦とは言えない。壁は全体に傾斜をもって立ち上がり、特に東壁では緩く立ち上がる。

カマド: 東壁の中央南寄りに位置し(方位N-95°-E)、壁の外側に突出する。規模は全長0.78m、幅(0.9)mを測る。燃焼部は壁外にあり、火床は床面とほぼ同じ高さにある。

その他: 掘り方調査で、当初の掘り方時には、住居の東壁全体が10～15cmほど東に寄った位置にあることが確認された。カマドも同様に、一回り大きくなる。また、カマド前から住居中央にかけて、凹凸のある深さ15～25cm前後の不定型な土坑状の掘り方をもつ。掘り方の埋土は、暗灰～暗黄灰色砂質火山灰土で、径5～10mmの暗灰色土ブロックを含む。

遺物: 出土した遺物は少なく、そのほとんどが住居の埋土中からである。須恵器の杯・椀を各1点、土師器の小型の甕2点を図示(第55図、表19)した。全て埋土中からの出土。掲載した以外に、須恵器13片、土師器56片が出土している。

時期: 出土した杯・椀・甕類から、9世紀後半の住居と考えられる。

2号住居 (第56～58図、表20、PL.10・29・30)

調査時は、S1-2(2号住居)として調査した。

位置: 調査区の東側に位置し、本住居の南南西側16mに1号住居がある。

グリッド: 68区S20

形状: 南北方向にやや長い長方形を呈し、隅がやや丸みをもつ。

規模: 長辺3.7m 短辺3.18m 壁高37cm

長軸方向: N-0°-E **床面積:** 9.47㎡

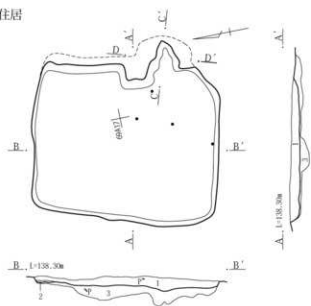
埋没土: 1～5層が埋没土で、床面を覆うのは5層の暗黄灰色As-Cまじり火山灰土を主に、2層の暗灰色細粒火山灰土である。

床面・壁: 床面は僅かに凹凸をもつが概ね平坦で、壁は南辺で僅かに緩く、他は垂直に近く立ち上がる。

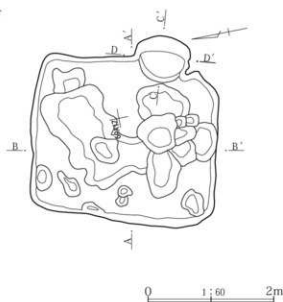
表19 1号住居出土遺物観察表

図 Pl.No.	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第55図	1	須恵器 杯か	埋土 口縁部～体部 下位片	□ 11.6	細砂粒・白色・黒色 鉱物粒/還元層/灰	ロクロ整形(右回転)。	
第55図	2	須恵器 椀	埋土 口縁部～体部 上位片	□ 14.8	細砂粒・白色鉱物 粒/還元層・軟質/ 灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。	
第55図	3	土師器 甕	埋土 口縁部～頸部片	□ 10.8	細砂粒・雲母/良好/ 層	口縁部は横撫で。	器面炭素吸着。
第55図	4	土師器 甕	埋土 口縁部～胴部 上位片	□ 10.8	細砂粒/良好/層	口縁部は横撫で。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は撫で。	

1号住居

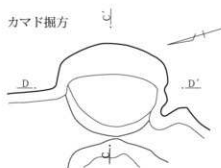
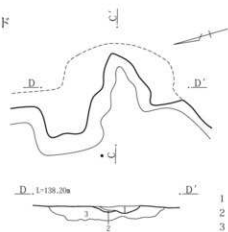


掘方

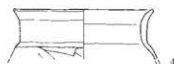
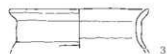
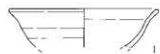


- 1 暗灰色As-C、Hr-FAまじり火山灰土。径5～10mmの黄灰色火山灰土ブロックまじり。
- 2 黄灰色軟質火山灰土。
- 3 暗灰～暗黄灰色砂質火山灰土。径5～10mmの暗灰色土ブロックを含む。径2mmの白色軽石(As-C)を含む。

カマド



- 1 灰褐色As-Cまじり火山灰土。
- 2 暗灰色焼土まじり火山灰土。径2～5mmの焼土ブロックや径1mmの白色軽石(As-C)を含む。
- 3 暗灰色火山灰土。径2mmの軽石(As-C)を含む。



0 1:3 10cm

第55図 1号住居平面図、カマド平面図、出土遺物

カマド：東壁の中央南寄りに位置し(方位N-93°-E)、壁の外側に大きく突出する。規模は全長1.2m、幅1.35mを測る。燃焼部は壁外側が主体となり、火床は住居床面より僅かに低くなる。焚口の両脇には、僅かに袖部が残存する。

貯蔵穴：南東隅に位置し、東西方向に長い楕円形で、長軸53cm、短軸43cm、深さ48cmを測る。底面は平坦。

その他：深さ10cm前後の掘り方をもち、底面はやや凹凸。埋土は、床面を構成する6層が黒色火山灰土で、下位層の7層が黄灰褐色火山灰土ブロックまじり火山灰土である。

遺物：出土した遺物は少なく、カマド内の底面付近および貯蔵穴付近に散在する。須恵器の椀2点、土師器の甕8点、石製品1点、鉄製品2点、椀形鍛冶滓1点を図示(第57・58図、表20)した。2の須恵器椀および3・10の土師器甕は、カマド内の底面付近から出土している。3・4は小型の甕である。11は粗粒輝石安山岩の棒状礫を素材とした敲打器で、南壁西寄りの壁際の埋土中から出土し、小口両端に敲打痕、右側縁の礫縁部に敲打・摩耗痕、縦位の刃ならし傷があることから鍛冶関連遺物の可能性がある。12は鉄製の紡錘車で、北壁中央東寄りの壁際の埋土中から出土し、長さ(3.8)cm、軸部は径0.4cm、紡輪は径5.4cm、厚さ0.2cmを測る。13は鉄鎌の基部で、北壁中央の壁際の埋土中から出土し、木質を残す。14は中型の椀形鍛冶滓で、南壁西寄りの壁際付近の埋土中から出土し、長軸8.5cm、短軸7.1cm、厚さ3.7cm、重さ298.4gを測り、上面は木炭痕が付着して凹凸を持ち、上面中央部は磁着が強く、下面は椀形に大きく突出する。鍛冶関連の滓は、この1点の出土のみである。他は埋土中からの出土。掲載した以外に、須恵器39片、土師器75片が出土している。

時期：出土した杯・椀・甕類から、9世紀後半の住居と考えられる。

3号住居 (第59～61図、表21、PL.10・11・30)

調査時は、S1-3(3号住居)およびS1-5(5号住居)として、重複を想定して調査を行った。結果としては、S1-5はS1-3に伴う古いカマドであったため、S1-5は欠番とした。

位置：調査区の中央やや南寄りに位置し、本住居の北

側に4号住居が重複し、西南西側6mに10号住居がある。

グリッド：69区D18

重複：本住居の北壁の一部に、4号住居が重複する。土層断面の観察から、本住居の方が古い。

形状：南北方向に長い長方形で、南壁よりも北壁が長い台形状を呈する。

規模：長辺4.13m 短辺(南壁)2.75m、(北壁)3.35m 壁高20cm

長軸方向：北辺方位N-10°-E **床面積**：11.39㎡

埋没土：1～4層が埋没土で、床面を覆うのは3層の暗灰色As-Cまじり火山灰土を主に、2層の暗灰色火山灰土、4号住居埋没土2層と重複状態にある4層は黄灰色As-Cまじり火山灰土である。

床面・壁：床面は僅かに凹凸をもつが概ね平坦で、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

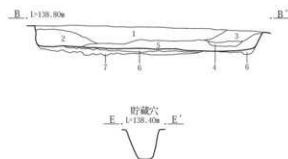
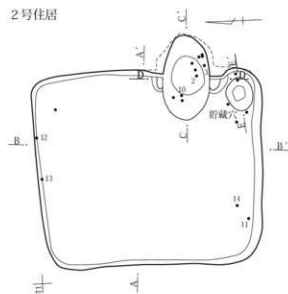
カマド：東壁に新旧2基のカマドを検出した。住居の廃絶時に伴う新しいカマド(カマド1)は、東壁中央に位置し(方位N-98°-E)、壁の外側に大きく突出する。規模は全長1.25m、幅1.15mを測る。燃焼部は壁外側が主体となり、火床は住居床面より僅かに低くなる。焚口の両脇には、僅かに袖部が残存する。なお、焚き口部の底面および床面に、薄く灰を確認した。カマド1より古いカマド(カマド2)は、東壁の中央やや南寄りでカマド1の直ぐ南脇に位置する(方位N-98°-E)。残存するのは、壁外側に突出した燃焼部の一部で、全長(0.4)m、幅(0.6)mを測る。

貯蔵穴：南東隅に位置し、東西方向にやや長い楕円形を呈し、長軸48cm、短軸41cm、深さ10cmを測る。底面は平坦であるが、東側が高い。

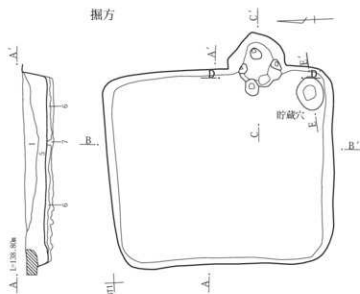
その他：深さ10cm前後の掘り方をもち、底面は全体に凹凸。住居中央に径0.95m、深さ12cmを測る円形の床下土坑、貯蔵穴付近に長軸1.2m、短軸0.7m、深さ16cmを測る不整楕円形を呈する床下土坑を確認した。また、住居中央の床下土坑脇や壁際に、径37cm、深さ30cm前後の円形ピットを数ヶ所確認したが、支柱穴とは異なる。掘り方の埋土は、カマド前付近の床面を構成する5層が暗灰色のAs-Cと焼土粒をまじる火山灰土で、6・7層が暗灰色のAs-Cをまじる火山灰土で埋土の主体をなす。

遺物：出土した遺物は多く、カマド内の底面付近およ

2号住居



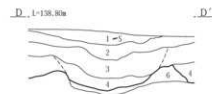
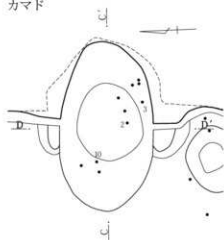
掘方



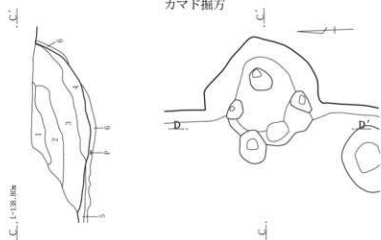
- 1 黒色As-Cまじり火山灰土。径0.5～2mmの白色軽石(As-C)や径1mmの軽石(Hr-FA)、径5～10mmの黄灰色火山灰土ブロックを含む。
- 2 暗灰色細粒火山灰土。As-Cの軽石は少ない。
- 3 暗黄灰色As-Cまじり火山灰土。
- 4 黒色As-Cまじり火山灰土。径2mmの白色軽石(As-C)を含む。
- 5 暗黄灰色As-Cまじり火山灰土。As-Cの軽石は少ない。
- 6 黒色火山灰土。径3mmの白色軽石(As-C, Hr-FA)がまじる。
- 7 黄灰褐色火山灰土ブロックまじり火山灰土。火山灰土ブロックは径5～10mm。カマド付近には、層厚2mmの黒色土の薄層が挟在する。

0 1:60 2m

カマド



カマド掘方

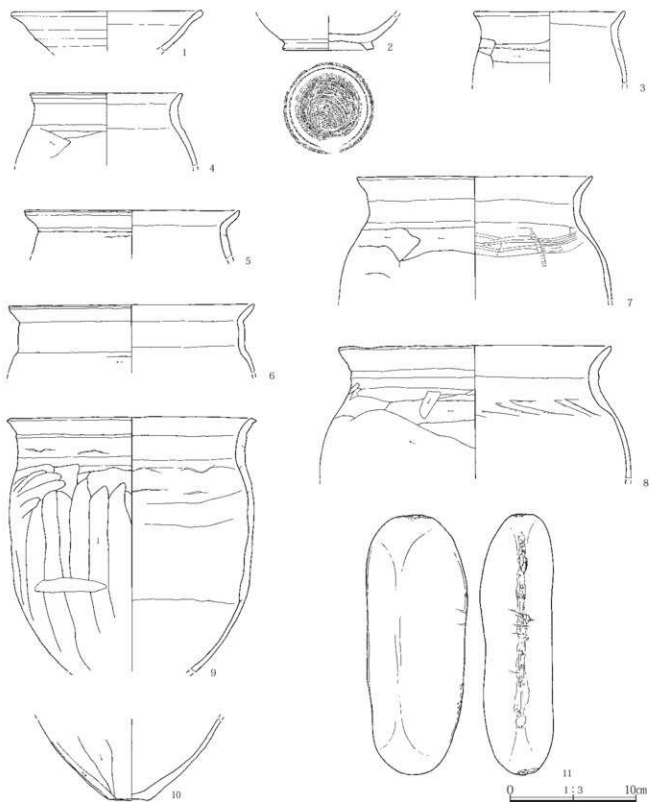


- 1 黒色火山灰土。径2～5mmの軽石(As-C)を多く含む。径0.5～2mmの軽石(Hr-FA)を含む。
- 2 暗灰色火山灰土。径2～3mmの軽石(As-C)を含む。
- 3 黒～暗灰色As-Cまじり火山灰土。径10mm大の火山灰土ブロックを含む。
- 4 灰褐色焼土ブロックまじり火山灰土。径30mmの火山灰質シルトブロックを含む。
- 5 暗灰色As-Cまじり火山灰土。
- 6 黒色軽石まじり火山灰土。径2～5mmの白色軽石を含む。

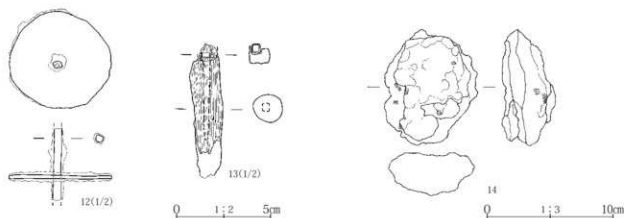
0 1:30 1m

第56図 2号住居平面図、カマド平面図

第3章 検出された遺構と遺物



第57図 2号住居出土遺物(1)

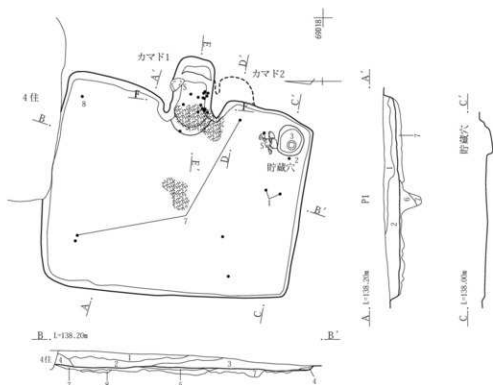


第58図 2号住居出土遺物(2)

表20 2号住居出土遺物観察表

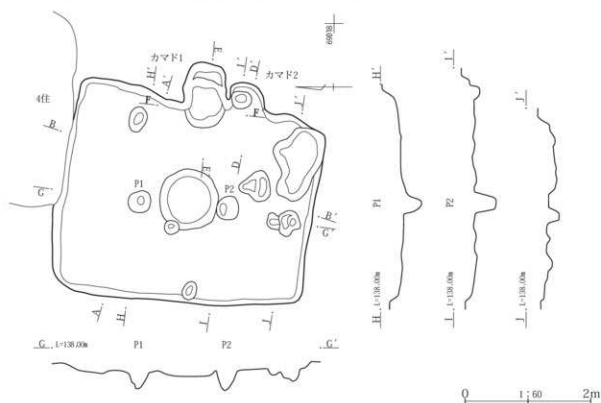
種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第57図	1	須臾器 鉢	埋土 口縁部～体部 中位片	口 14.8	細砂粒・還元焰・軟質/浅黄	ロクロ整形(右回転)。		
第57図	2	須臾器 鉢	カマド内 体部下位～底部	底 6.9 台 6.4	粗砂粒・赤黒色粘土粒・還元焰・軟質/浅黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	内外面炭素吸着・黒色味。	
第57図	3	土師器 甕	カマド内 口縁部～胴部 上位1/4	口 11.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で、輪積み痕を残す。胴部外面は横位のへら削り。	外面に保付着・内外面とも磨滅。	
第57図	4	土師器 甕	埋土 口縁部～胴部 上位片	口 11.8	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜横位のへら削り。内面はへら撫で。	外面に保付着。	
第57図	5	土師器 甕	埋土 口縁部1/4	口 16.8	細砂粒・黒色鉱物粒/良好/橙	口縁部は横撫で、輪積み痕を残す。口唇部外面に沈殿状の凹み。	内外面に保付着。	
第57図	6	土師器 甕	埋土 口縁部～頸部片	口 19.2	細砂粒・黒色鉱物粒・雲母/良好/橙	口縁部は横撫で、口唇部外面に沈殿状の凹み。胴部外面は横位のへら削り。内面は撫で。		
第57図 PL.29	7	土師器 甕	埋土 口縁部～胴部 上位1/2	口 18.4	精選・細砂粒少量/良好/橙	口縁部は横撫で、下半部には成形時の指頭圧痕を残す。胴部外面は横位のへら削り。内面は刷毛状工具による撫で。刷毛目(3、4本/1cm)	内外面とも磨滅。	
第57図 PL.29	8	土師器 甕	埋土 口縁部～胴部 上位1/3	口 21.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は2回以上に分けて横撫で。胴部外面は斜横位のへら削り。内面はへら撫で。	胴部外面に保付着・内面にも黒色の付着物。	
第57図 PL.30	9	土師器 甕	埋土 口縁部～胴部 下位1/3	口 19.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は2回に分けて横撫で。胴部外面は横位のへら削り。一部は撫で状を呈する。内面は横位のへら撫で。上半部の工具は刷毛状を呈する。整形の下に輪積み痕・接合痕を残す。	外面の広範囲に炭素吸着。	
第57図	10	土師器 甕	カマド内 胴部下位～底部 2/3	底 3.2	細砂粒/良好/にぶい橙	胴部外面は横位のへら削り。内面はへら撫で。底部外面はへら削り。	外面炭素吸着・一部に保付着。	
第57図 PL.30	11	礫石 磨石	埋土 完形	長 20.3 幅 8.0	厚 5.9 重 136.0	粗粒輝石安山岩	小口部内端に鋭打痕があるほか、右側縁の側縁部に鋭打・摩耗痕、縦位の刃ならし面がある。	棒状磨
第58図 PL.30	12	鉄製品 紡錘車	埋土 紡錘部	長 (3.8) 幅 5.4	重 (18.4)		紡錘車の紡錘部で、円形の紡錘に直交して軸が貫通する。軸の両端は破損している。紡錘：径5.4cm 厚さ0.2cm 軸：径0.4cm	
第58図 PL.30	13	鉄製品 鉄鏝	埋土 基部	長 (7.1) 幅 1.6	重 (12.0)		鉄鏝の基部で、錆化した広葉樹材の柄の内部に基部が残る。基部の断面は、正方形。	
第58図 PL.30	14	鍛冶関連 槌形鍛冶滓	埋土 完形	長 8.5 短 7.1	厚 3.7 重 298.4		上面形は楕円形を呈し、上面は木炭痕が付着して凹凸をもつ。上面中央部は磁着が強い。下面は槌形に大きく突出する。	

3号住居

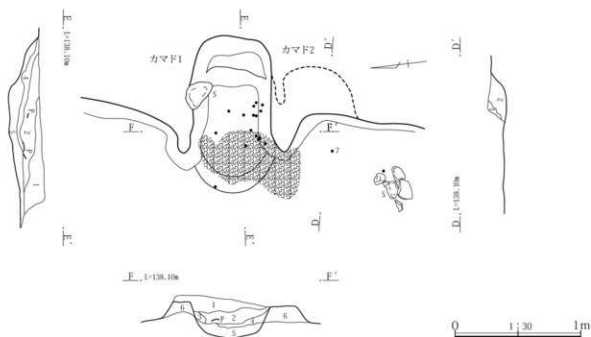


- 1 暗灰色火山灰土。径1～2mmの白色軽石(As-C)を多く含む。土上には軽石(Hr-FA)が点在する。
- 2 暗灰色火山灰土。径1～2mmの白色軽石(As-C)を多く含む。径10mmの黄灰色火山灰土ブロックが点在。
- 3 暗黄灰色As-Cまじり火山灰土。径20mmの黄灰色火山灰土ブロックを含む。
- 4 黄灰色As-Cまじり火山灰土。径1～2mmの軽石を含む。
- 5 暗灰色As-C、焼土粒まじり火山灰土。
- 6 暗灰色As-Cまじり火山灰土。径0.5mmの軽石粒(As-C)が多い。径5～20mmの黄灰色火山灰土ブロックを含む。
- 7 暗灰色As-Cまじり火山灰土。径5～10mmの白色軽石(As-C)を含む。
- 8 黄灰～暗灰色火山灰土のブロック上。径5～30mm大のブロックからなる。

掘方



第59図 3号住居平面図

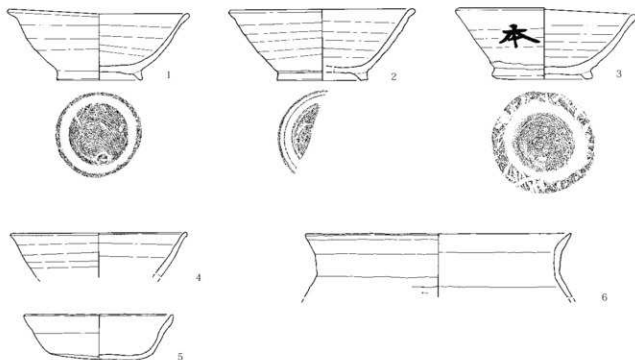


カマド1 (E-E'・F-F')

- 1 灰褐色A-C、焼土まじり火山灰土。径3mmの焼土粒を含む。
- 2 赤褐色焼土ブロックを多く含む火山灰土。
- 3 暗灰～黒色火山灰土。炭化物を含み、径5mmの橙色岩片や焼土を含む。
- 4 褐色焼土ブロックまじり火山灰土。径5～15mmの焼土ブロックを含む。
- 5 暗灰～黒色焼土ブロックまじり火山灰土。径5～7mmの焼土ブロックが少し含まれる。
- 6 灰色焼土ブロックを含む火山灰土。

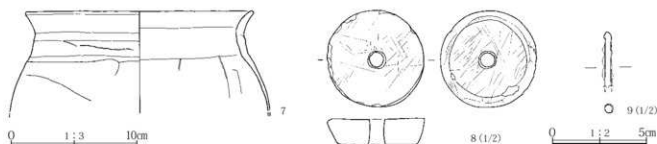
カマド2 (D-D')

- 1 黒色細粒火山灰土。
- 2 灰褐色焼土ブロックまじり火山灰土。径1mm大の炭化物や径2～5mmの橙色焼土を含む。



第60図 3号住居カマド平面図、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



第61図 3号住居出土遺物

表21 3号住居出土遺物観察表

採掘 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第60回 PL.30	1	須恵器 椀	床直 3/4	口 底	14.0 6.6	高 台	5.6 6.5	粗砂粒・細砂粒・雲 母/還元焼・軟質/ 灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。 内外面炭素吸着。
第60回 PL.30	2	須恵器 椀	床直 1/3	口 底	14.2 7.0	高 台	5.6 7.0	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/還元焼・軟質/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。高台端部は凹面状。 内外面磨減。
第60回 PL.30	3	須恵器 椀	貯蔵穴底面 口縁部一部欠	口 底	13.9 7.6	高 台	5.6 7.2	細砂粒/白色鉱物 粒/還元焼/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。高台の貼付は粗雑。高台端部に木本料植物の茎状の圧痕が残る。口縁部外面に墨書「本」。
第60回 PL.30	4	須恵器 椀か	カマド2内 口縁部～体部 中位片	口	13.8			粗砂粒・細砂粒/還 元焼・軟質/オリーブ 黒	ロクロ整形(右回転)。 内外面炭素吸着・黒色。
第60回 PL.30	5	土師器 杯	埋土 3/4	口	11.6	高	3.6	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。底部は手持ちへう削り。内面は撫で。
第60回	6	土師器 甕	埋土 口縁部～胴部 上位	口	21.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横位のへう削り。
第61回 PL.30	7	土師器 甕	カマド内 口縁部～胴部 上位1/2	口	17.8			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は2回以上に分けて横撫で。輪積み痕を残す。胴部外面は横・弱横位のへう削り。内面は横位のへう撫で。 口縁部外面を 中心に煤付 着。
第61回 PL.30	8	石製品 紡錘車	床面近く 完形	径 孔	5.0 0.9	厚 重	1.4 55.5	砥沢石	紡錘車の紡輪。上下両面とも粗い線条痕が残されているが、良く平坦に整形されている。径9mmの孔を肉側穿孔する。逆台形状。
第61回 PL.30	9	鉄製品 紡錘車	埋土 軸端部	長 径	(3.0) 0.3	重	(1.0)		紡錘車の軸端部で、錆化がすすみ、内部は空洞化する。端部は丸く、軸断面は円形。

び貯蔵穴付近に散在し、遺物の大半は埋土中からである。須恵器の椀4点、土師器の杯1点と甕2点、石製品1点、鉄製品1点を図示(第60・61図、表21)した。1は南壁付近の床面上、2は貯蔵穴脇の床面上から出土し、3は貯蔵穴の底面付近から出土し、外面に「木」の墨書をもつ。4はカマド2内からの出土である。8は砥沢石製の紡錘車の紡輪で、北東隅付近の床面近くから出土している。薄型の逆台形状を呈し、上下両面に粗い線条痕を残すが、平坦に整形されている。径5.0cm、孔径0.9cm、厚さ1.4cm、重さ55.5gを測る。9は鉄製の細い軸状を呈し、長さ(3.0)cm、径0.3cmを測り、紡錘車の軸の一部と考えられる。他は埋土中からの出土。掲載した以外に、須恵器19片、土師器140片が出土している。

時期: 出土した杯・椀・甕類から、9世紀後半の住居と考えられる。

4号住居 (第62・63図、表22、PL.11・30)

調査時は、S1-4(4号住居)として調査した。

位置: 調査区の中央やや南寄りに位置し、本住居の南側に3号住居が重複し、南西側8.5mに10号住居、北側13.5mに6号住居がある。

グリッド: 69区C・D18・19

重複: 本住居の南西隅に、3号住居の北壁の一部が重複する。土層断面の観察から、本住居の方が新しい。

形状: 南北に長い長方形を呈する。

規模: 長辺4.13m 短辺3.13m 壁高30cm

長軸方向: N-0°-E **床面積:** 10.05㎡

埋没土: 1~4層が埋没土で、床面を覆うのは4層の暗黄灰色火山灰土を主に、3層の黒色でAs-Cまじり火山灰土。3号住居埋没土4層と重複状態にある2層は、暗灰~暗灰褐色火山灰土である。

床面・壁: 床面は比較的水平で、壁はやや傾斜をもつて立ち上がる。

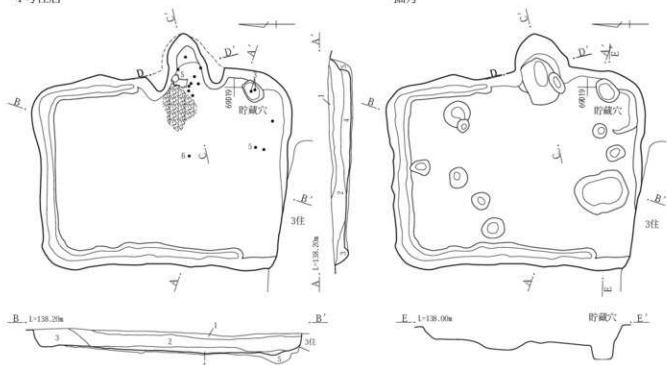
壁溝: 東壁のカマドから南壁を除いた壁際に検出した。幅15~20cm、深さ5cm前後を測る。

表22 4号住居出土遺物観察表

挿入 PL.No.	No.	種類 種別	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	底 径	高 さ			
第63図	1	須恵器 杯	埋土 口縁部~底部片	□ 12.2 6.0		高 4.4	細砂粒・赤黒色粘土粒/還元焼・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り後、無調整。	内外面ともやや磨滅。
第63図	2	須恵器 杯か	埋土 口縁部~体部 中位1/4	□ 13.0			粗砂粒・細砂粒/還元焼・軟質/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。	内外面に炭素吸着。
第63図	3	須恵器 杯	貯蔵穴内 体部中位~底部 1/2	□ 6.0			細砂粒・黒色鉱物粘・雲母/還元焼・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り後、無調整。	内面底部外面とも磨耗・底部から体部下平に炭素吸着・黒色。
第63図 PL.30	4	須恵器 椀	掘り方 1/4	□ 14.2 6.8		高台 6.4	粗砂粒・赤黒色粘土粒/還元焼・軟質/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付け高台。高台の貼付は粗雑。	内面磨耗・内外面炭素吸着。
第63図 PL.30	5	須恵器 椀	床直 1/2	□ 15.6 6.4		高台 6.2	粗砂粒・細砂粒/還元焼・軟質/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。口縁から体部外面には丁寧な横撫で。高台部は底部回転系切り後の付け高台。	内外面とも炭素吸着・黒色。
第63図	6	須恵器 杯	埋土 口縁部~体部 下位1/4	□ 14.6			粗砂粒・細砂粒/還元焼・軟質/灰才	ロクロ整形(右回転)。体部は丸みを有する。	内外面に炭素吸着・黒色。
第63図	7	土師器 甕	埋土 口縁部~頸部 1/4	□ 18.8			細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は2回以上に分けて横撫で。輪積み痕を残す。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラ撫で。	外面磨滅。
第63図	8	土師器 甕	埋土 口縁部~胴部 上位1/4	□ 18.8			細砂粒・赤色粘土粒少量/良好/明黄濁	口縁部は2回以上に分けて横撫で。胴部整形時の工具が当たった痕跡を残す。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラ撫で。	
第63図 PL.30	9	土師器 甕	埋土 口縁部~胴部 中位1/2	□ 18.8			細砂粒・赤色粘土粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。輪積み痕を残す。胴部外面は上位に横位。その後中位に縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラ撫で。	内面磨滅。

4号住居

掘方

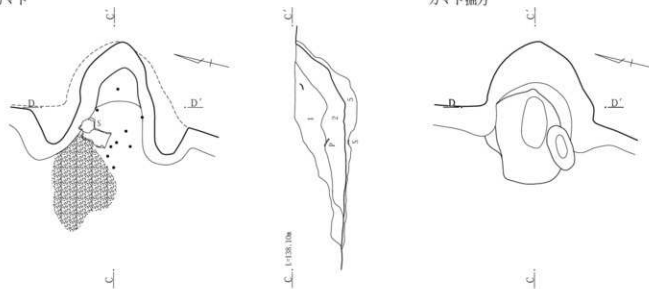


- 1 暗灰色As-Cまじり火山灰土。やや軟質である。
- 2 暗灰～暗灰褐色火山灰土。径0.5～1mmの白色軽石(As-C)や径5～20mmの黄灰色火山灰土ブロックを含む。
- 3 黒色As-Cまじり火山灰土。径1mm大の褐色岩片が点在する。
- 4 暗黄灰色火山灰土。軽石(As-C)を少量含む。
- 5 暗灰色As-Cまじり火山灰土。径0.5mm大の軽石を多く含む。径5～20mm大の黄灰色ブロックを含む。

0 1; 60 2m

カマド

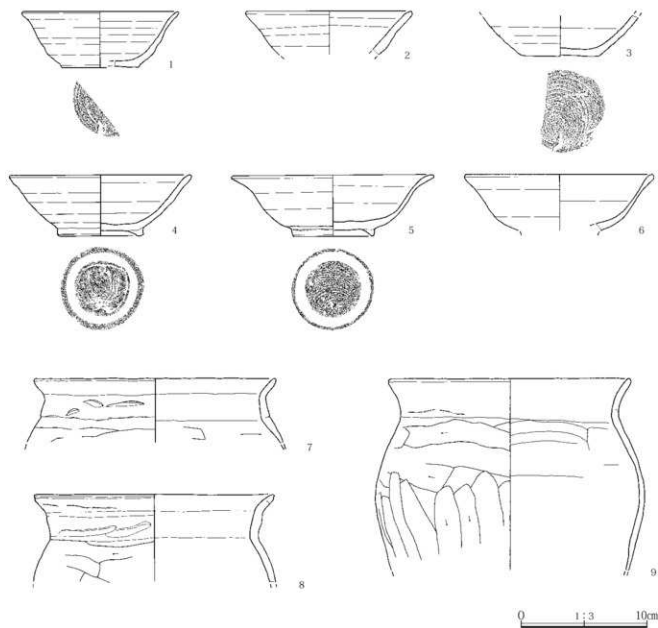
カマド掘方



- 1 暗灰色As-Cまじり火山灰土。径2～4mmの白色軽石(As-C)を含む。
- 2 灰褐色焼土ブロックまじり火山灰土。土器片を多く含む。径10～15mmの褐色焼土ブロックを含むが、軽石(As-C)は少ない。
- 3 灰褐色As-Cまじり火山灰質シルト～砂質土。
- 4 暗灰色軽石(As-C)まじり火山灰土。
- 5 暗灰褐色火山灰質シルトブロック上。径0.5～3mmの焼土粒を含む。

0 1; 30 1m

第62図 4号住居平面図、カマド平面図



第63図 4号住居出土遺物

カマド：東壁の中央やや南寄りに位置し(方位N-85°-E)、壁の外側に大きく突出する。規模は全長0.97m、幅1.35mを測る。燃焼部は壁外側が主体となり、火床は住居床面とほぼ同じ高さにある。焚口の両脇には、僅かに袖部が残存する。なお、焚き口部の底面および床面に、薄く灰を確認した。

貯蔵穴：南東隅に位置し、北東方向にやや長い楕円形を呈し、長軸35cm、短軸27cm、深さ19cmを測る。底面は平坦である。

その他：浅い掘り方をもち、底面は僅かに凹凸のみで、径37cm、深さ10cm前後の円形ピットを数ヶ所確認したが、主柱穴とは異なる。掘り方の埋土は、暗灰色のAs-Cまじり火山灰土である。

遺物：出土した遺物は、本調査の中で最も多い。カマド内の底面付近および貯蔵穴付近に散在するが、大半は埋土中からの出土である。須恵器の杯3点と椀3点、土師器の甕3点を図示(第63図、表22)した。3は貯蔵穴内から出土し、4は掘り方の埋土から、5は南壁付近の床直出土である。他は埋土中からの出土。掲載した以外に、須恵器35片、土師器158片が出土している。

時期：出土した杯・椀・甕類から、9世紀後半の住居と考えられる。

6号住居 (第64～66図、表23、PL.11・12・30)

調査時は、S1-6(6号住居)として調査した。

位置：調査区の中央やや北寄りに位置し、南側13.5mに4号住居、南東側16mに2号住居がある。

グリッド：79区B・C2・3

形状：南北に長い長方形を呈するが、南東隅および南西隅は丸みを帯びる。

規模：長辺4.95m 短辺3.42m 壁高15cm

西辺方位：N-O°-E **床面積**：13.58㎡

埋没土：1～5層が埋没土で、床面を覆うのは3層の暗灰～黒色のAs-Cまじり火山灰土を主とする。

床面・壁：床面は細かな凹凸はあるが、ほぼ平坦。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

壁溝：東壁のカマドから南壁中央にかけての、南東側を除いた壁際に検出した。幅20cm前後、深さ4cm前後を測る。

カマド：東壁の中央やや南寄りに位置し(方位N-

93°-E)、壁の外側に大きく突出する。規模は全長1.05m、幅1.20mを測る。燃焼部は壁の内側から外側に跨がり、火床は住居床面より僅かに低くなる。焚口の両脇には、袖部が残存する。

貯蔵穴：南東隅に位置し、北東方向にやや長い楕円形を呈し、長軸115cm、短軸91cm、深さ15cmを測る。底面は平坦である。

その他：住居の床面下に部分的に浅い掘り方をもち、南壁付近に径75cm前後、深さ20cm前後を測る不整形の床下土坑を有する。また、ピット状の落ち込みは浅く、柱穴とは考え難い。

遺物：出土した遺物は多く、カマド内およびカマド周辺に散在するが、その大半は埋土中からの出土である。須恵器の杯1点と椀2点、土師器の杯1点と甕4点、石製品1点を図示(第65・66図、表23)した。3・4は床直からの出土で、3の底部内面に墨書を有する。7はカマド内、8はカマドの左袖脇からの出土である。9は砥沢石製の紡錘車の紡輪で、南壁際の床面近くから出土している。円盤状を呈し、表裏面・体部に平ノミ状の整形痕、体部の軸線上に溝状の縦位線刻があり、径4.4cm、孔径1.1cm、厚さ2.3cm、重さ60.9gを測る。他は埋土中からの出土。掲載した以外に、須恵器18片、土師器101片が出土している。

時期：出土した杯・椀・甕類から、9世紀後半の住居と考えられる。

8号住居 (第67・68図、表24、PL.12・31)

調査時は、S1-8(8号住居)として調査した。調査区の西側が緩斜面地であったため、表土掘削の際に住居の北西側を掘りすぎた。

位置：調査区南西側の調査区境で、南壁際に位置し、本住居の東側12mに10号住居がある。

グリッド：69区H・I17・18

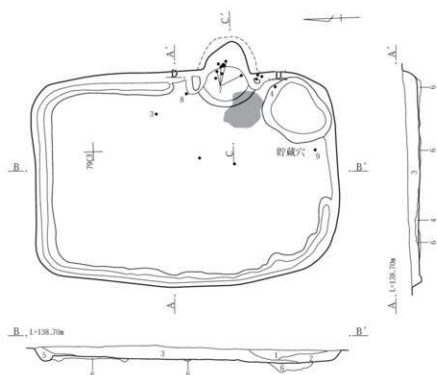
形状：住居の北西側の掘りすぎと南壁が調査区外となることから、詳細には欠けるが、南壁土層断面等から形状を呈する小型住居と考えられる。

規模：一辺2.7m前後と推定 壁高40cm

床面積：7.3㎡前後と推定

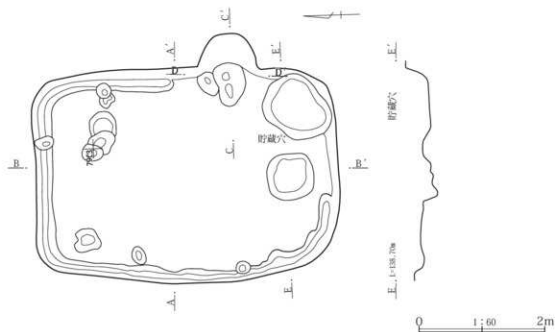
埋没土：4～7層が埋没土で、床面を覆うのは4層の暗灰色のAs-Cまじり火山灰土を主とする。

6号住居



- 1 暗灰色As-Cまじり火山灰土。径1mm大の焼土粒を含む。
- 2 暗灰色As-Cまじり火山灰土。
- 3 暗灰～黒色As-Cまじり火山灰土。径0.5～2mmの白色軽石(As-C)や軽石(Gr-FA)を多く含む。
- 4 暗灰色火山灰土。
- 5 暗灰色火山灰土。塊状無磨理の層相を呈する。
- 6 暗黄灰色火山灰土ブロックを含む火山灰土。径5～10mm大の黄灰色火山灰土ブロックや径2mmの白色軽石(As-C)、径2mm焼土ブロックを含む。

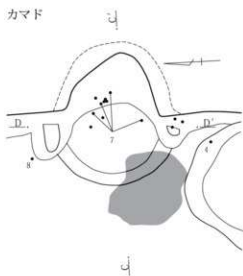
掘方



第64図 6号住居平面図

第3章 検出された遺構と遺物

カマド

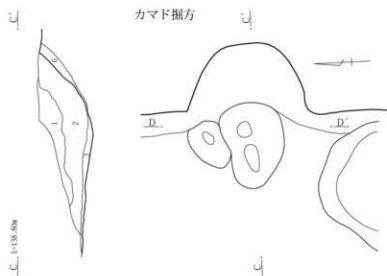


D., 1:100, 80m



.D'

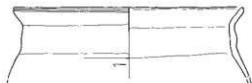
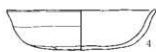
カマド掘方



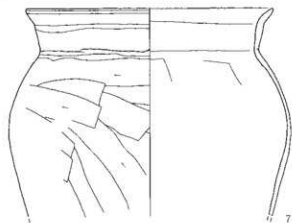
C., 1:100, 80m

- 1 暗灰色火山灰土。径2～3mmの白色軽石(As-C)を多く含む。
- 2 灰褐色焼土ブロックを含む火山灰土。径10～15mmの橙褐色焼土ブロックや径15～25mmの灰褐色火山灰質シルトブロックが含まれる。
- 3 暗紫灰色焼土まじり火山灰土。径2～5mm橙褐色焼土ブロックを多く含む。
- 4 暗灰色細粒火山灰土。
- 5 灰褐色火山灰質シルトのブロック上。
- 6 暗灰色細粒火山灰土。

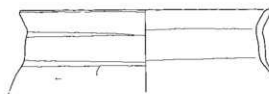
0 1:30 1m



5



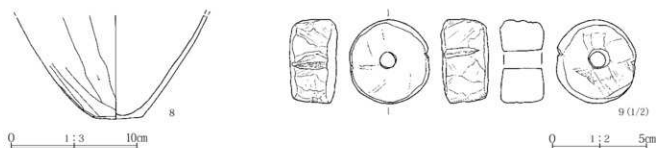
7



6

0 1:3 10cm

第65図 6号住居カマド平面図、出土遺物



第66図 6号住居出土遺物

表23 6号住居出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類	出土位置	残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第65図	1	須恵器 杯か	カマド内 口縁部～体部 中位片	□	11.6	細砂粒/還元焰・軟 質/灰白	ロクロ整形(右回転)。口唇部は外方を向く。	外面やや炭素 吸着。		
第65図	2	須恵器 椀か	埋土 口縁部～体部 中位片	□	12.7	細砂粒/還元焰・軟 質/灰白	ロクロ整形(右回転)。			
第65図 PL.30	3	須恵器 椀	床直 体部上位～底部 1/2	底	6.4	台 6.2	細砂粒・赤黒色粘 土粒/還元焰・軟質/ 灰	ロクロ整形(左回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。高台端部に小礫大の圧痕。	高台内部に墨 書・円図不明。	
第65図 PL.30	4	土師器 杯	床直 1/2	□	11.7	高 3.1	小礫・細砂粒/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。底部は四縁部に手持ち へら削り。中央に型肌部分を残す。内面は撫で。		
第65図	5	土師器 甕	埋土 口縁部～頸部片	□	18.0		細砂粒/良好/橙	口縁部は2回に分けて横撫で。口唇部は沈線状に凹む。胴 部外面は横位のへら削り。内面はへら撫で。	外面にわずかに 炭素吸着。	
第65図	6	土師器 甕	埋土 口縁部～胴部 上位片	□	19.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は2回以上に分けて横撫で。型肌の成形痕を残す。 胴部外面は横位のへら削り。内面はへら撫で。	外面に炭素吸 着・黒色。	
第65図 PL.30	7	土師器 甕	カマド内 口縁部～胴部 中位3/4	□	19.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。外面中位には撫での部分を多く残し、輪 轆み痕も見られる。胴部外面は上位に横・斜横位。中位以 下は斜横位のへら削り。内面はへら撫で。		
第66図	8	土師器 甕	床直 胴部中位～底部	底	3.9		細砂粒/良好/明赤 褐	胴部外面は縦位のへら削り。底部はへら削り。内面はへら 撫で。底部内面成形時に後から粘土塊を貼り、補修してい る。	底部外部に炭 素吸着・黒色。	
第66図 PL.30	9	石製品 紡錘車	床面近く 完形	径 孔	4.4 0.9	厚 重	2.3 60.9	砥沢石	紡錘車の紡錘。表裏面・体部に平ノミ状の整形痕(幅1cm) が残されているほか、体部の軸線上に溝状の縦位線刻があ る。径9mmの孔を両面穿孔する。	円盤状

床面・壁:床面はほぼ平坦で、東・北壁は垂直に近く、西壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

カマド:東壁の中央やや南寄りに位置し(方位N-95°-E)、壁の外側に大きく突出する。規模は全長0.78m、幅0.6mを測る。燃焼部は壁外側が主体となり、先端に煙道が一段高く続く。火床は住居床面とほぼ同じ高さにある。燃焼部に礫を検出したが、支脚石とは異なる。なお、焚き口部の底面および床面に、薄く灰を確認した。

貯蔵穴:南東隅に位置し、形状は円形ないし楕円形と考えられ、東西方向71cm、深さ18cmを測り、底面は平坦。

その他:床面下に部分的に浅い掘り方をもち、底面は凹凸が目立つ。掘り方の埋土は、黄灰色の砂質火山灰土である。

遺物:出土した遺物は少なく、カマド内の底面付近および貯蔵穴付近に散在する。須恵器の杯1点と椀1点、土師器の甕2点を図示(第68図、表24)した。1・2は貯蔵穴脇の床直ないし床近く、3・4はカマド内からの出土である。他は埋土中からの出土。掲載した以外に、土師器16片が出土している。

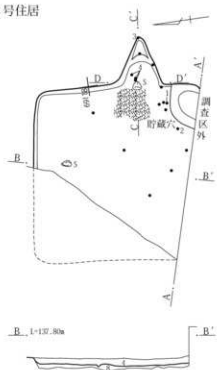
時期:出土した杯・椀・甕類から、9世紀後半の住居と考えられる。

10号住居 (第69・70図、表25、PL.12・31)

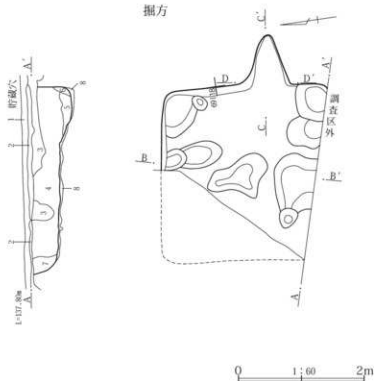
調査時は、S1-10(10号住居)として調査した。

位置:調査区中央の南側に位置し、本住居の東北東側6mに3号住居、西側12mに8号住居がある。

8号住居

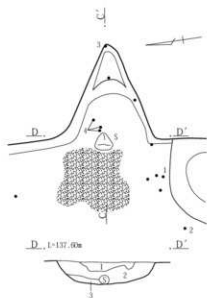


掘方

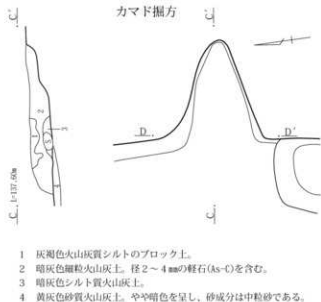


- 1 暗灰色耕作土。
- 2 灰色As-Bまじり耕作土。
- 3 灰褐色火山灰土。
- 4 暗灰色As-Cまじり火山灰土。径5mmの白色軽石(As-C)を多く含む。
- 5 暗灰色焼土ブロックまじり火山灰土。径10mmの焼土ブロックを含む。
- 6 黄灰色砂質火山灰土。
- 7 暗灰色細粒火山灰土層。径0.5～1mmの褐色軽石(As-D?)を含む。
- 8 黄灰色砂質火山灰土。やや暗色を呈し、砂成分は中粒砂である。

カマド

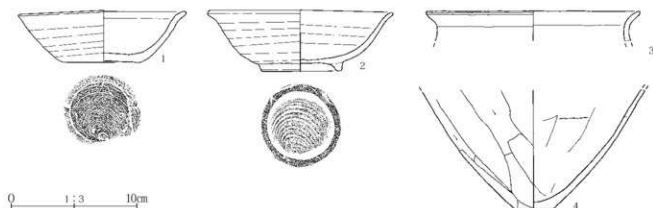


カマド掘方



- 1 灰褐色火山灰質シルトのブロック上。
- 2 暗灰色細粒火山灰土。径2～4mmの軽石(As-C)を含む。
- 3 暗灰色シルト質火山灰土。
- 4 黄灰色砂質火山灰土。やや暗色を呈し、砂成分は中粒砂である。

第67図 8号住居平面図、カマド平面図



第68図 8号住居出土遺物

表24 8号住居出土遺物観察表

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	底			
第68図 PL.31	1	須恵器 杯	床直 2/3	口 13.0 底 5.8	高 4.1	底	細砂粒/還元焼/軟 質/浅黄	口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	内外面ともに 炭素吸着・黒色。
第68図 PL.31	2	須恵器 椀	床面近く 3/4	口 14.4 底 6.6	高 4.8 底 6.2	底	粗砂粒・細砂粒/還 元焼/軟質/灰白	口クロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	器面やや青減 ・底部内外面 に炭素吸着・ 黒色。
第68図	3	土師器 甕	カマド内 口縁部片	口 16.8		底	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横撫で。	
第68図 PL.31	4	土師器 甕	カマド内 胴部中位～底部	底 3.1		底	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	胴部外面中位・下位は斜縦位のヘラ削り。底部外面はヘラ削り。内面はヘラ撫で。	外面炭素吸着 ・黒色・一部に 煤付着。

グリッド：69区 E・F 17

形状：南北方向にやや長い長方形を呈する。

規模：長辺3.53m 短辺2.91m 壁高40cm

長軸方向：N-7°-E 床面積：7.7㎡

埋没土：1～4層が埋没土で、床面を覆うのは1層の暗灰色軽石まじり火山灰土を主とし、2・3層が壁際で三角堆積する。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁の下部は垂直直みで、上部がやや傾斜をもって立ち上がる。

壁溝：東壁のカマドから南東隅に位置する貯蔵穴にかけての、南東側を除いた壁際に検出した。幅15～20cm、深さ5～12cmを測る。

カマド：東壁の中央やや南寄りに位置し(方位N-101°-E)、壁の外側に大きく突出する。規模は全長1.3m、幅1.1mを測る。燃焼部は壁外側が主体となり、火床は住居床面より僅かに低くなる。焚口の両脇には、袖部が残存する。

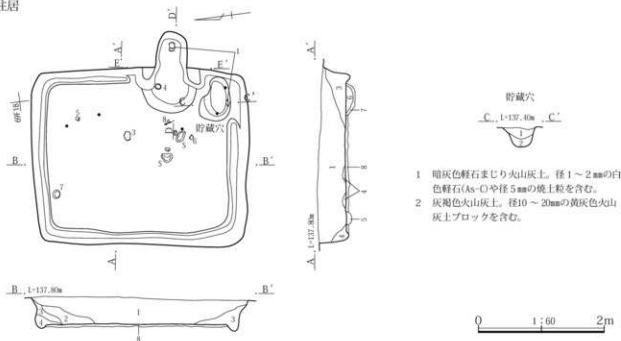
貯蔵穴：南東隅に位置し、東西方向にやや長い楕円形を呈し、長軸70cm、短軸50cm、深さ31cmを測る。土層断面で、底面に7層とした明灰色火山灰質シルトのブロック土が張られ、6層の灰褐色砂質火山灰土が埋土となっていた。

その他：床面下に浅い掘り方をもち、底面はやや凹凸きみ。掘り方の埋土は、黄灰色の砂質火山灰土である。

遺物：出土した遺物は少なく、カマド内の底面付近および貯蔵穴付近に散在し、カマド前には大型礫が出土している。須恵器の蓋1点と杯1点、椀3点、土師器の杯2点と甕1点を図示(第70図、表25)した。1はカマド内底面近くと埋土中との接合、4はカマド内から、8はカマド前の床直出土である。他は埋土中からの出土。掲載した以外に須恵器8片、土師器29片が出土している。

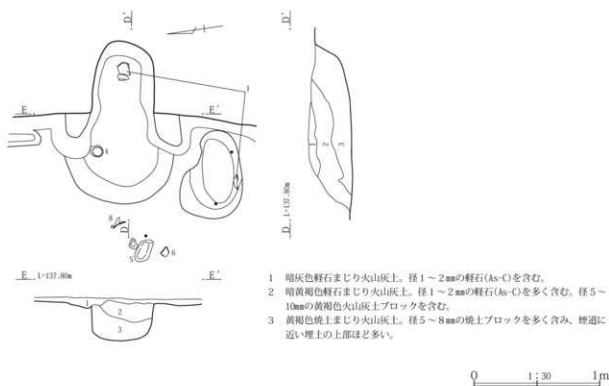
時期：出土した杯・椀・甕類から、9世紀後半の住居と考えられる。

10号住居

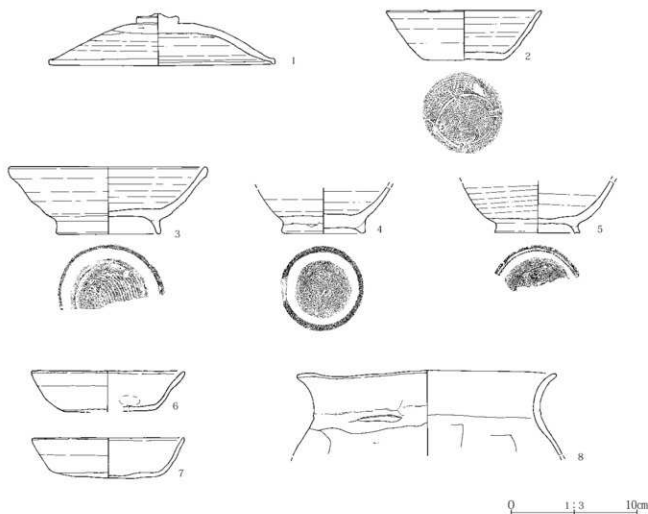


- 1 暗灰色軽石まじり火山灰土。径2～5mm白色軽石(As-C)を多く含む。径10mmの黄褐色火山灰土ブロックを含む。
- 2 暗灰色火山灰土。径10mm大の黄灰色火山灰土ブロックを含む。
- 3 暗灰～黒色火山灰土。径2～5mmの軽石(As-C)を含む。
- 4 暗黄灰色細粒火山灰土。
- 5 暗灰色As-Cまじり火山灰土。
- 6 灰褐色砂質火山灰土。径10mm大の砂質土のブロックを含む。
- 7 明灰色火山灰質シルトのブロック上。径5～10mmのシルトブロックや径2mmの橙土ブロックを含む。掘方底部に薄く貼られている。
- 8 黄灰色砂まじり火山灰土。やや暗色を呈する。

カマド



第69図 10号住居平面図、カマド平面図



第70図 10号住居出土遺物

表25 10号住居出土遺物観察表

種 類 No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第70図 PL.31	須恵器 蓋	カマド内 3/4	口 17.6	高 3.0	4.1 3.0	小粒・粗砂粒・長石/ 還元焰・やや軟質/ 灰灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は中央寄りに回転へう削り。揃みは頂部を回転糸切り後、貼付。	天井部内面は 磨耗顯著。
第70図 PL.31	須恵器 杯	埋土 1/2	口 12.1	高 6.4	3.9	粗砂粒・細砂粒/還 元焰/灰黄褐	ロクロ整形(左回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	底部内外面の 磨雑部は磨耗 顯著・炭素吸 着・黒色。
第70図 PL.31	須恵器 碗	床直 1/2	口 15.4	高 8.2	5.3 8.0	黒色鉱物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は、底部回転糸切り後の付け 高台。	内面磨耗・器 形歪み顯著・ 内外面に自然 種付着。
第70図	須恵器 碗	埋土 体部中位～底部	底 6.6	台 6.2	6.2	細砂粒・白色鉱物 粒/還元焰・やや軟 質/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。高台部は、底部回転糸切り後の付け 高台。貼付はやや粗雑。	内面磨耗・器 面炭素吸着。
第70図	須恵器 碗	貯蔵穴内 体部中位～底部 1/3	底 6.4	台 6.4	6.4	細砂粒・赤黒色粘 土粒/還元焰・軟質/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は、底部回転糸切り後の付け 高台。	内面の一部に 炭素吸着。
第70図 PL.31	土師器 杯	埋土 1/2	口 12.0	高 7.8	3.2	細砂粒・白色鉱物 粒/良好にふい粉	口縁部は横撫で。体部外面は撫で、内面に成形時の指頭圧 痕を残す。底部は手持ちへう削り。内面は撫で。	外面に炭素吸 着。
第70図 PL.31	土師器 杯	埋土 完形	口 11.8	高 7.8	3.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。底部は手持ちへう削り、 内面は撫で。	底部外面の一 部に煤付着。
第70図	土師器 甕	カマド内 口縁部～胴部 上位1/3	口 20.2			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は2回以上に分けて横撫で、輪積み痕を残す。胴部 は整形時の工具痕を残す。胴部外面は横位のへう削り。内 面は横位のへう撫で。	内面は磨滅。

(3) 掘立柱建物

本調査で検出された掘立柱建物は、1棟を検出したのみである。

1号掘立柱建物 (第71図、PL.13)

調査時は、S B-1として調査した。調査時での建物想定と、整理時での確定とは大きく異なる。

位置：調査区中央のやや南西側に位置し、2・3号井戸の南側となる。

グリッド：69区E～G18～20

形状・規模：本建物は西北西方向に長い建物で、計29基の柱穴を確認できた。建物の規模は、外側が北辺4間(8.05m)×西辺2間(4.70m)、内側が南辺5間(5.95m)×西辺3間(3.80m)を測り、桁行方向はN-63°-Wとなる。外側の柱穴は、内側の建物を西面で幅1.1m、北・東面で幅0.9mの間をもって3面を取り巻くように配置され、南面では南側のみに幅0.9mの間をもって配置されている。その結果、柱穴での平面形は、L形状となる。内側の柱穴配置をみると、南辺の5間の内、西側が3間(3.10m)、東側が2間(2.85m)と配置され、西側は3間(3.10m)×3間(3.80m)で東柱をもち、東側は詳細に欠けるが2間(2.85m)×3間(3.80m)と西側より少し狭い間取りとなる。各柱穴規模では、内側の要衝となるP1・4・5・6・8は径40～50cm前後、深さ30cm前後を測り、内側の他の柱穴では同規模ないし径25～40cm前後とやや小さめで、深さも10～60cmとばらつきが目立つ。

なお、建物の上層構造を想定すれば、内側が建物の身舎となり、西側の東柱をもつ広目の間取りと、東側の狭目の間取りから構成され、それを取り巻く外側は下屋と考えられる。また、南面に付く柱間の状況から、P27とP28の柱の空く部分に入り口を想定することができよう。

時期：出土遺物がなく時期の特定は難しいが、その構造から近世の建物である可能性が高い。

(4) 土坑

検出された土坑は、調査区全体に散漫に分布し、計16基を検出した。その形状は、円形や楕円形および方形を呈し、遺物をほとんど出土させていない。唯一、12号土坑に須恵器の杯が出土している。

以下、各土坑ごとに記載する(表32 土坑一覧を参照)。

1号土坑 (第72図、PL.13)

調査時は、S K-1(1号土坑)として調査を行った。

位置：調査区の南東側に位置し、東側に隣接して2号土坑、東側1.5mに1号住居および3.5mに12号土坑がある。

グリッド：69区A16

形状：北北西方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模：長軸0.93m、短軸0.56m、深さ26cm

長軸方向：N-27°-W

埋土は、As-Bをまじる暗灰色砂質火山灰土が主となる。底面は、概ね平坦となるが、南側が一段高い。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

2号土坑 (第72図、PL.13)

調査時は、S K-2(2号土坑)として調査を行った。

位置：調査区の南東側に位置し、西側に隣接して1号土坑、東側に隣接して1号住居、さらに東側2.5mに12号土坑がある。

グリッド：69区A16

形状：北北西方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模：長軸0.93m、短軸0.58m、深さ10cm

長軸方向：N-27°-W

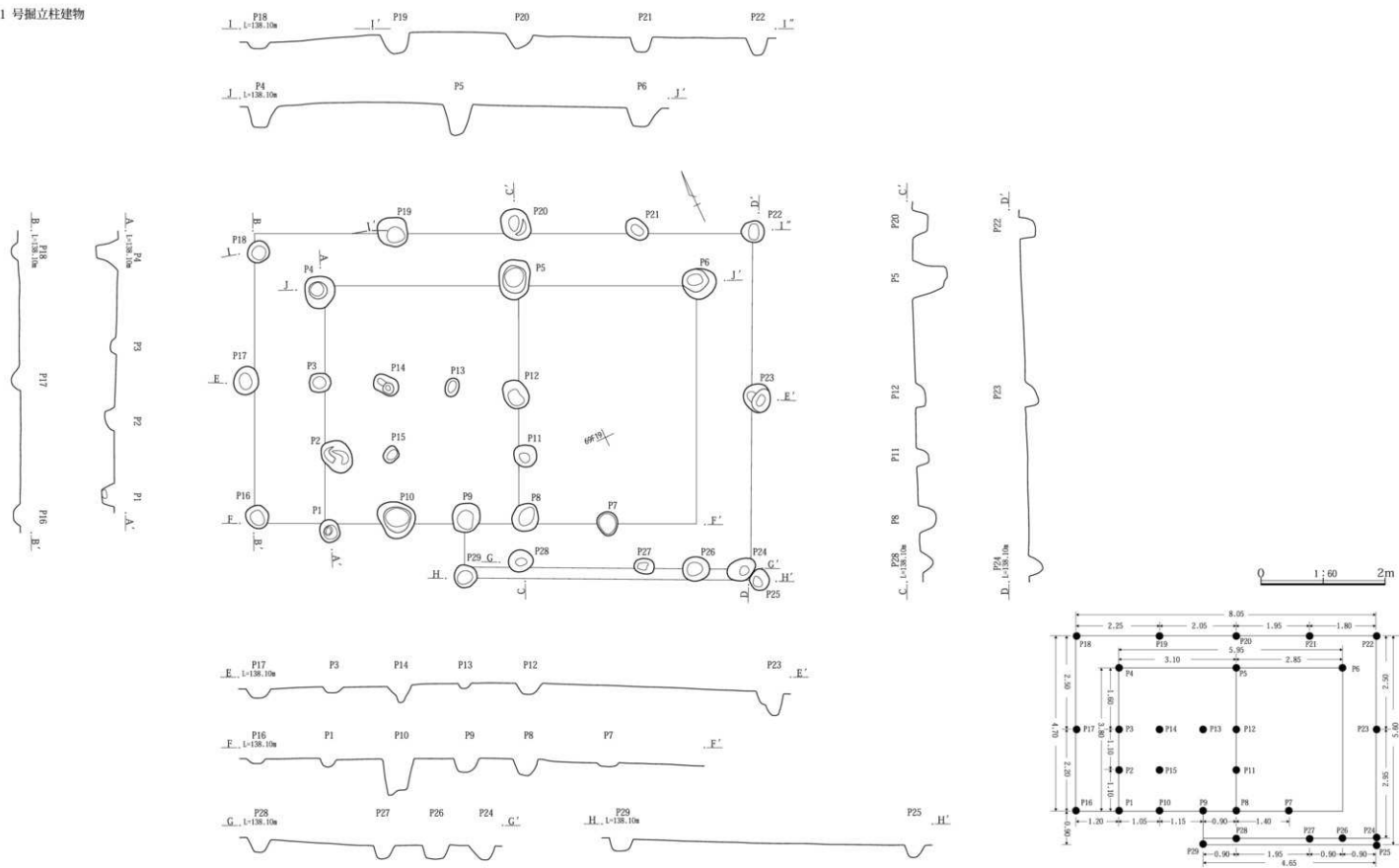
埋土は、As-Cを含む暗灰色火山灰土である。底面は、概ね平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

3号土坑 (第72図、PL.13)

調査時は、S K-3(3号土坑)として調査を行った。

位置：調査区中央のやや南東寄りに位置し、4号土坑と重複する。周囲には、北側1.5mに5号土坑、西側3.0mに16号土坑がある。

1号孤立柱建物



第71图 1号孤立柱建物平面图

グリッド：69区B・C17・18

重複：本土坑の北東部で4号土坑と重複するが、遺構確認時に本土坑が新しいことを確認している。

形状：東西方向に長軸をもつ、卵形(西側が幅狭な楕円形)を呈する。

規模：長軸1.25m、短軸中央1.0m、深さ13cm

長軸方向：N-80°-W

埋土は、As-Cを含む暗灰色火山灰土である。底面は、概ね平坦。出土遺物はなく時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

4号土坑 (第72図、PL.13)

調査時は、SK-4(4号土坑)として調査を行った。

位置：調査区中央のやや南東寄りに位置し、3号土坑と重複する。周囲には、北側1.0mに5号土坑、西側3.0mに16号土坑がある。

グリッド：69区B18

重複：本土坑の南側を3号土坑と重複するが、遺構確認時に本土坑が古いことを確認している。

形状：北北東方向に長軸をもつ、長楕円形を呈する。

規模：長軸(0.95)m、短軸0.61m、深さ30cm

長軸方向：N-25°-E

埋土は、As-D?を含む暗灰色火山灰土である。底面は、中央がピット状に深くなる。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

5号土坑 (第72図、PL.13)

調査時は、SK-5(5号土坑)として調査を行った。

位置：調査区中央のやや南東寄りに位置し、南側1.0mに4号土坑、北北東側4.0mに6号土坑がある。

グリッド：69区B18

形状：概ね円形を呈する。

規模：径1.15m、深さ12cm

埋土は、As-Cを多く含む黒色火山灰土である。底面は平坦。出土遺物には須恵器・土師器片があるが、時期の特定は難しく、古代の可能性のある土坑と考えられる。

6号土坑 (第72図、PL.13)

調査時は、SK-6(6号土坑)として調査を行った。

位置：調査区中央の東寄りに位置し、南南西側4.0m

に5号土坑、北東側7.0mに9号土坑がある。

グリッド：69区B19

形状：ほぼ円形。

規模：径0.83m、深さ18cm

埋土は、As-Cを多く含む暗灰色火山灰土が主となる。底面は概ね平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

9号土坑 (第72図、PL.14)

調査時は、SK-9(9号土坑)として調査を行った。

位置：調査区中央の東寄りに位置し、東側6.0mに2号住居、南西側7.0mに6号土坑がある。

グリッド：69区A20

形状：概ね南北方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模：長軸1.43m、短軸0.85m、深さ18cm

長軸方向：N-9°-E

埋土は、As-CやBr-FAを含む暗灰色火山灰土が主となる。底面は概ね平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

10号土坑 (第72図、PL.14)

調査時は、SK-10(10号土坑)として調査を行った。

位置：調査区の東側中央に位置し、南西側8.0mに1号住居、北側8.0mに2号住居がある。

グリッド：68区S・T18

形状：北東方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模：長軸1.34m、短軸0.87m、深さ22cm

長軸方向：N-46°-E

埋土は、暗灰色火山灰土が主となる。底面は概ね平坦ではあるが、東側は一段高くなる。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

12号土坑 (第72図、表26、PL.31)

調査時は、SK-12(12号土坑)として調査を行った。

位置：調査区の南東に位置し、1号住居と重複、西側3.0m付近に1・2号土坑がある。

グリッド：68区T16

重複：1号住居の南東隅に僅かに重複するが、その新旧は不明。

形状：ほぼ円形。

規模: 径0.50m、深さ20cm

埋土は、As-Cをまじる暗灰色火山灰土が主となる。底面は平坦で、大型の垂円礫を伴う。埋土上位から須恵器の杯1点が出土し、図示した。他に、須恵器片と土師器片が1点ずつ出土している。出土した杯から、9世紀後半の土坑と考えられる。

14号土坑 (第72図、PL.14)

調査時は、S K-14(14号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区中央の北東寄りに位置し、西側に接するように15号土坑、西側5.0mに6号住居がある。

グリッド: 79区A 2

形状: 北西方向に長軸をもつ、楕円形を呈する。

規模: 長軸1.18m、短軸0.54m、深さ9cm

長軸方向: N-58°-W

埋土は、As-Cを含む暗灰色火山灰土が主となる。底面は平坦。出土遺物には須恵器片1点があるが、時期の特定は難しく、古代以降の土坑と考えられる。

15号土坑 (第73図、PL.14)

調査時は、S K-15(15号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区中央の北東寄りに位置し、東側に接するように14号土坑、西側3.0mに6号住居がある。

グリッド: 79区A・B 2

形状: 北西方向に長軸をもつ、歪んだ不整形長方形を呈する。

規模: 長軸2.10m、短軸1.20m、深さ21cm

長軸方向: N-47°-W

埋土は、As-Cを含む暗灰色火山灰土を主とし、黄灰色As-Cまじり火山灰土である。底面は平坦であるが、南西部が一段高くなる。出土遺物には、須恵器片1点、土師器片4点がある。出土遺物からすると、古代の土坑の可能性が高い。

16号土坑 (第73図、PL.14)

調査時は、S K-16(16号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区中央の南寄りに位置し、西側および北西側3.0mに3・4号住居、東側3.0mに3・4号ならびに5号土坑がある。

グリッド: 69区C 18

形状: 概ね方形。

規模: 長軸0.95m、短軸0.82m、深さ8cm

長軸方向: N-16°-E

埋土は、As-Cまじりの黄灰色火山灰土が主となる。底面は概ね平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

27号土坑 (第73図、PL.14)

調査時は、S K-27(27号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区中央の北西隅に位置し、西側を28号土坑と重複し、南側の一部を1号溝と接する。

グリッド: 79区H 7

重複: 28号土坑および1号溝と重複ないし接するが、その新旧は不明。

形状: 北西方向に長軸をもつ、楕円形。

規模: 長軸1.51m、短軸0.73m、深さ87cm

長軸方向: N-0°-E

底面は概ね平坦。出土遺物に近現代の陶磁器1片があることから、近現代以降の土坑と考えられる。

28号土坑 (第73図、PL.14)

調査時は、S K-28(28号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区中央の北西隅に位置し、東側を27号土坑と重複し、西側を29号土坑と重複する。また、南側は攪乱をうけ、1号溝と接する。

グリッド: 79区H・I 7

重複: 27・29号土坑および1号溝と重複ないし接するが、その新旧は不明。

形状: 北西方向に長軸をもつ、不整形楕円形と考えられる。

規模: 長軸(1.68)m、短軸1.52m、深さ85cm

長軸方向: N-64°-W

底面は概ね平坦。出土遺物に近現代の陶磁器1片があることから、近現代以降の土坑と考えられる。

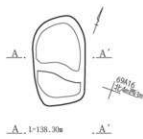
29号土坑 (第73図、PL.14・15)

調査時は、S K-29(29号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区中央の北西隅に位置し、東側を28号土坑と重複し、南側は攪乱をうける。

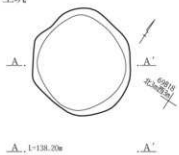
グリッド: 79区H・I 7

1号土坑



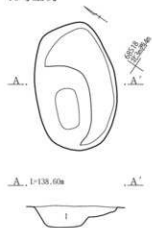
- 1 暗灰色砂質火山灰土。灰色軽石(As-B)まじり。
2 暗灰色砂質土。軽石を多く含む。

5号土坑

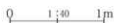


- 1 黒色火山灰土。径0.5mmの白色軽石(As-C)を多く含む。

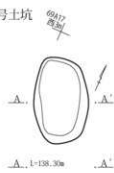
10号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。橙色軽石粒(As-D7)を含む。

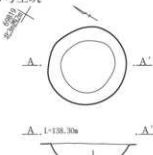


2号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。径1~2mmの灰色軽石(As-C)を含む。

6号土坑

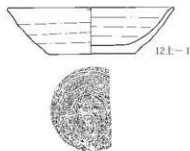


- 1 暗灰色火山灰土。径0.5~2mmの白色軽石(As-C)を多く含む。

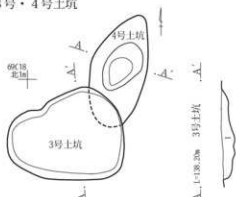
12号土坑



- 1 暗灰色As-εまじり火山灰土。



3号・4号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。径0.5mmの白色軽石(As-C)を多く含む。

4号土坑



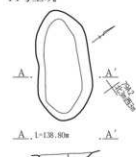
- 1 暗灰色火山灰土。橙色軽石粒(As-D7)を含む。

9号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。径0.5~1mmの白色軽石(As-C)や径2mmの白色軽石(Br-Fa)を含む。

14号土坑

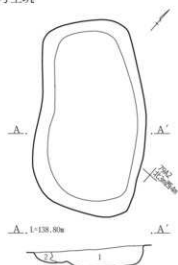


- 1 暗灰色火山灰土。径0.5mmの白色軽石(As-C)を含む。

第72図 1~6・9・10・12・14号土坑平面図、12号土坑出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

15号土坑



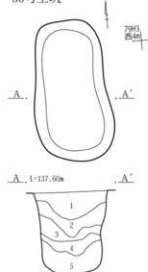
- 1 暗灰色火山灰土。径0.5～2mmの白色軽石(As-C)を含み、径1mmの赤色焼土粒を多く含む。
- 2 黄灰色As-Cまじり火山灰土。

16号土坑



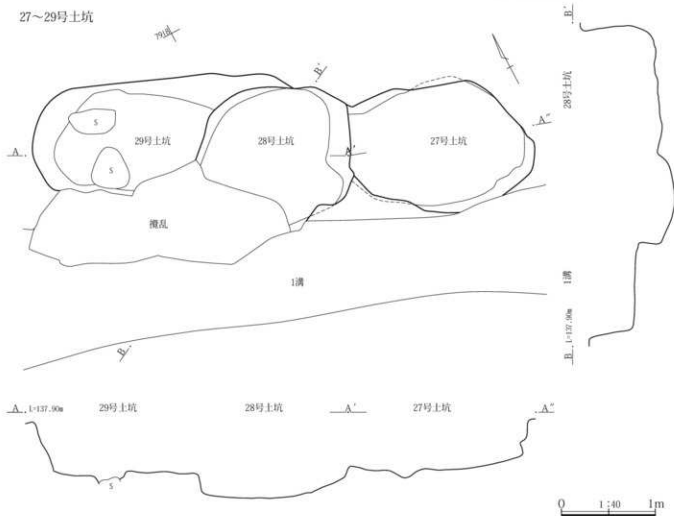
- 1 黄灰色As-Cまじり火山灰土。やや軟質である。

30号土坑



- 1 暗灰色As-Cまじり火山灰土。径1～2mmの軽石(As-C)は上位と下底に多い。
- 2 暗灰色As-Cまじり火山灰土。軽石は埋土全体に散っている。
- 3 暗灰～黒色細粒火山灰土。
- 4 暗灰～灰色火山灰土～灰色火山灰質シルト互層。径1mmの白色軽石(As-C)を含む。
- 5 暗灰色火山灰土互層。

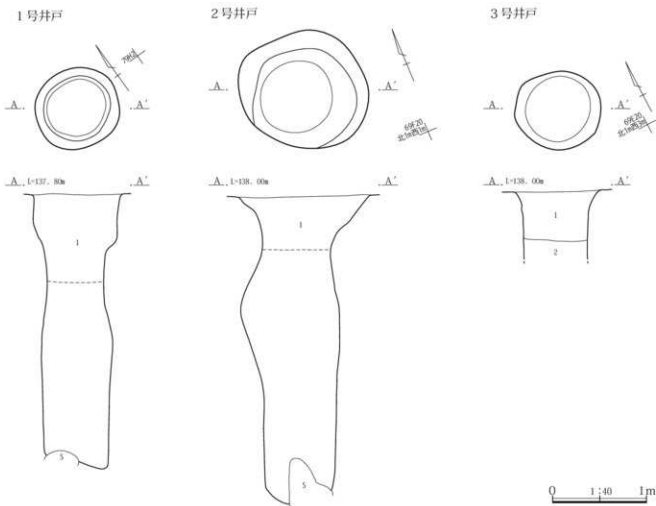
27～29号土坑



第73図 15・16・27～30号土坑平面図

表26 12号土坑出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口 底	高			
第72図 PL.31	1	須恵器 杯	埋土 1/3	13.0 6.8	3.6	粗砂粒・細砂粒/還元焼・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面底部外面も、含め磨耗・磨滅。



1号井戸

1 暗灰色火山灰土ブロックまじり火山灰土。径10～50mmの暗灰～黒色火山灰土のブロックを含む。基質は灰色砂質火山灰土。

2号井戸

1 暗灰色火山灰土ブロックまじり火山灰土。径10～50mmの暗灰～黒色火山灰土のブロックを含む。基質は灰色砂質火山灰土。

3号井戸

1 暗灰色As-Cまじり火山灰土。径2～5mmの白色軽石(As-C)を含む。基質は灰色砂質火山灰土。

2 雑色シルトブロックまじりシルト質砂質土。径10～30mmの暗灰～黄灰色シルト質粘土のブロックを多く含む。

第74図 1～3号井戸平面図

重複: 28号土坑と重複するが、その新旧は不明。

形状: 北西方向に長軸をもつ、楕円形と考えられる。

規模: 長軸(2.80)m、短軸(1.20)m、深さ58cm

長軸方向: N-65°-W

底面は概ね平坦で、底面に地山礫が露出する。出土遺物に近現代の陶磁器1片があることから、近現代以降の土坑と考えられる。

30号土坑 (第73図、PL.15)

調査時は、S K-30(30号土坑)として調査を行った。

位置: 調査区中央の西寄りに位置し、南西側8.0mに2号溝がある。

グリッド: 79区H・12・3

形状: 南北方向に長軸をもつ、楕円形。

規模: 長軸1.51m、短軸0.73m、深さ87cm

長軸方向: N-0°-E

埋土上位はAs-Cを含む暗灰色火山灰土を主とし、底面付近では暗灰色火山灰土が互層となる。底面は平坦。出土遺物はなく、時期の特定は難しいが、古代以降の土坑と考えられる。

(5)井戸

検出された井戸は、調査区中央の南西側に計3基を検出した。このうち、1・2号井戸については、井戸上位部の調査の後、半裁深掘りにより底面までの調査を行った。その断面形状は、縦掘りないし漏斗状を呈する。遺物を出土させたのは、1号井戸のみであった。

以下、各土坑ごとに記載する(表33 井戸一覧を参照)。

1号井戸 (第74・78図、表27、PL.15・31)

調査時は、S E-1(1号井戸)として調査を行った。上位部の調査の後、半裁深掘りにより底面までの調査を行った。

位置: 調査区中央の西側に位置し、南東側11.0mに2号井戸がある。

グリッド: 79区H 1・2

形状: 概ね円形。

規模: 径0.9m、深さ2.9m

上部の埋土は、暗灰～黒色火山灰土のブロックを含む暗灰色火山灰土で、基質は灰色砂質火山灰土。断面形状は、上部から下部までほぼ縦坑のみで、中間がやや狭くなる。底面には大型の地山礫が露出する。出土遺物には、陶磁器類と石製品類の計4点を図示した。1は瀬戸・美濃陶器の丸碗、2は在地系の焙烙片、3は粗粒輝石安山岩製の石臼で径34.2cm、高さ9.3cm、重さ6450.0gを測る。また、4は粗粒輝石安山岩製の五輪塔(地輪)の完形で、長軸21.9cm、短軸21.0cm、高さ15.3cm、重さ8200.0gを測る。これらの出土遺物から、18世紀後半以降の井戸と考えられる。

2号井戸 (第74図、PL.15)

調査時は、S E-2(2号井戸)として調査を行った。上位部の調査の後、半裁深掘りにより底面までの調査を行った。

位置: 調査区中央のやや南西寄りに位置し、南側に1号掘立柱建物に隣接し、北西側11.0mに1号井戸、東側2.0mに3号井戸がある。

グリッド: 69区F 20

形状: 北西方向にやや長い楕円形。

規模: 長軸1.42m、短軸1.26m、深さ3.25m

長軸方向: N-48°-W

上部の埋土は、暗灰～黒色火山灰土のブロックを含む暗灰色火山灰土で、基質は灰色砂質火山灰土。断面形状は、上部が漏斗状に開き、中間はやや膨らみをもつ縦坑となる。底面には大型の地山礫が露出する。出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から近世以降の井戸の可能性が高い。

3号井戸 (第74図、PL.15)

調査時は、S E-3(3号井戸)として調査を行った。半裁深掘りによる底面までの調査はしていない。

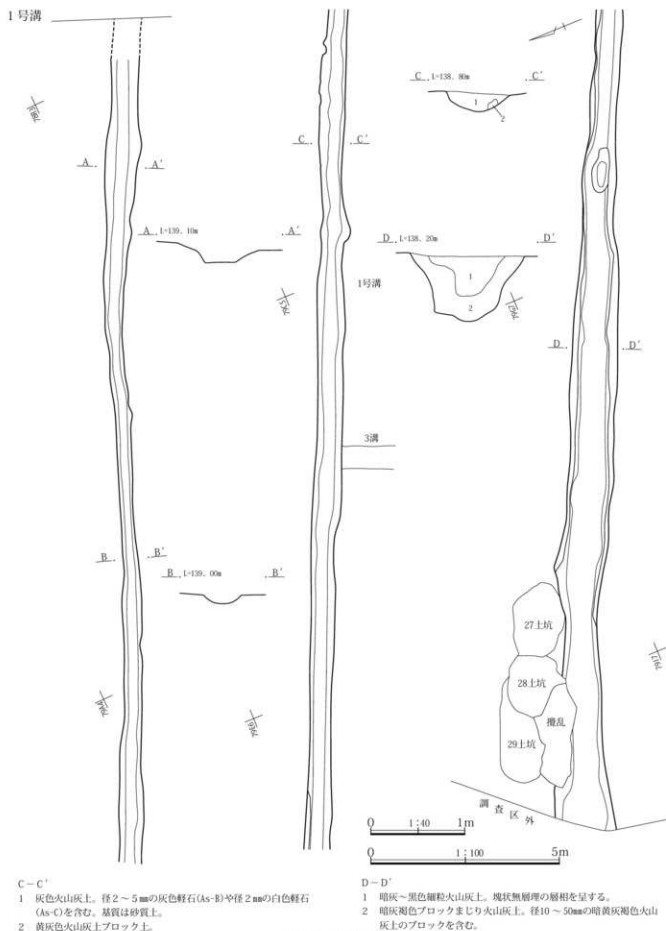
位置: 調査区中央のやや南西寄りに位置し、南側に1号掘立柱建物に隣接し、西側2.0mに2号井戸がある。

グリッド: 69区E 20

形状: ほぼ円形。

規模: 径0.9m、深さ(0.68)m

上部の埋土は、暗灰色As-Cまじりの火山灰土で、基質は灰色砂質火山灰土。断面形状は、上部がやや漏斗状に



C-C'

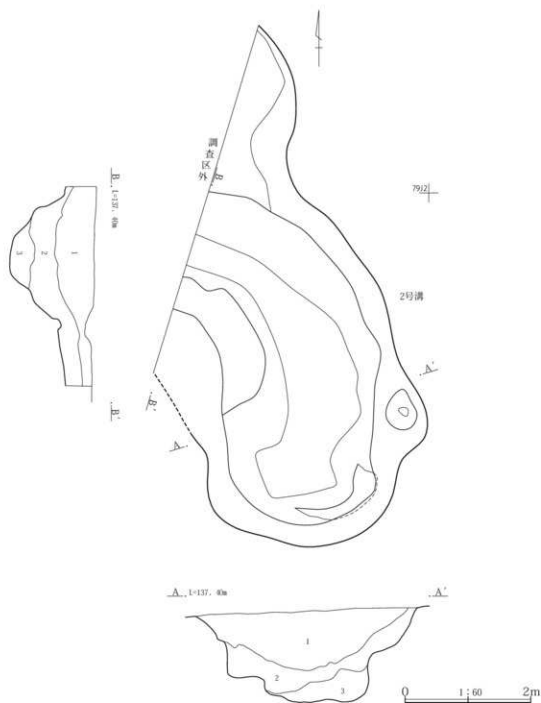
- 1 灰色火山灰土。径2～5mmの灰色軽石(As-B)や径2mmの白色軽石(As-C)を含む。基質は砂質土。
- 2 黄灰色火山灰土ブロック上。

D-D'

- 1 暗灰～黒色細粒火山灰土。塊状無層理の層相を呈する。
- 2 暗灰褐色ブロックまじり火山灰土。径10～50mmの暗黄灰褐色火山灰土のブロックを含む。

第75図 1号溝平面図

2号溝



A-A'

1 暗灰色火山灰土互層。下底に径30cmの白色火山灰質シルトのブロックを含む。ガラスを含む埋土。

2 雑色～暗灰色火山灰質シルトブロックを含む火山灰土互層。不陶法で分載の悪い層相を呈する。

3 暗灰色砂質シルト。塊状無層理の層相を呈するが水成堆積の特徴を持つ。

B-B'

1 暗灰色As-Cまじり火山灰土互層。

2 暗灰色火山灰質シルトブロックまじり火山灰土互層。径10～400mm大のブロックを含む。

3 灰～暗灰色シルト～砂互層。ラミナが見られ水成堆積の特徴を呈する。

第76図 2号溝平面図

開く。出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から近世以降の井戸の可能性が高い。

(6)溝

検出された溝は3条のみで、1・3号溝は1連の溝である。1号溝は南へ延びる台地の南北を分断するような溝であり、3号溝が途中で接続することから、1・3号溝は同様な性格の溝と考えられる。また、2号溝は遺跡地西側の谷部へ延びる溝のようで、その先端部が調査されたにすぎず、不明な点が多い。

以下、各溝ごとに記載する(表34 溝一覧を参照)。

1号溝 (第75・78図、表28、PL.16)

調査時は、S D-1(1号溝)として調査を行った。

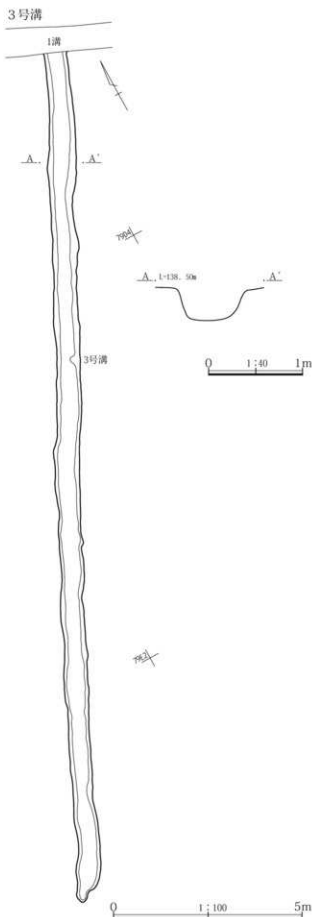
立地・走向:南へ延びる台地の南北を分断するように、調査区の北側を東から西側へ直線的に走向し(西傾斜)、途中で3号溝がT字状に接続する。

グリッド:78区R~T 2・3、79区A~I 3~7

重複:溝の西端で27~29号土坑と接するが、新旧は不明。また、途中で3号溝がT字状に接続するが、底面高が同一であることや、溝形状等が近似することから同一時期の分岐溝と考えられる。

規模:全長(65.0)m、上幅0.35~1.20m、下幅0.20~0.75m、深さ10~65cm。

埋土は、溝中央付近(C-C')で、As-CやAs-Bを含む灰色火山灰土(基質は砂質土)が主となる。西側(D-D')では、下位に暗黄灰褐色火山灰土のブロックを含む暗灰褐色火山灰土が堆積する。一方、溝の底面高をみると、西端が東端よりも1.60m低い。出土遺物には、陶磁器類1点を図示した。5は瀬戸・美濃陶器の丸碗である。掲載した以外に、近世の国産磁器2点、国産施釉陶器3点が出土している。なお、埋土中にビニールが含まれていたことから、本溝は近・現代の溝である。



第77図 3号溝平面図

2号溝 (第76・78図、表29、PL.16・31)

調査時は、S D-2(2号溝)として調査を行った。

立地・走向：調査区の西端に検出され、西傾斜する台地の中位を先端として、曲線的に西側(調査区外)へ延びる溝である。

グリッド：69区J 20、79区J 1・2

規模：全長(5.7)m、上幅3.40～3.75m、下幅1.40m、深さ1.6m。

埋土上層は、暗灰色火山灰土の互層で、ガラスを含むことから近代以降の堆積と考えられる。また、底面の埋土は、灰～暗灰色シルト～砂互層で、ラミナがみられ水成堆積の特徴を呈する。出土遺物には、陶磁器類3点と金属製品1点を図示した。6は瀬戸・美濃陶器の皿、7・8は在地系の焙烙、9は金属製品で煙管の雁首である。掲載した以外に、須恵器・土師器片と近世の在地系焙烙片が出土している。これらの出土遺物から、近世以降の溝と考えられる。

3号溝 (第77図)

調査時は、S D-3(3号溝)として調査を行った。

立地・走向：南へ延びる台地の西斜面となる変換部付近を南北方向に延びる溝で、北側先端を1号溝とT字状に接続させ、北側から南へ直線的に走向する(南傾斜)。南側先端は、1号掘立柱建物や2・3号井戸の手前で止まる。

グリッド：79区C～E 1～5

重複：溝の南側先端で11号住居と重複するが、遺構確認時に本溝の方が新しいことは明らかであった。また、北側先端を1号溝とT字状に接続するが、底面高が同一であることや、溝形状等が近似することから、本溝は1号溝から続く分岐溝と考えられる。

規模：全長22.5m、上幅0.65m前後、下幅0.40m前後、深さ12～33cm。

埋土は、As-Cを含む暗灰色細粒火山灰土が主となる。溝の底面高をみると、南端が北端よりも0.32m低い。出土遺物はないが、1号溝からの分岐溝であることから、1号溝と同様に近・現代の溝である。

(7)遺構外出土遺物

調査区内からの遺構外遺物は多くはないものの、古代の須恵器や土師器、近世以降の陶磁器類(近世の陶磁器類23点、近現代の陶磁器類6点)、石製品・石造物の各1点がある。これらの遺物の内、図示したものは第79図に示した4点である。

以下、種別ごとに記載する。

1. 須恵器 (第79図、表30)

1は須恵器の椀で、口縁部外面の一部が変色している。

2. 陶磁器類 (第79図、表30)

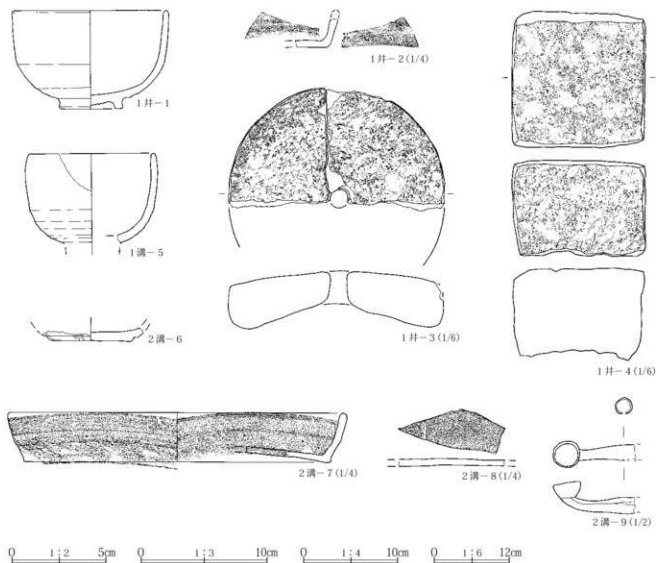
2は瀬戸・美濃陶器の香炉で、底面に脚が付くようである。体部外面は長石釉か。17世紀後半から18世紀の所産。

3. 石製品 (第79図、表30、PL.31)

3は珪質頁岩製の砥石である。小口部は折断後に粗く研磨、各辺の稜は丁寧に面取り整形され、裏面側は剥落した後も平坦に整形されている。石材は細粒・緻密質で、仕上げ砥とすることができよう。

4. 石造物 (第79図、表30、PL.31)

4は板碑の左側縁側の体部破片で、石材は緑色片岩。碑面は磨滅しており、部分的に工具痕が残る。左辺側裏面には、板碑本来の逆台形状の整形が残されている。



第78図 1号井戸、1・2号溝出土遺物

表27 1号井戸出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第78図 PL.31	1	瀬戸・美濃 陶器 丸碗	埋土 口縁部1/3、 底部完	口 径 12.2 底 4.8	高 7.7	//灰白	体部外面中位以下は回転造削りで、掘削り終了部で面気味に立ち上がる。口縁部は内湾気味に立ち上がる。口径に比して高台径は小さい。内面から高台部に灰釉。	18世紀中頃～ 後半
第78図	2	在地系土器 焙烙	埋土 体部～底部片			//黒褐、暗灰	断面中央は暗灰色。器表付近は浅黄褐色。内面器表は暗灰色。外面器表は黒褐色。体部外面下端から底部外面はやや薄い黒褐色。	江戸時代
第78図 PL.31	3	石製品 石臼	埋土 1/2	径 34.2 高 9.3	重 6490.0	粗粒輝石安山岩	激しく使い込まれ、すり合わせ部は良く摩耗している。臼の上面に刻まれた溝は痕跡程度で死れており、管理は不十分である。芯棒孔はラッパ状に開く。	下白
第78図 PL.31	4	石造物 五輪塔	埋土 完形	長 21.9 短 21.0	高 15.3 重 8200.0	粗粒輝石安山岩	ノミ状の工具痕が残り、磨き整形は雑である。手前側が厚く後方が薄く、前者を正面と捉えた。被熱して焦げる。	地輪

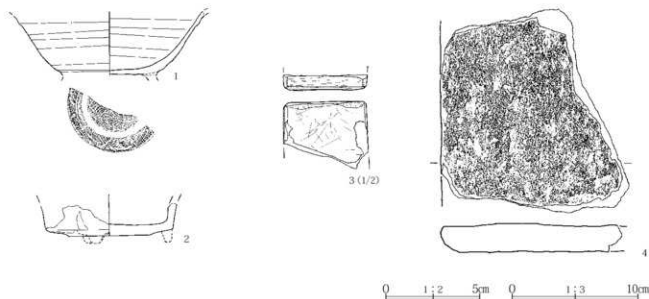
表28 1号溝出土遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第78図	5	瀬戸・美濃 陶器 丸碗	埋土 口縁部・体部 1/3	口 (10.0)		//灰白	体部外面は丸みを持ち、口縁部はやや内湾。器壁はやや厚い。内面から高台部に灰釉。	18世紀後半

第3章 検出された遺構と遺物

表29 2号溝出土遺物観察表

採 取 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第78図 PL.31	6	瀬戸・美濃 陶器 皿	埋土 底部	底	6.5		//灰白	高台の挟りはなく、外面は平坦。高台脇は浅く抉る。内面から高台外面付近に長石軸か。底部外面に目痕3カ所。	17世紀か
第78図 PL.31	7	在地系土器 切塔	埋土 口縁部1/4、 底部1/8	口 底	35.3 32.2	高 5.2	//黒	断面中央は黒色。器表付近は灰白色。器表は黒色。外面下位は皺状亀裂残るが、下部を覆う。外面中に接合痕残る。残存部に耳は認められない。	江戸時代
第78図	8	在地系土器 切塔	埋土 底部					断面中央は黒色。器表付近は灰白色。内面器表は黒色。外面器表は明褐色。内面に押印が認められるが、一部のたため判断不可能。	江戸時代
第78図 PL.31	9	金属製品 煙管	埋土 完形	長 幅	4.3 1.4	高 重 1.7 5.9		煙管の巻首で、吸い口側端部が破損する。火室内に煙草の残渣が残る。	



第79図 遺構外出土遺物

表30 遺構外出土遺物観察表

採 取 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第79図	1	須恵器 轆	遺構外 体部上位～底部 1/3	底	7.7		細砂粒・赤黒色粘 土粒/還元焰、やや 軟質/浅黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は剥離しているが、底部回転糸切り後の付け高台。	口縁部外面の一部変色・付着物か。底部炭灰着色。
第79図	2	瀬戸・美濃 陶器 香炉	遺構外 底部1/2	底	6.4		//灰白	底部脇面取り部に脚の貼り付け痕2ヶ所残る。体部外面に長石軸か。内面と面取り部以下は無軸。	17世紀後半～18世紀
第79図 PL.31	3	石製品 砥石	遺構外 破片	長 幅	3.6 4.6	厚 重 0.9 617.8	柱状頁岩	小口部は折断後に軽く研磨され、各辺の稜は丁寧に面取り整形されている。裏面側が剥落した後も平坦に整形され、再利用しようとしたことが明らかである。石材は細粒・緻密質で、仕上げ砥とすることができるだろう。	板状
第79図 PL.31	4	石造物 板碑	遺構外 破片	長 幅	16.0 14.8	厚 重 2.4 907.4	緑色片岩	左側縁部の体部破片。碑面は磨滅しており、部分的に工具痕が残る。左辺側裏面には板碑本来の臺台形状の整形が残されている。右辺側の破損面は摩耗しており、板碑から別の目的で整形されたことは明らかであるが、詳細は不明。	

表31 住居一覧表

遺構名	位置 (グリッド)	平面形状	規模(m)				長軸方位	炉	カマド		重複関係 (古→新)	時期/備考	
			長軸	短軸	深さ	床面積			位置/方位/規模(m)	位置/方位/規模(m)			
1号住居	68区 T 16・17 69区 A 16・17	長方形	3.05	2.60	0.16	6.13	N-16°-E		位置	東壁	方位 N-95°-E	12号土坑	9世紀後半
									長さ	0.78	幅		
2号住居	68区 S 20	長方形	3.70	3.18	0.37	9.47	N-0°-E		位置	東壁	方位 N-93°-E		9世紀後半
									長さ	1.20	幅		
3号住居 新カマド	69区 D 18	長方形 (台形)	4.13	狭 2.75 広 3.35	0.20	11.39	N-10°-E		位置	東壁	方位 N-98°-E	4号住居 (3住→4住)	9世紀後半
									長さ	1.25	幅		
3号住居 旧カマド									位置	東壁	方位 N-98°-E		
									長さ	(0.40)	幅		
4号住居	69区 C・D 18・19	長方形	4.13	3.13	0.30	10.05	N-0°-E		位置	東壁	方位 N-85°-E	3号住居 (3住→4住)	9世紀後半
									長さ	0.97	幅		
5号住居									位置	方位			欠番
									長さ		幅		
6号住居	79区 B・C 2・3	長方形	4.95	3.42	0.15	13.58	N-0°-E		位置	東壁	方位 N-93°-E		9世紀後半
									長さ	1.05	幅		
7号住居	79区 F・G 1・2	円形	径 6.50	—	—	—	—	石囲炉					縄文時代中期 加曾利 E 3 式期
									位置	東壁	方位 N-95°-E		
8号住居	69区 H・I 17・18	方形	2.70	—	0.40	7.30	—		位置	東壁	方位 N-95°-E		9世紀後半
									長さ	0.78	幅		
9号住居	68区 R・S 15・16	隅丸方形	3.00	—	0.27	6.79	—	不明					縄文時代早期 然糸文期
									位置	東壁	方位 N-101°-E		
10号住居	69区 E・F 17	長方形	3.53	2.91	0.40	7.70	N-7°-E		位置	東壁	方位 N-101°-E		9世紀後半
									長さ	1.30	幅		
11号住居	69区 E 20 79区 E 1	円形	径 5.30	—	—	—	—	石囲炉 埋設土器				3号溝 (11住→3溝)	縄文時代中期 加曾利 E 3 式期
									位置	東壁	方位 N-95°-E		
12号住居	68区 T 17・18 69区 A 17・18	円形	径 5.00	—	—	—	—	石囲炉 埋設土器					縄文時代中期 加曾利 E 3 式期
									位置	東壁	方位 N-95°-E		
13A号住居	79区 A・B 4・5	円形	径 5.00	—	—	—	—	石囲炉				1号溝 (13A住→1溝)	縄文時代中期 加曾利 E 3 式期
									位置	東壁	方位 N-95°-E		
13B号住居	79区 A・B 4・5	円形	径 7.50	—	—	—	—	石囲炉				1号溝 (13B住→1溝)	縄文時代中期 加曾利 E 3 式期
									位置	東壁	方位 N-95°-E		
14号住居	78区 S 2	円形	径 3.00	—	—	—	—	石囲炉					縄文時代中期 加曾利 E 3 式期
									位置	東壁	方位 N-95°-E		
15号住居	69区 D 16・17	円形	径 4.50	—	—	—	—	不明					加曾利 E 3 式期
									位置	東壁	方位 N-95°-E		

第3章 検出された遺構と遺物

表32 土坑一覧表

遺構名	位置 (グリッド)	平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
			長軸(径)	短軸	深さ			
1号土坑	69区A16	楕円形	0.93	0.56	0.26	N-27°-W		古代以降
2号土坑	69区A16	楕円形	0.93	0.58	0.10	N-27°-W		古代以降
3号土坑	69区B・C17・18	卵形	1.25	1.00	0.13	N-80°-W	4号土坑	古代以降
4号土坑	69区B18	長楕円形	(0.95)	0.61	0.30	N-25°-E	3号土坑	古代以降
5号土坑	69区B18	円形	1.15	—	0.12	—		古代
6号土坑	69区B19	円形	0.83	—	0.18	—		古代以降
7号土坑								欠番
8号土坑								欠番
9号土坑	69区A20	楕円形	1.43	0.85	0.18	N-9°-E		古代以降
10号土坑	68区S・T18	楕円形	1.34	0.87	0.22	N-46°-E		古代以降
11号土坑	78区S1	楕円形	0.63	0.42	0.25	N-21°-E		縄文時代
12号土坑	69区B19	円形	0.50	—	0.20	—	1号住居	9世紀後半
13号土坑	78区T2	楕円形	1.12	0.91	0.36	N-35°-E		縄文時代
14号土坑	78区A2	楕円形	1.18	0.54	0.09	N-58°-W		古代以降
15号土坑	79区A・B2	長方形	2.10	1.20	0.21	N-47°-W		古代
16号土坑	69区C18	長方形	0.95	0.82	0.08	N-16°-E		古代以降
17号土坑	78区S1	円形	0.70	—	0.23	—		縄文時代
18号土坑								欠番
19号土坑	78区T2	楕円形	0.73	0.59	0.18	N-0°-E		縄文時代
20号土坑								欠番、14号住居に変更
21号土坑	68区S19	円形	1.52	—	0.12	—		縄文時代
22号土坑								欠番
23号土坑	68区S19	楕円形	1.37	0.71	0.48	N-0°-E		縄文時代
24号土坑	68区S19	楕円形	1.42	1.07	0.80	N-78°-E		縄文時代
25号土坑	68区S19	方形	1.42	—	0.40	—		縄文時代
26号土坑	68区S18	楕円形	0.76	0.65	0.36	N-41°-E		縄文時代
27号土坑	79区H7	楕円形	1.51	0.73	0.87	N-0°-E	28号土坑、1号溝	近現代以降
28号土坑	79区H・I7	楕円形	(1.68)	1.32	0.85	N-64°-W	27・29号土坑、1号溝	近現代以降
29号土坑	79区H・I7	楕円形	(2.80)	(1.20)	0.58	N-65°-W	28号土坑	近現代以降
30号土坑	79区H・I2・3	円形	0.83	—	0.18	—		古代以降
31号土坑	79区B4	円形	0.82	—	0.38	—		縄文時代
32号土坑	69区F18	円形	0.92	—	0.57	—		縄文時代
33号土坑	79区B1	円形	1.20	—	0.72	—		縄文時代

表33 井戸一覧表

遺構名	位置 (グリッド)	平面形状	断面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
				長軸(径)	短軸	深さ			
1号井戸	79区H1・2	円形	縦坑	0.90	—	2.90	—		18世紀後半以降
2号井戸	69区F20	楕円形	漏斗状	1.42	1.26	3.25	N-48°-W		近世以降
3号井戸	69区E20	円形	漏斗状	0.90	—	(0.68)	—		近世以降

表34 溝一覧表

番号	位置 (グリッド)	規模(m)			走向方向	重複遺構/交差溝	所属時期/備考	
		長さ	上面幅	底面幅				
1号溝	78区R~T2・3 79区A~I3~7	(65.00)	0.35~1.20	0.20~0.75	0.10~0.65	東→西	3号溝へ分岐、27~29号土坑	近・現代
2号溝	69区J20 79区J1・2	(5.70)	3.40~3.75	1.40	1.60	東→西?		近世以降
3号溝	79区C~E1~5	22.50	0.65	0.40	0.12~0.33	北→南	1号溝から分岐、11号住居	近・現代

第4章 調査の成果(総括)

第1節 縄文時代早期の遺構と遺物について

本調査における縄文時代第2面調査時に検出された、縄文時代早期の集石遺構には、4号集石とした板状礫4石が花弁状に配置された組石状を呈するものと、8号集石とした小型礫が径3.0mほどの範囲に集中するものが存在する。両者の礫は共に被熱しており、熱を加えることを目的とした用途の遺構であることが理解できる。しかし、こうした異なる形態・構造のものが、同一の遺構とは考え難い。また、帰属時期についても再考する必要性を否めない。

本項では、群馬県内での類例と比較し、遺構の形態・構造および時期について検討したい。

1. 県内の燃糸文期の遺構

群馬県内における燃糸文期の土器を出土した遺跡は数多くあるが、遺構を伴う例は意外と少ない。この時期の集石遺構ないし石囲炉と報告された「石組状の遺構」が確認された遺跡には、赤城山西南麓に渋川市城山遺跡や上原遺跡、前橋市坂上遺跡が知られ、本遺跡に比較的近い場所に位置する。県央部では、伊勢崎市八寸大道上遺跡が知られている。また、長野原町榎木Ⅱ遺跡では、屋内に石囲炉を伴う竪穴住居、単独の石囲炉等が多数検出されている。

ここでは、それらの集石遺構および住居内・外石囲炉とされた遺構を取り上げる(第80～82図)。

〈城山遺跡〉

渋川市北碓町下箱田に所在し、概期の竪穴住居(屋内炉は伴わない)6棟と、6基の集石遺構が検出されている。報告では、1号集石遺構は不整丸長方形の掘込みをもち、掘込みの壁面に中型垂角礫を据える。2号集石遺構は楕円形の掘込みをもち、底面および壁面に大中の

扁平礫・垂角礫を据える。礫は被熱していない。3号集石遺構は楕円形の掘込みをもち、底面に石皿、壁面に大型扁平礫を据える。4号集石遺構は不整楕円形の掘込みをもち、底面に大型扁平礫、壁面に大中の扁平礫・垂角礫を据える。壁面に石皿を転用する。5号集石遺構は掘込みがなく、大型で扁平な垂角礫を中央に据え、その周囲を礫で囲う。6号集石遺構は楕円形の土坑の上部に、大型扁平礫3石と小型礫が不規則に集中するとしている。また、各集石遺構の使用石材に被熱痕跡がないとしながらも、2～3号集石遺構については、埋土に炭化物を混入することから火の使用を推測している。

〈上原遺跡〉

渋川市北碓町箱田に所在し、137基の集石遺構が幾つかに群在するように検出されている。報告された主な遺構に、7号集石は土坑状の掘込みをもち、上部に中型の垂角礫が集中する。15号集石は播鉢状の掘込みをもち、掘込みの壁面に大型の扁平な垂角礫を花弁状に、中央の底面にも中型垂角礫を据える。36号集石は播鉢状の掘込みをもち、掘込みの壁面に大型の扁平な垂角礫を据えるが、一部は直立に据え、中央の底面にも中型垂角礫を据える。41号集石は径1.2mの浅い掘込みをもち、底面を中心に扁平な垂角礫を据える。45号集石は播鉢状の掘込みをもち、底面から壁面に大小の扁平な垂角礫を据える。57号集石は播鉢状の掘込みをもち、底面および壁面に大型の扁平な垂角礫を据えるが、一部は直立に据える。58号集石は掘込みがなく、大小の扁平な垂角礫を面的に集中させる。65号集石は掘込みがなく、2.6m×1.8mの範囲に大小の扁平な垂角礫を面的に集中させる。82号集石は浅い掘込みをもち、底面に大型の扁平な垂角礫を据え、その周囲にも礫を配する。84・114号集石は掘込みをもち、底面および壁面に大型の扁平な垂角礫を据えるが、一部は直立に据える。115号集石は径1.1mの土坑状の掘込みをもち、上部に中型の垂角礫が集中する。116号集石は掘込みをもち、底面および壁面に大型の扁平な垂角礫を据えるが、一部は直立に据える。125号集石は播鉢状の

掘込みをもち、底面および壁面に大・中型の扁平な亜角礫を据える。126号集石は径1.0mの掘込みをもち、上部に中型の亜角礫が多く集中する。129号集石は掘込みをもち、底面および壁面に大・中型の扁平な亜角礫を据える。

これら遺構の礫の被熱等に関する報文はなく、詳細に欠ける。

〈坂上遺跡〉

前橋市富士見町石井に所在し、集石遺構6基が点在するように検出されている。報告では、B区1号集石は黒ボク土上層を検出面とし、中央に角礫を据え、その周囲に拳大の亜円礫を径60cmほどの円形に、さらに上部に長軸1.2mほどの楕円形に小型礫で覆う。礫は全て被熱して赤変し、集石間から押し文土器が出土しているという。B区2号集石は黒ボク土中層を検出面とし、平板な角礫を四方から斜めに組み、中央にも角礫をもち、一部の礫に赤変を認めるが、人為的被熱かは判然としにくい。住居に伴う炉とされ、中期初頭の可能性が高いとしている。E区1・2号集石は共に黒ボク土中層を検出面とし、平板な角礫等の数石からなる。E区3号集石は黒ボク土中層を検出面とし、3石の平板な角礫を三方から斜めに組み、もう一方には抜き取り痕が認められ、本来は四方に石を配した構造と推測されている。また、焼土や礫の赤変は顕著ではないが、炉と想定されている。F区1号集石は黒ボク土上層を検出面とし、拳大の円礫が集中し、礫は全て被熱して赤変しているとおる。

この内、B区2号集石とE区3号集石は、同様な構造となることは報告の通りであるが、中期初頭の住居に伴う炉とは考え難い。また、礫を斜めに組むことや他の例からすれば、揺鉢状の掘込みをもつことは明らかであろう。

〈八寸大道上遺跡〉

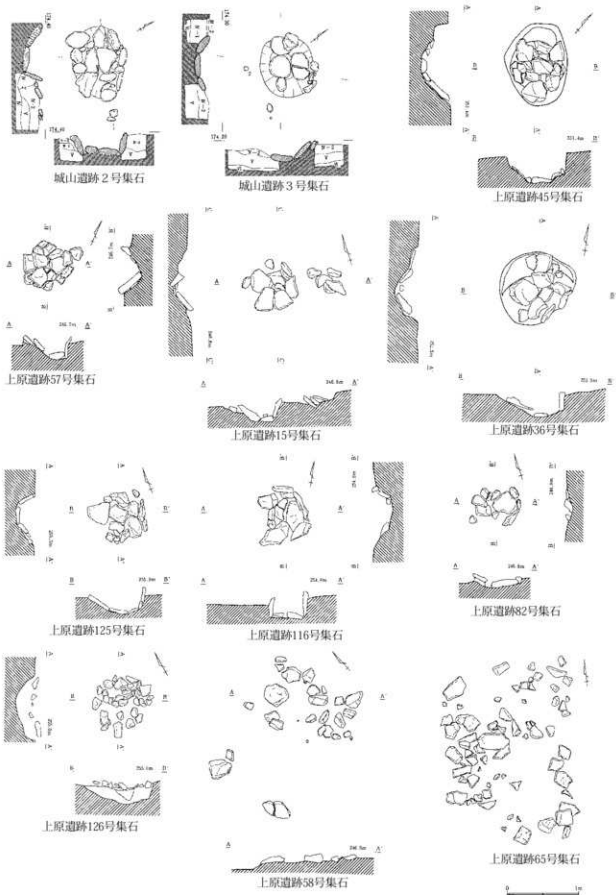
伊勢崎市八寸町に所在し、早期から中期の集石遺構が14基検出されている。この内、燃系文土器が出土したと報告された150遺構は、掘込みをもち、中型礫10個程度が集中する。152遺構は掘込みをもち、中型礫を主に径70cmに集中し、礫は被熱し赤化が著しい。155遺構は掘込みをもち、中型礫を主に径1.0mに集中し、中央部の径30cmほどの範囲に礫をもちない。160遺構は掘込みをもち、小・中型礫が径70cmに散漫に集中する。

〈楡木II遺跡〉

長野原町林に所在し、概期の竪穴住居31棟(石囲炉を伴う住居9棟、床炉を伴う住居5棟)とされ、他に単独の石囲炉10基、そして13基の集石遺構、配石遺構1基が検出されている。竪穴住居については疑義もあるが、ここでは集石・配石遺構および石囲炉(住居に伴う例も含む)とされた、主な遺構について取り上げる。

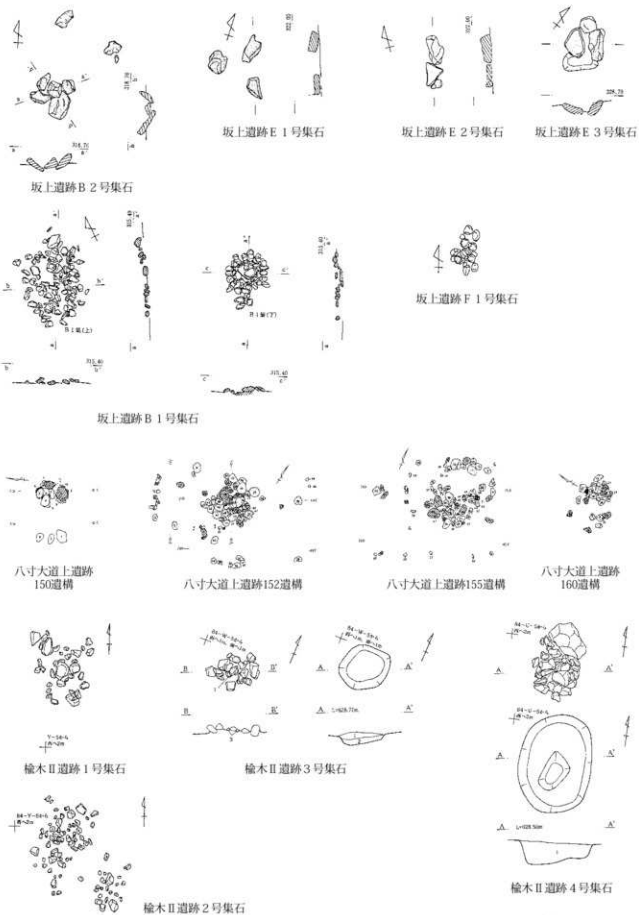
集石として報告された1号集石は、掘込みをもち、小・中型礫が径90cmに散漫に集中する。2号集石は掘込みをもち、小・中型礫が径80cmと径50cmに散漫に集中し、2基に分離できる。3号集石は不整形形の掘込みをもち、上部に中型礫が集中する。4号集石は長軸1.3mの楕円形の掘込みをもち、上部に大小の礫が集中する。6号集石は掘込みをもち、大小の礫が径1.0mほどに集中する。8号集石は掘込みをもち、小・中型礫が長軸1.5mほどに集中し、中央部の径30cmほどの範囲に礫をもちない。9号集石は掘込みをもち、小・中型礫が長軸80cmほどに集中する。13号集石は掘込みをもち、小・中型礫が長軸1.3mほどに散漫に集中する。15号集石は長軸70cmの不整形長方形の掘込みをもち、上部に中型礫が数個集中する。しかし、10号集石のように、中期中葉土器を出土させる例もあり、これらが燃系文土器の遺構かは判然としにくい部分もある。また、配石と報告された2号配石は掘込みをもち、大型の扁平礫を中央に、その周囲にも扁平礫を据えている。

一方、石囲炉を伴う住居として報告された遺存状態の良い6号竪穴住居の炉は、径1.2mの浅い半円状の掘込みをもち、やや大振りな扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる。炉底面は平坦。礫には被熱痕および煤の付着が認められる。7号竪穴住居の炉は、長軸1.1mの浅い楕円形の掘込みをもち、大型な扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる。炉底面は平坦。礫には被熱痕および煤の付着が認められる。12号竪穴住居の炉は、長軸1.0mの浅い楕円形の掘込みをもち、やや大振りな扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる。炉底面は平坦。礫には被熱痕および煤の付着が認められ、炉内にも焼土が若干認められる。37号竪穴住居の炉は、浅い楕円形の掘込みをもち、大型な扁平礫を壁面に斜めに連ねる。炉底面は平坦。51号竪穴住居の炉は、長軸0.6mの楕円ぎみの掘込みをもち、やや大振りな扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる。

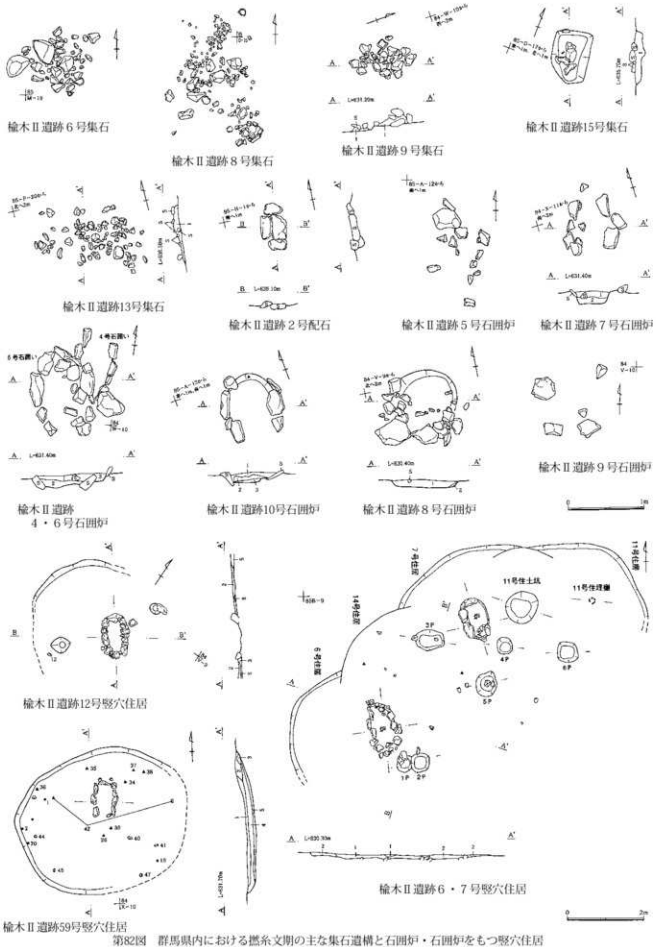


第80図 群馬県内における縄文時代早期の主な集石遺構(1)

第4章 調査の成果(総括)



第81図 群馬県内における縄文期の主な集石遺構(2)



第82図 群馬県内における縄文時代早期の主な集石遺構と石囲炉・石囲炉をもつ竪穴住居

が残存礫は少ない。炉の周囲には焼土が薄く分布する。59号竪穴住居の炉は、浅い楕円形の掘込みをもつようで、大型な扁平礫を長方形にやや斜めに連ねる。底面は揺鉢状とある。64号竪穴住居の炉は、掘込みは不明であるが、長軸0.8mの楕円ぎみにやや大振りの扁平礫を連ねる。

さらに、単独の石囲炉として報告された4号石囲炉は、6号石囲炉と重複して4号石囲炉が古く、長方形ないし楕円形の掘込みをもつようで、やや大振りの扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる。底面は平坦か。6号石囲炉は、4号石囲炉と重複して6号石囲炉が新しく、楕円形の掘込みをもつようで、大型ないしやや大振りの扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる。底面は若干凹凸か。7号石囲炉は、楕円形の掘込みをもつようで、大振りの扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる。底面は平坦。10号石囲炉は、楕円形の掘込みをもつようで、大型な扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる。底面は平坦。なお、これら石囲炉の礫の被熱状況は不明。そして、2・5・9号石囲炉とされたものは、大小の礫が散置にあるのみで、被熱の状況も含めて石囲炉としての根拠が薄い。

以上、「石組状の遺構」を出土させた県内の5遺跡の例を挙げたが、その形態・構造には差があり、幾つかのタイプに分別できる。また、それらの礫には被熱の痕跡を認められる例も多く、その形態には使用用途に差のあることも窺える。

2. 県内「石組状の遺構」の形態分類

先述したように、概期の集石遺構ないし石囲炉と報告された「石組状の遺構」には、その形態・構造に差があることが明らかとなった。ここでは、それらの遺構について、被熱等の状況も加味した、形態差における使用用途をも踏まえて分類を試みる。

1群

掘込みをもち、掘込みの壁際に大型扁平(板状)礫等の礫を巡らせる石組状の一群で、使用礫に被熱の痕跡が認められることや、埋土に焼土ないし炭化物が認められていること等から、炉として考えることのできる遺構である。また、本群には「集石遺構」や「石囲炉」と称されて報

告された遺構を含むが、それらの形態・構造からA・B類の三つに分類することができる。

1群A類

楕円形等の浅い掘込みをもち、大振りの扁平礫を掘込みの壁面に斜めに連ねる特徴をもつ類。従来、「石囲炉」と称してきた形態そのものである。検木Ⅱ遺跡の報告で「石囲炉」とされたものに代表されるが、他遺跡での例は少なく、埼玉県日高市向山遺跡6号竪穴住居が知られる。また、この類の遺構は、竪穴住居に伴う場合と、単独の場合があるものの、両者の形態・構造にはほとんど差異はない。依って、現段階では、その分別は避けておきたい。

1群B類

楕円形や揺鉢状等の掘込みをもち、底面および掘込みの壁面に大中の扁平な礫や垂角礫を据えて、石組み状の形態をとる類。この類は、石組みの形状から、さらに分別できる。なお、現在のところ、竪穴住居に伴う例はないようである。

1群B1類：掘込みの底面がやや広く、数石の礫で底面が構成され、掘込みの壁面に斜位ないし直立に礫を据える特徴をもつ。この類を代表する遺構として、城山遺跡2号集石を挙げることができ、上原遺跡45・116・125号集石も本類に含まれる。

1群B2類：揺鉢状の掘込みで、掘込みの壁面に大型の扁平な垂角礫を花卉状に、中央の底面にも中型垂角礫を据える特徴をもつ。この類を代表する遺構として、上原遺跡15号集石や坂上遺跡B2号集石を挙げることができ、城山遺跡3号集石、上原遺跡36・57号集石、坂上遺跡E3号集石も本類に含まれる。

2群

掘込みをもち、礫を集中させる一群で、礫が被熱している場合と、被熱していない場合がある。前者をA類、後者をB類として分類することができる。しかし、礫の被熱等の詳細に欠ける報告が多く、本群の分類の難しさをもつ。

2群A類

平面的に集中した礫が被熱している類で、その集中度合いから、次の三つに分別(想定を含む)できる。

2群A1類：礫を平面的に集中させるが、その集中

度合いが粗い類。従来、礫群と称されてきた範囲に含まれる遺構である。傾向とすると、使用される礫は中型礫を主とし、その分布範囲が1.0m以上と比較的広い範囲に及ぶ。ただし、使用後に散乱した姿である可能性も十分に考えられる。なお、次の2群A2類とは、礫の集中度合いの粗密や分布範囲広さ等で、分別し難い点を有する。

2群A2類： 礫を平面的に集中させ、その集中度合いが密な類。従来、礫群と称されてきた遺構で、所謂「石蒸し焼き跡(遺構)」とされている類である。傾向とすると、使用される礫は拳大ほどの小型礫(破砕礫を含む)を主とし、その分布範囲が1.0m前後以内と比較的コンパクトな範囲に収まる例が多い。中には、坂上遺跡B区1号集石のように、礫が盛上がった状態の例も存在する。この類を代表する遺構として、坂上遺跡B区1・F区1号集石、八寸大道上遺跡152遺構を挙げることができる。

2群A3類： 数石の大型礫で構成される類。ただし、礫の抜き取り等、使用後の姿である可能性も十分に考えられる。

2群B類

平面的に集中した礫が被熱していない類で、その集中度合いから、次の三つに分別(想定を含む)できる。

2群B1類： 礫を平面的に集中させるが、その集中度合いが粗い類。傾向とすると、使用される礫は中型礫を主とし、その分布範囲が1.0m以上と比較的広い範囲に及ぶ。ただし、使用後に散乱した姿である可能性も十分に考えられる。この類を代表する遺構として、上原遺跡58・65号集石(被熱礫を含まないことを前提として)を挙げることができる。

2群B2類： 礫を平面的に集中させ、その集中度合いが密な類。傾向とすると、使用される礫は小・中型礫を主とし、その分布範囲が1.0m前後と比較的コンパクトな範囲に収まる。この類を代表する遺構として、八寸大道上遺跡150・160遺構を挙げることができる。

2群B3類： 数石の大型礫で構成される類。ただし、礫の抜き取り等、使用後の姿である可能性も十分に考えられる。この類を代表する遺構として、坂上遺跡E区1・2号集石を挙げることができる。

3群

小・中型の礫を平面的に集中させ、その下部に土坑状の掘り込みをもつ一群。礫の被熱については詳細を欠くが、状況によっては分別できる可能性もある。ともあれ、1群および2群とは、明らかに性格の異なる遺構と考えられる。被熱礫のない遺構とすれば、なおさらであろう。とりえず、本群を代表する遺構として、上原遺跡126号集石、楡木Ⅱ遺跡3・4・15号集石を挙げることができる。

以上、分類した結果を要約すると、炉と考えることのできる1群には、1群A類とした竪穴住居に伴う場合(屋内炉)と単独の場合(屋外炉)の両者が存在し、1群B類は竪穴住居に伴う例はなく、単独の場合(屋外炉)のみが存在し、屋外炉形態に幾つかのバリエーションがみられることとなる。2群は礫が被熱している場合と、被熱していない場合が存在し、想定される形態を含め2群A類と2群B類を各3細分した。しかし、遺構の詳細に欠ける部分が多く、その実態をつかみきれないのが事実である。被熱礫で構成される2群A2類の所謂「石蒸し焼き跡」とされる遺構と、被熱礫をもたない2群B2類とでは、明らかに異なる使用用途を考えるを得ない。問題は、2群B類であろう。また、3群とした平面的な礫集中の下部に土坑状の掘り込みをもつ一群もまた、不明な部分を残しつつも、他の群とは性格の異なる遺構と考えざるを得ない。なお、「集石土坑」とされる土坑内に被熱礫が充填されるようなタイプの遺構については、これまでのところ、県内における燃系文期には検出されていないようである。

3. 本遺跡検出遺構との比較

上述の分類を基に、本遺跡において検出された集石遺構について比較する。

1号集石は、破損した大型礫が3石と、その北西に破損した大型礫2石が点在し、いずれの礫も被熱した扁平礫であることから、2群A3類に相当する。

3号集石は、八字状に被熱した大型礫2石が配置され、八字状の内側が径40cmの範囲が焼土化していることからすると、2群A3類に相当する可能性をもつ。或いは、

1群A類の屋外石垣的な遺構とする見方もできる。

4号集石は、板状礫を花卉状に、中心の狭くなる底面に1石を配した組石状を呈し、礫の内面は被熱している。このことからすれば、1群B2類に相当する。特に、上原遺跡15号集石や坂上遺跡B2号集石の形態と酷似する。

6号集石は、板状の被熱した破損礫5石からなり、同一レベル上にあることから、2群A3類に相当する。

8号集石は、拳大の小型礫が主となり、ほぼ同一レベル上に集中し、礫の多くは被熱していることからすれば、2群A1類ないしA2類に相当する。ただし、径3.0mと分布範囲が広く、礫がやや散漫であることを加味すると、現況は2群A1類とすることが妥当であろう。しかし、密集していた礫が散乱した姿であるとするれば、本来は2群A2類であった可能性は否めない。

以上、本遺跡での集石遺構は、分類した1群B2類に4号集石が相当し、2群A1類に8号集石が、2群A3類に1・6号集石が相当する。また、3号集石は、1群A類ないし2群A3類に相当する可能性をもつことが明らかとなった。

4. 結語

県内の5遺跡の例からする分類を基に、本遺跡での集石遺構を比較・検討した結果、先述した各分類内に収まるものであった。8号集石は、従来の礫群(集石)とされてきた範疇に含まれる遺構と理解できる。また、本遺跡での4号集石が当たる1群B2類は、4号集石の内面被熱の状況から、炉としての用途が想像に堅く、むしろ「石組炉」と称しても良い遺構種と考えることができよう。

一方で、3号集石については、若干の問題を残す。この3号集石を、1群A類の屋外石垣的な見方をすれば、1群A類内を細分できる可能性が出てくる。同時に、屋外炉という視点から、他の屋外施設をも含めた再検討が必要となってくるのと共に、調査時の遺構認識や礫の被熱・石材・焼土等といった基礎的なデータの集約も必要となってくる。こうした点も含めて、今後の調査に期待したい。

こうした集石遺構は、燃糸文期に特有の遺構ではなく、古くは旧石器時代、そして縄文時代を通じて知られる遺

構であることは言うまでもない。これまでも、多くの研究者が論考を発表している。県外に目を転じれば、同時期の集石遺構の検出例は、以前より知られているところであり、その形態も今回の分類以外の形態をもつ遺構も存在する。むしろ、今回分類した1群A類の「石組炉」や、1群B2類の「石組炉」といった形態の遺構は、県外ではあまりみられないようで、地域の変容の姿も窺える。また、同時期の形態差もさることながら、同一形態の時間的推移および消長・変遷についても、併せて今後の研究課題として取り上げる必要がある。

何れにせよ、本調査で検出されたこれらの集石遺構は、9号住居と共に燃糸文期の遺構群としてとらえることができ、屋内に炉を伴わない堅穴住居と、屋外炉および礫群(蒸し焼きや石焼き調理の施設)がセットで検出された良例と言えよう。

出典文献

- 富澤敏弘 1989 『城山遺跡』北橘村教育委員会
 原 雅信他 1989 『八寸大道遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 羽鳥政彦 1994 『坂上遺跡』富士見村教育委員会
 長谷川福次 1999 『箱田遺跡群(上原・三角遺跡)』北橘村教育委員会
 藤巻幸男他 2009 『楡木B遺跡(2)』群馬県埋蔵文化財調査事業団

参考文献

- 小柴一夫 1979 『縄文時代における焼石遺構』『小田原考古学研究会会報』8
 上田典男 1983 『縄文時代焼石遺構の形態的把握』『物質文化41』
 谷口康浩 1986 『縄文時代「集石遺構」に関する試論—関東・中部地方における早・前・中期の焼石遺構を中心として—』『東京考古4』
 原 雅信 1988 『群馬県の集石遺構について』『群馬の考古学—創立十周年記念論集—』群馬県埋蔵文化財調査事業団

第2節 総括

今回の調査では、縄文時代と平安時代の集落をはじめとし、旧石器時代から近現代にまで至る多くの遺構・遺物が検出された。ここでは、各時代の様相をまとめて総括としたい。

旧石器時代

今回の調査で出土した旧石器時代の石器は、極めて少なかった。周辺遺跡でも断片的にしか出土していない中、東の谷を隔てた新田上遺跡での出土石器量は群を抜いている。現在、整理作業が進められている新田上遺跡での状況を踏まえ、白川扇状地での旧石器時代の遺跡の在り方、そして後期旧石器時代後半期石器群の様相について、今後の検討課題となろう。

縄文時代

第1面調査時に検出された中期後半加曾利E3式期の小規模集落は、竪穴住居が6棟前後からなり、径50～60m前後に取まる環状を呈し、出土土器からすると比較的単時期に営まれた集落である。環状となる集落の中央部には、33号土坑とした大型礫が多量に詰められた円形の土坑が存在し、他の土坑とは様相を異にしている。同時期の集落遺跡としては、新田上遺跡がある。本遺跡の東側の谷を隔てた遺跡で、台地の西側に十数棟からなる竪穴住居が検出されている。出土土器からしても、本遺跡と同時期であり、谷を隔てて同時存在していた集落であることは明らかである。

一方、第2面調査で出土した早期の土器は、条痕文系土器と燃糸文系土器が層位を隔てて出土していることが確認され、さらに燃糸文期の竪穴住居と集石が検出された。特に集石については、使用されている石が被熱している点は共通するが、その形態に差異がみられる。4号集石とした、板状礫を配した組石状の形状を呈する集石は、その形状と礫の被熱状態から、屋外炉と考えることのできる燃糸文期の遺構である。同類の遺構は、渋川市城山遺跡、上原遺跡、前橋市坂上遺跡で検出されており、やはり燃糸文期ないし早期の遺構と報告されている。しかし、被熱していない遺構も存在することから、遺構の使用用途に問題を残す。それと共に、形形態の在り方に

ついて、屋内炉・屋外炉、石組炉等の地域的な差異、さらには変遷について、今後の検討課題となろう。

平安時代

今回の調査で、平安時代の集落を確認したが、検出したのは9世紀後半の竪穴住居7棟であった。重複するのは2棟のみで、竪穴住居は台地の中央付近に点在する状況であった。また、台地上に位置するため、水田等の生産遺構は今回の調査では未発見である。鉄生産に関わる椀形鍛冶滓の出土はあるものの、関連する遺構は検出されていない。

本遺跡の西に隣接する上細井山遺跡では、9世紀中頃から10世紀前半期の竪穴住居が24棟、東隣の新田上遺跡では31棟が検出されており、調査面積の差によるが本遺跡は少ない状況と言えよう。しかし、一方では、近隣の上町・時沢西組屋谷戸遺跡や天王・東組屋谷戸遺跡、山王・柴遺跡といった大集落の存在もあり、生産域の問題も含め、同地域における古代の集落形成の在り方について再考する必要性が生じてきている。

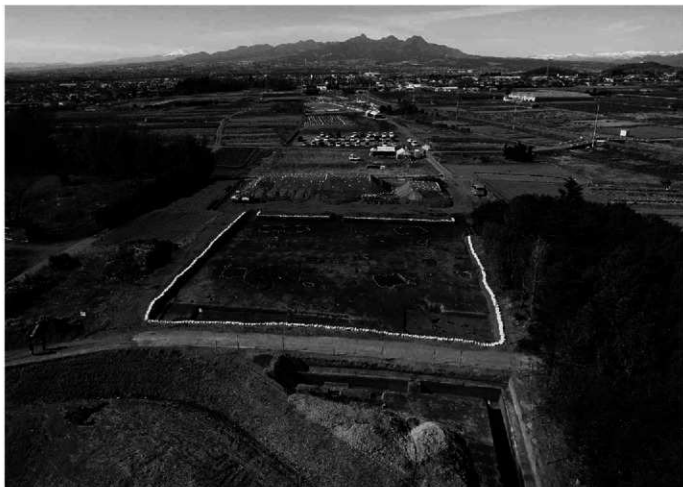
中・近世

中・近世以降の遺構には、掘立柱建物や土坑、井戸、溝が検出された。特に、掘立柱建物は、近世建物と考えられる。柱穴は二重の構造となり、内側が建物の身舎で、それを取り巻く外側が下屋と考えられる。上層構造とすれば、西側の束柱をもつ広目の間取りと、東側の狭目の間取りから構成され、西側のザシキ(へヤ)と東側の土間と考えられる。なお、西側の束柱からすれば、ザシキ部分は二ないし三間に分かれる可能性をもつ。また、南面に付く柱間の状況から、南面の柱の空く部分に入り口を想定することができる。近世の民家(農家)を研究する上で、好例と言えよう。

写真図版



遺跡全景 空中写真 南から赤城山を望む



遺跡全景 空中写真 東から榛名山を望む



調査区東側全景 空中写真 上から



調査区全景 空中写真 上から



遺跡東端 1・2トレンチ全景 南から



2トレンチ北壁土層断面 南西から



4トレンチ全景 東から



6トレンチ旧石器調査全景 北から



6トレンチ旧石器出土状況 西から



6トレンチ北壁土層断面 南から



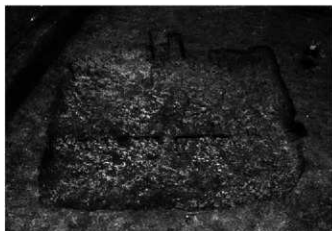
7トレンチ西側全景 東から



7トレンチ東側全景 南西から



9号住居遺物出土状況 北東から



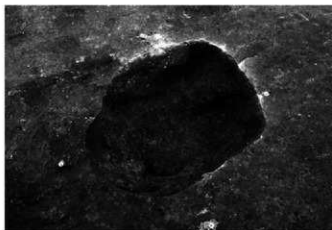
9号住居全景 北から



7号住居全景 南から



7号住居炉 南から



7号住居炉 掘り方 南から



11号住居全景 南から



11号住居炉 西から



11号住居炉内埋設土器出土状況 南から



12号住居全景 南西から



12号住居跡 南東から



12号住居跡内埋設土器出土状況 南から



13(A・B)号住居全景 南から



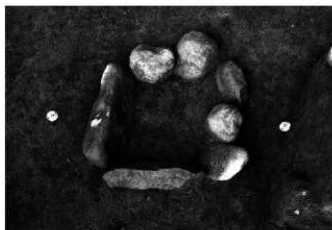
13号住居跡 東から



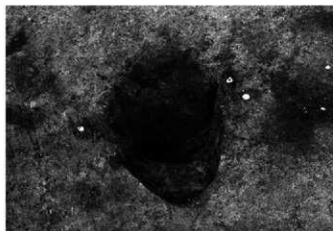
14号住居遺物出土状況 南から



14号住居遺物出土状況 南から



14号住居跡 南から



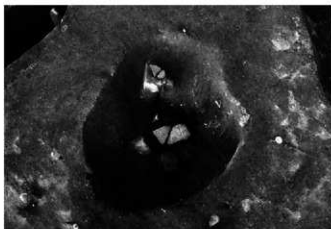
11号土坑全景 南から



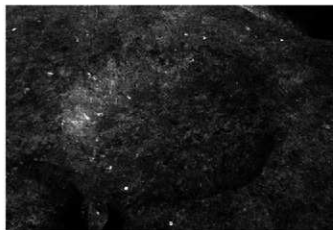
13号土坑遺物出土状況 南から



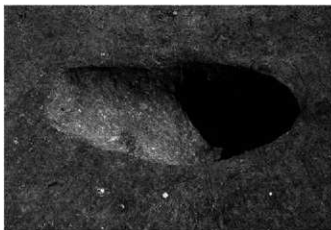
17号土坑遺物出土状況 南から



19号土坑遺物出土状況 南から



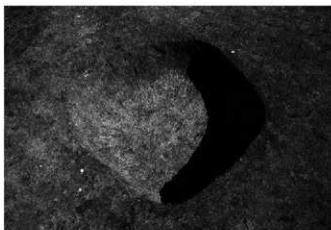
21号土坑全景 南から



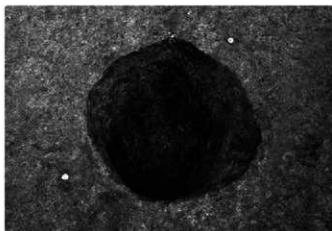
23号土坑全景 西から



24号土坑全景 西から



25号土坑全景 南から



26号土坑全景 西から



31号土坑全景 南から



33号土坑出土状況上面 南から



33号土坑出土状況下面 南から



集石群出土状況 南西から



1号集石検出状況 南西から



3号集石検出状況 西から



4号集石検出状況 北から



6号集石検出状況 北東から



8号集石検出状況 北東から



第2面遺物出土状況 東から



第2面遺物出土状況 西から



第2面石楡出土状況



第2面北側遺物出土状況 南東から



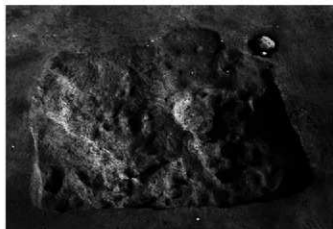
第2面南側遺物出土状況 北東から



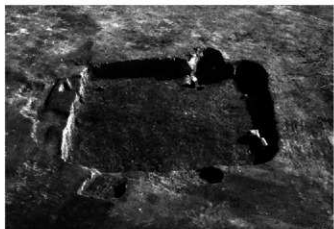
1号住居全景 西から



1号住居カマド 西から



1号住居掘り方 西から



2号住居全景 西から



2号住居カマド 西から



2号住居掘り方 西から



3号住居全景 西から



3号住居カマド1 西から



3号住居貯蔵穴遺物出土状況 西から



3号住居紡錘車出土状況 南から



3号住居カマド2 西から



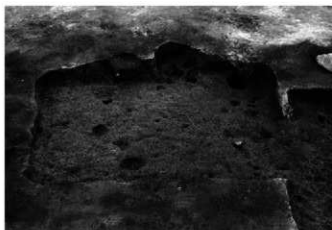
3号住居掘り方 西から



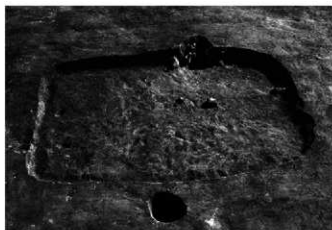
4号住居全景 西から



4号住居カマド 西から



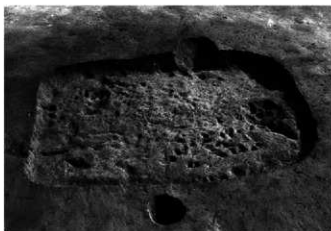
4号住居掘り方 西から



6号住居全景 西から



6号住居カマド 西から



6号住居掘り方 西から



8号住居全景 西から



8号住居カマド 西から



8号住居掘り方 西から



10号住居全景 西から



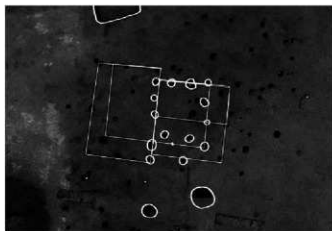
10号住居遺物出土状況 南から



10号住居カマド 西から



1号掘立柱建物西側 南から



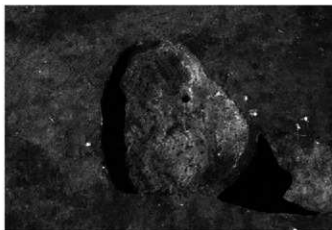
1号掘立柱建物全景 空中写真



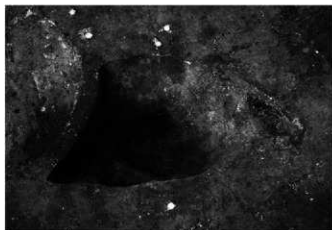
1号土坑 南から



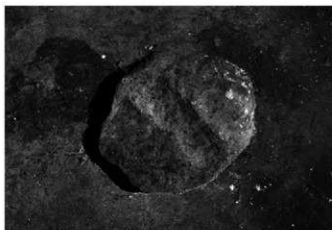
2号土坑 南から



3号土坑 南から



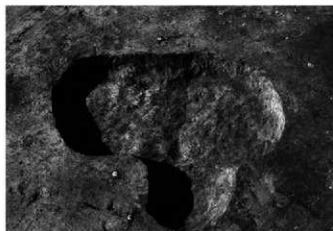
4号土坑 南から



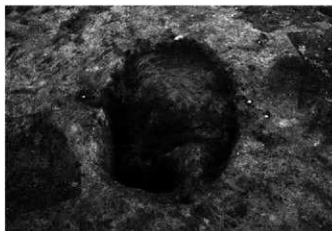
5号土坑 南から



6号土坑 南から



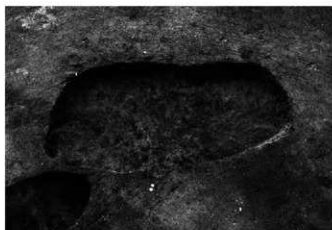
9号土坑 東から



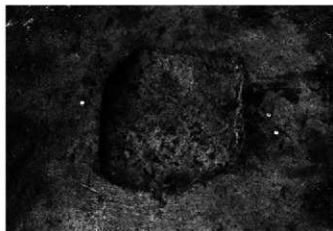
10号土坑 南西から



14号土坑 南東から



15号土坑 北東から



16号土坑 南から



27～29号土坑 西から



27号土坑 南から



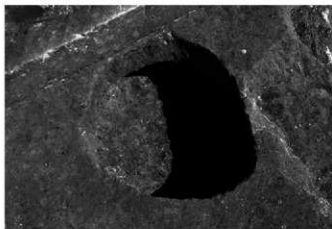
28・29号土坑 南から



29号土坑 南から



30号土坑 西から



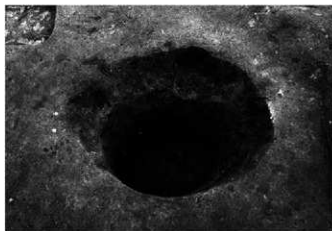
32号土坑 南から



1号井戸 南から



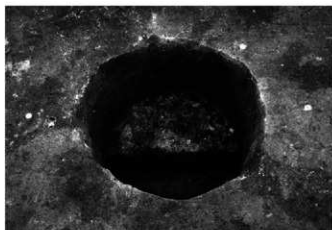
1号井戸断ち割り 南から



2号井戸 南から



2号井戸断ち割り 南から



3号井戸 南から



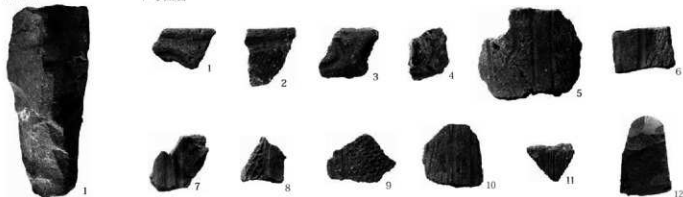
1号溝 西から



2号溝 北から

旧石器

7号住居



9号住居

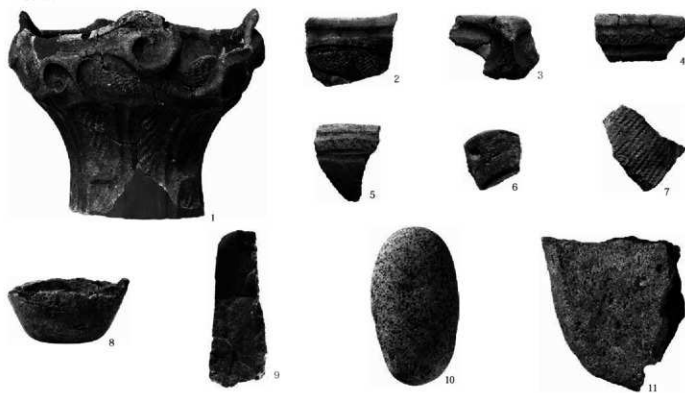


11号住居

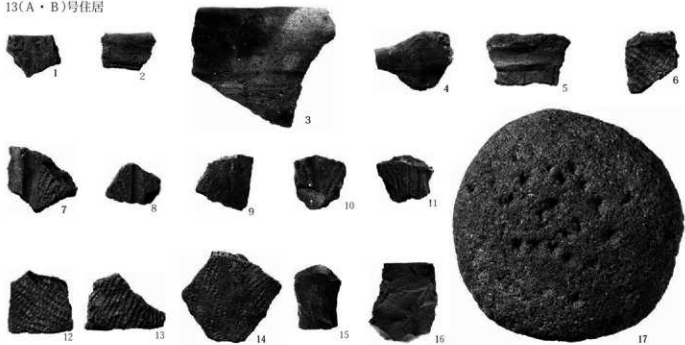




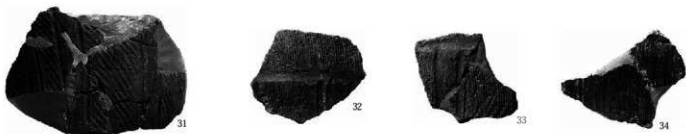
12号住居



13(A・B)号住居





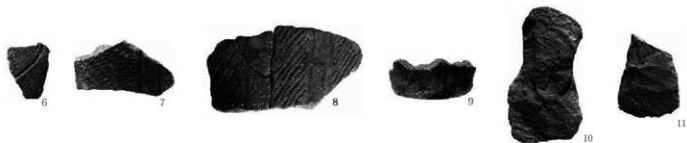


11号土坑

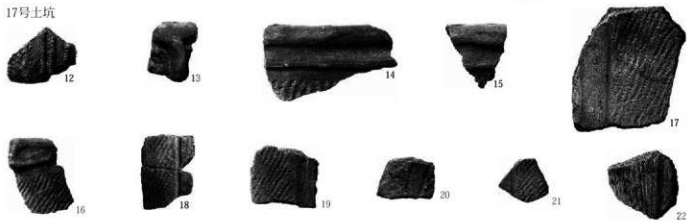


13号土坑

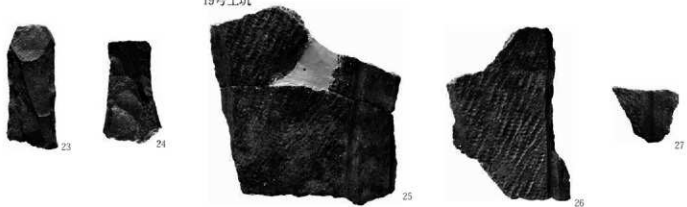




17号土坑



19号土坑

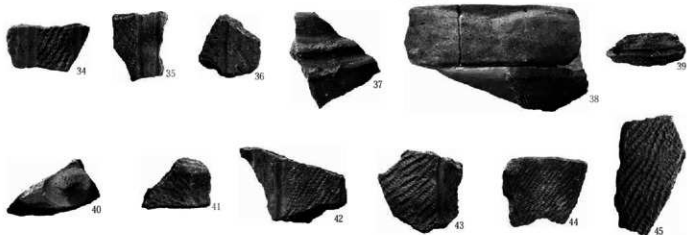


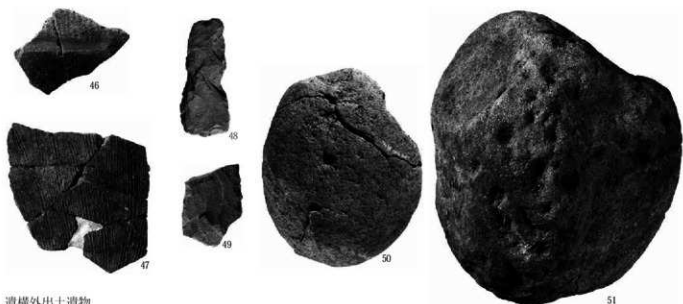
24号土坑



31号土坑

33号土坑





遺構外出土遺物





24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



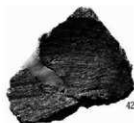
39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



52



49



50



51



53



54



55



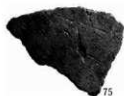
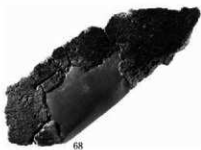
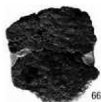
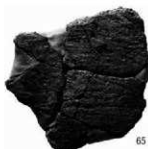
56

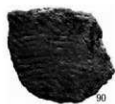


57



58





90



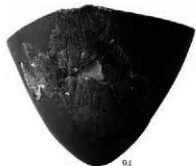
91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



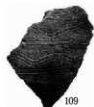
106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



119



120



121



122



123



124



118



125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



156



157



158



159



160



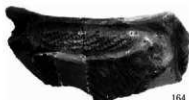
161



162



163



164



165



166



167



168



169



170



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183



184



185



186



187



188



189



190



191



192



193



197



194



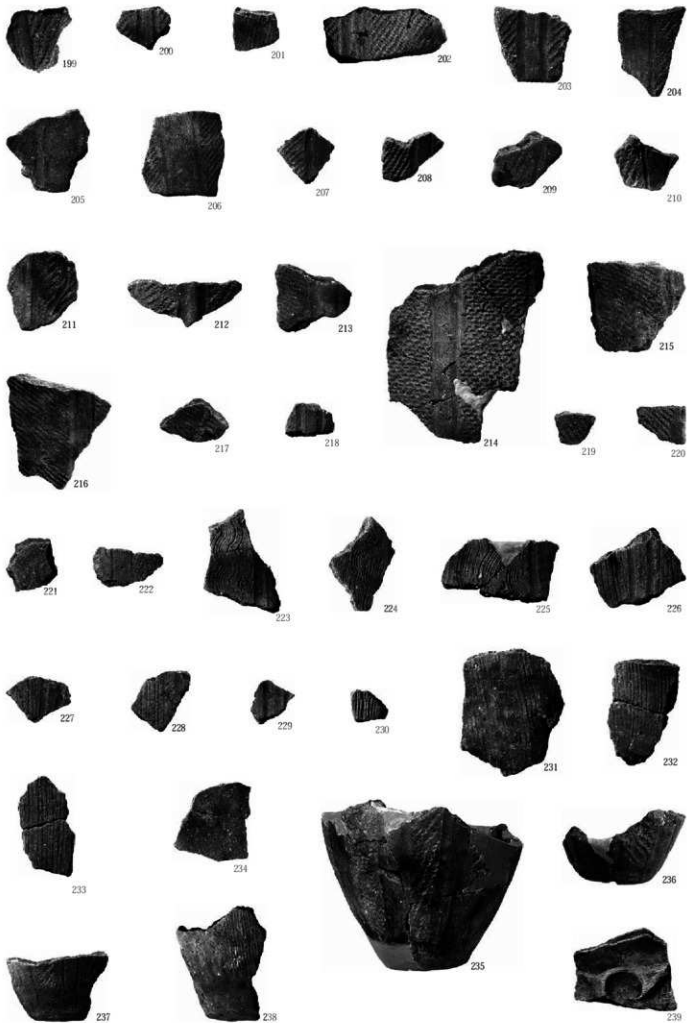
195

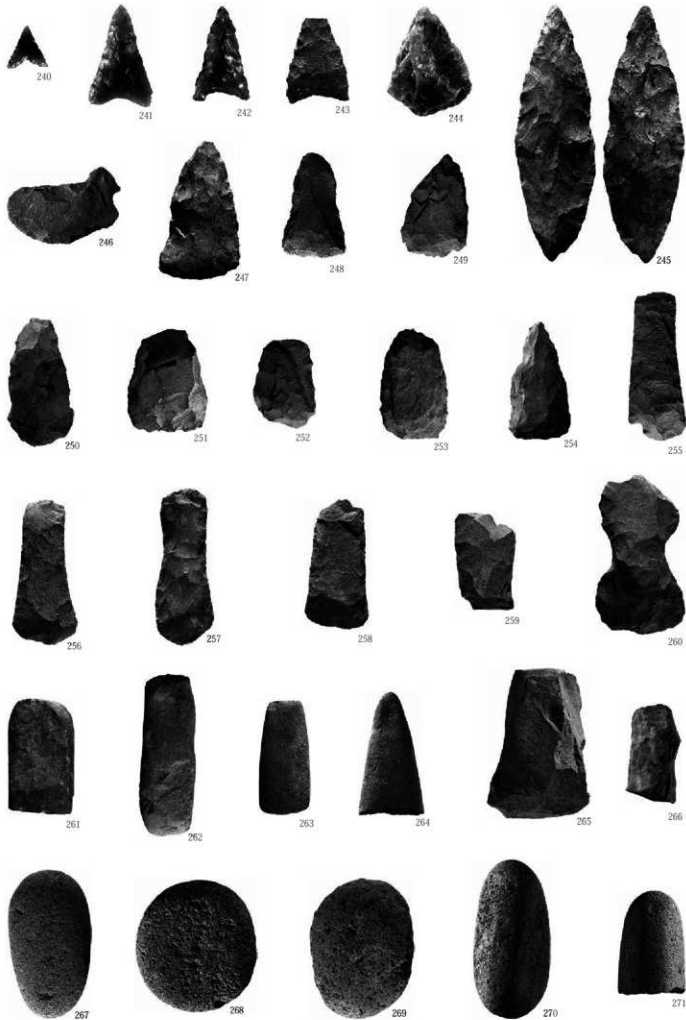


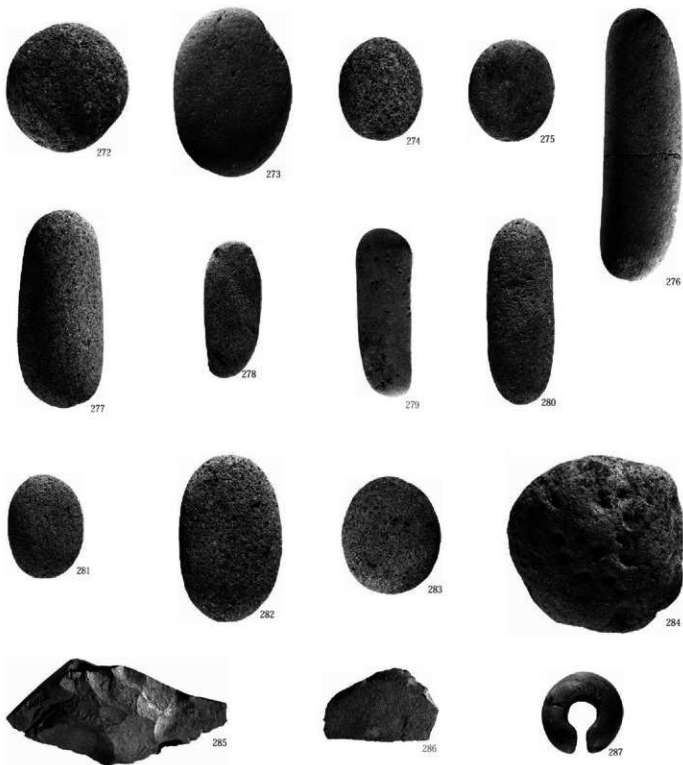
196



198

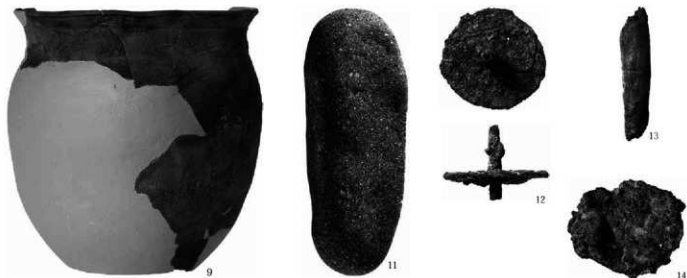






2号住居





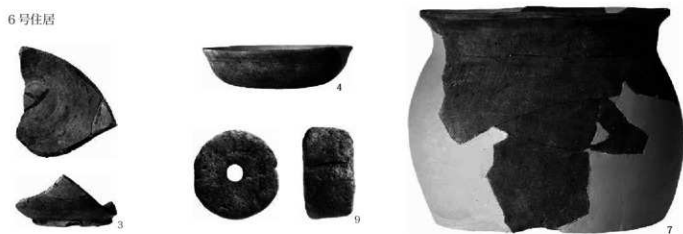
3号住居



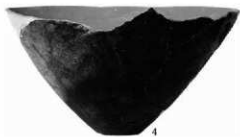
4号住居



6号住居



8号住居



10号住居



12号土坑



1号井戸



2号溝



遺構外出土遺物



報告書抄録

書名ふりがな	かみほそいなかじまいせき
書名	上細井中島遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第576集
編著者名	矢口裕之 谷藤保彦
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20131225
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かみほそいなかじまいせき
遺跡名	上細井中島遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししかみほそいまち
遺跡所在地	群馬県前橋市上細井町
市町村コード	10201
遺跡番号	00787
北緯(世界測地系)	362539
東経(世界測地系)	1390437
調査期間	20100101-20100331 20121001-20121031
調査面積	4,758.13㎡
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	縄文/平安/中近世
遺跡概要	集落-縄文-竪穴住居7+土坑11+集石5-縄文土器+石器/集落-平安-竪穴住居7+土坑13/中近世-孤立柱建物1+土坑3+井戸3+溝3/その他-縄文-遺構外-縄文土器+石器
特記事項	縄文時代の調査は2面調査となり、第1面では中期後半の集落、第2面では早期の竪穴住居と集石および包含層が検出された。
要約	縄文時代早期の包含層は、燃系文系土器群と染痕文系土器群の2時期に分別されるが、検出された竪穴住居および集石は燃系文系の遺構である。縄文時代中期後半の集落は、小規模な環状集落を呈し、中央に特異な土坑をもつ。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第576集

上細井中島遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

平成25(2013)年12月18日 印刷

平成25(2013)年12月25日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／松本印刷工業株式会社

